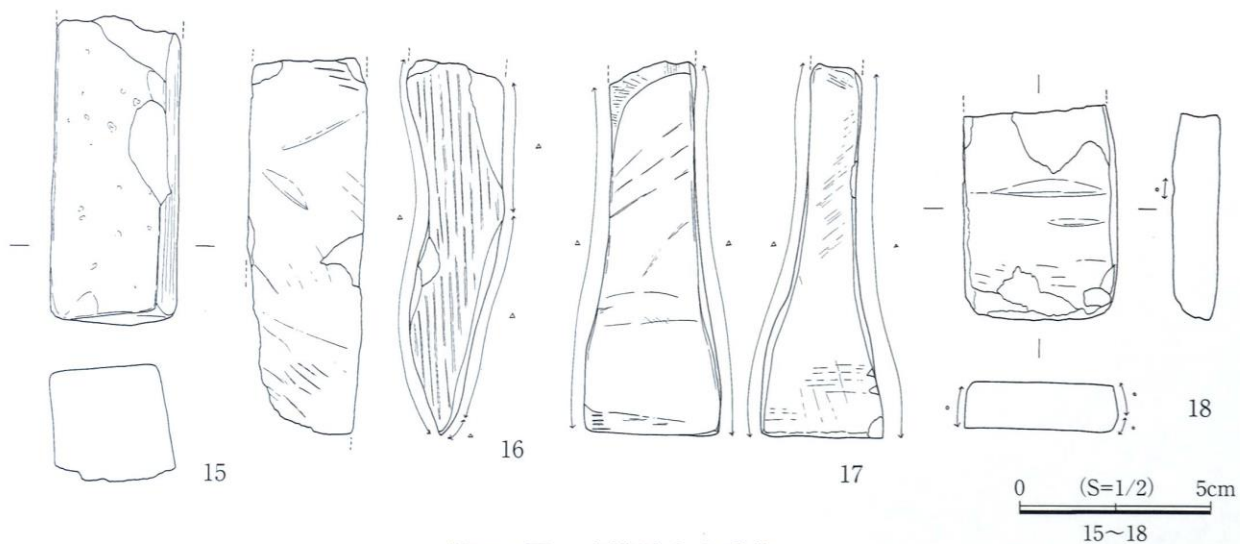
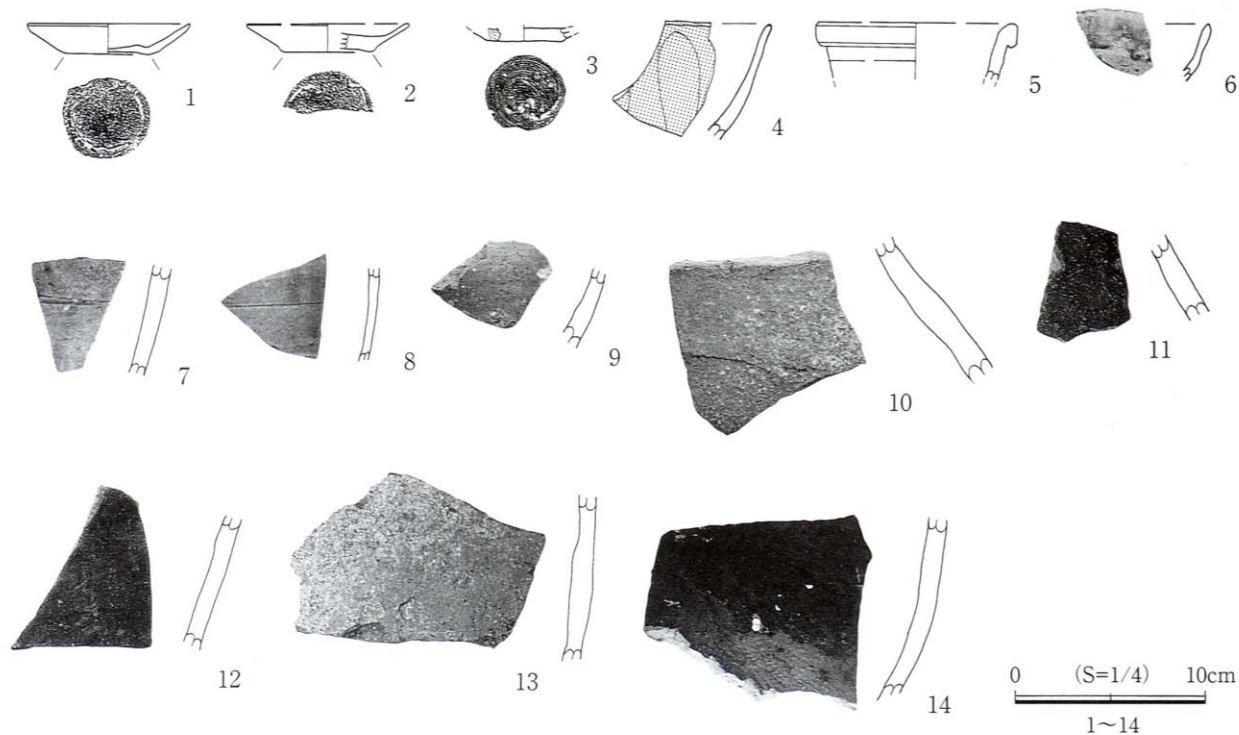
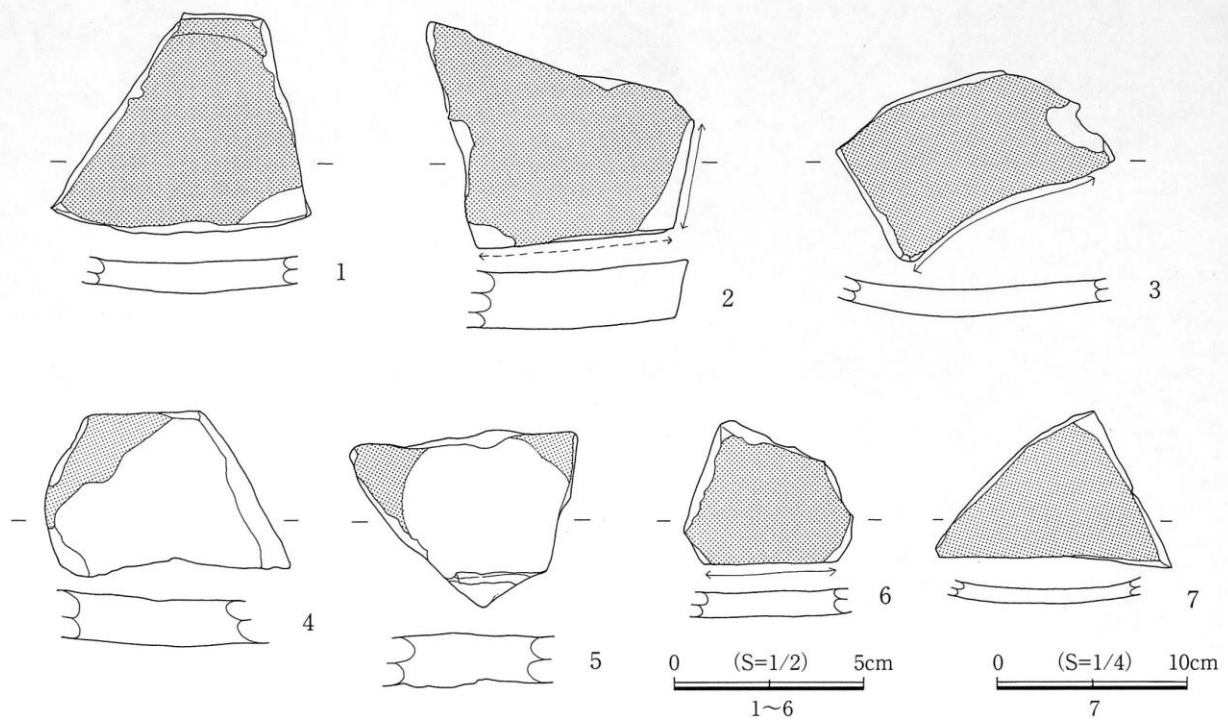


第211図 溝 (SD-301, 304) 出土遺物



第212図 遺構外出土遺物



第213図 遺構外出土遺物（転用砥石）

SD-305（第143図）

5F25-1から5F14-20にかけて分布する。途中、5F15-16で屈曲していること、類似する幅、深さの溝が5F24-5から5F14-25にかけて分布していることから、方形に巡っていたと考えられる。ただし、南側や北西部では溝の痕跡が確認できなかった。

SD-306（第143図）

第2区画の台地側縁辺に沿って、5F15-12から5F25-22にかけて分布する。ただし、5F25-4から5F25-18にいたる間は、その痕跡が確認できない。北側では、溝の途中で小規模な穴が掘削されている。

3. 遺構外の出土遺物（第212, 213図）

西側の城山遺跡(篠本城)に比較すると、出土遺物は多くはない。その中でも常滑の甕が目立っている。そして、これらを再利用した砥石も出土している。

第27表 C4区古代出土遺物一覧

出土地点	挿図No.	種別 器種	計測値と形態の特徴			備考
			計測値(mm)	整形・形態の特徴	色調など	
SI-301	第146図-1	土師器 坏	口径: 122 器高: 42 底径: 64	ロクロ整形。体部上半から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。底部は回転糸切り後周縁部手持ちヘラケズリ。体部下端は手持ちヘラケズリ。	褐色	No.2
	第146図-2	土師器 坏	口径: 115 器高: 41 底径: 63	ロクロ整形。体部から口縁部にかけてややふくらみをもつ。底部は回転糸切り後周縁部手持ちヘラケズリ。摩滅しており、体部下端の調整は観察できない。	淡褐色	一括8
	第146図-3	土師器 坏	口径: 117 器高: 39 底径: 66	ロクロ整形。体部から口縁部にかけてややふくらみをもつ。底部は回転糸切り後周縁部手持ちヘラケズリ。摩滅しており、体部下端の調整は観察できない。	淡褐色	No.3
	第146図-4	土師器 坏	口径: 119 器高: 36 底径: 60	ロクロ整形。体部から口縁部にかけてややふくらみをもつ。底部は回転糸切り後周縁部手持ちヘラケズリ。その他の調整は剥離が著しく、観察でき	淡褐色	No.4, 5
	第146図-5	土師器 高台付坏	口径: 96 器高: 41 台径: 53	ロクロ整形。器形は体部上半から口縁部にかけてやや外反する。体部下端は屈曲する。高台部は外反する。剥落著しく調整は観察できない。	褐色	No.1
	第146図-6	土師器 高台付坏	器高: <19> 底径: 63	高台の接合痕残る。	橙褐色	一括9
	第146図-7	土師器 小型甕	口径: 111 胴部径: 120 器高: 106 底径: 46	胴部は球状を呈する。口唇部は内側に向けてわずかにつまみ出される。頸部から口縁部にかけてナデ。胴部は斜め方向のヘラケズリ。	茶褐色	No.5, 7
	第146図-8	転用硯	200mm×122mm.	須恵器破片を転用。内面の大半摩滅。		No.6
SI-302	第147図-1	土師器 坏	口径: (156) 器高: 35	丸底を呈するが、体部との境付近に部分的に稜が立つ。体部はやや丸みをもつ。外面は口縁部がナデ、体部および底部はヘラケズリ。内面は底面が一方の、体部は水平方向にミガキ。	内外面赤彩	一括20, 竈
	第147図-2	土師器 坏	口径: (140) 器高: (31) 底径: (104)	体部及び底部は丸みもち、その境には稜が立つ。摩滅が著しく、体部にヘラケズリの痕跡が僅かに観察できるのみ。	淡橙褐色	No.2
	第147図-3	土師器 坏	口径: (140) 器高: <33>	体部と底部の境は稜が立つ。体部はやや丸みをもつ。口縁部はナデ。摩滅が著しく、体部および底部はヘラケズリ。内面はナデ。	淡褐色	一括26, P2
	第147図-4	土師器 坏	口径: (140) 器高: (36) 底径: (95)	底部と体部の境には稜が立つ。摩滅著しく、底部にヘラケズリの痕跡が僅かに観察できるのみ。	淡褐色	No.5
	第147図-5	土師器 坏	口径: (130) 器高: 37 底径: (93)	体部から口縁部にかけてやや丸みをもつ。外面は口縁部がナデ、体部および底部はヘラケズリ。内面はミガキ。	淡褐色	一括21 「×」の線刻 交点に刺突
	第147図-6	土師器 坏	口径: (128) 器高: 40 底径: 74	ロクロ整形。体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。底部は手持ちヘラケズリ。糸切り痕は消失。体部下端は手持ちヘラケズリ。	外面赤彩。	No.10 「×」の線刻
	第147図-7	土師器 坏	口径: 132 器高: 36 底径: 86	ロクロ整形。体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。静止糸切り後周縁部手持ちヘラケズリ。体部下端は手持ちヘラケズリ。	内外面赤彩	No.4, 11
	第147図-8	須恵器 蓋	器高: <23> つまみ径: 37	ロクロ整形。天井部は回転ヘラケズリ。つまみ部分は低い。	灰色	No.9
	第147図-9	須恵器 坏	口径: (140) 器高: 42 底径: 84	ロクロ整形。器壁は厚く、体部は直線的に立ち上がる。底部は回転ヘラケズリ。体部下端は手持ちヘラケズリ。	灰色	一括5
	第147図-10	土師器 手捏ね	口径: (34) 器高: (35)	外面は指頭圧痕が顕著に残るが、内面はナデられている。器形は玉状で、口縁はすばまる。	淡褐色	一括33
	第148図-11	土師器 甕	口径: (160) 器高: <50>	胴部は丸みを持った肩を持つ。丸みをもった口唇部は外側に張り出す。外面は頸部から口縁部にかけてナデ。胴部はヘラケズリ。内面はヘラナデ。	暗褐色	一括18
	第148図-12	土師器 小型甕	口径: (118) 器高: <46>	胴部は肩が張る。口唇部は垂直に立つ。頸部から口縁部にかけてナデ。胴部は縦方向のヘラケズリ。内面はナデ。	暗褐色	一括24
	第148図-13	土師器 甕	口径: (130) 器高: <69>	頸部のくびれは弱く、口縁部はわずかに外反する。口唇部は丸みを持つ。外面の調整は摩滅により観察できない。内面はヘラナデ。	淡橙褐色	No.7
	第148図-14	土師器 小型甕	口径: (160) 胴部径: (153) 器高: <94>	口唇部は外側につまみ出され、丸みをもつ。胴部径よりも口径の方が大きい。外面は頸部から口縁部にかけてナデ。胴部は縦方向のヘラケズリ。内面はナデ。	暗褐色	No.6
	第148図-15	土師器 甕	口径: (220) 器高: <38>	口縁部は大きく外反し、口唇部は丸みをもつ。口径の方が胴部径よりも大きい。外面は頸部から口縁部にかけてナデ。胴部はヘラケズリ。	暗褐色	一括19

出土地点	挿図No.	種別 器種	計測値と形態の特徴			備考	
			計測値(mm)	整形・形態の特徴	色調など		
SI-302	第148図-16	土師器 甕	口径：(196) 器高：<43>	口唇部は垂直に立ち、わずかにつまみ出され、内側は受け口縁に窪む。胴部は縦方向のヘラケズリにより稜線が立ち、肩が張る。外面は頸部から口縁部にかけてナデ。輪積み痕が残る。	淡褐色	一括25	
	第148図-17	土師器 甕	口径：(244) 胴部径：(236) 器高：<108>	口縁部は大きく外反し、口唇部は丸みをもつ。口径よりも胴部径の方が大きい。外面は頸部から口縁部にかけてナデ。胴部は縦方向のヘラケズリ。	暗褐色	一括14, 竈	
	第148図-18	土師器 甕	口径：193 胴部径：204 器高：<134>	口唇部は垂直に立ち、わずかにつまみ出され、内側は受け口縁に窪む。外面は頸部から口縁部にかけてナデ。胴部は縦方向のヘラケズリ。	明褐色	No.1	
	第148図-19	土師器 甕	器高：<62> 底径：93	胴部は底部から直線的に立ち上がる。外面はヘラケズリ。内面はナデ。底部は歪んで、楕円形を呈する。	暗褐色	一括34	
	第148図-20	土師器 甕	器高：<48> 底径：85	胴部は底部から丸みをもって立ち上がる。外面はヘラケズリ。	淡褐色	No.8	
	第148図-21	転用硯	59mm×66mm。須恵器破片を転用。内面全体摩滅。一部墨付着。				一括
	第148図-22	転用硯	100mm×79mm。須恵器破片を転用。内面全体及び外面摩滅。一部墨付着。				一括
	第148図-23	石製紡錘車	長さ57mm, 幅33mm, 厚さ10mm, 重さ29.5g。側縁及び下端に剝離がみられる。				一括35
SI-303	第149図-1	土師器 坏	口径：(114) 器高：(34)	丸底。体部は丸みをもつ。外面はヘラケズリ。内面はナデ。	褐色	一括5	
	第149図-2	土師器 坏	口径：(140) 器高：34	丸底。体部は丸みをもつ。外面はヘラケズリ。内面はミガキ状のナデ。	赤褐色	No.3	
	第149図-3	土師器 坏	口径：(142) 器高：39	体部下端と底部との境はやや不明瞭。口唇部は内側に屈曲する。外面はヘラケズリ。内面はナデ。	橙褐色	No.2	
	第149図-4	土師器 坏	口径：128 器高：33 底径：84	体部下端と底部との境は明瞭。口唇部はわずかに内湾する。外面はヘラケズリ後ナデ。内面はナデ。	赤褐色	一括4	
	第149図-5	土師器 小型甕	口径：(106) 器高：<37>	頸部はほとんどくびれず、垂直に立ち上がる胴部が口縁部で僅かに外反する。口唇部は丸みをもつ。摩滅著しく調整は観察できない。	赤褐色。	一括7 焼成はやや脆い	
	第149図-6	土師器 甑	口縁部片		褐色	一括8	
	第149図-7	転用硯・砥石	60mm×45mm。須恵器破片を転用。内面全体及び断面が摩滅している。				一括
	第149図-8	転用硯・砥石	116mm×55mm。須恵器破片を転用。内面全体及び断面が摩滅。硯利用後に砥石として利用。				一括
	第149図-9	石製敲磨具	長さ77mm, 幅42mm, 厚さ30mm, 重さ128.1g。全面摩滅。				一括9
SI-304	第150図-1	土師器 坏	口径：115 器高：40	丸底。体部は丸みをもち、口唇部はさらに内側にすぼまる。外面は口縁部がナデ、体部はヘラケズリ。内面はミガキ。	暗褐色	一括17	
	第150図-2	土師器 坏	口径：(134) 器高：37	丸底。体部は丸みをもつ。口唇部は直立する。外面は口縁部がナデ、体部はヘラケズリ。内面はナデ。	淡赤褐色	No.4	
	第150図-3	土師器 坏	口径：(140) 器高：38	丸底。体部は丸みをもつ。外面は口縁部がミガキ状のナデ、体部はヘラケズリ。内面は丁寧なナデ。	淡赤褐色	一括12	
	第150図-4	土師器 坏	口径：(144) 器高：<32>	丸底か、体部は丸みをもつ。外面は口縁部がミガキ状のナデ、体部はヘラケズリ。内面はミガキ。	茶褐色	No.8	
	第150図-5	土師器 坏	口径：(144) 器高：(28)	丸底。体部は丸みをもつ。口唇部はやや尖る。外面は口縁部がナデ、体部はヘラケズリ。僅かに輪積み痕が残る。内面はナデ。	橙褐色	一括15	
	第150図-6	土師器 坏	口径：(140) 器高：(30)	丸底。体部は丸みをもつ。口縁部との境にはわずかに稜線が立ち、垂直にたつ。外面は口縁部がナデ、体部はヘラケズリ。	赤褐色	一括13	
	第150図-7	土師器 坏	口径：149 器高：38	丸底。体部は丸みをもつ。口縁部との境には僅かに稜線が立ち、口唇部は直立する。外面は口縁部がナデ、体部はヘラケズリ。内面はナデ。	茶褐色	No.5	
	第150図-8	土師器 坏	口径：(153) 器高：<34>	丸底か、体部は丸みをもつ。外面は口縁部がナデ、体部はヘラケズリ。内面はナデ。	茶褐色	一括21	
	第150図-9	土師器 坏	口径：(136) 器高：35	体部と底部の境は不明瞭だが、僅かに稜が立つ。体部は丸みをもつ。外面は口縁部がナデ、体部はヘラケズリ。内面はナデ。	暗褐色	一括19	
	第150図-10	土師器 坏	口径：(150) 器高：<34>	体部と底部の境は不明瞭だが、内外とも調整方向が変わり、やや屈曲する。体部は丸みをもつ。内面はミガキ。外面は口縁部がナデ、体部はヘラケズリ。内面はミガキ。	暗褐色	一括16	
	第150図-11	土師器 坏	口径：(158) 器高：35	体部と底部の境はやや不明瞭。体部は丸みをもつ。外面は口縁部がナデ、体部はヘラケズリ。内面はナデ。	暗褐色	一括20	
	第150図-12	土師器 盤	口径：180 器高：(24) 底径：165	体部と底部の境は明瞭で、体部は屈曲して短く立ち上がる。外面は口縁部がナデ、体部および底部はヘラケズリ後ナデ。内面はミガキ。	内外面赤彩	一括37	
	第151図-13	土師器 小型甕	口径：(100) 胴部径：(107) 器高：77	胴部は球状を呈する。頸部のくびれは弱く、口縁部は短く外反する。口唇部は丸みをもつ。外面は頸部から口縁部にかけてナデ、胴部は横方向のヘラケズリ。内面はヘラケズリ後ナデ。	淡赤褐色	No.9	

出土地点	挿図No.	種別 器種	計測値と形態の特徴			備考
			計測値(mm)	整形・形態の特徴	色調など	
SI-304	第151図-14	土師器 小型甕	口径: 165 胴部径: 177 器高: 162 底径: 87	頸部のくびれは弱く、口縁部は緩く外反する。口唇部は丸みをもつ。頸部内面には稜が立つ。外面は頸部から口縁部にかけてナデ。胴部は上半が斜め方向、下半が横方向のヘラケズリ。内面はヘラケズリ後ナデ。	暗褐色	No.6
	第151図-15	土師器 甕	口径: (174) 器高: <52>	外面は頸部から口縁部にかけてナデ。	暗褐色	一括28
	第151図-16	土師器 甕	口径: 184 器高: <52>	口縁部はゆるくかつ短く外反する。	茶褐色	No.1
	第151図-17	土師器 甕	口径: (202) 器高: <52>	頸部は強く括れ、口縁部は大きく外反する。口唇部は丸みをもつ。外面は頸部から口縁部にかけてナデ、胴部はヘラケズリ。内面はヘラケズリ後ナデ。	茶褐色	一括32
	第151図-18	土師器 甕	口径: (200) 器高: <64>	口縁部は大きく外反し、口唇部は僅かにつまみ出される。外面は頸部から口縁部にかけてナデ、胴部はヘラケズリ後ナデ。内面はヘラケズリ後ナデ。	茶褐色	一括29
	第151図-19	土師器 甕	口径: (204) 器高: <81>	口縁端部はやや外側につまみ出される。外面は頸部から口縁部にかけてナデ。胴部はヘラケズリ後ナデ。内面はヘラナデ。	赤褐色	一括26
	第151図-20	土師器 甕	口径: (270) 器高: <90>	頸部が括れずに口縁部は外反する。外面は頸部から口縁部にかけてナデ。胴部は把手貼付後縦方向にヘラケズリ。内面はナデ。	赤褐色	一括25
	第151図-21	土師器 甕	口径: (280) 器高: <116>	頸部が括れずに口縁部は外反する。口唇部はややつまみ出される。外面は頸部から口縁部にかけてナデ。胴部は縦方向のヘラケズリ。内面はナデ。	茶褐色	No.2
	第151図-22	土師器 小型甕	口径: (134) 器高: <64>	頸部の括れは弱く、口縁部は小さく外反する。口唇部は丸みを持つ。外面は頸部から口縁部にかけてナデ、胴部はヘラケズリ。内面はヘラケズリ後ナデ。	赤褐色	一括30
	第151図-23	土師器 甕	口径: (180) 胴部径: (191) 器高: <69>	頸部の括れは弱く、口縁部は小さく外反する。口唇部はやや丸みを持つ。外面は頸部から口縁部にかけてナデ、胴部はヘラケズリ。内面はヘラケズリ後ナデ。	暗褐色	一括27
	第151図-24	土師器 甕	口径: (150) 器高: <45>	頸部の括れは弱いもの、口縁部は大きく外反する。外面は頸部から口縁部にかけてナデ。胴部はヘラケズリ。内面はナデ。	暗褐色	一括24
	第151図-25	土師器 甕	口径: (194) 器高: <53>	口唇部は上方につまみ出され、内側は受け口様に窪む。外面は頸部から口縁部にかけてナデ。内面はナデ。	茶褐色	No.10
	第151図-26	土師器 甕	口径: (210) 器高: <64>	頸部の括れは弱い。胴部径よりも口径が大きい。外面は頸部から口縁部にかけてナデ。胴部はヘラケズリ後ナデ。	茶褐色	No.3
	第151図-27	土師器 甕	口径: 200 器高: <108>	口唇部はやや垂直に立ち、内側は受け口様に窪む。外面は頸部から口縁部にかけてナデ、胴部は縦方向のヘラケズリ後ナデ。内面はヘラケズリ後ナデ。	茶褐色	No.7
第151図-28	石製紡錘車	径51mm, 厚さ17mm, 重さ63.1g。擦痕が認められるもの、同心円状または放射状のものは見られない。			一括35	
第151図-29	石製敲磨具	長さ<47mm>, 幅30mm, 厚さ26mm, 重さ63.7g。ほぼ直方体。下端部に敲打痕あり。			一括34	
第151図-30	炭化種子	桃の種。長さ15mm, 幅17mm, 厚さ14mm。			一括36	
SI-305	第152図-1	土師器 坏	口径: (120) 器高: 41 底径: 73	体部と底部との境は明瞭。底部は体部のケズリ調整により正円とならない。体部はややふくらむ。口縁部外面は凹線状に窪む。外面は口縁部がナデ、体部および底部はヘラケズリ。	淡褐色	一括20
	第152図-2	土師器 坏	口径: (126) 器高: 34 底径: 74	体部と底部の境は明瞭。外面は口縁部がナデ、体部がヘラケズリ、底部は手持ちヘラケズリ。	暗褐色	No.6
	第152図-3	土師器 坏	口径: (120) 器高: 38 底径: (72)	ロクロ整形。体部は直線的に立ち上がる。底部は手持ちヘラケズリ。体部下端僅かにヘラケズリ。	暗褐色	一括16
	第152図-4	土師器 坏	口径: 118 器高: 38 底径: 71	ロクロ整形。口縁部はわずかに外反する。底部は手持ちヘラケズリ。体部下端はヘラケズリ。	淡褐色	No.5
	第152図-5	土師器 坏	口径: 116 器高: 39 底径: 67	ロクロ整形。体部はやや丸みを持つ。底部は回転糸切り後周縁部手持ちヘラケズリ。体部下端はヘラケズリ。	橙褐色	一括21
	第152図-6	土師器 坏	口径: 117 器高: 35 底径: 64	ロクロ整形。体部は直線的に立ち上がる。底部は回転糸切り後周縁部手持ちヘラケズリ。体部下端はヘラケズリ。ロクロ目は摩滅。	明褐色	No.4
	第152図-7	土師器 坏	口径: (128) 器高: 38 底径: (78)	ロクロ整形。口縁部はわずかに外反する。底部は回転糸切り後周縁部手持ちヘラケズリ。体部下端はヘラケズリ。	淡褐色	一括17
	第152図-8	土師器 坏	口径: (116) 器高: 37 底径: 68	ロクロ整形。体部は直線的に立ち上がる。底部は回転糸切り後未調整で、上げ底状になる。体部との境には生地がはみ出る。	茶褐色	No.10
	第152図-9	土師器 坏	口径: 120 器高: 37 底径: 84	ロクロ整形。体部から口縁部にかけてやや外反して立ち上がる。底径が大きい。底部は回転糸切り後手持ちヘラケズリ。	暗褐色	一括15

出土地点	挿図No.	種別 器種	計測値と形態の特徴			備考
			計測値(mm)	整形・形態の特徴	色調など	
SI-305	第153図-10	土師器 甕	口径：(217) 器高：<58>	口縁端部は上方につまみ出されて屈曲し、内側は受け口様に窪む。外面は頸部から口縁部にかけてナデ、胴部はヘラケズリ。内面はナデ。	明褐色	一括30
	第153図-11	土師器 甕	口径：(207) 胴部径：(213) 器高：<110>	口縁端部は上方につまみ出され、内側は受け口様に窪む。外面は頸部から口縁部にかけてナデ、胴部は縦方向のヘラケズリ。内面はヘラナデ。	茶褐色	No.7
	第153図-12	土師器 甕	口径：191 胴部径：(220) 器高：<174>	口縁端部は上方に長くつまみ出される。外面は頸部から口縁部にかけてナデ、胴部は上半が縦方向に、下半が横方向にヘラケズリ。内面はヘラナデ。	暗褐色	No.2
	第153図-13	土師器 甕	口径：160 器高：<54>	口縁端部は外側にややつまみ出される。外面は頸部から口縁部にかけてナデ、胴部は縦方向のヘラケズリ。内面はナデ。	暗褐色	一括26
	第153図-14	土師器 甕	口径：210 胴部径：(214) 器高：<129>	口縁端部は上方につまみ出される。頸部から口縁部にかけてナデ、胴部は上半が縦方向、下半が横方向にヘラケズリ後ナデ。内面はヘラナデ。	暗褐色	No.11, 12
	第153図-15	土師器 甕	口径：(226) 器高：<48>	口縁端部はつまみ出された後外反する。胴部の肩が張る。外面は頸部から口縁部にかけてナデ。内面はナデ。	明褐色	一括29 SI-304と接合関係
	第153図-16	土師器 壺か	口径：(214) 器高：<61>	胴部の肩は丸い。口縁端部はつまみ出された後外反する。外面は頸部から口縁部にかけてナデ。内面はナデ。	赤褐色 赤彩	一括27
	第153図-17	土師器 甕	口径：(230) 器高：<42>	口縁端部はつまみ出された後外反する。外面は頸部から口縁部にかけてナデ、胴部はヘラケズリ。内面はナデ。	暗褐色	一括28 SI-304と接合関係
	第153図-18	土師器 甌	口縁部破片	口縁端部はつまみ出される。外面は頸部から口縁部にかけてナデ、胴部は把手貼付後ヘラケズリ。内面はナデ。	淡褐色	一括22
	第153図-19	土師器 甌	器高：<46> 底径：96	外面はヘラケズリ。内面はナデられるが、下端はヘラケズリ。孔はケズリにより整形される。	暗褐色	一括25
	第153図-20	土製 支脚	長さ<149>mm, 径<90>mm, 重さ714g。上下端は欠損。横断面は楕円形。			No.8
	第153図-21	土製 支脚	長さ<37>mm, 幅<61>mm, 厚さ<42>mm, 重さ57g。下端の一部のみ遺存。			一括33
	第153図-22	鉄製 刀子	長さ<76>mm, 高さ11mm, 刃部背幅3mm。片開。			No.3
	第153図-23	石製紡錘車	斑輝岩。径37mm, 厚さ16mm, 重さ36.8g。上面は円心円状、下面は放射状の擦痕。			No.9
第153図-24	砥石	凝灰岩。長さ57mm, 幅36mm, 厚さ24mm, 重さ37g。			一括32	
第153図-25	敲石	安山岩。長さ78mm, 幅61mm, 厚さ16mm, 重さ119g。周縁の敲打痕は面が形成されている。			一括33	
第153図-26	磨石	長さ78mm, 幅40mm, 厚さ12mm, 重さ38g。全体的に線条痕が顕著。裏面は弧を描く。裏面下部に敲いた後擦ったような痕跡あり。側面にも面が形成されるほど磨られた痕跡。			一括31	
SI-306	第154図-1	土師器 坏	口径：(132) 器高：32 底径：58	ロクロ整形。体部はやや丸みを持つ。底部は回転糸切り後未調整。体部との境はくびれて下方に突き出す。	淡褐色	No.1, 2, 8
	第154図-2	土師器 坏	口径：(136) 器高：37 底径：66	ロクロ整形。体部はやや丸みを持つ。底部は回転糸切り後未調整で上げ底状。	海綿を含む。 橙褐色	No.6
	第154図-3	土師器 坏	口径：(136) 器高：37	ロクロ整形。体部はやや丸みを持つ。	海綿を含む。 橙褐色	No.7, 10
	第154図-4	土師器 高台付坏	口径：150 器高：<37>	ロクロ整形。体部はやや丸みを持つ。内面はミガキ。	淡褐色	No.4, 12, 16
	第154図-5	土師器 鉄鉢模倣坏	口径：(176) 最大径：(184) 器高：59 底径：68	ロクロ整形。口縁部は内側に屈曲する。体部はやや丸みを持つ。摩擦著しく、底部および体部下端にケズリ痕跡を僅かに観察。	褐色	一括19
	第154図-6	土師器 甕	口径：(202) 器高：<61>	口縁端部は上方につまみ出される。外面は頸部から口縁部にかけてナデ、胴部は縦方向のヘラケズリ。内面はナデ。	淡褐色	一括18
	第154図-7	土師器 甕	口径：208 胴部径：202 器高：<136>	頸部のくびれは弱く、口縁部は短く外反する。胴部径よりも口径が大きい。外面は頸部から口縁部にかけてナデ、胴部は縦方向のヘラケズリ。内面は縦方向のヘラナデ。	淡褐色	No.14, 15
	第154図-8	土師器 甕	器高：<31> 底径：130	器壁は比較的厚い。外面は胴部下端が横方向のヘラケズリ。	橙褐色	No.13
SI-308	第156図-1	土師器 坏	口径：(120) 器高：35 底径：67	ロクロ整形。口縁部は外反する。摩擦著しく、底部に僅かにケズリ痕。	褐色	No.3
	第156図-2	土師器 坏	口径：(122) 器高：33 底径：74	ロクロ整形。口縁部は外反する。口径に対して、器高は比較的低い。底部および体部下端はヘラケズリ。	橙褐色	No.2
	第156図-3	土師器 椀か	器高：<28> 底径：(60)	ロクロ整形。底部は中央部がやや上げ底状。中心部および周縁部はヘラケズリ。	褐色	一括4

出土地点	挿図No.	種別 器種	計測値と形態の特徴			備考	
			計測値(mm)	整形・形態の特徴	色調など		
SI-308	第156図-4	土師器 小皿	口径: 94 器高: 15 底径: 50	ロクロ整形。底部は回転ヘラケズリで、やや上げ底ぎみ。体部下端はヘラケズリ。	茶褐色	一括7	
	第156図-5	土師器 高台付坏	器高: <25> 台部形: (76)	ロクロ整形。台部は直線的である。	茶褐色	一括9	
	第156図-6	土師器 高台付坏	口径: (114) 器高: 43 台径: 65	ロクロ整形。体部は直線的に立ち上がる。台部も直線的である。摩滅著しく、調整観察できない。	外面は淡赤褐色 内面黒色処理	No.1	
	第156図-7	土師器 高台付坏	口径: (163) 器高: <46>	ロクロ整形。体部はやや丸みを持つ。口縁端部はやや外反する。摩滅著しく、調整観察できない。	外面は茶褐色 内面黒色処理	一括5	
	第156図-8	土師器 高台付坏	口径: (172) 器高: <52>	ロクロ整形。体部は丸みを持つ。口縁端部は外反する。摩滅著しく、調整観察できない。	外面は茶褐色 内面黒色処理	一括6	
	第156図-9	土師器 甕	口径: (172) 胴部径: (160) 器高: <76>	口唇部は外側につまみ出されて尖る。摩滅著しく、調整観察できない。	橙褐色	一括11	
	第156図-10	土師器 甕	器高: <16> 底径: (120)	バケツ形を呈する。器壁は比較的厚い。	褐色	一括10	
SI-309	第157図-1	土師器 坏	口径: (140) 器高: 38	丸底。体部は丸みを持つ。外面は口縁端部がナデ、体部がヘラケズリ。内面はナデ。	淡褐色	No.14 「×」の線刻	
	第157図-2	土師器 坏	口径: (124) 器高: 38 底径: (70)	体部は丸みを持つ。摩滅著しく、体部および底部ともケズリ痕が僅かに観察。	内面赤彩	No.5	
	第157図-3	土師器 坏	口径: (132) 器高: 41 底径: 82	ロクロ整形。体部は直線的に立ち上がる。底部および体部下端はヘラケズリ。	褐色	No.4 「*」の線刻、交点に刺突。	
	第157図-4	土師器 坏	口径: (136) 器高: <37> 底径: (86)	ロクロ調整。体部は直線的に立ち上がる。底部周縁はヘラケズリ。	内面赤彩	一括23	
	第157図-5	土師器 小型甕	口径: 118 胴部径: (126) 器高: <82>	体部は球形を呈する。口唇部は丸みを持つ。外面は頸部から口縁部にかけてナデ、胴部は主に横方向にヘラケズリ。内面はナデ。	褐色	No.6	
	第157図-6	土師器 甕	口径: 166 胴部径: 167 器高: <101>	口縁端部は外側につまみ出される。外面は頸部から口縁部にかけてナデ、胴部は縦方向のヘラケズリ。内面はナデ。	褐色	No.13	
	第157図-7	土師器 甕	口径: (226) 胴部径: (231) 器高: 268 底径: 86	頸部は強く括れ、口縁部は大きく外反する。口縁端部は外側につまみ出される。外面は頸部から口縁部にかけてナデ、胴部は上半が縦方向のヘラケズリ、下半が横方向のヘラケズリ。内面はヘラナデ。	灰褐色	No.11, 12, 18, 19	
	第157図-8	土師器 甕	口径: (146) 器高: <70>	口唇部は丸みを持つ。外面は頸部から口縁部にかけてナデ、胴部は縦方向のヘラケズリ。内面はナデ。	褐色	一括20	
	第157図-9	土師器 甕	口径: (184) 胴部径: (226) 器高: <170>	頸部の括れは弱く、口縁部は緩く外反する。外面は頸部から口縁部にかけてナデ、胴部は上半が縦方向のヘラケズリ、下半が横方向のヘラケズリ。	褐色	No.3	
	第158図-10	土師器 甕	口径: 193 器高: <105>	頸部の括れは弱く、口縁部は緩く外反する。外面は頸部から口縁部にかけてナデ、胴部は縦方向のヘラケズリ。内面はナデ。	淡褐色	No.7	
	第158図-11	土師器 甕	口径: (204) 器高: <85>	胴部は肩が丸みを持つ。口縁端部はわずかに上方につまみ出され、内側は受け口様に窪む。外面は頸部から口縁部にかけてナデ、胴部は縦方向のヘラケズリ。内面はナデ。	褐色	竈BNo.1	
	第158図-12	土師器 甕	器高: <50> 底径: 128	外面はヘラケズリ。内面はヘラナデ。	黒褐色	No.2	
	第158図-13	土製 支脚	長さ<113>mm, 径<87>mm, 重さ464g。横断面はやや方形ぎみ、下端は円形ぎみで径が大きくなる。				No.17
	第158図-14	転用硯	42mm×54mm。内面のほぼ全体が摩滅している。				一括10
	第158図-15	石製紡錘車	径44mm, 厚さ16mm, 重さ49g。上面は直線上の線状痕、下面は放射状の線状痕。				No.1
	第158図-16	鉄製 鎌	長さ<26mm>, 高さ39mm, 背幅3mm。中央部で意図的に折り曲げられている。				No.16
	第158図-17	鉄製 刀子	長さ<26>mm, 高さ<13>mm, 刃部背幅5mm。片刃。				No.15
SI-311	第160図-1	土師器 坏	口径: (100) 器高: 35 底径: (50)	体部はやや丸みを持つ。摩滅が著しい。体部および底部はヘラケズリ。口縁端部および内面はヘラケズリ後ナデ。	灰褐色	一括2	
	第160図-2	土師器 坏	器高: <21> 底径: 64	体部下端はややくびれ、底部は下方に突き出す。	淡赤褐色	一括3	
	第160図-3	土師器 甕	器高: <47> 底径: 77	外面は斜め方向のヘラケズリ。内面はヘラナデ。	暗褐色	No.1	

出土地点	挿図No.	種別 器種	計測値と形態の特徴			備考
			計測値(mm)	整形・形態の特徴	色調など	
SI-311	第160図-4	土師器 甑	底部破片	外面はヘラケズリ。内面はヘラケズリ後ナデ。孔部はヘラケズリにより整形。	暗褐色	一括4
SI-312	第161図-1	土師器 椀か	口径：(148) 器高：〈41〉	体部から口縁部にかけて内湾する。口縁部および内面はナデ、胴部はヘラケズリ後ナデ。口縁部は内反する。	黒褐色	一括8
SI-313	第162図-1	土師器 甑	口径：(320) 器高：〈63〉	口縁部はややつまみ出され、内側は受け口様に窪む。頸部から口縁部にかけて内外面ともナデ。胴部は外面が把手貼付後ヘラケズリ、内面がヘラケズリ後ミガキ。	淡褐色	一括4
	第162図-2	石製 敲磨具	安山岩。長さ99mm、幅132mm、厚さ52mm、重さ761g。被熱し変色。敲打痕、擦痕が顕著。上面中央には径20mm、深さ7mmの窪み。			No.1
SI-314	第163図-1	土師器 坏	口径：(116) 器高：45	丸底。口縁部は内傾し、体部との境の稜は外側へ張り出す。口縁部および内面はナデ。体部外面はヘラケズリ後ナデ。	内面底部以外は赤彩	No.8, 12, 14
	第163図-2	土師器 坏	口径：(136) 器高：56	丸底。口縁部は体部との境にわずかな稜を持ち、ややくびれて上方に立ち上がる。口縁部および内面はナデ、体部はヘラケズリ。	赤褐色	No.30
	第163図-3	土師器 椀	口径：(118) 器高：96	丸底。口縁部は長く内湾し、体部との境にわずかな稜を持つ。口縁部および内面はナデ、体部はヘラケズリ後ナデ。	暗褐色	一括33, 34
	第163図-4	土師器 甑	口径：(212) 器高：〈62〉	口縁部は弱く外反し、胴部との境にわずかな稜を持つ。口唇部は丸みを持つ。口縁部および内面はナデ。胴部はヘラケズリ。	淡褐色	No.2
	第163図-5	土師器 甕	口径：(275) 胴部径：(283) 器高：〈160〉	頸部の括れは弱く、口縁部は緩く外反する。口唇部は丸みを持つ。外面は全体的に斜め方向のヘラケズリ。内面は横方向のヘラナデ。	淡褐色	No.3, 4
	第163図-6	土師器 甕	口径：(164) 胴部径：(248) 器高：〈156〉	頸部の括れは弱く、口縁部は緩く外反する。口唇部は丸みを持つ。外面は頸部から口縁部にかけてナデ、胴部は上半が縦方向のヘラケズリ、下半がケズリ後ナデ。内面はヘラナデ。	淡褐色	No.29
	第164図-7	土師器 甕	口径：192 胴部径：320 器高：370 底径：110	頸部の括れは弱く、口縁部は緩く外反する。口唇部は丸みを持つ。口縁部および内面はナデ。胴部は上半が縦方向、下半が横方向のヘラケズリ。	明褐色	No.15~24, 26, 31
	第164図-8	土師器 壺	口径：(219) 胴部径：386 器高：387 底径：86	頸部は強く括れるもの、口縁部は緩く外反する。口唇部は丸みを持つ。摩擦が著しく、調整は観察できない。底部はくびれを持ち、下方に突き出す。	明褐色	No.27
	第164図-9	土師器 甕か壺	器高：〈77〉 底径：(100)	胴部の立ち上がりの角度は壺か。外面は横方向のヘラケズリ。内面はナデ。	暗褐色	No.25
	第164図-10	土師器 甕か壺	器高：〈85〉 底径：(78)	胴部の立ち上がりの角度は壺か。外面はヘラケズリ後ナデ。内面はヘラナデ。	暗褐色	No.28
	第165図-11	土師器 甕		外面は胴部下半が棒状工具によるミガキ。	淡褐色	一括4 常総型甕
	第165図-12	土師器高坏	脚部破片			
SI-315	第166図-1	土師器 坏	口径：123 器高：39 底径：79	体部と底部との境に稜を持つ。体部はまるみを持つ。破滅が著しく、調整は観察できない。	赤褐色	一括1
	第166図-2	土師器 坏	口径：(126) 器高：35 底径：91	体部と底部の境は明瞭。体部は丸みを持つ。口縁部は体部との境にわずかな稜を持つ。口縁部および内面はナデ。体部および底部はヘラケズリ。	灰褐色	一括2
SI-317	第166図-1	土師器 坏	口径：123 器高：37 底径：75	ロクロ整形。体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。底部は回転糸切り後周縁部ヘラケズリ。体部下端はヘラケズリ。	灰褐色	No.1
	第166図-2	土師器 手捏ね	口径：(81) 器高：34 底径：(58)	体部から口縁部にかけて垂直に立ち上がる。底部は面を有し、器壁は厚い。指頭による成形の後丁寧にナデる。	茶褐色	一括4
	第166図-3	土師器 甕	口径：(136) 胴部径：161 器高：〈108〉	口縁部はつまみ出され、内側は受け口様に窪む。内外面とも頸部から口縁部はナデ、胴部はヘラケズリ後ナデ。	茶褐色	No.2
	第166図-4	土師器 甑	口径：(240) 器高：〈76〉	口唇部はややつまみ出される。内外面とも頸部から口縁部にかけてナデ。胴部は外面がヘラケズリ、内面はヘラケズリ後ナデ。	暗褐色	一括3
SI-318	第168図-1	土師器 高台付坏	器高：〈23〉 台部径：87	底部はケズリ後ナデ。台部はわずかに外反する。	赤褐色	No.1
	第168図-2	土師器 甑	底部破片	孔部はヘラケズリで調整。	暗褐色	一括2
	第168図-3	砥石	凝灰岩。長さ39mm、幅30mm、厚さ8mm、重さ14g。紐穴あり。先端部欠損後さらに摩擦。			一括5
SI-319	第167図-1	土師器 坏	口径：(140) 器高：〈33〉	体部と底部の境にわずかな稜を持つ。口唇部内側は僅かに窪む。口縁部および内面はナデ。体部および底部はヘラケズリ後ナデ。	暗褐色	一括4

出土地点	挿図No.	種別 器種	計測値と形態の特徴			備考
			計測値(mm)	整形・形態の特徴	色調など	
SI-319	第167図-2	土師器 坏	口径: (144) 器高: 32	口縁端部および内面はナデ。体部および底部はヘラケズリ。丸底部部は丸みを持つ。体部と底部の境はケズリにより屈曲するが稜は持たない。	淡褐色	一括3
	第167図-3	土師器 坏	口径: 135 器高: 38 底径: 92	口縁部は体部との境に僅かな稜を持って外反する。底部も体部との境に稜を持つ。口縁端部および内面はナデ、体部および底部はヘラケズリ後ナデ。	内外面赤彩	No.1
	第167図-4	土師器 坏	口径: (140) 器高: 30 底径: (118)	底部と体部の境にわずかに稜を持つ。摩滅が著しい。体部および底部はヘラケズリ後ナデ。	内外面赤彩	一括2
	第167図-5	須恵器 坏	器高: <29> 底径: 90	ロクロ整形。底部は回転ヘラケズリ。体部下端は未調整。	灰色	一括
	第167図-6	土師器 甕	口径: (180) 器高: <42>	口唇部はやや上方につまみ出される。頸部から口縁部にかけてナデ。	茶褐色	一括6
	第167図-7	土師器 甕	口径: (190) 器高: <48>	口唇部は屈曲して上方につまみ出される。内外面とも頸部から口縁端部にかけてナデ、胴部は横方向のヘラケズリ後ナデ。	茶褐色	一括7
	第167図-8	土師器 手捏ね	口径: (45) 器高: 33	指頭による整形。口縁端部は強くつまみ出され、内側にすばまる。底部と器壁の厚さが異なる。	暗褐色	一括8
	第167図-9	石製 台石か	砂岩。長さ<63>mm, 幅<74>mm, 厚さ<51>mm, 重さ292g。破碎後被熱している。遺存している部分は全体的に摩滅している。表面に凹みあり。			一括9
	SI-320	第169図-1	土師器 小皿	口径: 87 器高: 15 底径: 49	ロクロ整形。体部は直線的に立ち上がる。体部下端はくびれ、底部は下方に突き出す。底部は回転糸切り後未調整。	明褐色
第169図-2		土師器 小皿	口径: 92 器高: 20 底径: 57	ロクロ整形。体部は直線的に立ち上がる。底部は回転糸切り後未調整。	淡黄褐色	一括6
第169図-3		土師器 高台付椀	口径: (168) 器高: 56 台径: 78	ロクロ整形。体部は中央部で屈曲してふくらみ、口縁端部は外反する。底部は回転糸切り後周縁部ヘラケズリ。その後、高台の貼付。台の付け根は沈線状に窪む。内面はミガキ。	内面黒色処理	No.3, 4
第169図-4		土師器 高台付椀	器高: <23> 台径: (79)	ロクロ整形。底部は回転糸切り。周縁部の調整は観察できない。その後、高台の貼付。台の付け根は沈線状に窪む。内面はミガキ。	内面黒色処理	一括5
第169図-5		石帯	丸帯。長さ23mm, 幅36mm, 厚さ7mm, 重さ12g。裏面の縁辺は面取りされている。2ヶ1単位の孔はV字状に穿たれる。			No.1
SI-321	第170図-1	土師器 坏	口径: (144) 器高: 28	平底だが、体部と底部の境を有しない。口径に対して、器高は小さい。摩滅著しく調整観察できない。	淡褐色	一括2
	第170図-2	土師器 坏	口径: (144) 器高: 38 底径: 88	体部と底部の境は不明瞭ながら境を有す。口縁端部および内面はナデ。体部および底部はヘラケズリ。	淡褐色	No.1 「×」の線刻 交点に刺突
	第170図-3	須恵器 杯	口径: 143 器高: 42 底径: 84	ロクロ整形。体部は直線的に立ち上がる。底部は回転ヘラケズリ。体部下端は未調整。	灰色	一括3
	第170図-4	土師器 小皿	口径: (96) 器高: 13 底径: (48)	ロクロ整形。体部中央は屈曲し、下端は括れる。底部は回転糸切り後未調整で、下方に突き出す。	明褐色	一括5
	第170図-5	土師器 小皿	口径: (88) 器高: 22 底径: (54)	ロクロ整形。体部から口縁部にかけて外反して立ち上がる。底部は回転糸切り後未調整。	淡褐色	一括4
	第170図-6	土師器 高台付坏	器高: <18> 台径: (72)	高台部は短く、直線的である。	内面黒色処理	一括14
	第170図-7	土師器 甕	器高: <21> 底径: 108	底部外面に轆轤台か回転台の板目が残る。外面は胴部および底部はヘラケズリ、内面はナデ。	暗褐色	一括17
	第170図-8	土師器 甕	口径: (173) 器高: <51>	頸部の括れは弱く、口縁部は短く外反する。頸部から口縁端部は内外面ともナデ。胴部は外面がヘラケズリ、内面はヘラナデ。	暗褐色	一括5
	第170図-9	土師器 甕	口径: (210) 器高: <52>	口唇部はわずかにつまみ出される。胴部径より口径の方が大きい。頸部から口縁端部は内外面ともナデ。胴部外面はヘラケズリ。	明褐色	一括16
	第170図-10	土師器 甕	口径: (216) 器高: <51>	頸部の括れは弱く、口縁部は短く外反する。口唇部はややつまみ出される。	暗褐色	一括22
	第170図-11	土師器 甕	口径: (212) 器高: <63>	口縁部は短く外反する。頸部から口縁部にかけて内外面ともナデ。胴部はヘラケズリ。	淡褐色	一括21
	第170図-12	土師器 甕	破片	孔底面はナデ。	茶褐色	一括19
	第170図-13	土師器 甕	破片	孔底面および内側はヘラケズリ後ナデ。	茶褐色	一括20
	第171図-14	片岩	長さ106mm, 幅77mm, 厚さ11mm, 重さ105g			一括25

出土地点	挿図No.	種別 器種	計測値と形態の特徴			備考
			計測値(mm)	整形・形態の特徴	色調など	
SI-321	第171図-15	転用硯	84mm×49mm。須恵器破片を転用。内面は大半摩滅している。断面も強弱あるものの、摩滅している。			一括
	第171図-16	転用硯	134mm×118mm。須恵器破片を転用。内面全体が摩滅しており、一部に墨が付着している。断面も摩滅している。			SI-324と接合。
	第171図-17	鉄鏃	長さ<60>mm、幅24mm。両刃両関。基関を有する。			一括
	第171図-18	磨石	長さ57mm、幅36mm、厚さ16mm、重さ53g。下端は摩滅し、面を形成している。			一括
	第171図-19	敲石	長さ120mm、幅68mm、厚さ37mm、重さ382g。安山岩。上下端部に明瞭な敲打痕。表面中央部にも敲打痕あり。			一括
SI-322	第172図-1	土師器 坏	口径：(162) 器高：<31>	口縁端部および内面はナデ。体部はヘラケズリ。	茶褐色。	一括
SI-323	第174図-1	土師器 坏	口径：(126) 器高：<35>	丸底。口縁部はやや内傾して立ち上がり、体部との境は外側に張り出す。口縁部および内面はナデ。体部はヘラケズリ。	濃褐色	No.15
	第174図-2	土師器 坏	口径：(142) 器高：<41>	丸底。口縁部は長く直立し、体部との境は稜を持ち、わずかに外側に張り出す。口縁部および内面はナデ。体部はヘラケズリ後ナデ。	内外面赤彩	No.9
	第174図-3	土師器 坏	口径：(155) 器高：<37>	丸底。口縁部は体部との境で屈曲し、くびれながら外反する。外面は口縁部がナデ、体部がヘラケズリ後ナデ。内面はヘラケズリ後ナデ。	内外面赤彩	一括36
	第174図-4	土師器 坏	口径：(143) 器高：48	丸底。口縁部はややくびれて外反する。口縁部は内外面ともナデ。体部は外面がヘラケズリ。内面はミガキか。	内面黒色処理か	No.10
	第174図-5	土師器 坏	口径：(160) 器高：47	丸底。口縁部と体部の境はやや屈曲する。口縁部および内面はナデ。体部はヘラケズリ。	茶褐色	一括24
	第174図-6	土師器 坏	口径：119 器高：<40>	丸底。体部は丸みを持ち、口縁部は直立する。口縁部および内面はミガキに近いナデ。体部はヘラケズリ。底部には内面から突き割った孔をもつ。	茶褐色	No.13
	第174図-7	土師器 坏	口径：(144) 器高：35	丸底。摩滅著しいが、体部にヘラケズリの痕跡あり。	淡褐色	一括25
	第174図-8	土師器 坏	口径：(97) 器高：44 底径：54	口縁部と体部の境にわずかな稜をもつ。外面は口縁部がナデ、体部および底部はヘラケズリ。内面はヘラナデ。	橙褐色	一括23
	第174図-9	土師器 坏	口径：(142) 器高：<66>	丸底。口縁部はややくびれて外反する。口縁部および内面はナデ。体部はヘラケズリ。	橙褐色	一括22
	第174図-10	土師器 坏	口径：(140) 器高：<50>	丸底。体部は丸みを持つ。口縁部および内面はナデ。体部はヘラケズリ。	橙褐色	No.11
	第174図-11	土師器 坏	口径：150 器高：58 底径：46	底部と体部との境にわずかな稜を持つ。体部は丸みを持つ。口縁部および内面はヘラナデ後ミガキに近いナデ。体部および底部はヘラケズリ。	茶褐色	No.12
	第174図-12	土師器 小型壺	口径：(126) 胴部径：169 器高：<91>	体部は球状を呈する。口縁部は短く外反する。口唇部は丸みを持つ。外面の頸部から口縁部および内面はナデ。胴部は縦方向のヘラケズリ。	褐色	一括28
	第174図-13	土師器 甕	口径：(164) 器高：<65>	口縁部は短く外反する。口唇部は丸みを持つ。摩滅著しく、調整観察できない。	褐色	一括27
	第174図-14	土師器 壺	口径：(190) 胴部径：274 器高：<217>	頸部は長く直立し、口縁部は大きく外反する。口唇部は丸みを持つ。外面の頸部から口縁部および内面はナデ。胴部はヘラケズリ後ナデ。	淡褐色	No.8
	第174図-15	土師器 甕	口径：125 胴部径：166 器高：186 底径：60	頸部から口縁部にかけて長く外反する。口唇部は丸みを持つ。外面の頸部から口縁部および内面はナデ。胴部は摩滅著しく調整観察できない。	赤褐色	No.2
	第174図-16	土師器 壺	口径：(174) 器高：<96>	頸部は長く直立し、口縁部は大きく外反する。口唇部は丸みを持つ。口縁部および内面はナデ。頸部および胴部はヘラケズリ後ミガキに近いナデ。	褐色	No.17
	第174図-17	土師器 甕	口径：(188) 器高：<144>	頸部は長く直立し、口縁部は外反する。口唇部は丸みを持つ。口縁部は内外面ともナデ。頸部から胴部は外面がヘラケズリ、内面はヘラナデ。	灰褐色	一括21
	第175図-18	土師器 壺	口径：(124) 器高：<55>	口縁部は頸部から短く直立する。口唇部は丸みを持つ。口縁部および内面はナデ。頸部および胴部はヘラケズリ。	茶褐色 胴部に初めの圧痕	一括29
	第175図-19	土師器 甕	口径：(142) 胴部：(153) 器高：<130>	頸部のくびれは弱く、口縁部は短くかつ緩く外反する。頸部から口縁部および内面はナデ。胴部は縦方向のヘラケズリ。	褐色	一括35
	第175図-20	土師器 甕	口径：206 器高：190 孔径：60	頸部はほとんどくびれず、口縁部は短く僅かに外反する。口唇部は丸みを持つ。頸部から口縁部にかけて内外面ともナデ。胴部は外面が縦方向のヘラケズリ、内面はヘラナデ後ナデ。	褐色	No.14, 15, 18, 19
	第175図-21	土師器 壺か	口径：(136) 器高：<72>	頸部のくびれは弱く、口縁部は僅かに外反する。口唇部は丸みを持つ。頸部から口縁部にかけて内外面ともナデ。胴部は外面がヘラケズリ、内面はヘラナデ。	赤褐色	一括26
	第175図-22	土師器 甕	口径：130 胴部径：154 器高：<156>	口縁部は短く外反し、口唇部は丸い。頸部から口縁部および内面はナデ。胴部は斜め方向のヘラケズリ。	褐色	No.3-6

出土地点	挿図No.	種別 器種	計測値と形態の特徴			備考
			計測値(mm)	整形・形態の特徴	色調など	
SI-323	第175図-23	土師器 甕か	口径: (124) 胴部径: 156 器高: <110>	頸部のくびれは弱く、口縁部はやや外反するように直立する。頸部から口縁部および内面はナデ。胴部は摩滅著しく、僅かに横方向のヘラケズリ痕が観察できる。	褐色	一括33
	第175図-24	土師器 甕	口径: 153 胴部径: 153 器高: 159 底径: 54	頸部のくびれは弱く、口縁部は短く外反する。口唇部は丸みを持つ。ゆがみが著しい。外面の頸部から口縁部および内面はナデ。胴部は縦方向のヘラケズリ。	茶褐色	No.20
	第173図-25	土師器 手捏ね	口径: (44) 器高: 17 底径: 40	口縁部は薄くかつ短く直立する。外面は指頭圧痕がわずかに残り、内面は丁寧にナデられる。	橙褐色	一括32
	第173図-26	土師器 手捏ね	口径: 50 器高: 21 底径: 38	口縁部は短く直立し、凹凸が著しい。外面は指頭圧痕見られるが、内面は丁寧にナデられている。	赤褐色	No.1
	第173図-27	土師器 手捏ね	口径: (52) 器高: 25 底径: 42	内外面とも指頭圧痕が残る。	赤褐色	一括31
	第173図-28	土師器 手捏ね	口径: 52 器高: 37 底径: 24	外面および口唇部は凹凸著しいが、内面は丁寧にナデられている。	赤褐色	一括30
	第173図-29	土鈴玉	長さ13mm, 幅11mm, 厚さ9mm。球状だがややいびつ。表面は丁寧にナデられる。			甕一括
	第173図-30	土鈴玉	径10mm。球状。表面は丁寧にナデられる。			甕一括
	第173図-31	土鈴玉	長さ10mm, 幅9mm, 厚さ8mm。球状だが、ややいびつ。表面は丁寧にナデられる。			甕一括
	第175図-32	転用硯・砥石	99mm×100mm。須恵器破片を転用。内面全体摩滅。中央部には墨が付着。断面にも弱い摩滅痕あり。			一括
SI-324	第176図-1	土師器 坏	口径: (140) 器高: 34	丸底。体部は丸みを持つ。外面は口縁端部がナデ、体部がヘラケズリ。内面は丁寧にナゲ。	橙褐色	一括9
	第176図-2	土師器 坏	口径: 148 器高: 51	底部は平底きみだが、体部との境に稜を持たない。外面は口縁端部がナデ、体部がヘラケズリ。内面はヘラナデ。	淡褐色	No.7
	第176図-3	土師器 高台付坏	器高: <20> 台部径: 72	摩滅著しく調整観察できない。	橙褐色	一括8
	第176図-4	土師器 甕	口径: (150) 器高: <82>	口縁端部は僅かにつまみ出される。内外面とも頸部から口縁部にかけてナデ。胴部は外面がヘラケズリ、内面はヘラナデ後ナデ。	黒褐色	No.6
	第176図-5	土師器 甕	口径: (214) 胴部径: (208) 器高: <129>	口縁端部は上方につまみ出され、内側は受け口様に窪む。胴部径より口径が大きい。内外面とも頸部から口縁部にかけてナデ。胴部外面はヘラケズリ後ナデ、内面はヘラナデ。	暗褐色	No.1, 5
	第176図-6	土師器 甕	器高: <63> 底径: 127	内外面ともヘラケズリ後ナデ。	暗褐色	No.3, 4
	第176図-7	土師器 甕	把手破片		橙褐色	一括10
	第176図-8	転用硯	42mm×52mm。須恵器破片を転用。内面全体が摩滅。流れたような墨が付着している。			一括
SI-325	第177図-1	土師器 坏	口径: (128) 器高: <32>	丸底。口縁部は屈曲して直立する。口縁部および内面はナデ。体部はヘラケズリ。	黒褐色	一括2
	第177図-2	土師器 坏	口径: (140) 器高: <32>	体部と底部の境に稜をもつ。外面は口縁端部がナデ、体部がヘラケズリ。内面は摩滅著しく調整観察できない。	暗褐色	一括1
	第177図-3	土師器 坏	口径: (106) 器高: 34 底径: (78)	体部は直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。摩滅著しく調整観察できない。	淡褐色	一括3
	第177図-4	土師器 甕	口径: (204) 器高: <59>	口縁端部の外面はつまみ出されてわずかに窪む。頸部から口縁部および内面はナデ。胴部はヘラケズリ。	暗褐色	一括5
	第177図-5	土師器 甕	器高: <52> 底径: (74)	外面は調整観察できない。内面はナデ。	暗褐色	一括6
SI-326	第178図-1	土師器 坏	口径: (126) 器高: <31>	丸底か。口縁端部は僅かにくびれて直立する。摩滅著しく調整観察できない。	淡赤褐色	一括2
	第178図-2	土師器 椀	口径: 131 器高: 64	丸底。体部は丸みを持ち、口縁部は直立する。口縁端部および内面はナデ。体部はヘラケズリ後ナデ。	内面体部下半 赤彩	一括1
	第178図-3	土師器 甕	口径: (134) 器高: <47>	口唇部は丸みを持つ。頸部から口縁部および内面はナデ。胴部はヘラケズリ。	茶褐色	一括6
	第178図-4	土師器 甕	口径: (166) 器高: <56>	頸部の括れは弱い。口唇部は丸い。内外面ともナデ。	淡褐色	一括5
	第178図-5	土師器 甕	口径: (260) 器高: <42>	口縁部は大きく外反し、端部の外側は下方へ突出する。頸部から口縁部および内面はナデ。胴部はヘラケズリ。	明褐色	一括7
	第178図-6	土師器 高坏	脚部破片	外面はヘラケズリ。内面はナデ。	外面赤彩	一括9

出土地点	挿図No.	種別 器種	計測値と形態の特徴			備考
			計測値(mm)	整形・形態の特徴	色調など	
SI-327	第179図-1	土師器 坏	口径: 108 器高: 37 底径: 52	ロクロ整形。体部は中位で屈曲し、口縁部は直線的に立ち上がる。底部は回転糸切り後未調整で、下方に突き出る。	内面黒色処理 口縁部に2カ所 打ち欠き	No.1
	第179図-2	土師器 坏	口径: 113 器高: 35 底径: 55	ロクロ整形。体部は中位で屈曲し、口縁部は外反する。底部は回転糸切り後未調整。	淡褐色 口縁部に2カ所 打ち欠き	No.1
	第179図-3	土師器 鉢か	口径: 162 器高: 45 底径: 55	器高に対して、口径が大きい。摩擦著しく調整観察できない。	赤褐色	一括3
	第179図-4	土師器 甌	把手破片		明褐色	一括4
	第179図-5	砥石	凝灰岩。長さ54mm, 幅43mm, 厚さ20mm, 重さ69g。上端欠損後さらに利用。			
SI-328	第180図-1	土師器 高坏か	口径: (98) 器高: <38>	口縁端部はややくびれて外反する。体部は丸みを持つ。口縁端部および内面はナデ。体部はヘラケズリ。	明褐色	一括7
	第180図-2	土師器 坏	口径: 123 器高: 30	平底さみだが、体部と底部の境に明瞭な稜を持たない。口縁端部および内面はミガキ。体部はヘラケズリ。	体部と底部で 異なる胎土	一括2
	第180図-3	土師器 坏	口径: 158 器高: 34	丸底。外面は口縁端部がナデ、体部はヘラケズリ。内面はミガキ。	淡褐色 底部にタール付着	No.1
	第180図-4	土師器 坏	口径: (160) 器高: 31	平底さみだが、体部と底部の境に明瞭な稜を持たない。体部は比較的直線的に立ち上がる。口縁端部および内面はナデ。体部はヘラケズリ。	暗褐色	一括3
	第180図-5	土師器 碗	口径: (154) 器高: <67> 底径: 100	体部は急角度で立ち上がる。口縁端部および内面はナデ。体部および底部はヘラケズリ。	明褐色	一括18
	第180図-6	土師器 甌	口径: (212) 器高: <60>	口唇部は丸みをもつ。頸部から口縁部はナデ。	暗褐色	一括13
	第180図-7	土師器 甌	口径: (190) 器高: <50>	内外面ともナデ。	暗褐色	一括12
	第180図-8	土師器 甌	口径: (224) 器高: <96>	口縁端部はつまみ出され、内側はやや窪み、外側は下に突出する。頸部から口縁部および内面はナデ。体部はヘラケズリ。	橙褐色	一括9
	第180図-9	土師器 甌	口径: (300) 器高: <74>	口縁部は短く外反する。頸部から口縁部および内面はミガキに近いナデ。胴部はヘラケズリ。	明褐色	一括10
	第180図-10	石製紡錘車	閃緑岩?。径40mm, 厚さ17mm, 重さ40g。上面に直線的な線状痕、断面に成形痕が残る。			一括
	第180図-11	敲石	安山岩。長さ<77>mm, 幅<42>mm, 厚さ<42>mm, 重さ182g。被熱により剥落している。敲打痕が測線に三カ所、下面に一カ所みられる。			一括
SI-329	第181図-1	土師器 坏	口径: 123 器高: 40	丸底。体部は丸みを持つ。表面調整観察できず。	淡褐色	一括10
	第181図-2	土師器 坏	口径: (82) 器高: <49>	口縁部は屈曲して内傾する。外面は口縁部はナデ、体部はヘラケズリ。内面はミガキ。	褐色	一括5
	第181図-3	土師器 坏	口径: (90) 器高: <42>	口縁部は屈曲して内傾する。体部との境は沈線状に窪む。外面は口縁部がナデ、体部はヘラケズリ。内面はミガキ。	内外面とも黒色 処理	一括7
	第181図-4	土師器 甌	口径: (164) 胴部径: (157) 器高: <89>	頸部の括れは弱く、口縁部はわずかに外反する。外面は頸部から口縁部にかけてナデ。内面は横位のヘラナデ。	暗褐色	一括4
	第181図-5	土師器 甌	口径: 200 器高: <71>	口唇部は尖りぎみ。外面は頸部から口縁部にかけてナデ、胴部はヘラケズリ。内面はナデ。	褐色	一括3
	第181図-6	土師器 甌	口径: (250) 胴部径: (227) 器高: <88>	口縁部は短く外反する。口唇部は丸みを持つ。外面は頸部から口縁部にかけてナデ、胴部はヘラケズリ。内面はナデ。	暗褐色	一括8
	第181図-7	土師器 甌	口径: (290) 胴部径: (251) 器高: <330>	外反する口縁部は端部が丸みをもつ。外面は頸部から口縁部にかけてナデ、胴部は上半が縦方向にヘラケズリ、下半は横方向にヘラケズリ。	淡褐色	No.1, 2
	第181図-8	土製支脚	長さ<73>mm, 径135mm, 重さ1141g。焼成が弱く脆い。円錐の形状と思われる。			一括
	第181図-9	石製紡錘車	凝灰岩。径36mm, 厚さ16mm, 重さ29g。側面は縦方向の線状痕が見られる。断面は円筒状。			一括
SI-330	第182図-1	土師器 坏	口径: (136) 器高: 39	体部は丸みを持つ。	橙褐色	No.1
	第182図-2	土師器 甌	口径: (194) 器高: <73>	口縁部は大きく外反する。口唇部はわずかにつまみ出され、内側は受け口様に窪む。外面は頸部から口縁部にかけてナデ、胴部は縦方向のヘラケズリ。内面はナデ。	褐色	一括2
	第182図-3	土師器 甌	破片	頸部の括れは弱く、口縁部はわずかに外反する。	淡褐色	一括3
SI-331	第183図-1	土師器 坏	口径: 120 器高: 40 底径: 76	ロクロ整形。体部は直線的に立ち上がる。底部は回転糸切り後周縁部は手持ちヘラケズリ。体部下端は手持ちヘラケズリ。	淡褐色	No.9

出土地点	挿図No.	種別 器種	計測値と形態の特徴			備考
			計測値(mm)	整形・形態の特徴	色調など	
SI-331	第183図-2	土師器 坏	口径: (116) 器高: 45 底径: 65	ロクロ整形。体部は直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。底部は回転糸切り後周縁部は手持ちヘラケズリ。体部下端は手持ちヘラケズリ。	暗褐色	No.2
	第183図-3	土師器 坏	口径: 119 器高: 39 底径: (84)	底部と体部の境は比較的明瞭な稜が立つ。外面は口縁部がナデ、体部および底部はヘラケズリ。内面はナデ。	明褐色	No.1
	第183図-4	土師器 小型甕	口径: 128 器高: <39>	口縁端部はやや上方につまみ上げられる。頸部から口縁部にかけて内外面ナデ、胴部は外面は縦方向のヘラケズリ。内面はヘラナデ。	淡褐色	No.3
	第183図-5	土師器 甕	口径: 160 器高: <53>	口唇部は丸みを持つ。外面は体部がヘラケズリ。内面は頸部から口縁部はナデ、胴部はヘラナデ。	暗褐色	No.7, 8
	第183図-6	土師器 甕	口径: (272) 器高: <110>	口径に比べて、胴部径の方が大きい。把手は横長で上部がわずかに窪む。外面は頸部から口縁部にかけてナデ、胴部はヘラケズリ。内面は頸部から口縁部にかけてナデ、胴部はヘラナデ。	明褐色	No.4, 6
SI-332	第184図-1	土師器 坏	口径: 123 器高: 35 底径: 68	ロクロ整形。口縁部はわずかに外反する。底部は回転糸切り。体部下端ヘラケズリ後、底部周縁ヘラケズリ。	褐色	No.1
SI-334	第185図-1	土師器 坏	口径: 117 器高: <32>	丸底か。体部は丸みを持つ。外面は口縁端部はナデ、体部はヘラケズリ。内面はナデ。	明褐色	一括4
	第185図-2	土師器 坏	口径: (126) 器高: <42>	丸底。体部は丸みを持つ。外面は口縁端部はナデ、体部はヘラケズリ。内面はナデ。	暗褐色	一括5
	第185図-3	土師器 坏	口径: (142) 器高: 38	丸底。外面は口縁端部はナデ、体部はヘラケズリ。内面はナデ。	淡褐色	一括3
	第185図-4	土師器 坏	口径: (146) 器高: 30 底径: 92	外面は口縁端部はナデ、体部及び底部はヘラケズリ。内面はミガキ。部分的にナデが残る。体部と底部の境が不明瞭で中心からの径が異なる。	明褐色	No.1
	第185図-5	土師器 甕	口径: (135) 器高: <39>	口縁端部はつまみだされる。内外面とも頸部から口縁部にかけてナデ。胴部外面はヘラケズリ。	暗褐色	一括13
	第185図-6	土師器 甕	口径: (154) 器高: <50>	口縁端部は尖りぎみ。外面は頸部から口縁部にかけてナデ、胴部はヘラケズリ。内面はナデ。	橙褐色	一括12
	第185図-7	土師器 甕	口径: (156) 器高: <102> 胴部径: (175)	口縁端部は尖りぎみ。外面は頸部から口縁部にかけてナデ、胴部はヘラケズリ。内面はナデ。	明褐色	一括9
	第185図-8	土師器 甕	口径: (200) 器高: <53>	頸部の括れは弱い。口縁端部は丸みをもつ。外面は頸部から口縁部にかけてナデ、胴部はヘラケズリ。内面はナデ。	明褐色	一括10
	第185図-9	土師器 甕	口径: (194) 器高: <49>	頸部の括れは弱い。口縁端部はややつまみだされるが、丸みをもつ。外面は頸部から口縁部にかけてナデ、胴部はヘラケズリ。内面はナデ。	淡褐色	一括14
	第185図-10	土師器 甕	口径: (192) 器高: <52>	口縁端部は丸みをもつ。外面は頸部から口縁部にかけてナデ、胴部はヘラケズリ。内面はナデ。	明褐色	一括11
	第185図-11	土師器	器高: <23>	底部破砕だが、丸底で器壁が20mmと厚い。	橙褐色	一括8
	第185図-12	土師器 甕	口縁部片	外面は口縁部はナデ、胴部はヘラケズリ。内面は横方向にミガキ。	暗褐色	一括15
	第185図-13	転用硯	110mm×61mm。須恵器破片を転用。内面全体が摩滅。墨の付着がみられる。			一括
	第186図-14	土製品 支脚	長さ<78>mm、幅<46>mm、厚さ<36>mm、重さ90g。裏面は欠損しているが、直線的な稜線で画された多面を構成している。各面は平滑。			一括
	第186図-15	砥石	凝灰岩。長さ<37>mm、幅<57>mm、厚さ<28>mm、重さ72g。下面にV字状の線状痕。			一括
SI-335	第187図-1	土師器 甕	口径: (334) 器高: <96>	口唇部はややつまみ出される。外面は口縁部がナデ、胴部は縦あるいは斜め方向にヘラケズリ。内面は丁寧なナデ。	茶褐色。	一括1
SI-336	第189図-1	須恵器 短頸壺	口径: (99) 器高: <28>	ロクロ整形。体部から口縁部にかけて内側にすぼまる。頸部の括れは弱い。	灰色	一括
	第189図-2	土師器 手捏ね	口径: (78) 器高: 27 底径: (48)	体部外面には、規則的に指頭圧痕が見られる。比較的丁寧に整形される。底部はヘラケズリ。体部、口縁部は内外面ともナデ。	赤褐色	一括16
	第189図-3	土師器 甕	口径: (196) 器高: <103>	頸部で屈曲した口縁部は直線的に立ち上がる。口唇部は丸みを持つ。外面は口縁部がナデ、頸部から胴部はヘラケズリ。内面はナデ。	褐色	No.9, 11, 12, 13
	第189図-4	土師器 壺	口径: (140) 器高: 122 底径: 80	口縁部は頸部から短く外反する。口唇部は丸みをもつ。外面は口縁部はナデ。内面は口縁部はナデ。胴部上半はヘラナデ、下半はナデ。	橙褐色	No.6
	第189図-5	土師器 壺か	口径: 128 器高: 197 底径: 75	ゆがみが著しい。口縁部は短く外反する。口唇部は丸みをもつ。胴部は球状を呈する。体部と底部の境はやや括れる。外面は口唇部はナデ、口縁部から頸部及び胴部上半は縦方向のヘラケズリ、胴部下半は斜め方向のヘラケズリ。内面はナデ。	茶褐色	No.2, 3
	第189図-6	棒状土製品	長さ<78>mm、径<18>mm。やや湾曲し、先端付近でくびれる。頭部は面取りされる。			No.14

出土地点	挿図No.	種別 器種	計測値と形態の特徴			備考
			計測値(mm)	整形・形態の特徴	色調など	
SI-336	第189図-7	鉄鏃	長さ31mm, 幅11mm, 長頸, 両刃, 両開。			
	第189図-8	台石	長さ187mm, 幅104mm, 厚さ77mm, 重さ2150g。左右側面及び表裏面が摩滅している。左右側面の摩滅は顕著だが, 表裏面は粗い。上下側面はうち欠いたままである。			No.15
SI-337	第190図-1	土師器 椀	口径: 140 器高: 61 底径: 50	体部は丸みを持ち, 口縁部はやや内湾する。底部と体部との境はわずかに稜が立つ。外面は口縁端部がナデ, 体部はヘラケズリ後ナデ。内面はナデ。	褐色	No.5
	第190図-2	土師器 椀	口径: (134) 器高: 84 底径: 45	頸部を有し, 口縁部は短く外反する。底部と体部の境はわずかに稜が立つ。外面は口縁部がミガキに近いナデ, 体部はヘラケズリ後ミガキ。内面はミガキに近いナデ。	橙褐色	No.1
	第190図-3	土師器 坏	口径: (148) 器高: 53	丸底。体部は丸みを持ち, 口縁部は直立する。外面は口縁部がミガキ, 体部はヘラケズリ後ミガキ。内面はミガキ。	内外面とも赤彩	No.9
	第190図-4	土師器 坏	口径: (148) 器高: 69 底径: 54	底部は丸底ぎみだが, 僅かに稜線が観察できる。外面は口縁部から体部にかけてミガキ, 底部はケズリ後ミガキ。内面はミガキ。	内外面とも赤彩	No.2-1
	第190図-5	土師器 坏	口径: 155 器高: 60 底径: 63	底部の稜線は比較的明瞭だが, ややまるみをもつ。内外面ともケズリ後ミガキ。	内外面とも赤彩。	No.2-2
	第190図-6	土師器 椀	口径: (162) 器高: 59 底径: 50	体部と底部の境は明瞭。内外面ともミガキ。	内外面とも赤彩	No.3
	第190図-7	土師器 坏	口径: (170) 器高: 64 底径: (50)	外面は体部がミガキ, 体部下端はヘラケズリ後ミガキに近いナデ, 底部はヘラケズリ。内面はミガキ。	内面上半部から外面上半部まで赤彩	No.4
	第190図-8	土師器 壺か	器高: <165> 底径: 85	底部は括れてした下方に突き出す。胴部は内湾するように立ち上がる。外面はヘラケズリ後ミガキ。内面はナデ。	茶褐色	No.7
	第190図-9	土師器 壺か	器高: <164>	外面はヘラケズリ後ミガキ。内面はヘラケズリ後ナデ。	褐色	No.6
	第190図-10	土師器 壺か	器高: <40> 底径: 66	外面は胴部がナデ, 底部はヘラケズリ。内面はナデ。	外面赤彩	一括32
	第190図-11	土師器高坏	脚部破片	外面はナデ。	外面赤彩	一括26
SB-301	第191図-1	須恵器 長頸瓶	口径: (97) 器高: <11>	口縁端部は下方にもつまみ出される。	灰色	
SB-302	第192図-1	土師器 坏	口径: (147) 器高: <26>	ロクロ整形。口縁部は外反する。高台が付くか。	褐色	一括2
	第192図-2	土師器 高台付坏	器高: <24> 台部径: 54	ロクロ整形。高台部は長く外反する。摩滅が著しいため調整が観察できない。	橙褐色	一括1
SK-308	第195図-1	土師器 高台付坏	口径: (96) 器高: 45 底径: 64	ロクロ整形。体部から口縁部は直線的に立ち上がる。高台部は短い。	褐色	No.1
	第195図-2	土師器 坏	口径: (108) 器高: 37 底径: (60)	ロクロ整形。体部から口縁部は直線的に立ち上がる。	淡褐色。	一括7
	第195図-3	土師器 坏	口径: (114) 器高: 42 底径: (52)	ロクロ整形。体部は直線的に立ち上がるが, 口縁部はわずかに外反する。	淡褐色。	一括5
	第195図-4	土師器 甕	器高: <36> 底径: 64	胴部は急傾斜で立ち上がる。胴部外面, 底部はヘラケズリ。内面はヘラナデ。	赤褐色。	No.3
	第195図-5	土師器 甕	器高: <20> 底径: 52	胴部外面, 底部はヘラケズリ。内面はナデ。	褐色	No.2
	第195図-6	土師器 灯明皿	口縁部片	体部は丸みを持つ。ロクロ整形ではない。	口唇部にター ル付着	一括6
SK-320	第195図-1	土師器 坏	底径: 47	ロクロ整形。底部は回転糸切り後未調整, やや下方に突き出す。体部下端は未調整。	明褐色	一括15
	第195図-2	土師器 坏	器高: <14> 底径: 57	ロクロ整形。底部は回転糸切り後未調整, やや下方に突き出す。体部下端は未調整。	暗褐色	一括13
	第195図-3	土師器 坏	口径: 104 器高: 28 底径: 49	ロクロ整形。体部中位で屈曲し, 口縁部はやや外反する。底部は回転糸切り。	明褐色	一括14
	第195図-4	土師器 坏	口径: 111 器高: 33 底径: 60	ロクロ整形。体部中位で屈曲し, 口縁部はやや外反する。底部は回転糸切り後未調整。体部下端は未調整。	淡褐色	No.3

出土地点	挿図No.	種別 器種	計測値と形態の特徴			備考
			計測値(mm)	整形・形態の特徴	色調など	
SK-320	第195図-5	土師器 高台付坏	口径: 148 器高: 39 底径: 55	ロクロ整形。体部はやや丸みを持つ。口縁部は外反する。底部は回転ヘラケズリ。	淡褐色 内面黒色処理	No.5
	第195図-6	土師器 高台付坏	口径: 150 器高: 39 底径: 60	ロクロ整形。体部はやや丸みを持つ。口縁部は外反する。底部は回転ヘラケズリ。	淡褐色 内面黒色処理	No.4
	第195図-7	土師器 坏	口径: (134) 器高: 44 底径: (80)	ロクロ整形。体部中位で屈曲し、口縁部はやや外反する。	淡黄褐色	No.7
	第195図-8	土師器 坏	口径: (101) 器高: 29 底径: (65)	ロクロ整形。体部から口縁部にかけて概ね直線的に立ち上がる。底部は手持ちヘラケズリ。体部下端未調整。	暗褐色	一括16
	第195図-9	土師器 高台付坏	器高: <8> 台部径: 61	ロクロ整形。高台部は短い。	内面黒色処理	No.10
	第195図-10	土師器 高台付坏	器高: <27> 底径: 90	ロクロ整形。高台部は長く、端部は外反する。	暗褐色	No.1
	第195図-11	土師器 高台付坏	器高: <23> 底径: (56)	ロクロ整形。高台部は比較的長い。	暗褐色	一括12
	第195図-12	飯岡石	長さ138mm, 幅163mm, 厚さ41mm。			
SK-309	第196図-1	土師器甕	底部破片		淡褐色	一括5
	第196図-2	土師器 椀か	器高: <30> 底径: (93)	ロクロ整形。底部はヘラケズリ。体部下端は手持ちヘラケズリ。	橙褐色 内面黒色処理	一括4
	第196図-3	土師器 小型甕	口径: (112) 器高: <44>	頸部の括れは弱く、口縁部は短く外反する。外面は頸部から口縁部がナデ、胴部は縦方向のヘラケズリ。内面はナデ。	暗褐色	一括2
	第196図-4	土師器 小型甕	器高: <40> 底径: 52	外面は胴部が横方向のヘラケズリ、底部はヘラケズリ。内面はヘラナデ。	茶褐色	一括1
SK-310	第196図-1	須恵器 坏	口径: (161) 器高: 48 底径: 80	ロクロ整形。体部下端から底部にかけては丸みをもつ。底部は回転ヘラケズリ。	淡灰色。	一括1
	第196図-2	土師器 甕	口径: (228) 器高: <76>	外面は頸部から口縁部がナデ、胴部は縦方向のヘラケズリ。内面はナデ。	明褐色	No.1
SK-311	第196図-1	土師器 小皿	口径: (94) 器高: 22 底径: 60	ロクロ整形。体部は直線的に立ち上がり、口唇部はやや外反する。体部下端はやや括れる。底部は回転糸切り後未調整。体部下端は未調整。	淡褐色	一括1
SK-317	第197図-1	土師器 甕	器高: <56> 底径: 74	外面は胴部及び底部ヘラケズリ。内面はナデ。	茶褐色	一括2
	第197図-2	土師器 椀	口径: (160) 器高: <53>	体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。外面は口縁部がナデ、体部は横方向のヘラケズリ。	橙褐色	一括1
	第197図-3	土師器 甕	口径: (220) 器高: <143>	胴部は丸みを持つ。外面は頸部から口縁部にかけてナデ、胴部はヘラケズリ。	橙褐色	一括3
SK-318	第197図-1	土製 支脚	長さ<170>mm, 幅<78>mm, 厚さ<66>mm, 重さ632g。縦の稜線が明瞭で、横断面は多角形状を呈する。			No.1
	第197図-2	土師器 高坏	脚部破片		内面黒色処理	一括
SK-323	第197図-1	土師器 椀	口径: (132) 器高: 71	丸底。体部は丸みを持ち、口縁部は反るように内傾する。境は屈曲して稜が立つ。外面は口縁部がナデ、体部は丁寧なミガキ。内面はナデ。	内外面とも赤彩	一括1
SX-303	第194図-1	土師器 坏	口径: 101 器高: 25 底径: 44	ロクロ整形。体部は丸みを持つ。底部は回転ヘラケズリ、下方にやや突き出す。体部下端は未調整。	褐色	No.3
	第194図-2	土師器 坏	口径: (116) 器高: 33 底径: 65	ロクロ整形。底部は回転ヘラケズリ。体部下端は未調整。	橙褐色。	No.4
	第194図-3	土師器 坏	口径: 138 器高: <53> 底径: (52)	ロクロ整形。内面ミガキ。	内面黒色処理	No.11
	第194図-4	土師器 台付坏	口径: (164) 器高: <58> 底径: (66)	ロクロ整形。口縁部は外反する。底部は回転ヘラケズリ。	橙褐色	No.1, 2
	第194図-5	土師器 高台付椀	器高: <38> 底径: 79	体部は丸みを持つ。底部は回転ヘラケズリ。	内面黒色処理	一括

出土地点	挿図No.	種別 器種	計測値と形態の特徴			備考
			計測値(mm)	整形・形態の特徴	色調など	
SX-303	第194図-6	土師器 甕	口径: (168) 器高: <165>	頸部の括れは弱い。外面は口縁部がナデ、胴部上半は縦方向、下半は横方向のヘラケズリ。	橙褐色	No.5, 8, 9, 10
	第194図-7	土師器 甕	口径: (228) 器高: <155>	頸部の括れは弱い。外面は口縁部がナデ、胴部はヘラケズリ。内面はナデ。	橙褐色	No.6, 9, 10
	第194図-8	片岩	長さ157mm, 幅126mm, 厚さ25mm, 重さ761g。上部は挟りが入り受け口状で、周辺部は被熱している。			
遺構外	第198図-1	土師器 坏	口径: 170 器高: 39	平底ぎみだが、体部と底部の境には稜が立たない。口縁端部及び内面がミガキに近いナデ、体部及び底部はヘラケズリ。	橙褐色	5F25-2 一括7
	第198図-2	土師器 盤	口径: (190) 器高: 30 底径: (146)	口縁部は短く立ち上がり、口唇部はやや内傾する。口縁端部、内面はミガキに近いナデ、体部、底部はヘラケズリ。	橙褐色	5F25-17 No.5
	第198図-3	土師器 皿	口径: (170) 器高: <23>	口縁部は短く立ち上がる。口縁部から体部及び内面はナデ、底部はヘラケズリ。	淡褐色	5F25-1 一括6
	第198図-4	土師器 坏	口径: 126 器高: 40	丸底。体部は丸みを持つ。口縁部はやや括れて外反する。口縁部及び内面がナデ、体部がヘラケズリ後ミガキ。	橙褐色	5F25-2 No.12
	第198図-5	土師器 坏	口径: (123) 器高: 38	丸底。口縁部は体部との境で屈曲して直立する。外面は口縁部がナデ、体部はヘラケズリ。内面はミガキ。	淡褐色	5F25-2 一括8
	第198図-6	土師器 坏	口径: (159) 器高: 52 底径: (36)	体部と底部の境にはわずかに稜が立つ。口唇部はわずかに内傾する。口縁端部及び内面がナデ、体部及び底部がヘラケズリ。	褐色	5F24-2 一括1
	第198図-7	土師器 坏	口径: 125 器高: 37 底径: 80	口唇部はやや内傾する。口縁端部及び内面はナデ。体部から底部はヘラケズリで、境の稜線は明瞭。	暗褐色	5F25-7 No.2
	第198図-8	土師器 坏	口径: 103 器高: 41 底径: 65	ロクロ整形。体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。摩擦が著しい。体部下端は回転ヘラケズリか。	淡褐色	5F25-7 No.3
	第198図-9	土師器 坏	口径: (112) 器高: 37 底径: 66	ロクロ整形。体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。底部は手持ちヘラケズリ。体部下端は手持ちヘラケズリ。	赤褐色	5F24-25 一括4
	第198図-10	土師器 坏	口径: (110) 器高: 43 底径: (68)	ロクロ整形。体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。底部は手持ちヘラケズリ。体部下端は部分的に手持ちヘラケズリ。	褐色	5F25-7 一括15
	第198図-11	土師器 坏	口径: (120) 器高: 40 底径: (63)	ロクロ整形。口縁部はやや外反する。体部下端はヘラケズリ。	淡褐色	5F25-12 一括19
	第198図-12	土師器 坏	口径: (118) 器高: 38 底径: 74	ロクロ整形。口唇部はやや外反する。底部は手持ちヘラケズリ。	淡褐色	5F25-7 一括12
	第198図-13	土師器 坏	口径: (118) 器高: 40 底径: 64	ロクロ整形。体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。底部は手持ちヘラケズリ。体部下端は手持ちヘラケズリ。	淡褐色	5F25-8 一括17
	第198図-14	土師器 手捏ね	口径: (72) 器高: 25 底径: (46)	丁寧に整形される。体部は直線的に立ち上がる。内面はナデ。	茶褐色	5F25-16 一括35
	第198図-15	土師器 坏	口径: 121 器高: 38 底径: 62	ロクロ整形。体部から口縁部は直線的に立ち上がる。底部は回転糸切り後ヘラケズリ。体部下端は手持ちヘラケズリ	淡褐色	5F25-7 No.16
	第198図-16	土師器 坏	口径: (124) 器高: 35 底径: 70	ロクロ整形。体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。底部は回転糸切り。体部下端の調整は摩擦のため判別できない。	淡褐色	5F24-2 一括2
	第198図-17	土師器 坏	口径: (114) 器高: 38 底径: 77	ロクロ整形。体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。底部は回転糸切り後、周縁部は手持ちヘラケズリ。体部下端は手持ちヘラケズリ。	明褐色	5F25-2 一括9
	第198図-18	土師器 坏	口径: (127) 器高: 45 底径: 56	ロクロ整形。体部から口縁部は直線的に立ち上がる。体部下端は屈曲する。底部は回転糸切り。体部下端は未調整。	淡褐色	5F24-9 一括3
	第198図-19	土師器 坏	口径: 122 器高: 36 底径: 63	ロクロ整形。体部下端はヘラケズリ。	暗褐色	5F25-7 No.10
	第198図-20	土師器 坏	口径: (124) 器高: 38 底径: 72	ロクロ整形。体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。底部は回転糸切り後、周縁部はヘラケズリ。体部下端はヘラケズリ。	橙褐色	5F25-7 No.15

出土地点	挿図No.	種別 器種	計測値と形態の特徴			備考
			計測値(mm)	整形・形態の特徴	色調など	
遺構外	第198図-21	土師器 坏	口径: 121 器高: 41 底径: 75	ロクロ整形。体部から口縁部は直線的に立ち上がる。底部は回転ヘラケズリ。体部下端は回転ヘラケズリ。	淡褐色	5F25-12 No.2
	第198図-22	土師器 坏	口径: (122) 器高: 34 底径: 62	ロクロ整形。口縁部はやや外反する。底部は上げ底ぎみ、回転糸切り後、周縁部はヘラケズリ。体部下端はヘラケズリ、やや括れる。	淡褐色	5F25-7 No.12
	第198図-23	土師器 坏	口径: (122) 器高: 32 底径: (70)	ロクロ整形。体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。底部は上げ底ぎみ、回転糸切り後、手持ちヘラケズリ。体部下端は未調整。	茶褐色	5F25-7 一括14
	第198図-24	土師器 坏	口径: (104) 器高: 24 底径: (71)	ロクロ整形。器高は低い。底部は回転糸切り後、手持ちヘラケズリ。内面はナデ。	淡褐色	5F25-16 一括23
	第198図-25	土師器 坏	口径: (107) 器高: 29 底径: (52)	ロクロ整形。器壁は厚く、口縁部はやや外反する。底部は回転糸切り後、周縁部は回転ヘラケズリ。体部下端は回転ヘラケズリ。	茶褐色	5F25-14 一括20
	第198図-26	土師器 高台付坏	口径: (119) 器高: 43 底径: 63	ロクロ整形。体部はやや丸みを持つ。底部は摩滅している。	橙褐色	5F25-1 一括5
	第198図-27	土師器 高台付皿	口径: (132) 器高: 28 底径: (74)	ロクロ整形。口縁部はやや外反する。高台部はやや長い。底部は摩滅している。	内面黒色処理	5F25-7 一括13
	第198図-28	土師器 甕	器高: <25> 底径: 52	外面は胴部及び底部はヘラケズリ。内面はナデ。	暗褐色	5F25-12 一括34
	第198図-29	土師器 小壺	口径: (80) 器高: <34>	ロクロ整形。口縁部は体部との境で屈曲し、括れるように内傾する。体部下半はヘラケズリ。	淡褐色	5F25-2 一括37
	第198図-30	土師器 高坏か	口径: (126) 器高: <59>	口縁部は体部との境で屈曲し、やや括れながら外反する。外面は口縁部がナデ、体部は手持ちヘラケズリ。輪積痕が顕著である。内面はナデ。	茶褐色	5F25-14 一括21
	第198図-31	土師器 高坏	脚部破片		淡褐色	5F35-4 一括27
	第198図-32	土師器 高台付坏	器高: <38> 台部径: 80	ロクロ整形。高台部は長く、端部は大きく外反する。	内面黒色処理	一括28
	第198図-33	土師器 壺か	破片	ハケ目。	暗褐色	5F25-6 一括40
	第198図-34	土師器 甕	底部破片		底部に木葉痕	SK-307
	第199図-35	土師器 坏	口径: (150) 器高: 42	丸底。底部は平底ぎみだが、体部との境に稜を持たない。口縁部及び内面がナデ、体部はヘラケズリ。	明褐色 底部に練刻	5F25-2 一括11
	第199図-36	土師器 坏	口径: (127) 器高: 37 底径: 68	体部は丸みを持ち、底部との境は明瞭。摩滅が著しく調整は観察できない。	底部に練刻	5F25-2 一括10
	第199図-37	土師器 小型甕	口径: (146) 器高: <94> 胴部径: 144	胴部は球形を呈する。胴部径よりも口径が大きい。口唇部は丸みを持つ。外面は頸部から口縁部にかけて口縁にかけてナデ、胴部は斜め方向のヘラケズリ。剥離が著しい。内面はナデ。	橙褐色	5F25-17 No.26
	第199図-38	土師器 甕	口径: (159) 器高: <48>	口唇部は上方につまみ出される。外面は頸部から口縁部にかけて口縁にかけてナデ、胴部は縦方向のヘラケズリ。内面はナデ。	暗褐色	5F25-7 一括29
	第199図-39	土師器 甕	口径: (190) 器高: <56>	口唇部はつまみ出され、内側はやや受け口縁を呈する。	橙褐色	5F25-17 No.54
	第199図-40	土師器 甕	口径: (180) 器高: <72>	頸部は長く、ほぼ垂直に立ち上がり、口縁部は外反する。口唇部は丸みを持つ。外面は頸部から口縁部にかけてナデ、胴部はヘラケズリ。内面はナデ。	赤褐色	5F25-2 No.9
	第199図-41	土師器 甕	口径: 204 器高: <70>	外面は頸部から口縁部にかけてナデ、胴部は縦方向のヘラケズリ。内面はナデ。	橙褐色	5F25-2 No.7
	第199図-42	土師器 甕	口径: (300) 器高: <88>	外面は頸部から口縁部にかけてナデ、胴部はヘラケズリ後ナデ。内面はナデ。	褐色	5F25-17 No.30
	第199図-43	土師器 甕	口径: (294) 器高: <52>	内外面とも頸部から口縁部にかけてナデ。	暗褐色	5F25-16 一括30
	第199図-44	土師器 甕	器高: <54> 底径: 65	胴部外面は横方向のヘラケズリ。内面はナデ。	橙褐色	5F25-7 No.4
	第199図-45	土師器 甕	器高: <72> 口径: (86)	胴部外面は斜め方向のヘラケズリ。内面はナデ。	淡褐色	5F24-9 一括31
	第199図-46	土師器 甕	底径: 127	底径は大きい。	淡褐色	5F25-7 No.8

出土地点	挿図No.	種別 器種	計測値と形態の特徴			備考
			計測値(mm)	整形・形態の特徴	色調など	
遺構外	第199図-47	土師器 甕か	器高: <22>	尖底。胎土は古代のものに類似するが、時期の判断が明確ではない。	淡褐色	5F24-14 一括33
	第199図-48	土師器 甕	底部破片		底部に木葉痕	5F25-2 一括36
	第199図-49	土師器 高坏	脚部片		内面に粉痕	5F24-7 一括25
	第199図-50	土師器 灯明皿	口縁部片		内面に油煙痕	5F25-21 一括24
	第200図-1	須恵器 長頸瓶	口縁部片	頸部に筒状工具により山形の沈線文が施文される。	灰色	5F25-8
	第200図-2	須恵器 長頸瓶	口縁部片	頸部に刷毛状工具により波形の沈線文が施文される。	灰色	5F25-21
	第200図-3	須恵器 長頸瓶	頸部片	頸部に刷毛状工具により波形の沈線文が施文される。	灰色	5F25-9
	第200図-4	須恵器蓋	つまみ部片	つまみは低く、頂部は尖らない。	灰色	5F25-6
	第200図-5	須恵器蓋	つまみ部片	ロクロ整形。つまみは宝珠型。つまみ部分後付け。	橙灰色	5F24-3
	第200図-6	須恵器 蓋	器高: <25> つまみ径: 24	ロクロ整形。天井部は平坦。天井部は回転ヘラケズリ。つまみは円筒状で頂部は尖らない。	濃灰色	5F25-8
	第200図-7	須恵器 高台付坏	器高: <18> 台部径: 99	ロクロ整形。底部は丸底で台部から突き出す。底部は回転ヘラケズリ。台部後付け。	明灰色	5F25-2
	第200図-8	須恵器 高台付坏	口径: (164) 器高: 41 台部径: 107	ロクロ整形。体部下端は屈曲し、直線的に立ち上がる。台部後付け。	明灰色	5F25-2 5F25-7
	第200図-9	須恵器 高台付坏	口径: 153 器高: 41 底径: 92	ロクロ整形。体部は開き気味に立ち上がる。底部は回転ヘラケズリ。台部後付け。	灰色	5F25-2
	第200図-10	須恵器 高台付坏	器高: <30> 台部径: 50	ロクロ整形。底部は回転ヘラケズリ。台部後付け。	灰色	5F24-3
	第200図-11	須恵器 高台付坏	口径: 144 器高: 54 台部径: 90	ロクロ整形。体部下端で屈曲する。口縁端部はやや外反する。底部は回転ヘラケズリ。台部後付け。内面は摩擦が著しい。	灰色	5F25-17 5F25-7
	第200図-12	須恵器 坏	口径: 127 器高: 40 底径: 85	ロクロ整形。体部下端はヘラケズリ。底部は手持ちヘラケズリ。	灰色 一部青灰色	5F25-2, 5F25-7
	第200図-13	須恵器 坏	口径: 133 器高: 37 底径: 71	ロクロ整形。底部は丸底ぎみで、体部との境が不明瞭。回転ヘラケズリ。	明灰色	5F25-2
	第200図-14	須恵器 甕	口径: (270) 器高: <68>	頸部は有さず、体部からつまみ出されて、口縁部を整形する。胴部内面はあて具痕跡をナデ消している。	淡灰色	5F25-12
	第200図-15	須恵器 甕	口径: 263 器高: <77>	ロクロ整形。多角形状に面取りされる。	青灰色	5F25-8, 5F24-3
	第200図-16	須恵器 甕	口径: 241 器高: (320) 胴部径: 271 底径: (90)	ロクロ整形。胴部は外面に叩き目、内面にあて具痕。体部下端はヘラケズリ。	灰色	5F25-2 5F25-21
	第200図-17	須恵器 甕	口径: (260) 器高: <95>	胴部は外面に叩き目、内面にあて具痕あり。	青灰色	5F25-16 5F25-17
	第200図-18	須恵器 甕	口径: (260) 器高: <121>	胴部は外面に叩き目、内面にあて具痕あり。	青灰色	SD302, 5F25-12 5F25-17
	第200図-19	須恵器 長頸瓶	頸部径: 68 器高: 113 胴部径: 166	ロクロ整形。頸部は後付け。胴部は屈曲する肩を有する。	青灰色	5F25-7
	第200図-20	須恵器 長頸瓶	器高: 126 胴部径: 227	ロクロ整形。胴部の肩は張らずに丸みをもつ。		5F25-7
	第202図-1	凹石	長さ101mm, 幅<48>mm, 厚さ41mm, 重さ247g。直方体状を呈する。右側面を除いた各面は中央部が窪み、表面は線状の溝を有する。			5F25-7
	第202図-2	凹石	長さ58mm, 幅<86>mm, 厚さ26mm, 重さ151g。板状を呈する。表裏面ともやや窪む。欠損部分を除いて各面とも摩擦している。			5F25-16
	第203図-3	土製支脚	長さ<78>mm, 幅<44>mm, 厚さ<49>mm, 重さ118g。ほぼ直方体。各面は丁寧に整形されている。			5F25-21
第203図-4	土製管玉	長さ<25>mm, 径12mm, 孔径3.5mm。			5F25-16	
第203図-5	土製紡錘車	径(34)mm, 厚さ26mm, 孔径(7)mm。丁寧な面取りで整形される。			5F25-7	

出土地点	挿図No.	種別 器種	計測値と形態の特徴			備考
			計測値(mm)	整形・形態の特徴	色調など	
遺構外	第203図-6	土玉	径57mm, 厚さ44mm, 孔径(上)8mm, (下)12mm。球状を呈するが、下部に平坦面を有する。孔径は上部に対して下部は大きい。			5F25-3
	第203図-7	石製紡錘車	径47mm, 厚さ11mm, 重さ15g。下面と側面との間に斜行する面には、放射状に幅2mm程度の整形痕を有する。			5F24-9
	第203図-8	凹石	長さ<38>mm, 幅<68>mm, 厚さ<37>mm, 重さ112g。上面に窪みを有する。楕円形と思われる。			5F35-1
	第203図-9	磨石	長さ59mm, 幅24mm, 厚さ6mm, 重さ17g。研磨するためのものか、下端が摩滅し、明瞭な面を形成している。			5F25-1
	第203図-10	磨石	長さ<71>mm, 幅<62>mm, 厚さ20mm。全体の形状は不明だが扁平で、各面は摩滅している。下端に線状の溝が、上部には段差を有する。			5F25-16
	第203図-11	凹石	長さ<45>mm, 幅(76)mm, 厚さ31mm, 重さ175g。両面に10mm前後の比較的滑らかな窪みがみられる。			5F25-16
	第203図-12	敲石	長さ62mm, 幅45mm, 厚さ16mm, 重さ72g。表面及び側面には敲いた痕跡を有する。			5F24-2
	第203図-13	敲石	長さ56mm, 幅68mm, 厚さ27mm, 重さ128g。下端にのみ敲打痕を有する。			5F25-17
	第203図-14	砥石	長さ<42>mm, 幅37mm, 厚さ27mm, 重さ44g。欠損したものを再利用。			SD-305
	第203図-15	砥石	長さ<62>mm, 幅29mm, 厚さ17mm, 重さ37g。表面に「×」の切り込み。			一括
	第203図-16	鉄製 刀子	長さ<45>mm, 高さ11mm, 背幅3mm。			一括
	第203図-17	鉄鏃	長さ<58>mm, 幅10mm, 茎幅5mm。両刃。両開。			5F25-8
	第203図-18	鉄製品	長さ<53>mm, 幅7mm, 厚さ4mm。鉄族の茎に相当するか。			一括
	第203図-19	鉄製品	長さ<29>mm, 幅8mm, 厚さ2mm。			5F25-14
	第204図-20	片岩	長さ124mm, 幅108mm, 厚さ43, 重さ730g。使用痕跡は明瞭ではないがスス付着。			5F25-2
	第204図-21	石斧か	長さ116mm, 幅66mm, 厚さ12mm, 重さ114g。片岩製だが、表面は縁辺を剥離して刃部を形成している。			5F24-25, 5F25-17
	第204図-22	石斧か	長さ80mm, 幅128mm, 厚さ18mm, 重さ244g。側縁は尖り、下端には剥離痕が摩滅している。刃部状を呈しているが、その稜線は直線的ではない。			5F25-17
	第204図-23	片岩	長さ154mm, 幅77mm, 厚さ42mm, 重さ698g。両側縁は摩滅している。			5F25-1
	第204図-24	片岩	長さ53mm, 幅80mm, 厚さ24mm, 重さ141g。左側縁が一部摩滅している。			5F35-8
	第204図-25	片岩	長さ75mm, 幅68mm, 厚さ18mm, 重さ113g。左側縁がやや摩滅している。			5F25-12
	第204図-26	片岩	長さ89mm, 幅48mm, 厚さ23mm, 重さ139g。			5F25-17
	第204図-27	片岩	長さ98mm, 幅44mm, 厚さ15mm, 重さ56g。溝状部分が砥石状だが研ぎによって生成したものか不明でない。側面に摩滅の痕跡は見られない。			5F25-7
	第204図-28	礫	長さ<67>mm, 幅<83>mm, 厚さ41mm。被熱している。			5F25-2
	第204図-29	片岩	長さ86mm, 幅76mm, 厚さ15mm, 重さ131g。下端は刃部状。側面は摩滅している。			5F25-16
	第204図-30	台石か	長さ<94>mm, 幅<125>mm, 厚さ57mm。側縁は整形されている。			5F25-7
	第204図-31	片岩	長さ98mm, 幅88mm, 厚さ18mm, 重さ194g。			SK-307
	第204図-32	片岩	長さ71mm, 幅37mm, 厚さ13mm, 重さ47g。両側縁中央部に快れるように摩滅した痕跡。			5F25-9
	第204図-33	片岩	長さ76mm, 幅38mm, 厚さ16mm, 重さ60g。右側縁に快れるような摩滅痕。下端部は敲打痕か。			SD-305
	第204図-34	玉	高さ8mm, 幅8mm, 厚さ7mm, 重さ0.8g。			表採
	第201図-1	転用硯	46mm×45mm。須恵器破片を転用。内面全体、右側面が摩滅している。			5F25-22
	第201図-2	転用硯	50mm×44mm。須恵器破片を転用。内面の左半分、下側及び左右側面が摩滅している。			5F24-3
	第201図-3	転用硯	60mm×54mm。須恵器破片を転用。内面全体が摩滅している。			SD-305
	第201図-4	転用硯	60mm×55mm。須恵器破片を転用。内面全体が摩滅している。			5F24-8
	第201図-5	転用硯	73mm×60mm。須恵器破片を転用。内面の大半が摩滅している。右下端に墨痕が見られる。			SD-305
	第201図-6	転用硯	66mm×60mm。須恵器破片を転用。内面の左半分が摩滅している。			5F25-21
	第201図-7	転用硯	103mm×74mm。須恵器破片を転用。内面の左半分が摩滅している。			5F25-8
	第201図-8	転用硯	55mm×109mm。須恵器破片を転用。内面全体が摩滅し、中央に墨痕が見られる。左側面が摩滅している。			5F25-1
	第201図-9	転用硯	93mm×92mm。須恵器破片を転用。内面全体、下側及び右側面が摩滅している。			5F25-7
	第201図-10	転用硯	104mm×71mm。須恵器破片を転用。内面中央、左右側面が摩滅している。			5F25-14
	第201図-11	転用硯	139mm×144mm。須恵器破片を転用。内面中央がやや摩滅している。			5F24-8
	第201図-12	転用砥石	63mm×65mm。須恵器破片を転用。下側面が摩滅している。			5F25-21
	第201図-13	転用硯	88mm×80mm。須恵器破片を転用。外面中央部と内面の全体及び下側縁が摩滅している。			5F25-1
第201図-14	転用砥石	45mm×38mm。下側面が摩滅している。			5F25-21	
第201図-15	転用砥石	78mm×55mm。下側面が摩滅している。			5F25-21	
第201図-16	転用砥石	109mm×80mm。須恵器破片を転用。上下側面及び右側面が摩滅している。			5F25-1	

第28表 C4区中世出土遺物一覧

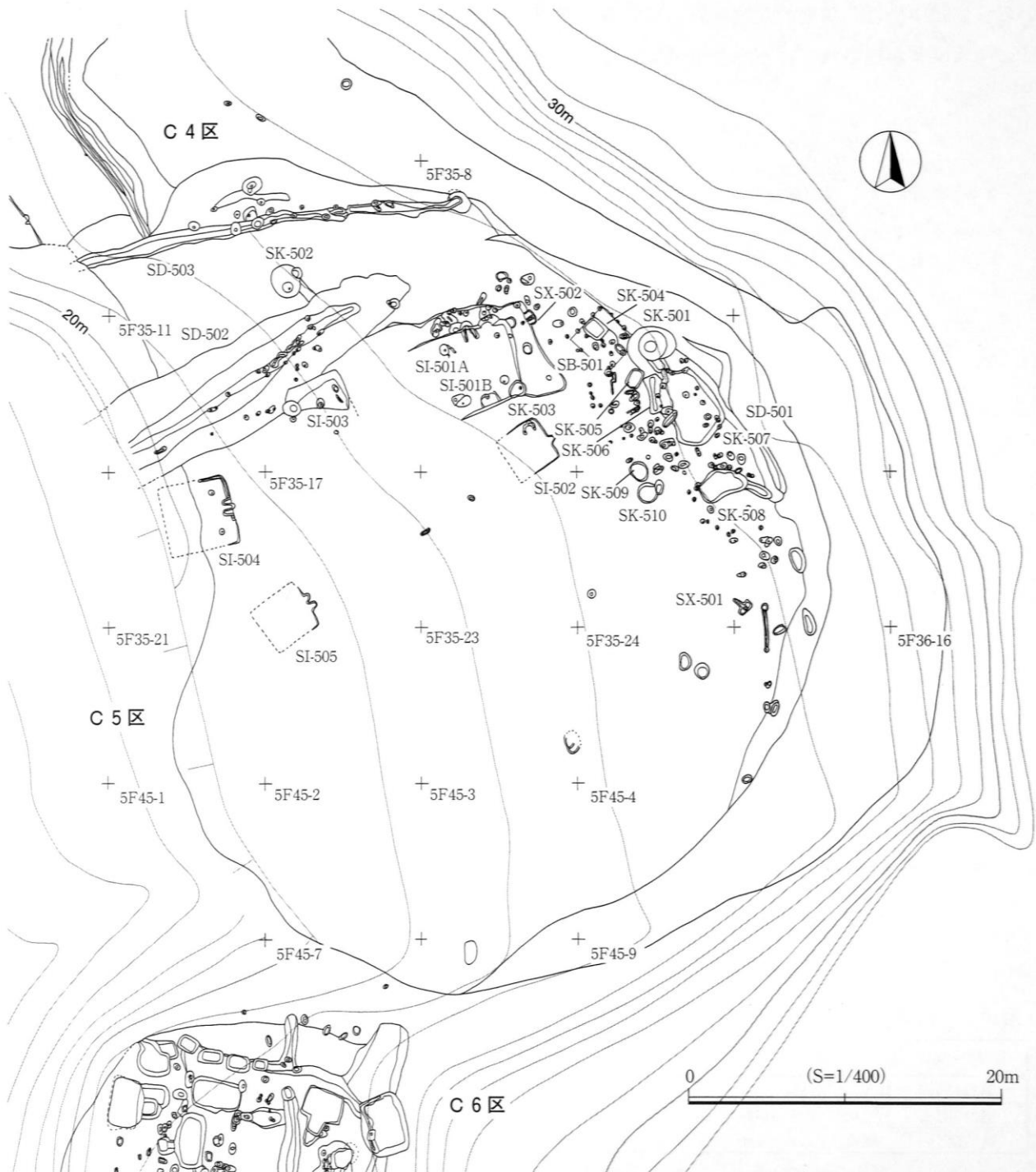
() は推定値 < > は遺存値

出土地点	挿図No.	種別・器種	計測値(mm, g)	特徴
SK-302	第205図-1	転用砥石	162×178×118	五輪塔(地輪)の転用
SK-303	第206図-1	白磁	底部破片	15世紀
SK-306	第209図-1	縁釉小皿	口径(102), 器高26, 底径(47)	
	第209図-2	深皿	器高<48>, 底径(120)	瀬戸産 No.3
	第209図-3	瓶子	器高<144>, 底径(108)	瀬戸産 No.1
	第209図-4	転用砥石	48×58×7	
SK-314	第210図-1	飯岡石	230×154×58	
SD-301	第211図-1	甕	破片	常滑産。5F15-16
SD-304	第211図-2	甕	口縁部破片	常滑産。5F15-16
	第211図-3	甕	破片	常滑産。5F15-21
5F25-9	第212図-1	かわらけ	口径85, 器高16, 底径46	
5F25-16	第212図-2	かわらけ	口径(82), 器高15, 底径48	
5F25-18	第212図-3	小皿	底部破片	瀬戸産
5F25-16	第212図-4	連弁文椀	口縁部破片	(青磁)
5F25-17	第212図-5	壺	口径(102), 器高<30>	
5F25-24	第212図-6	縁釉小皿	破片	瀬戸産
5F25-2	第212図-7	瓶子	破片	瀬戸産
5F25-17	第212図-8	徳利	破片	美濃産。近世。
5F24-7	第212図-9	徳利	破片	
5F25-8	第212図-10	甕	破片	常滑産
5F24-25	第212図-11	甕	破片	常滑産
5F15-21	第212図-12	甕	破片	常滑産
5F25-22	第212図-13	甕	破片	常滑産
5F25-2	第212図-14	甕	破片	
5F-35-4	第212図-15	砥石	<82>×31×33, 136g	
5F-25-8	第212図-16	砥石	<99>×31×27, 89g	
5F-25-8	第212図-17	砥石	<99>×36×32, 121g	
5F-25-8	第212図-18	砥石	<56>×41×12	
5F25-9	第213図-1	転用硯	59×69×8	内面のほぼ全体に使用痕
5F25-18	第213図-2	転用砥石	56×65×15	内面全体及び右側面に使用痕
5F25-17	第213図-3	転用砥石	32×74×7	内面全体及び下側面に使用痕
5F25-21	第213図-4	転用砥石	43×66×12	内面上部左側に使用痕跡
5F25-21	第213図-5	転用砥石	46×60×15	内面上部の左右端に使用痕
5F25-22	第213図-6	転用砥石	38×45×7	内面全体及び下側面に使用痕
5F25-21	第213図-7	転用硯	78×120×8	内面のほぼ全体に使用痕

第5章 C5区の調査

半円形状に台地整形が行われる（第214図）。遺構は北側での検出が多く、中央から南側は検出できなかった。中でも、中世の遺構は北東側に集中する。平安時代の住居跡が検出できたことから、台地整形の開始は当該期に遡る可能性がある。北側でC4区と、南側でC6区と段差を有しつつ接続している。

遺構は古代の竪穴住居跡と溝、中世の土坑、ピット群、そして近世の火葬施設を検出した。概して、遺構密度は高くない。



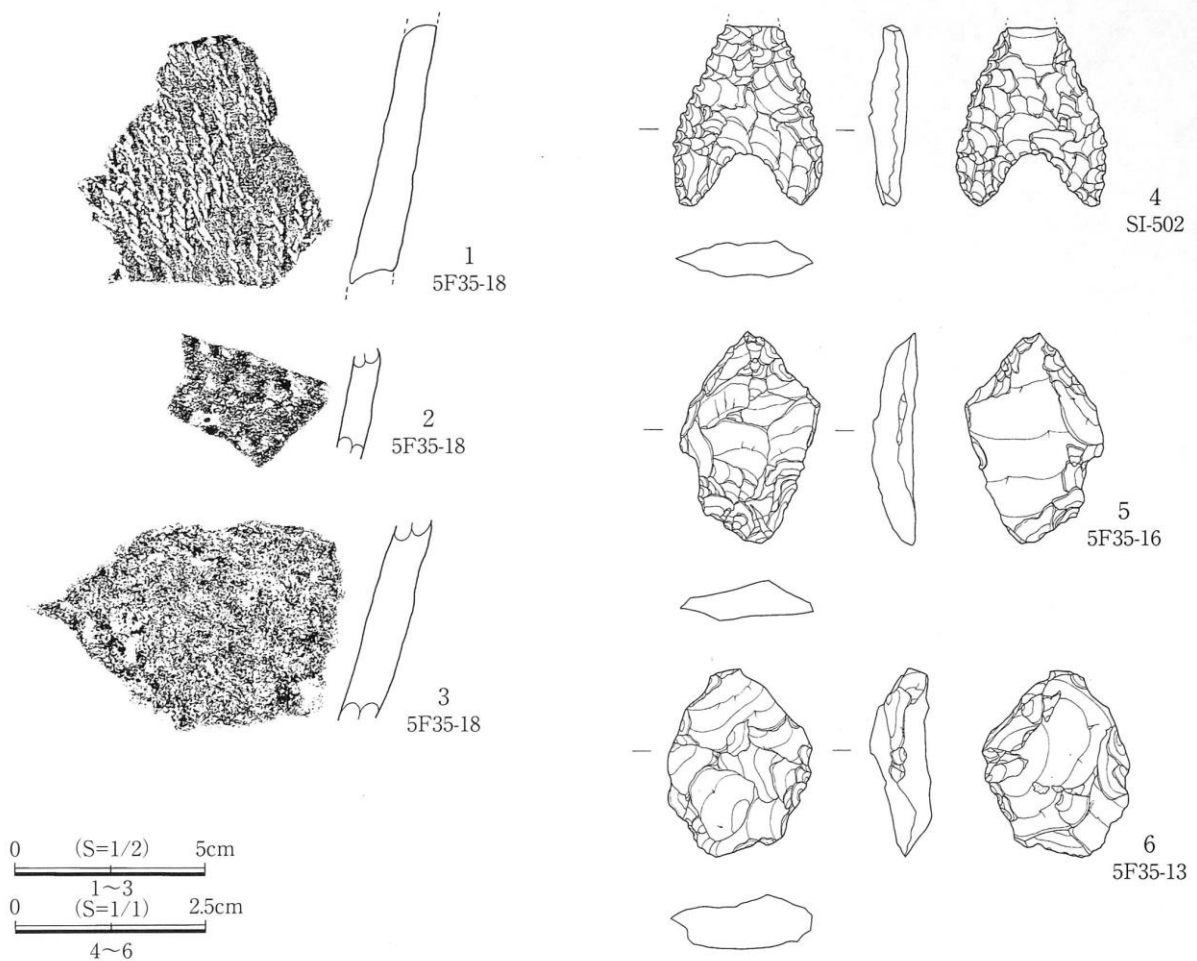
第214図 C5区遺構配置図

第1節 縄文時代 (第215図)

遺構は検出することができず、数点の土器片と石器が出土したにすぎない。これらは、東側の台地上から混入した可能性が高く、当地点での活動痕跡とは言い難い。

土器では、1が撚糸文系、2が浮島・興津系である。3は摩滅が著しく、型式の判別は難しい。中期であろうか。無文の胴部片で、胎土に砂礫を多く含む。

石器では、4の石鏃は先端部が欠損している。側縁は直線状でなく、かえしの部分で屈曲する。鋸歯状に丁寧な押圧剥離が施される。他の地区から出土したものとも比べても、同種のものも出土していない。5は菱形の形態をしている。剥片剥離後に上部両側縁に連続して二次調整を施し、先端部を丁寧に作出している。側縁中央は急角度の剥離を施している。下部も両面から二次調整が施されている。6は下部に局部的に二次調整が施されている。左側縁は尖るものの、右側縁は面を形成している。



第215図 C5区出土縄文土器及び石器

第29表 C5区縄文時代石器一覧

挿図No.	器種	地区	出土地点	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
第215図-4	石鏃	C5	SI-502	黒曜石	<24>	20	5	<1.7>	
第215図-5	二次加工のある剥片	C5	5F35-16	黒曜石	28	19	6	2.3	微細剥離
第215図-6	二次加工のある剥片	C5	5F35-13	黒曜石	25	19	8	2.8	

第2節 古墳時代から平安時代

6軒の竪穴住居跡が北半で散漫に分布する。出土した土器から、大半が平安時代末に属すると考えられるが、隅が角張り、直線的な壁を有するSI-504は古墳時代に属するであろうか。

溝は規模が大きく、幅広で深い。堀状を呈しており、中世に帰属する可能性も否定できないが、遺物は古代の土師器ばかりで、陶磁器類は出土していない。

第30表 C5区 竪穴住居跡計測表

()は推定値 < >は遺存値

遺構番号	時期	位置	主軸方位	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)
SI-501A	9世紀?	5F35-13	N-34° -W	0.7	0.6	0.7
SI-501B・C	11世紀以降	5F35-13	N-20° -W	5.8	(5.3)	0.9
SI-502	9世紀後半	5F35-13	N-35° -W	3.2	<3.1>	0.3
SI-503	不明	5F35-12	N-24° -W	<4.2>	<4.8>	0.5
SI-504	6世紀?	5F35-16	N-74° -E	<2.4>	(4.5)	0.1
SI-505	11世紀以降	5F35-17	N-55° -E	<1.8>	<3.1>	0.1

1. 竪穴住居跡

SI-501A (第216図)

検出状況 5F35-13に位置する。SI-501Bの床から約10cm高い覆土中で竈を検出した。竪穴住居跡の可能性のあるものの、柱穴、床面、壁など、他の要素は確認することができなかった。竪穴の遺構とするならば、SI-501B内での位置関係を考慮すると、かなり小規模なものと推測できる。埋没状況からSI-501Bとは時間的な断絶がある。この竈は被熱痕跡により燃焼部の掘り方が確認できたもので、竈内には黄白色砂ブロックが堆積していたが、袖は確認することができなかった。一方、火床は明瞭で、被熱により赤化していた。甕が出土している。

SI-501B (第217, 218図)

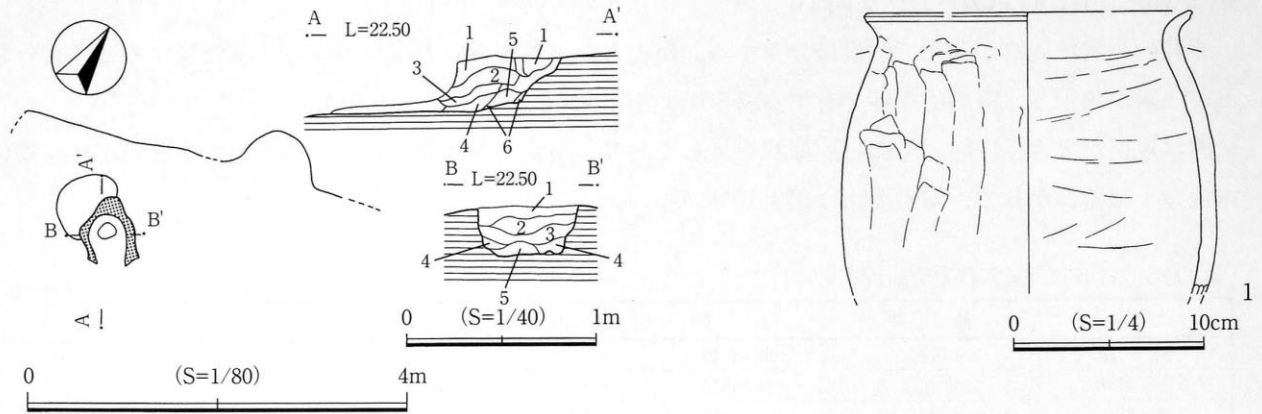
検出状況 5F35-13に位置する。西側の壁は検出できなかった。床は明瞭で、竈前面では灰を含む黒色土が、P1付近では粘土が分布していた。柱穴は4本とも底からの立ち上がり途中で屈曲するか、段差をもつ。上面に比べて底面の径は小さく、ほぼ柱材の大きさに相当するだろうか。P3では掘り方を2つ検出できたことから建て替えの可能性のあるものの、その他では確認できなかった。P5は入口施設のピットに相当し、その周囲は床から数cm前後、土坑状に掘り込まれていた。周溝は検出できなかった。

竪穴の東側と北側では棚状の掘りこみが確認できた(501C)。重複する住居跡とするには、底面が平坦でなく、竪穴側に傾斜している。また、形態が不整で、配列のわかる柱穴や竈は検出できなかったことから、501Bに付随する施設としておく。ピットは多数穿たれており、東側では10~20cm、北側では40cm前後の深さを測る。

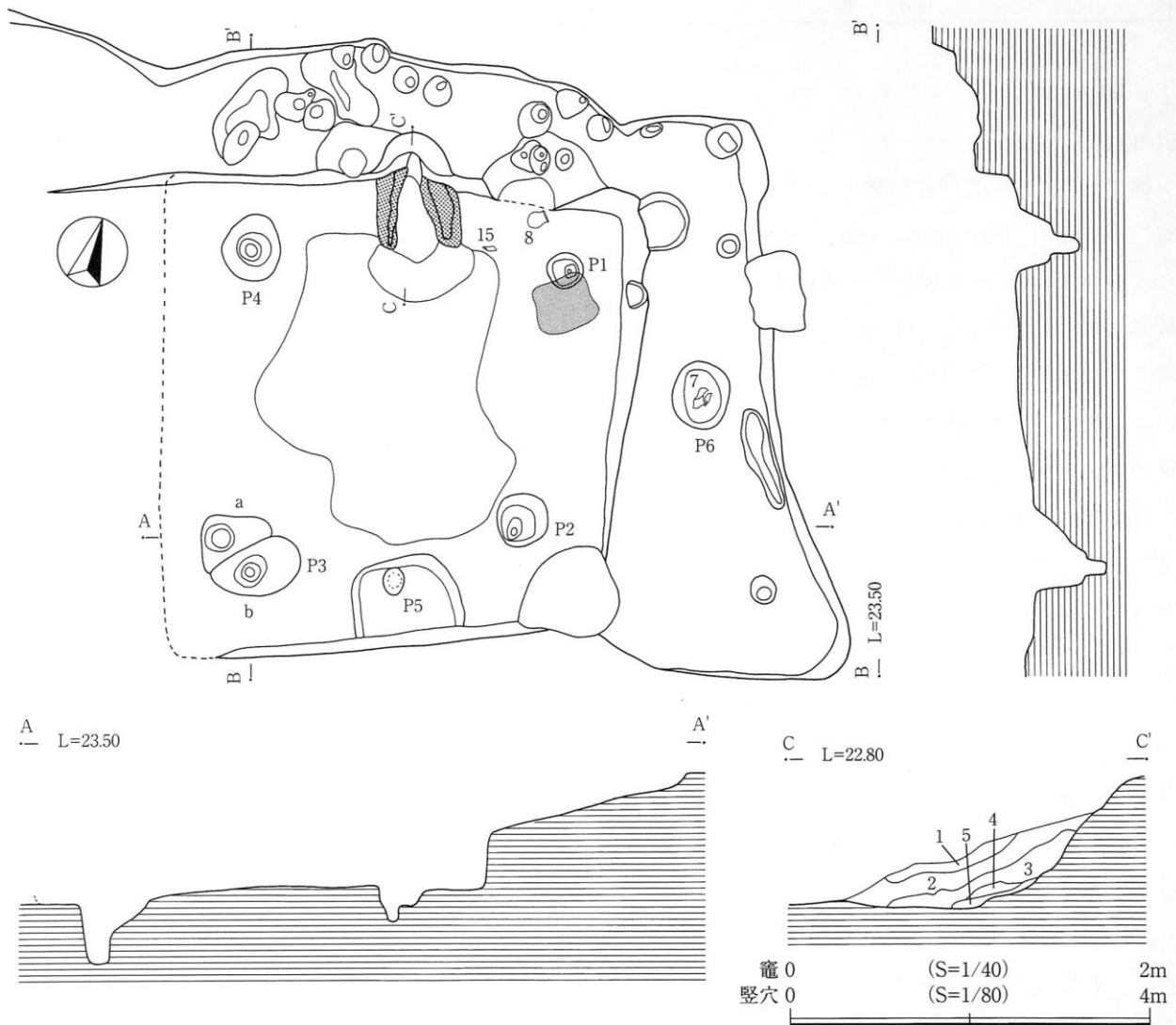
遺物と出土状況 501Aの壁、床を明確にし得なかったため、覆土中のものは混在している可能性があるが、平安時代の土師器坏、高台付坏、甕、土玉、紡錘車、支脚、砥石、刀子などが出土している。

SI-502 (第219, 220図)

検出状況 5F35-13に位置する。竈を2基検出した。竈Bは竪穴壁面に付設したもので、いわゆる袖は検出していない。竪穴外に燃焼空間を設けたものである。一方、竈Aは竪穴床面のほぼ直上で、壁に接することなく検出したもので、砂で構築された壁体がU字状に巡っている。天井部の有無については確認できなかった。これら2基の竈は、竪穴内には竈Aを覆うように焼土や炭化材が広がっていること、竈Aに



第216図 SI-501A実測図及び出土遺物



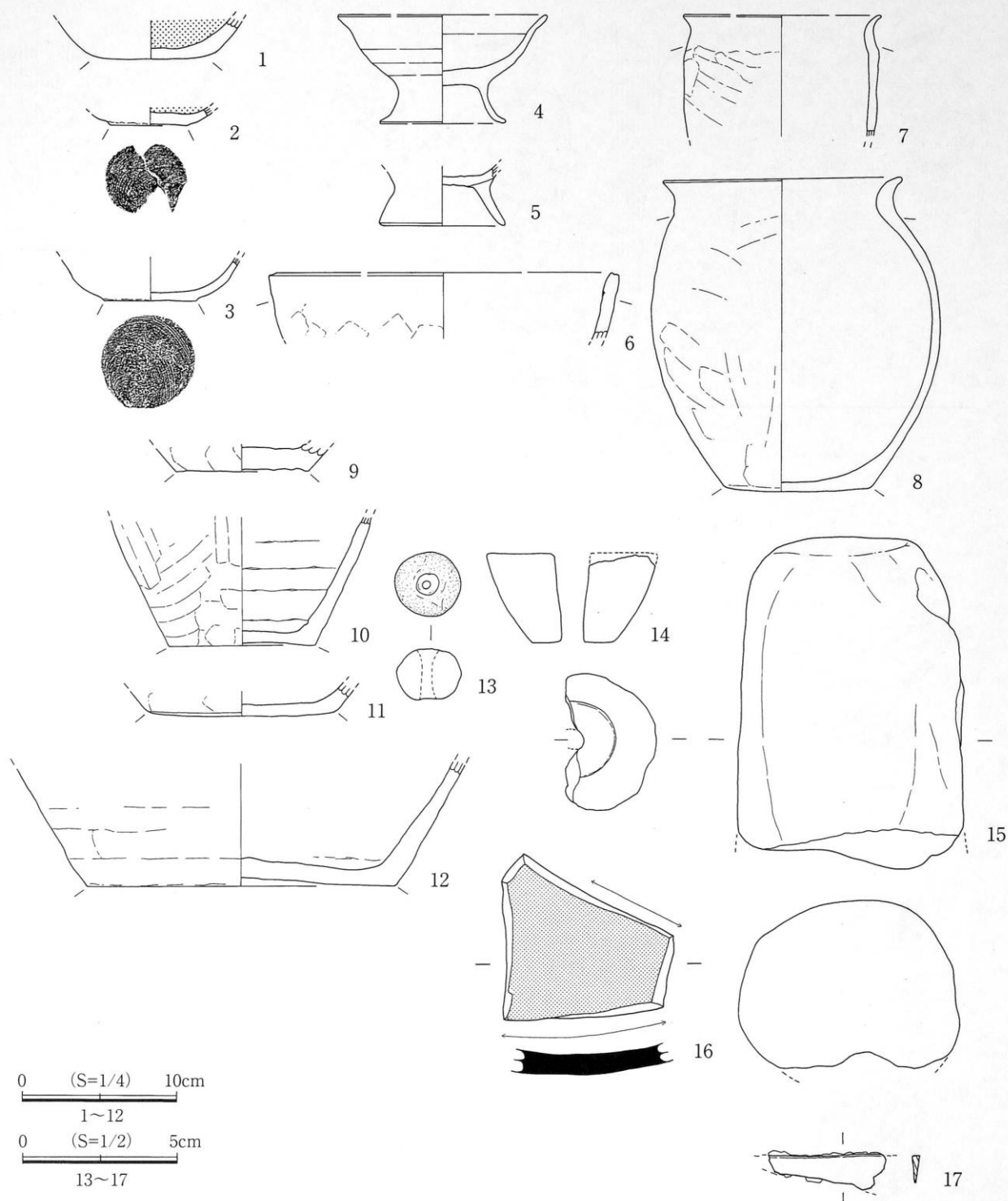
第217図 SI-501B実測図

SI-501A 竈土層説明

1. 暗褐色土。
2. 暗褐色土。黄褐色の山砂を含む。天井部崩落土の可能性。
3. 暗赤褐色土。焼土ブロックを多く含む。天井部内崩落土。
4. 暗灰色土。灰層。
5. 赤褐色土。火床。
6. 黄白色砂。火床相当部分に砂を貼りつけている。

SI-501B 竈土層説明

1. 褐色土。
2. 褐色土。焼土粒子、炭化粒子が混じる。
3. 灰褐色土。灰層。焼土粒子が混じる。
4. 灰褐色土。3層と同質。焼土の含有が多い。
5. 黒褐色土。炭化材を多く含む。

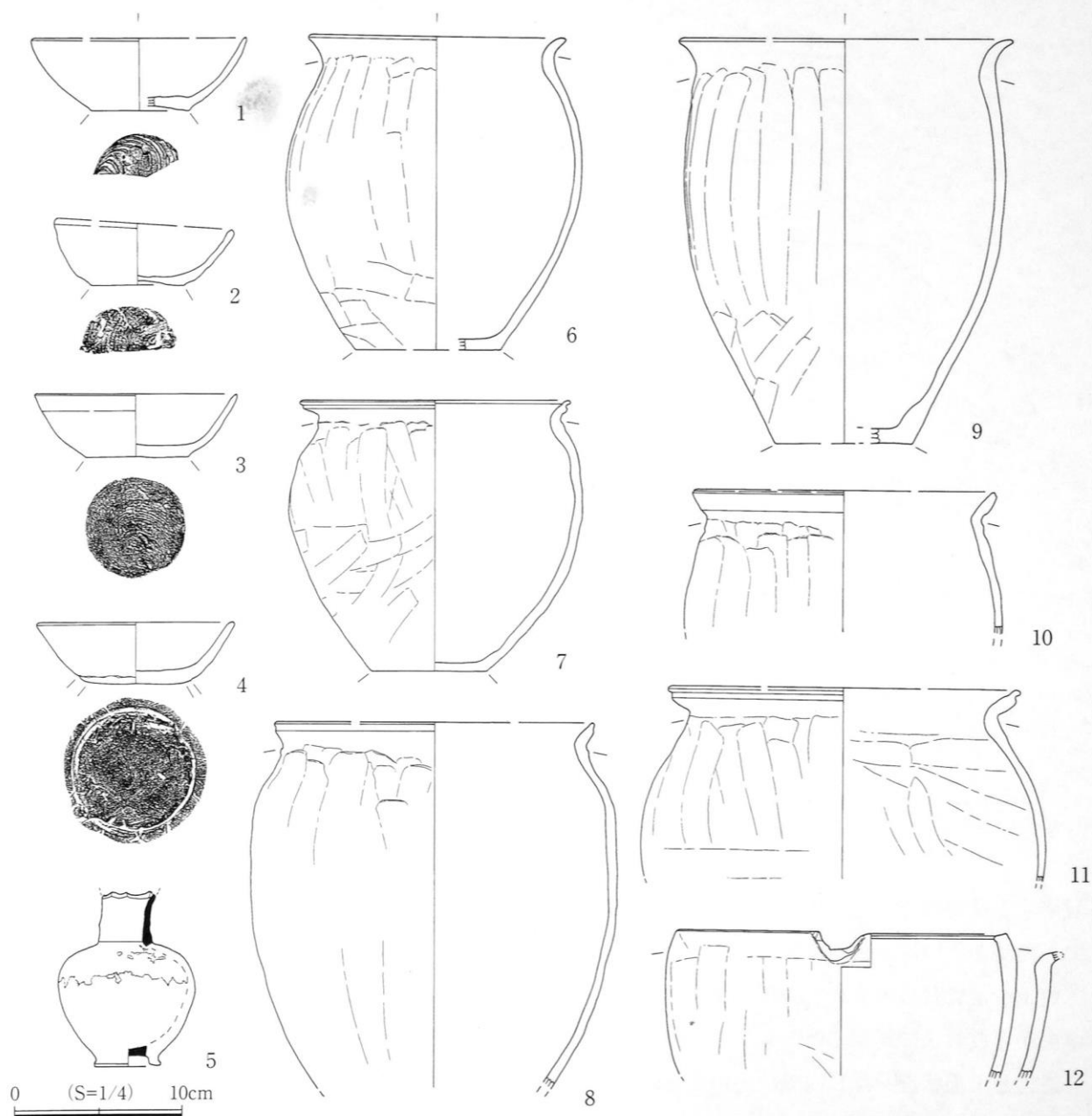
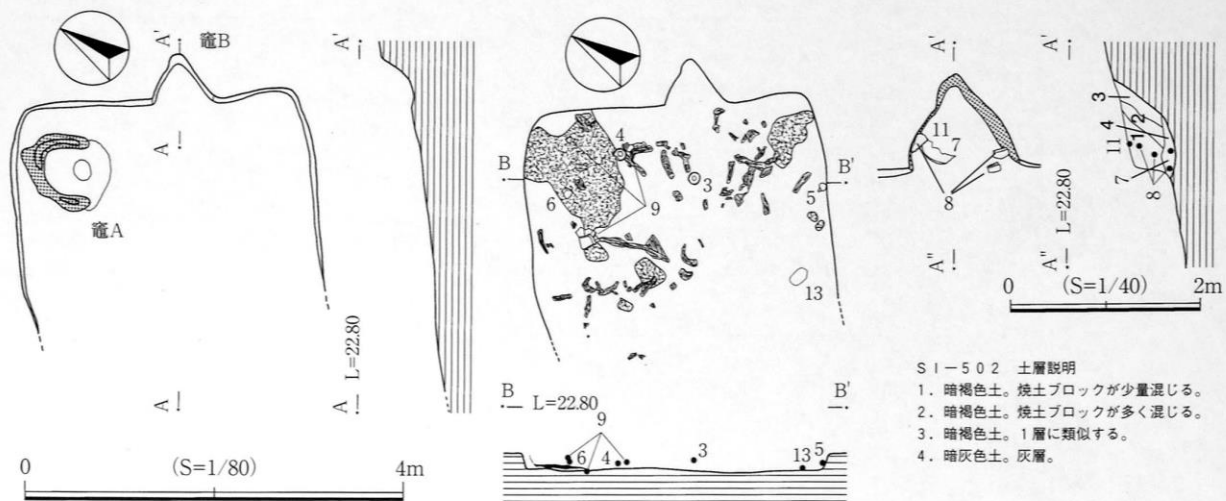


第218図 SI-501B出土遺物

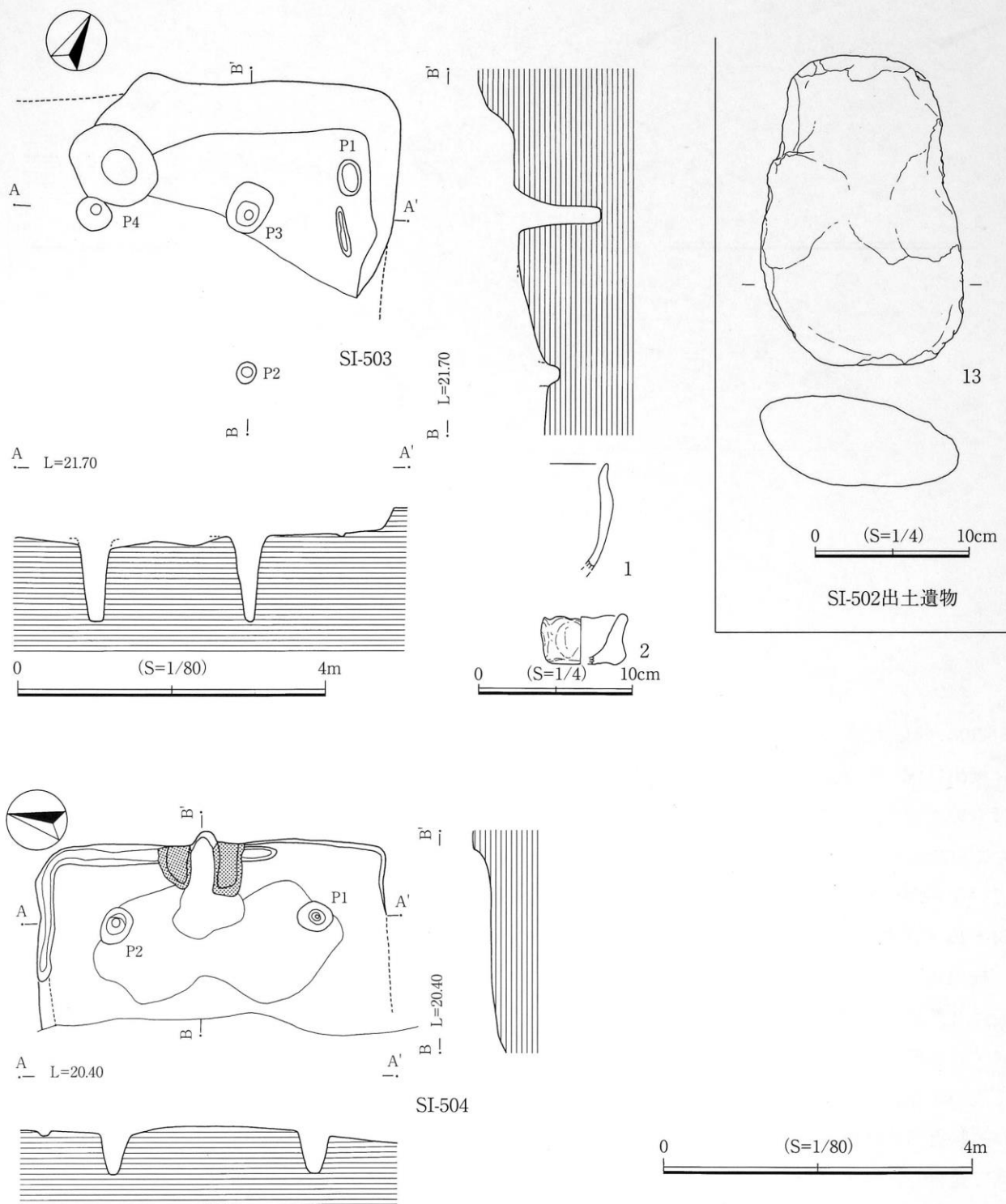
対応する壁が確認できないことから、それぞれの竈に対応する竪穴が重複するのではなく、一つの竪穴内で、同時あるいは連続的に使用されていたものと考えられる。

焼土や炭化材は竪穴の北東隅と南東隅を中心に確認できた。また、炭化材は主に東側で分布しており、中央から放射状に延びているものと、竪穴壁と平行に遺存しているものがある。

遺物と出土状況 竈B内では甕が主体的に出土した。一方、焼土、炭化材と共に床面で出土したものは坏が主体を占めている。



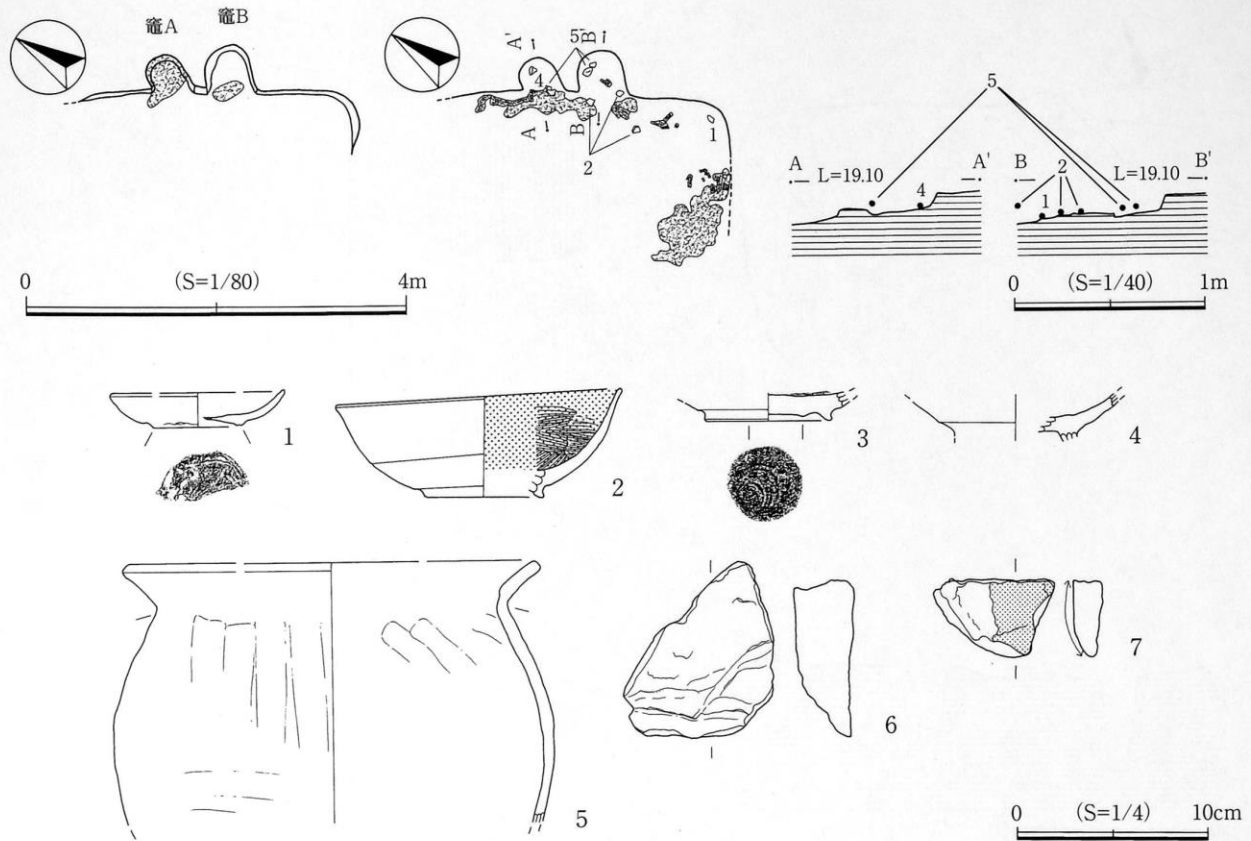
第219図 SI-502実測図及び出土遺物



第220図 SI-502出土遺物, SI-503, 504実測図及び出土遺物

SI-503 (第220図)

検出状況 5F35-12に位置する。竪穴の掘り込みとピットを検出した。竪穴部分は北東部分の壁と床を確認したにとどまる。ピットは径の大きさに比して深い点の特徴であるが、一般的な柱穴配列をとらない。竈も検出なかったことから、いわゆる竪穴住居跡としては判断材料に欠ける。時期を特定する遺物は出土していない。



第221図 SI-505実測図及び出土遺物

SI-504 (第220図)

検出状況 5F35-16に位置する。西側半分は消失しており、その他の壁もほとんど遺存していない。壁は直線的で、隅は角張る。竈より北側では壁に沿って周溝が巡るが、南側では竈の右袖脇で一部検出できただけである。柱穴は径が小さく、底から屈曲せず、直線的に立ち上がる。時期を決定する遺物は出土していないが、竈穴の形態から古墳時代の可能性がある。

SI-505 (第221図)

検出状況 5F35-17に位置する。竈と東側の壁が一部遺存していただけで、その他は検出できなかった。竈は2基並んで構築されている。竈間で接合関係が認められることから、同時に廃絶したものといえる。いずれも竈穴外に燃烧空間を設けたもので、いわゆる袖は検出しなかった。火床は明瞭だが、被熱の程度に違いが認められる。竈前面および南側の竈穴壁付近で焼土、炭化材が分布していた。

遺物と出土状況 竈内底面とその前面で、焼土、炭化物と共に遺物がまとまって出土している。5は竈間で接合したものである。

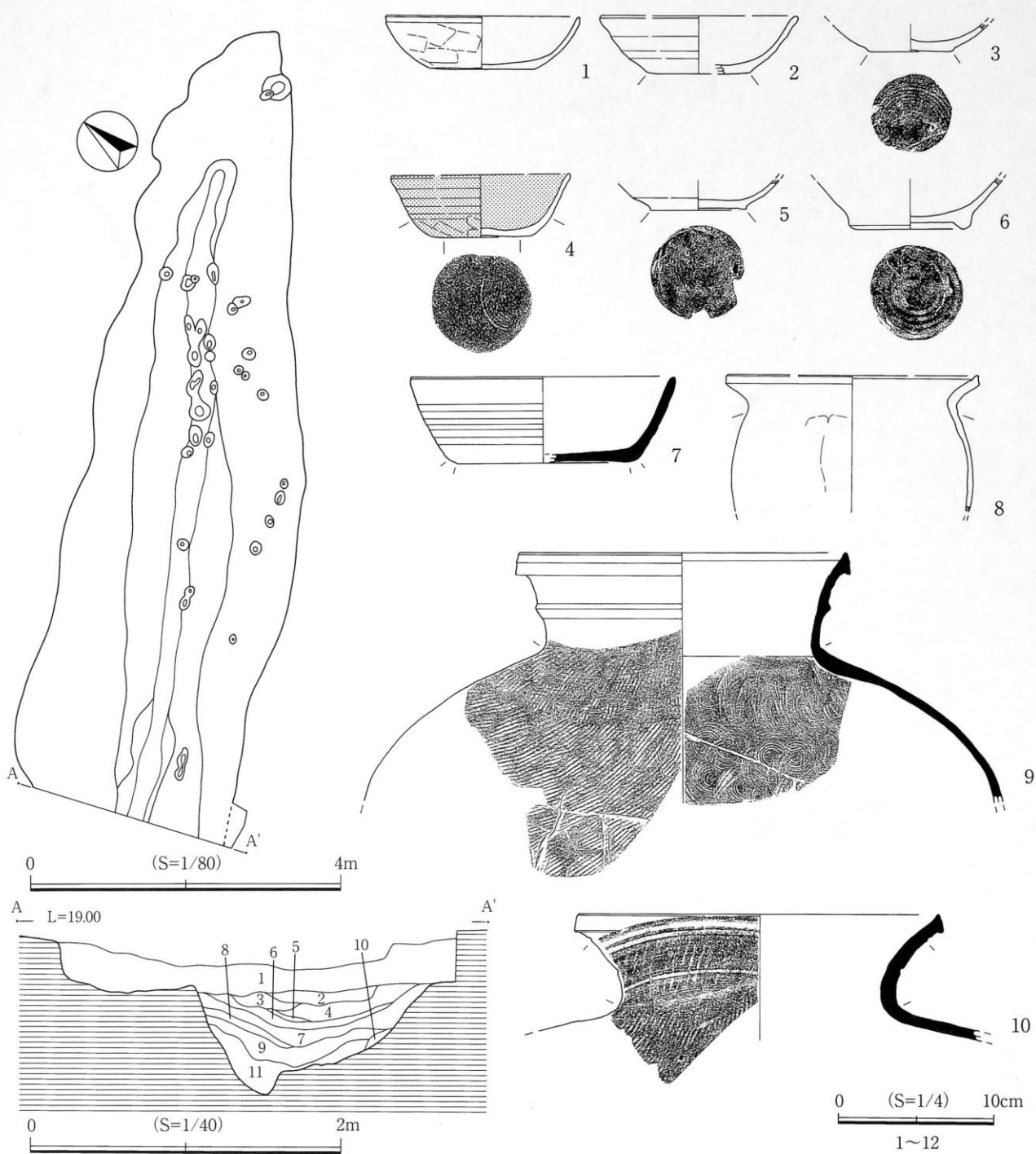
2. その他の遺構

SK-503 (第214図)

5F35-13, SI-501Bと南東隅で重複する。1.1m×1.0mの不整な楕円形を呈し、深さは0.2mを測る。

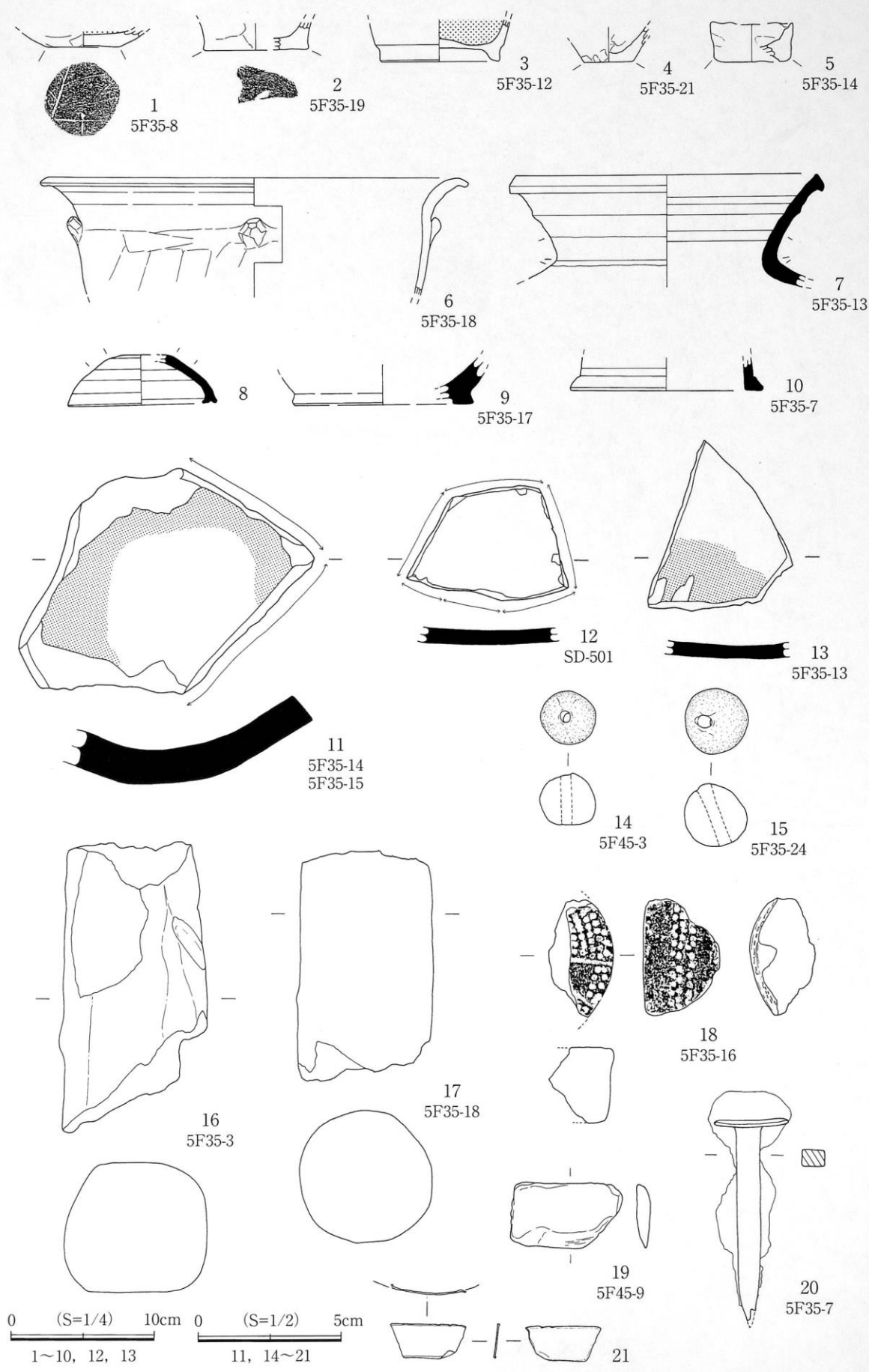
SD-502 (第222図)

5F35-7から5F35-11にかけて、等高線に直交するように分布する溝である。上場幅が約3mに対して底面幅は0.4mと狭い。深さは1.5mを測る。堀状を呈し、規模が大きい点は、当該時期の他の溝と様相が異なる。



- SD-502 土層説明
1. 表土層
 2. 黄褐色土。ローム、ロームブロックが多く混じる。
 3. 暗黄褐色粘質土。
 4. 黒褐色粘質土。砂質みを帯びる。
 5. 黄褐色土。2層に類似する。
 6. 黒色粘質土。4層に類似する。
 7. 灰褐色土。
 8. 灰褐色土。ロームが少し混じる。
 9. 暗灰色土。
 10. 暗灰色土。
 11. 明灰色土。

第222図 溝 (SD-502) 実測図及び出土遺物



第223図 遺構外出土遺物

る。形態や規模から判断すると、中世以降の可能性はあるが、遺物は古代のものが主体的に出土しており、陶磁器などは出土していない。土師器、須恵器の坏や甕、土玉や須恵器の転用砥石が出土している。

3. 遺構外の出土遺物 (第223図)

検出した遺構が少なかったように、遺物の出土量も少ない。土製品の出土が目立っている。

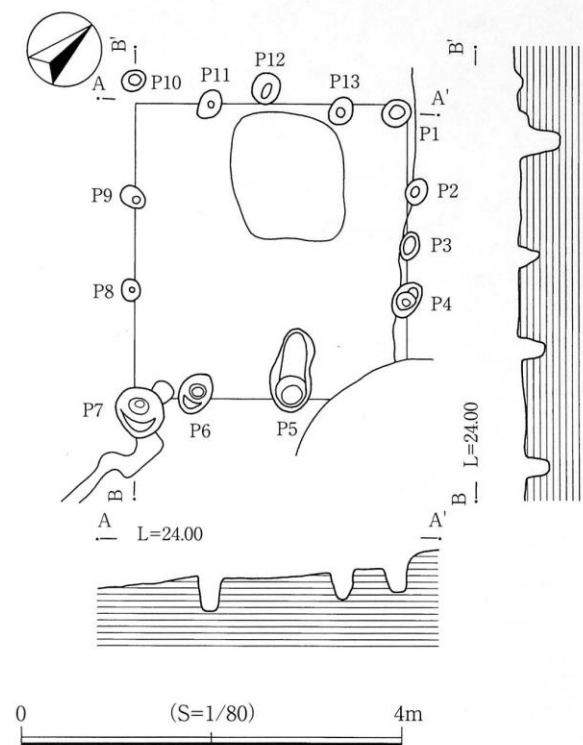
第3節 中世

遺構は北東側の区画縁辺で集中して分布している。ピットが多数検出できたものの、建物として把握できたものは1棟にすぎない。土坑は不整な形態のものが多い。遺物は小破片の陶磁器が少量出土している。

1. 掘立柱建物跡

SB-501 (第224図)

5F35-13に位置する。桁行き2.8m、梁行き2.4mの南北方向にわずかに長い建物跡である。ピットの深さはそれぞれ異なるものの、底面の標高はいずれもほぼ同じである。柱穴は柱筋が直線的に並ぶものの、均等な柱間隔をもたない。明確ではないが、3×3間の建物構造になろうか。



第224図 SB-501実測図

2. 土坑

SK-501 (第225図)

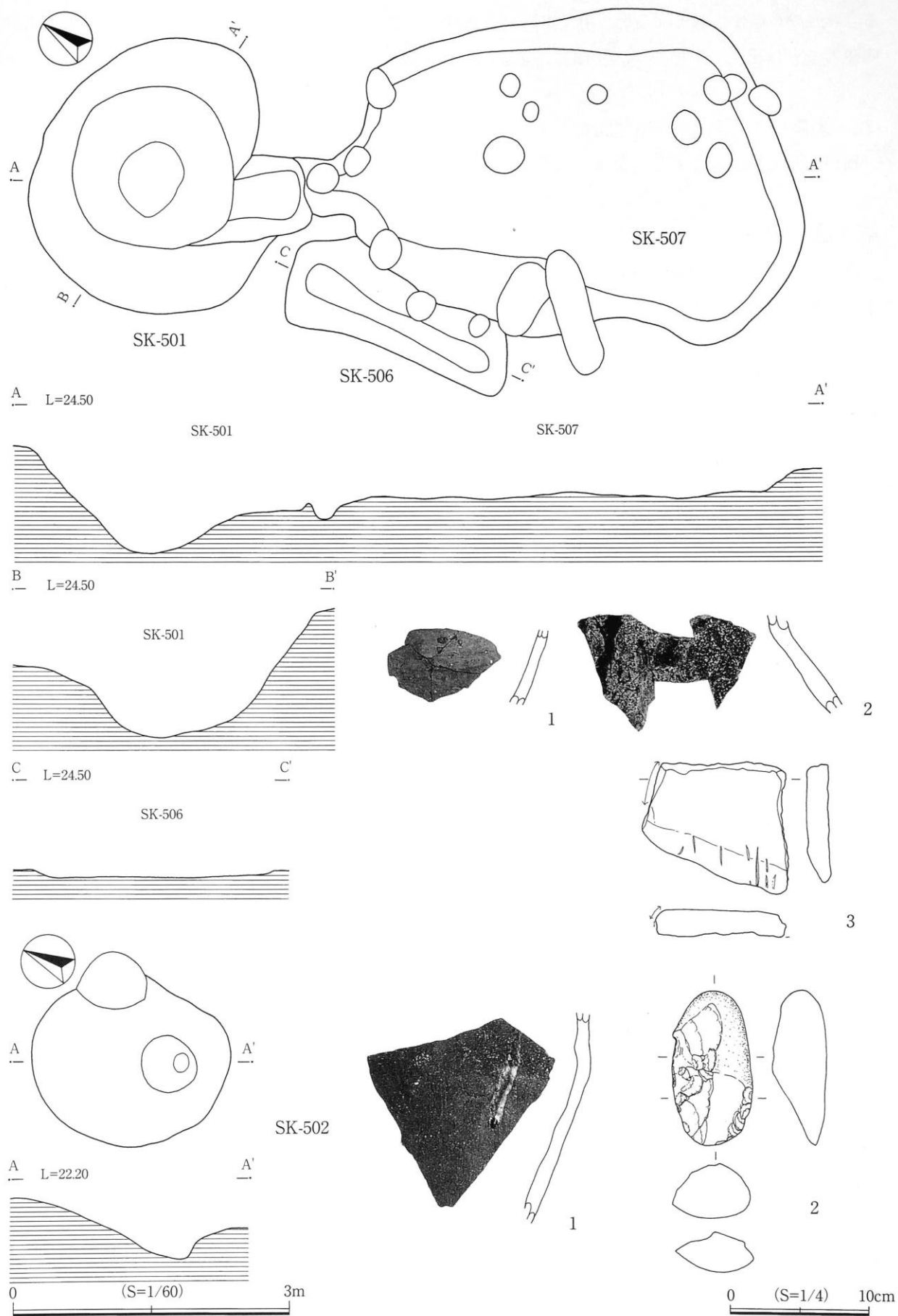
5F35-14に位置する。台地側の区画縁辺に分布する。径3mの円形で、すり鉢状の土坑である。深さは1.5mを測る。南側は0.8×0.9m、深さ0.1mの張り出しがあり、SK-507とほぼ同じ高さで接続している。井戸としては機能しないが、水を溜めていた可能性がある。

SK-506, 507 (第225図)

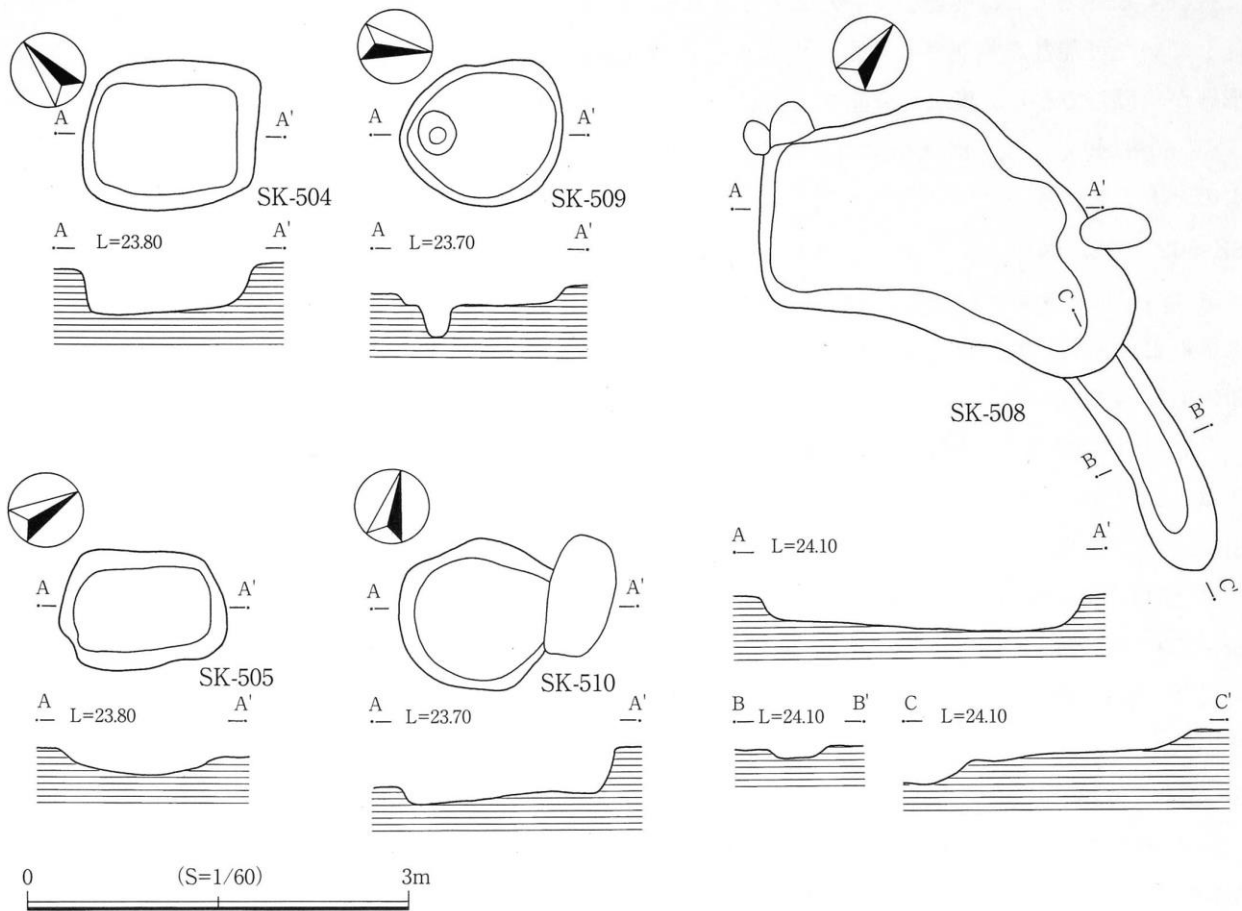
いずれも5F35-14に位置する。SK-507は不整な台形を呈する。底面は平滑で、深さは0.3mを測る。北側

第31表 C5区 土坑計測表(1)

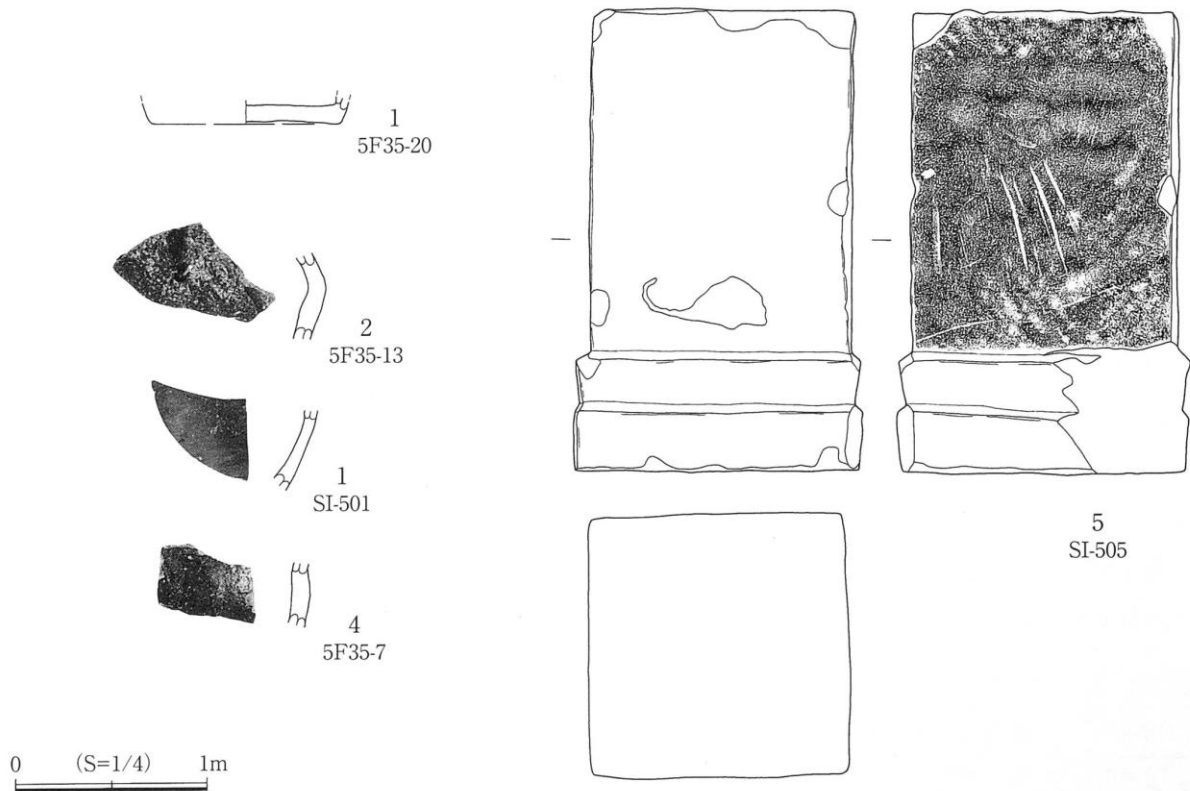
遺構番号	遺構種別	グリッド	主軸方位	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	時期
SK-501	土坑	5F35-14	N-90° -E	3.1	2.7	1.3	中世
SK-507	土坑	5F35-14	N-27° -W	5.5	3.5	0.3	中世
SK-506	土坑	5F35-14	N-13° -W	2.5	1.1	0.1	中世
SK-502	土坑	5F35-7	N-27° -W	2.2	2.1	0.7	中世
SK-504	土坑	5F35-14	N-49° -W	1.3	1.2	0.3	中世
SK-509	土坑	5F35-14	N-11° -W	1.3	1.1	0.1	中世
SK-505	土坑	5F35-14	N-22° -E	1.2	0.9	0.2	中世
SK-510	土坑	5F35-19	N-72° -E	1.7	1.2	0.4	中世
SK-508	土坑	5F35-19	N-63° -E	3.1	1.8	0.3	中世



第225図 土坑 (SK-501, 502, 506, 507) 実測図及び出土遺物



第226図 土坑 (SK-504, 505, 508, 509, 510) 実測図



第227図 遺構外出土遺物

で接続するSK-501とは関連していたと考えられる。約5×3mの平面規模からすると、作業空間として機能していた可能性を推測させるが、上屋を想定しうる柱穴は検出できなかった。SK-508と遺構の立地や形態が類似しており、集水の機能を果たしていた可能性もある。

SK-506は短く、浅い溝状を呈している。SK-507の壁面に沿うように構築されていることから、一連のものと考えられる。

SK-502 (第225図)

5F35-7に位置する。径が約2mの円形の土坑で、すり鉢状を呈する。SK-501と類似した形態だが、他の遺構群とは独立して分布しており、同様の機能を推測することはできない。

SK-504 (第226図)

5F35-14に位置する。SB-501と重複する。比較的均整のとれた長方形を呈している。底面は平滑で、深さは0.4mを測る。

SK-505 (第226図)

5F35-14に位置する。比較的均整のとれた長方形を呈するが、底面はややすり鉢状を呈する。

SK-509 (第226図)

5F35-14に位置する。やや不整な円形を呈する。底面は平滑で、南側には径0.3m、深さ0.3mのピットを検出した。

SK-510 (第226図)

5F35-19に位置し、SK-509と並んで分布する。楕円形を呈し、平滑な床面を有している。

SK-508 (第226図)

5F35-19に位置し、SK-507と並んで分布する。不整な台形を呈し、深さは0.4mを測る。東側は0.2mの段差をもって短い溝が延びており、台地側斜面上方に巡るSD-501と接続する。集水、あるいは水溜の機能を果たしていた可能性がある。

3. 溝

SD-501 (第214図)

5F35-15に分布する。台地側斜面中に浅く構築されている。区画の縁辺を巡るのではなく、斜面の一部を切り崩したものである。この下位にはSK-508が分布しており、斜面中で水を集めて、土坑に溜める機能が推測できる。

SD-503 (第214図)

5F34-10から5F35-8にかけて分布する。区画の北側縁辺を巡り、途中C4区のSD-302と接続する。

4. 遺構外の出土遺物 (第227図)

5は石塔を再利用した台石である。多数の線状痕がみられ、砥石として再利用していたと考えられる。

第32表 C5区 溝計測表

遺構番号	連結する遺構	長さ (m)	最小幅 (m)	最大幅 (m)	最小深 (m)	最大深 (m)	時期	備考
SD-501	SK-507	10.4	1.2	3.3	0.6	1.5	中世	
SD-503	SD-302	24.8	—	1.0	—	0.3	中世	

第4節 近世

近世の遺構としては、土坑を2基検出した。壁面が被熱しており、炭化材や焼土が分布する。また、わずかながら骨片も出土した。これらのことから、火葬施設として利用されていたと考えられる。散漫な分布状況を示している。

第33表 C5区 土坑計測表(2)

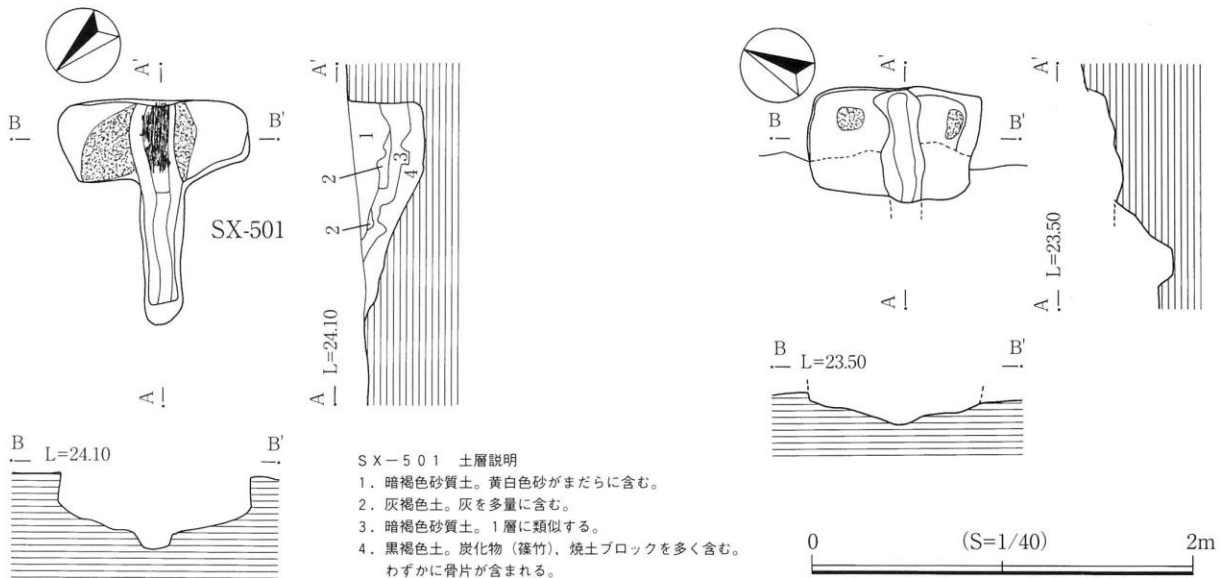
遺構番号	遺構種別	グリッド	主軸方位	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	時期
SX-501	火葬施設	5F35-20	N-48° -W	1.2	1.0	0.4	近世
SX-502	火葬施設	5F35-8	N-20° -W	0.9	0.6	0.2	近世

SX-501 (第228図)

5F35-20に位置する。1.0×0.4m、深さ0.3mの土坑に対して、長さ1.2mの溝が中央に構築されている。平面形態はT字状を呈している。南側の土坑は、壁面は垂直で被熱が著しい。底面はすり鉢状に窪み、焼土が多量に分布している。溝は土坑部分に向かって傾斜しており、南側ではわら状の炭化材が集中していた。

SX-502 (第228図)

5F35-8に位置する。SI-501の調査時に西側の溝部分は消失した。形態はSX-501に類似すると考えられ、東側に0.9×0.6m、深さ0.1mの土坑が、その中央に溝が構築される。土坑部分の壁面は被熱しており、底面にも焼土が分布している。溝はSX-501と異なり、水平である。



第228図 火葬施設 (SX-501, 502) 実測図

第34表 C 5 区古代出土遺物一覧

出土地点	挿図No.	種別 器種	計測値と形態の特徴			備考
			計測値(mm)	整形・形態の特徴	色調など	
SI-501A	第216図-1	土師器 甕	口径：(172) 器高：<150> 胴部径：	口縁部は短く外反する。外面は頸部から口縁部にかけてナデ。胴部は縦方向のヘラケズリ。内面はナデ。	茶褐色	竈一括1, 一括5
SI-501B	第218図-1	土師器 椀か	器高：<25> 底径：76	ロクロ整形か。底部は手持ちヘラケズリか。	内面黒色処理	一括9
	第218図-2	土師器 坏	器高：<12> 底径：52	ロクロ整形。底部は回転糸切り未調整。底部はやや突き出る。	内面黒色処理	一括14
	第218図-3	土師器 坏	器高：<29> 底径：60	ロクロ整形。底部は回転糸切り後未調整。体部との境にくびれを持ち、やや突き出す。体部下端は屈曲する。	灰褐色	一括1
	第218図-4	土師器 高台付坏	口径：(136) 器高：71 台部径：(82)	ロクロ整形。体部はやや丸みを持ち、口縁部は外反する。台部は長く、外反する。	淡褐色	一括2, 15
	第218図-5	土師器 高台付坏	器高：<40> 台部径：92	ロクロ整形。台部は長く、直線的。	橙褐色	一括3
	第218図-6	土師器 鉢	口径：(226) 器高：<43>	外面は口縁部がナデ、胴部は斜め方向のヘラケズリ。内面はナデ。	褐色	一括17
	第218図-7	土師器 甕	口径：(128) 胴部径：(126) 器高：<80>	頸部の括れは弱く、口縁部は短く外反する。胴部上半は湾曲せず直線的に立ち上がる。口縁部はナデ。胴部は斜め方向のヘラケズリ。内面はナデ。	暗褐色	CNo.1
	第218図-8	土師器 甕	口径：147 器高：205 胴部径：186 底径：92	口縁部は短く外反する。口唇部は丸みを持つ。ゆがみが著しく、上面観は楕円形を呈する。外面は頸部から口縁部にかけてナデ。胴部は主に縦方向のヘラケズリ。内面はナデ。	褐色	BNo.1
	第218図-9	土師器 甕	底径：86	器壁は厚い。外面は横方向のヘラケズリ。内面はナデ。底部はヘラナデ。	褐色	一括11
	第218図-10	土師器 甕	器高：<84> 底径：95	外面は上半が縦方向のヘラケズリ、下半が横方向のヘラケズリ。内面は1-2cm厚の輪積み痕が残る。	淡褐色	一括13
	第218図-11	土師器 甕	底径：122	外面は横方向のヘラケズリ。内面はナデ。	褐色	一括7, 16
	第218図-12	土師器 甕	器高：<79> 底径：198	底径大きくバケツ状。外面は横方向のヘラケズリ。内面はナデ。	褐色	一括8, 12
	第218図-13	土玉	径21mm, 高さ17mm。			一括
	第218図-14	土製紡錘車	径(55)mm, 高さ(29)mm。			C 一括
第218図-15	支脚	長さ<109>mm, 巾72mm, 厚さ<60>mm, 重さ483g。			一括	
第218図-16	転用硯・砥石	39mm×9mm。須恵器破片を転用。内側は全面摩滅、断面もわずかに摩滅する。			一括	
第218図-17	刀子	長さ38mm, 高さ8.5mm, 背幅2mm。			一括	
SI-502	第219図-1	土師器 坏	口径：(130) 器高：44 底径：(60)	ロクロ整形。底部は回転糸切り後未調整。体部との境にはくびれを持つ。	赤褐色	竈A一括14
	第219図-2	土師器 坏	口径：(108) 器高：38 底径：56	ロクロ整形。底部は回転糸切り後未調整。上げ底状で、体部との境はやや括れる。体部下半は屈曲する。ゆがみが大きく、口縁は傾く。	赤褐色	一括15
	第219図-3	土師器 坏	口径：122 器高：39 底径：64	ロクロ整形。底部は回転糸切り後未調整。体部との境にはくびれを持つ。体部は直線的に立ち上がる。	淡褐色	No.3
	第219図-4	土師器 坏	口径：119 器高：37 底径：60	ロクロ整形。底部は回転糸切り後ヘラケズリ。やや下方に突き出て、体部との境は生地がはみ出す。体部は直線的に立ち上がり、器壁は厚い。	茶褐色	No.5
	第219図-5	須恵器 小型長頸壺	頸部径：31.5 胴部径：82 台部径：38	底部は静止糸切り。台部は後付。体部の肩は丸みを持ち、上半には自然釉が付着している。口縁部欠損後、意図的に頸部を内側から外側に向かって打ち撞いている。	灰色	No.2
	第219図-6	土師器 甕	口径：154 胴部径：177 器高：190 底径：(88)	口縁部は短く外反する。端部は丸みを持つ。頸部から口縁部および内面にかけてナデ。胴部は上位から下位にかけて縦方向、下位は横方向のヘラケズリ。	茶褐色	竈A No.10
	第219図-7	土師器 甕	口径：162 胴部径：176 器高：164 底径：(70)	口縁部は短く外反する。口縁端部は強くつまみ出される。外面は頸部から口縁部にかけてナデ。胴部は上半が縦方向、下半が斜め方向にヘラケズリ。内面はナデ。	橙褐色	竈B No.8

出土地点	挿図No.	種別 器種	計測値と形態の特徴			備考	
			計測値(mm)	整形・形態の特徴	色調など		
SI-502	第219図-8	土師器 甕	口径：(192) 胴部径：220 器高：<220>	口縁部は短く外反し、口唇部はつまみ出される。外面は頸部から口縁部にかけてナデ。胴部は縦方向のヘラケズリ。	褐色	竈B No.1, 2, 10	
	第219図-9	土師器 甕	口径：(200) 胴部径：193 器高：245 底径：(84)	頸部のくびれは弱く、口縁部は短く外反する。外面は頸部から口縁部にかけてナデ。胴部は上半が縦方向、下半が斜め方向にヘラケズリ。内面はナデ。	茶褐色	No.4, 7, 9, 11	
	第219図-10	土師器 甕	口径：(182) 胴部径：190 器高：<85>	口縁部は短く外反し、肥厚する。頸部から口縁部および内面はナデ。体部は縦方向のヘラケズリ。	暗褐色	No.8, 12 一括12	
	第219図-11	土師器 甕	口径：(210) 胴部径：243 器高：<115>	口縁部は短く外反し、端部はつまみ出される。外面は頸部から口縁部にかけてナデ。胴部は上半が縦方向、下半が横方向にヘラケズリ。	褐色	竈B No.11	
	第219図-12	土師器 片口鉢	口径：197 器高：<87>	口縁部外面および内面はナデ。体部は縦方向のヘラケズリ。口唇部は平坦にナデられ、片口がつく。	茶褐色	竈B No.6	
	第220図-13	飯岡石	長さ203mm、幅132mm、厚さ58mm、剥離が著しくどの程度原形をとどめているか明瞭でない。				No.1
SI-503	第220図-1	土師器 椀	口縁部片	口縁部は直下が僅かに窪み、外反する。	茶褐色	一括1	
	第220図-2	土師器 手捏ね	口径：52 器高：33 底径：(50)	器面はナデられ、比較的凹凸は目立たない。	茶褐色	一括2	
SI-505	第221図-1	土師器 小皿	口径：(92) 器高：19 底径：(46)	ロクロ整形。底部は回転糸切り後未調整。体部下端はくびれ、底部は下方に突き出る。上げ底状を呈する。	暗褐色	No.21	
	第221図-2	土師器 高台付坏	口径：150 器高：54 台部径：63	ロクロ整形。口縁端部は僅かに外反する。体部は丸みを持つ。内面はミガキ。	内面黒色処理	No.13, 17, 19, 竈	
	第221図-3	土師器 高台付坏	器高：<15> 台部径：(67)	ロクロ整形。底部は回転糸切り。高台接合部内側は溝状に窪む。内面はミガキ。	橙褐色	一括24	
	第221図-4	土師器 高台付坏	台部径：14	ロクロ整形。体部下端は屈曲する。	暗褐色	No.1	
	第221図-5	土師器 甕	口径：(220) 胴部径：232 器高：<138>	口唇部は角頭状を呈する。外面は頸部から口縁部にかけてナデ。胴部は上半が縦方向、下半が横方向にヘラケズリ。内面は胴部上半がケズリ後ナデ。	暗褐色	No.3, 7, 8, 15, 竈	
	第221図-6	片岩	長さ93mm、巾79mm、厚さ32mm、重さ268.4g。下端が刃部状だが、明瞭な使用の痕跡は確認できない。				No.7
	第221図-7	片岩	長さ4mm、巾64mm、厚さ15mm、重さ51.5g。下端はやや刃部状。表面(網掛け部分)は摩滅している。				No.2
SD-502	第222図-1	土師器 坏	口径：(126) 器高：35 底径：(70)	底部と体部の境は明瞭。口唇部はわずかにつまみ出される。外面は口縁端部がナデ、体部はヘラケズリ。内面はナデ。	茶褐色	No.3 口唇部に油煙痕	
	第222図-2	土師器 坏	口径：(128) 器高：38 底径：66	ロクロ整形。底部は手持ちヘラケズリ。体部下端は未調整。	淡褐色	一括3	
	第222図-3	土師器 坏	器高：<18> 底径：53	ロクロ整形。底部は回転糸切り、下方に突き出る。体部下端は未調整。	淡褐色	一括8	
	第222図-4	土師器 坏	口径：(116) 器高：41 底径：62	ロクロ整形。底部は回転糸切り後、周縁部は手持ちヘラケズリ。体部下端は手持ちヘラケズリ。	淡褐色	No.3	
	第222図-5	土師器 坏	器高：<19> 底径：62	ロクロ整形。底部は回転糸切り、下方に突き出る。体部下端は未調整。	淡褐色	一括8	
	第222図-6	土師器 高台付坏	器高：<34> 台部径：78	ロクロ整形。底部は回転ヘラケズリ。台部は厚く短い。	暗褐色	一括6	
	第222図-7	須恵器 坏	口径：170 器高：56 底径：(112)	ロクロ整形。体部は直線的に立ち上がる。底部はヘラケズリ。	明灰色	5F-35-16と接合	
	第222図-8	土師器 甕	口径：(163) 器高：<89>	口唇部は上方につまみ出される。外面は頸部から口縁部にかけてナデ。胴部は縦方向のヘラケズリ。内面はナデ。	暗褐色	一括5	
	第222図-9	須恵器 甕	口径：(212) 器高：<163>	口縁端部は下方にもつまみ出される。頸部中位には稜線が巡る。胴部は外面が平行線状のタクキメ、内面は円形の当て具痕。	青灰色	No.1, 2, 一括	
	第222図-10	須恵器 甕	口径：(231) 器高：<82>	口縁端部は下方にもつまみ出される。口縁部直下及び頸部中位には凹線が巡る。頸部外面にはタクキメ。	表面に自然釉。	一括9	

出土地点	挿図No.	種別 器種	計測値と形態の特徴			備考
			計測値(mm)	整形・形態の特徴	色調など	
SD-502	第222図-11	土師器 甕	口縁部片	口唇部は尖る。	線刻「十」	一括7
	第222図-12	転用砥石	長さ95mm, 幅86mm。須恵器破片を転用。下端断面部分が摩滅している。			一括
	第222図-13	土玉	径23mm, 高19mm。			一括
遺構外	第223図-1	土師器 甕	底部片	外面は体部がヘラケズリ, 内面はナデ。	内面黒色処理	5F-35-18 一括5 底部は木葉痕
	第223図-2	土師器 甕	底部片	外面はヘラケズリ。内面はナデ。	暗褐色	5F-35-19 一括6 底部は木葉痕
	第223図-3	土師器 高台付坏	器高: <30> 底径: 85	ロクロ整形。体部は急角度で立ち上がる。	内面黒色処理	5F-35-12 一括2
	第223図-4	土師器 手捏ね	器高: <25> 底径: 35	整形は丁寧で, 体部と底部の境は明瞭。	暗褐色	5F-35-21 一括7
	第223図-5	土師器 手捏ね	口径: 58 器高: <28>	指押さえの痕跡は残るものの, 丁寧にナデられる。口唇部は尖る。	茶褐色	5F-35-14 一括8
	第223図-6	土師器 甕	口径: (300) 器高: <83>	口唇部は丸みを持つ。把手は小さく, 押さえつけられている。外面は頸部から口縁部にかけてナデ。胴部は縦方向のヘラケズリ。内面はナデ。	明褐色	5F-35-18 一括4
	第223図-7	須恵器 甕	口径: (211) 器高: <80>	ロクロ整形。口縁端部は下方にもつまみ出される。頸部中位には稜線が巡り, 下端はハケ(?)ナデ。	灰色	5F-35-13
	第223図-8	須恵器 蓋	口径: (104) 器高: <35>	ロクロ整形。体部はあまり丸みを持たず, 上半は回転ヘラケズリ。端部は	灰色	一括
	第223図-9	灰釉陶器 長頸瓶か		ロクロ整形。台部は低く扁平。		
	第223図-10	須恵器 高台	器高: <24> 台部径: (135)	ロクロ整形。端部は外側に開く。	灰色	5F-35-7
	第223図-11	転用規	103mm×81mm。須恵器破片を転用。内側外縁は摩滅しており, 炭が付着。断面も摩滅している。			5F-35-14
	第223図-12	転用砥石	116mm×82mm。須恵器破片を転用。断面は全て摩滅している。			5F-35-14
	第223図-13	転用規	122mm×102mm。須恵器破片を転用。内側一部が摩滅している。			5F-35-13
	第223図-14	土玉	径20mm, 高さ19mm。			5F-45-3
	第223図-15	土玉	径22mm, 高さ23mm。			5F-35-24
	第223図-16	支脚	長さ<103>mm, 巾<52>mm, 厚さ<46>mm, 重さ234g。ほぼ直方体。			5F-35-3
	第223図-17	支脚	長さ<81>mm, 径47mm, 重さ206g。断面はほぼ正円。			5F-35-18
	第223図-18	土製品	径(56)mm, 厚さ27mm。表面及び側面には竹管の刺突と沈線が施される。裏面には文様は見られない。			5F-35-16
	第223図-19	片岩	長さ46mm, 巾78mm, 厚さ10mm, 重さ54.6g。下端は刃部状を呈する。			5F-45-9
	第223図-20	鉄釘	73mm×8mm×6mm。断面は長方形。			5F-35-7

第35表 C5区中世出土遺物一覧

()は推定値 < >は遺存値

出土地点	挿図No.	種別・器種	計測値(mm, g)	特徴
SK-501	第225図-1	片口鉢	破片	知多産
	第225図-2	甕	破片	常滑産
	第225図-3	片岩	97×106×20, 291g	
SK-502	第225図-1	甕	破片	常滑産
	第225図-2	石斧か	113×59×39, 290g	縄文石器の可能性。
5F35-20	第227図-1	底部破片		瀬戸産 14世紀
5F35-13	第227図-2	常滑	破片	常滑産
SI-501	第227図-3	徳利	破片	砥石として転用?備前産
5F35-7	第227図-4		破片	瀬戸ではない
SI-505	第227図-5	転用砥石	241×136×136	宝篋印塔の転用

補遺 第34表

	第223図-21	青銅製品	12×(26)×1, 環状の形態をとる。	
--	----------	------	----------------------	--

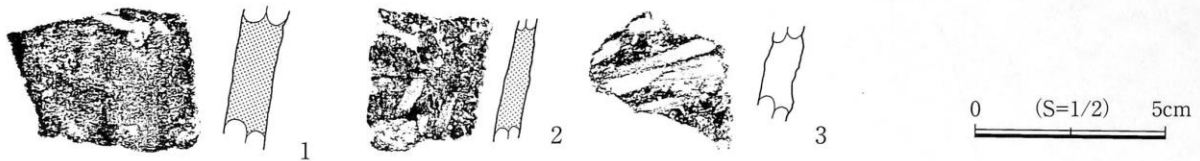
第6章 C6区の調査

中世に台地整形された平場で、遺構、遺物のほとんどが当該期のもので占められる（第230図）。北東側で検出した幅広の溝（SD-606）がC5区と連結している。平場の中央では遺構が目立たず、その周縁部に同心円状に分布する。遺構密度は比較的高い。北側と南側それぞれで同種の遺構が分布することから、南北間で別々に土地利用があったものと推測できる。

掘立柱建物跡、地下式坑、土坑を検出した。土坑はその形態、規模が様々である。

第1節 縄文時代（第229図）

遺構は検出できず、条痕文系（1,2）、浮島・興津系（3）の土器破片がわずかに出土しただけである。これらは当地点での活動痕跡とするよりも、台地上からの混入と考えた方が自然である。



第229図 C6区出土縄文土器

第2節 中世

1. 掘立柱建物跡

建物跡として把握できたものは3棟だが、多数ピットを検出していることから、他にも建物が存在していた可能性はある。特に、5F45-11,16,17にピットが集中している。SB-601, SB-603は、それぞれ規模や主軸方向が異なるが、中央の空白地帯を挟んで対峙するように分布しており、南北間それぞれで共通の土地利用があったことを窺わせる。

第36表 C6区 掘立柱建物跡計測表

遺構番号	位置	主軸方位	長軸(m)	短軸(m)	梁×桁	柱間距離(m)	柱穴深度(m)
SB-601	5F45-11	N-3° -E	8.1	3.4	2×4	1.7(2.0)	0.7
SB-602	5F45-16	N-42° -E	2.2	1.4	1×1	1.4(2.1)	0.3
SB-603	5F45-21	N-20° -E	5.2	2.2	1×3	2.2(1.8)	0.6

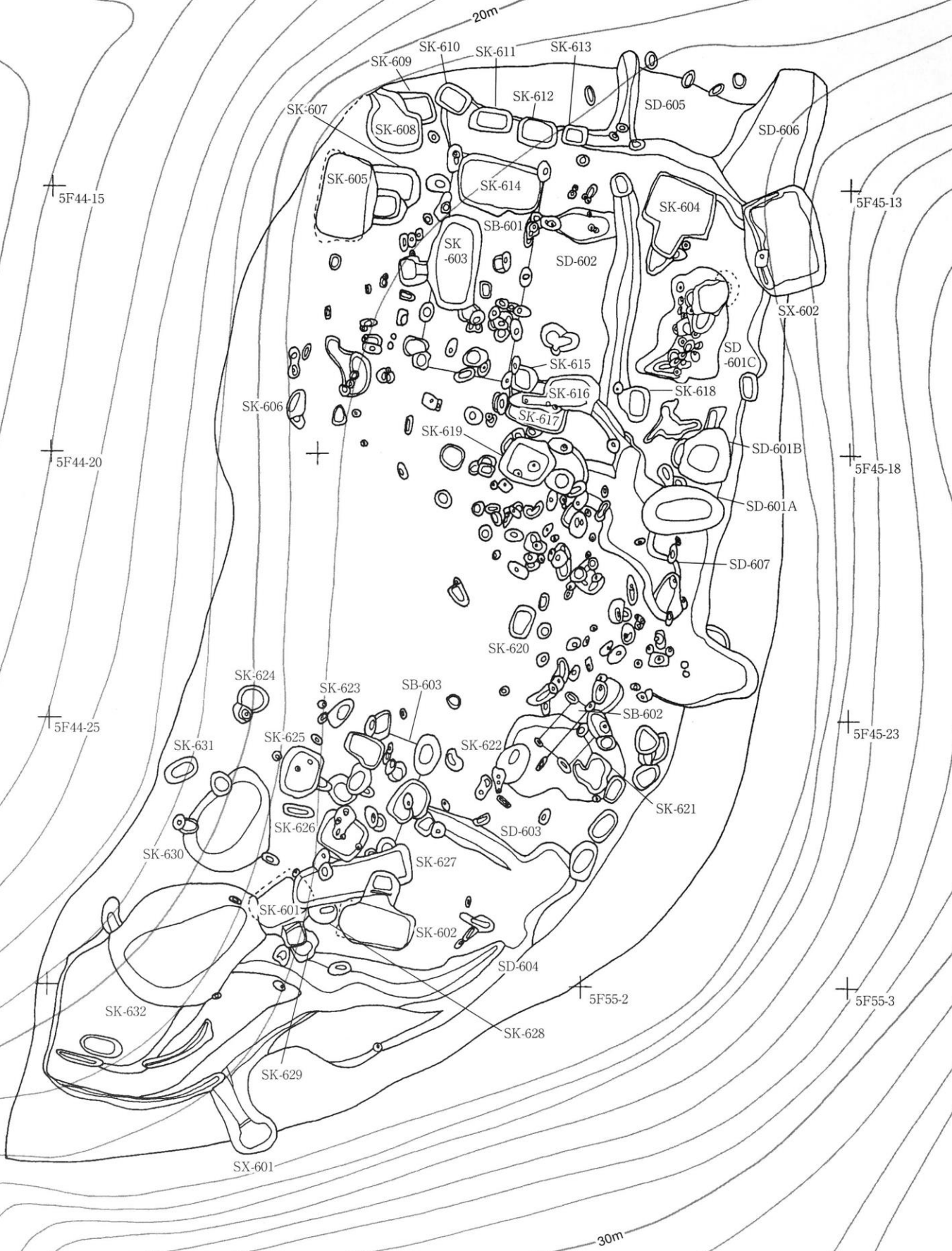
柱間距離:梁行(桁行)

SB-601（第231図）

5F45-11に位置する。SK-603, SK-604と重複するが、新旧関係は確認できなかった。柱間が2間×4間の建物跡で、南北方向に棟が長い。柱間は梁行きが約1.7m、桁行きが約2.0mである。それぞれのピットは桁方向に長い楕円形で、断面が尖った形態となる。

SB-602（第231図）

5F45-16に位置する。柱間が1間×1間の建物跡である。柱間は梁行きが2.2m、桁行きが1.4mを測る。それぞれのピットの平面形態は楕円形だが、断面が尖るものと、平坦になるものがある。建物跡に明確



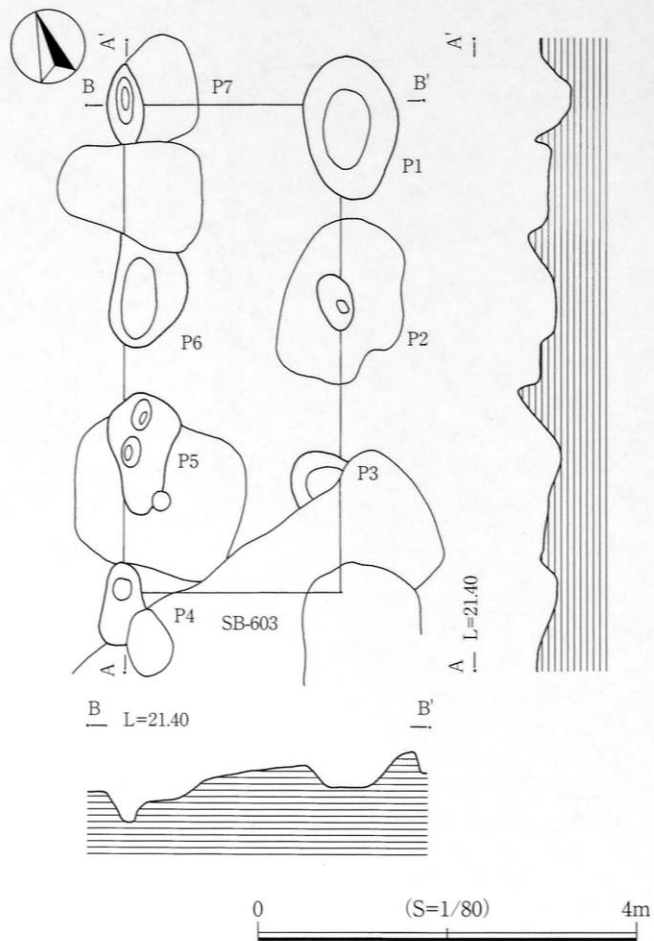
S = 1/200

第230図 C 6 区 遺構配置図

に伴うと判断はできないが、桁行き柱筋のほぼ中間のやや外側にも梁行き方向に長いピットを検出した。

SB-603 (第232図)

5F45-21に位置する。柱間が1間×3間の建物跡で、南北方向に棟が長い。柱間は梁行きが2.2m、桁行きが1.5~2.1mと等間隔ではない。SK-626, SK-627, SK-602と重複する。それぞれのピットは形態が楕円形で、断面が尖るものの、掘り方の規模は概して大きく、しかも一定していない。また、深さは同じだが、西側の桁行きのピットは標高が低い。



第232図 SB-603実測図

2. 地下式坑

4基の地下式坑を検出した。いずれも規模は類似するが、形態についてはSK-603は主室部の幅が広く、竪坑部と主室部の比高差がない点が他のものと異なる。細部については、SK-601, SK-602は竪坑部に浅い溝が巡り、主室部の壁面に窪みがある。昇降施設と関わるものであろう。遺構を群として見ると、掘立柱建物跡と同様に中央の空白地帯を挟んで、区画の北側でSK-603とSK-605が、南側でSK-601とSK-602が分かれて分布している。入口はそれぞれ反対方向を向いており、計画的な配置状況が認められる。遺物はわずかに出土した程度である。

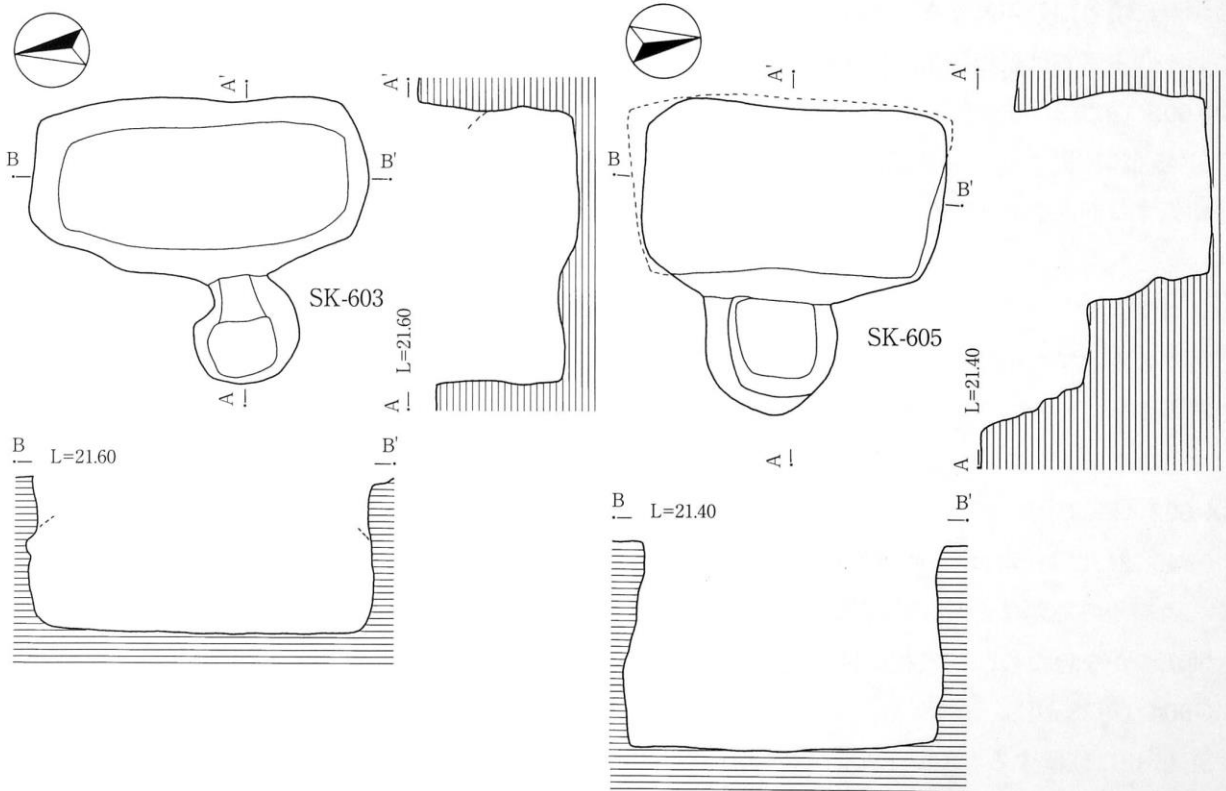
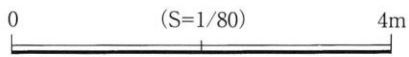
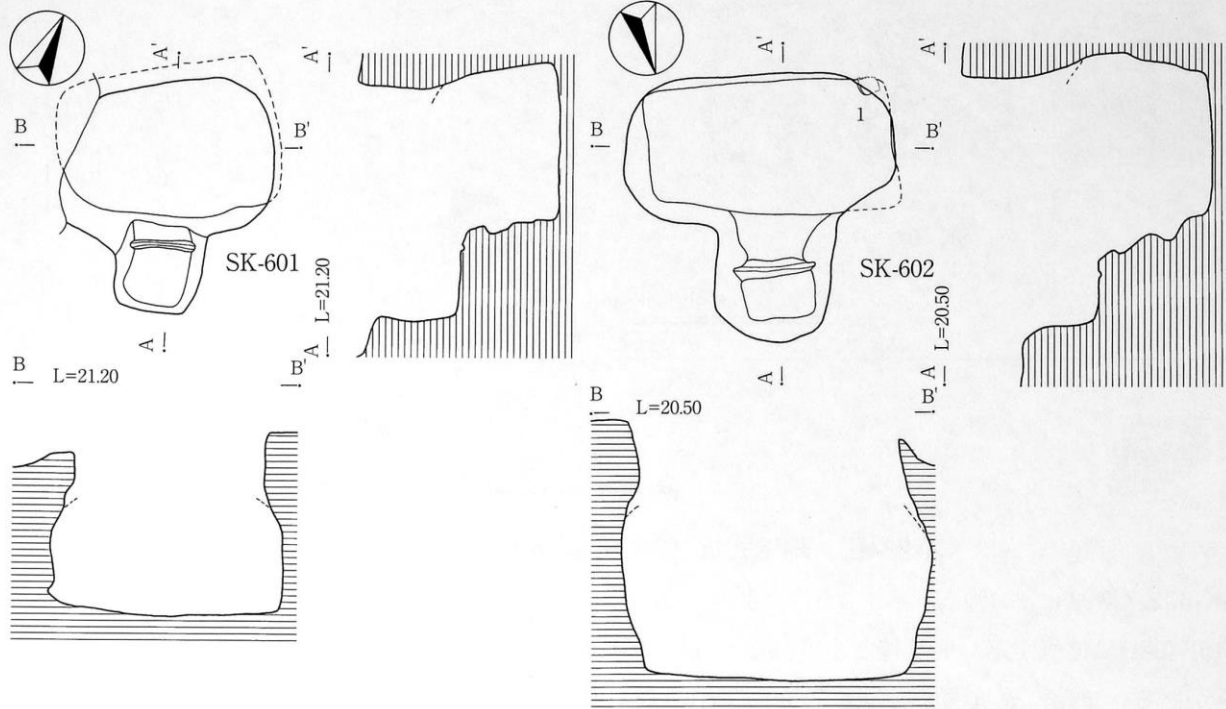
第37表 C6区 土坑計測表(1)

() は推定値 < > は遺存値

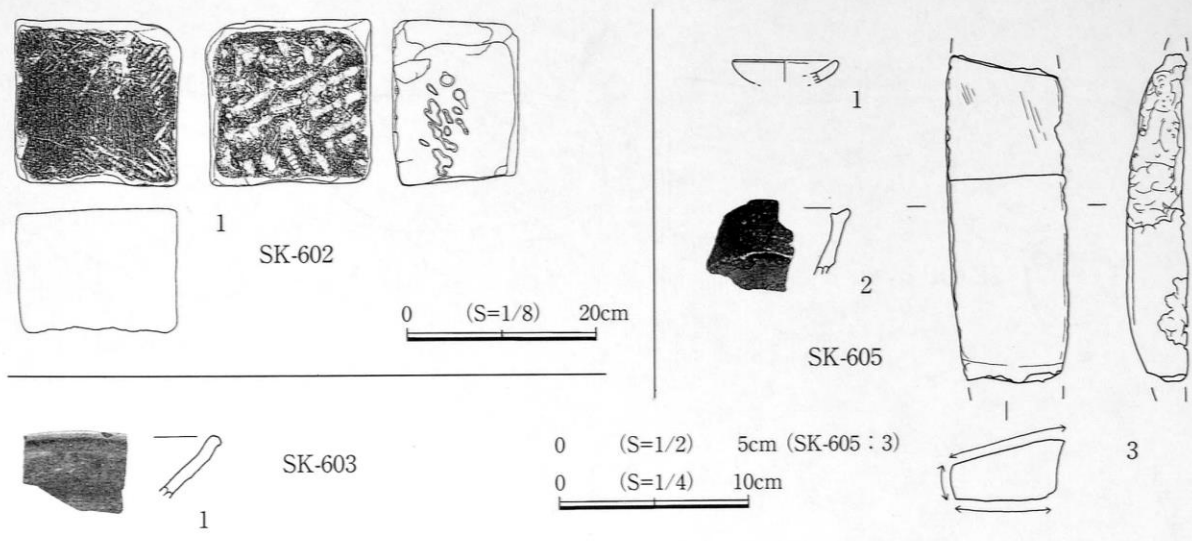
遺構番号	遺構種別	グリッド	主軸方位	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	時期
SK-601	地下式坑	5F44-25	N-35° -W	(2.6)	(2.2)	2.1	中世
SK-602	地下式坑	5F45-21	N-14° -E	2.9	2.8	2.6	中世
SK-603	地下式坑	5F45-11	N-6° -E	3.5	3.0	1.7	中世
SK-605	地下式坑	5F45-6	N-12° -E	(3.3)	(3.3)	2.2	中世

SK-601 (第233図)

5F44-25に位置する。竪坑部と主室部とは約1mの比高差がある。主室部の南側壁面には1カ所窪みがある。昇降施設の痕跡であろうか。竪坑部底面の主室部との境には幅約10cmの浅い溝が巡っている。



第233図 地下式坑 (SK-601~603, 605) 実測図



第234図 地下式坑 (SK-602, 603, 605) 出土遺物

SK-602 (第233, 234図)

5F45-21に位置する。竪坑部と主室部とは1.2mの比高差がある。主室部の北側壁面には縦に2カ所の窪みがある。また、竪坑部底面の主室部との境には幅15cmの浅い溝が巡っている。これらの様相はSK-601と類似した状況である。主室部の奥壁(南)側底面から五輪塔(地輪)が出土した。石塔として整形された痕跡が消失するほど、砥石(台石)として再利用されている。

SK-603 (第233, 234図)

5F45-11に位置する。竪坑部と主室部との比高差は他の地下式坑に比べるとほとんどなく、15cmほどで、わずかに境界部分が高くなっている程度である。またこの境界部分は、竪坑部、主室部に対してやや括れている。主室部は縦幅に比べて横幅が広い。

SK-605 (第233, 234図)

5F45-6に位置する。竪坑部と主室部とは1.3mの比高差がある。平面及び断面の形態はSK-601, SK-602と類似するが、主室部壁面の窪みや竪坑部の溝は検出しなかった。砥石、陶器、かわらけが出土している。

3. 土坑

区画の南北で検出しているが、北側で多く見ついている。長方形を基調としたものが多い。これらから石塔が多く出土しているが、いずれも砥石(台石)として再利用されているものばかりである。

SX-602 (第235図)

5F45-12, 区画の台地斜面側の縁辺に位置する。長方形を呈する。床は平滑で、壁は急角度で立ち上がる。西側から北側にかけての壁際には幅0.2mの周溝が巡る。掘り方は0.5mを測るが、東側は台地斜面と区別がつかないため、横穴状を呈したかどうかは判断できなかった。

SK-604 (第235図)

5F45-12に位置する。2.6×1.9m, 1.2×1.1mの方形の土坑が組み合わさった形態である。平面形態は地下式坑に類似するものの竪坑部と主室部の区別がなく、底面も南側に向かってやや傾斜するものの概ね平滑で、段差をもたない。掘り方も0.7mと浅く、地山による天井部は有していなかったと推測させる。

第38表 C6区 土坑計測表(2)

()は推定値 < >は遺存値

遺構番号	遺構種別	グリッド	主軸方位	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	時期
SX-602	土坑	5F45-12	N-16° -W	3.9	2.8	1.3	中世
SK-614	土坑	5F45-6	N-77° -W	3.8	2.1	0.5	中世
SK-604	土坑	5F45-12	N-20° -E	3.8	2.7	0.8	中世
SD-601A	土坑	5F45-17	N-90° -E	3.1	1.7	0.5	中世
SD-601B	土坑	5F45-12	N-90° -E	2.2	1.4	0.4	中世
SD-601C	土坑	5F45-12	N-34° -E	4.8	2.7	1.3	中世
SK-615	土坑	5F45-11	N-16° -E	1.3	1.0	0.7	中世
SK-616	土坑	5F45-11	N-2° -E	2.9	1.4	0.3	中世
SK-617	土坑	5F45-11	N-18° -E	2.2	0.8	0.3	中世
SK-618	土坑	5F45-11	N-5° -E	1.5	1.3	0.2	中世
SK-619	土坑	5F45-11	N-24° -E	1.9	1.9	0.7	中世
SK-625	土坑	5F45-24	N-18° -E	1.8	1.5	0.6	中世
SK-626	土坑	5F45-24	N-34° -E	1.9	1.8	0.5	中世
SK-627	土坑	5F45-24	N-12° -W	4.6	2.1	0.6	中世
SK-628	土坑	5F45-24	-	1.1	0.7	0.3	中世
SK-630	土坑	5F44-25	N-35° -E	4.1	3.1	0.2	中世
SK-632	土坑	5F44-25	N-61° -E	5.9	4.5	0.5	中世
SX-601	横穴状土坑	5F54-5	N-32° -W	3.0	1.7	0.8	中世
SK-610	土坑	5F45-6	N-30° -E	1.2	1.0	0.2	中世
SK-611	土坑	5F45-6	N-10° -E	1.6	1.0	0.3	中世
SK-612	土坑	5F45-6	N-17° -E	1.6	1.0	0.3	中世
SK-613	土坑	5F45-6	N-13° -E	1.0	0.7	0.2	中世
SK-633A	土坑	5F45-22	N-43° -W	0.8	1.1	0.4	中世
SK-633B	土坑	5F45-22	N-58° -W	0.7	1.1	0.2	中世
SK-633C	土坑	5F45-22	N-55° -W	0.8	1.4	0.4	中世
SK-633D	土坑	5F45-22	N-58° -W	0.9	1.5	0.2	中世
SK-633E	土坑	5F45-22	N-82° -W	1.1	1.0	0.2	中世

SK-614 (第235図)

5F45-6に位置する。SB-601と重複するが、新旧関係は確認できなかった。長方形を呈し、床は平滑で、壁は急角度で立ち上がる。

SD-601A, 601B (第236, 238図)

いずれも5F45-17に位置する。当初SD-601Cも含めて、両遺構を一連の溝として調査を始めたが、結果的にはそれぞれ独立した土坑と判明した。ただし、有機的な関係の有無については把握できなかった。いずれも平面形態は楕円形を呈し、ややすり鉢状を呈する。

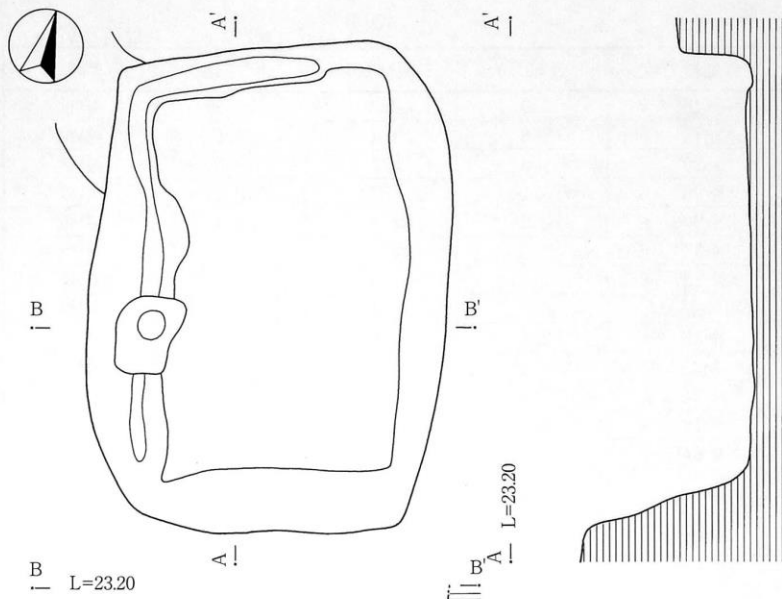
SD-601C (第237, 238図)

5F45-12に位置する。不整な楕円形を呈する。底面は南から北に向かって階段状に下降しているが、直線的に昇降しない。底面には多数のピットを確認したが、規則的に分布しない。また、階段状に昇降する底面が直線的でないため、壁面の角度も一定していない。最も低い部分は1.2×2mの楕円形を呈した空間がある。北東側は壁面が抉れている。地下式坑のように地山の天井部を有していたかどうかは確認できなかった。底面の各段では砥石に再利用した石塔や石臼、石鉢が出土している。

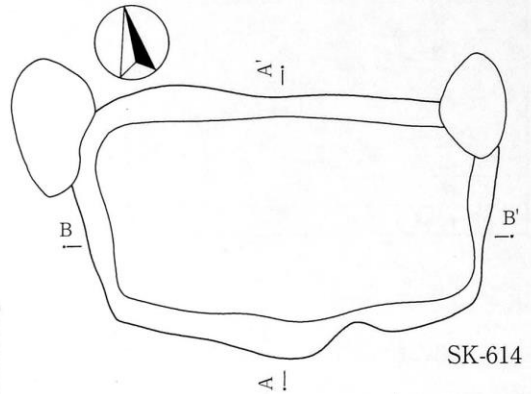
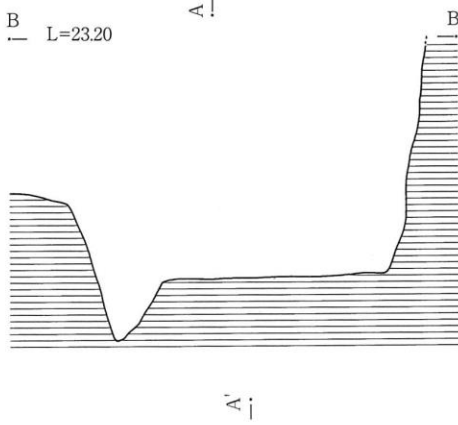
SK-615,616,617,618,619 (第239図)

いずれも5F45-11, 12に位置する。重複もしており、集中した分布状況が見られる。概ね主軸方向は一定である。平面形態は方形を基調としており、SK-615, 618は規模の小さい長方形の土坑である。断面は前者がすり鉢状に対して、後者は台形状で、床からなだらかに立ち上がる。

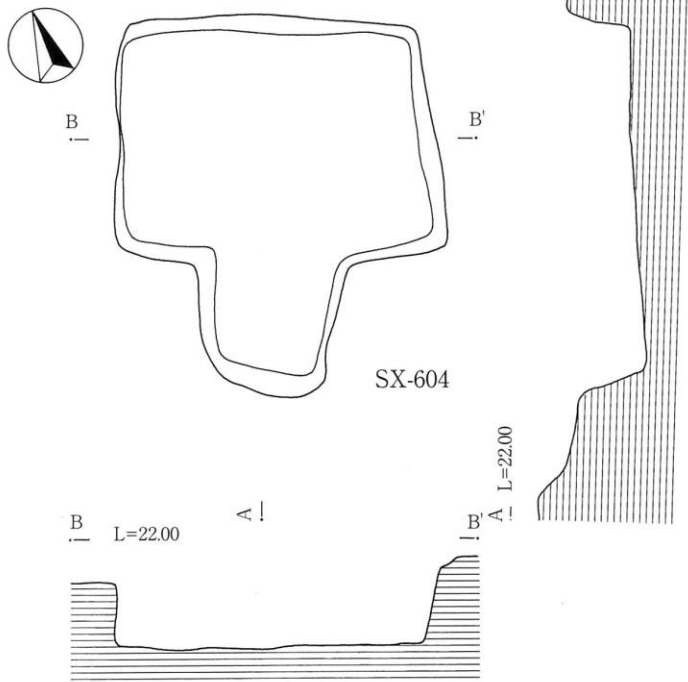
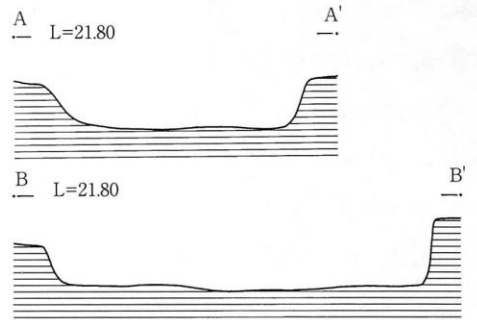
SK-616, 617は長方形を呈する。掘り方の深さは、前者が0.7mであるのに対して、後者は0.3mである。



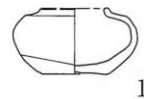
SX-602



SK-614



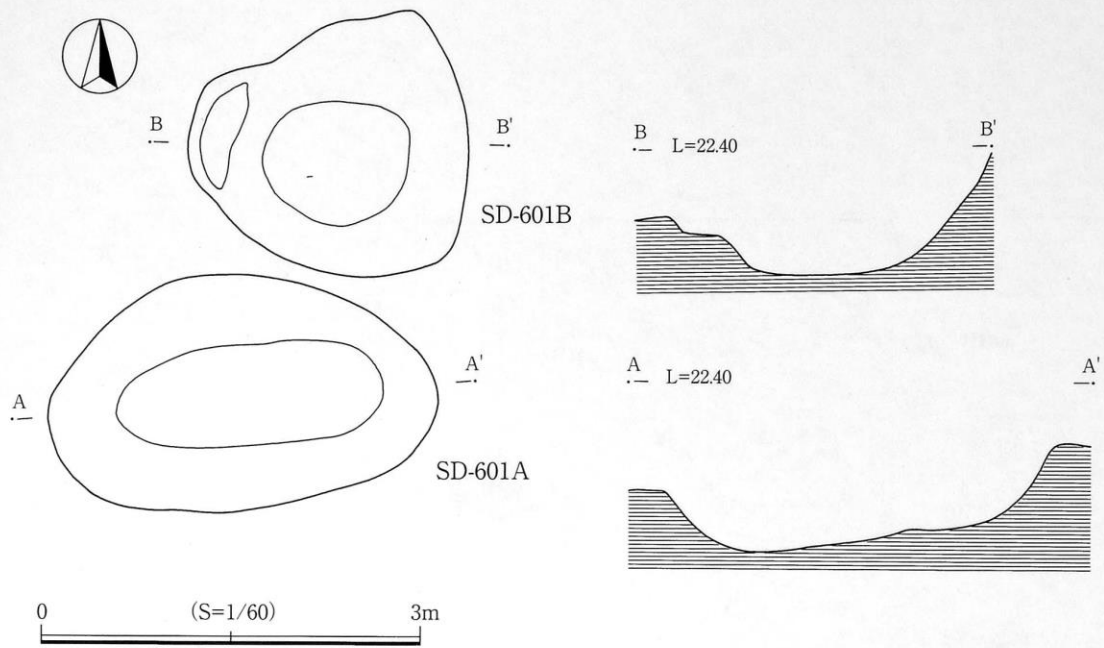
SX-604



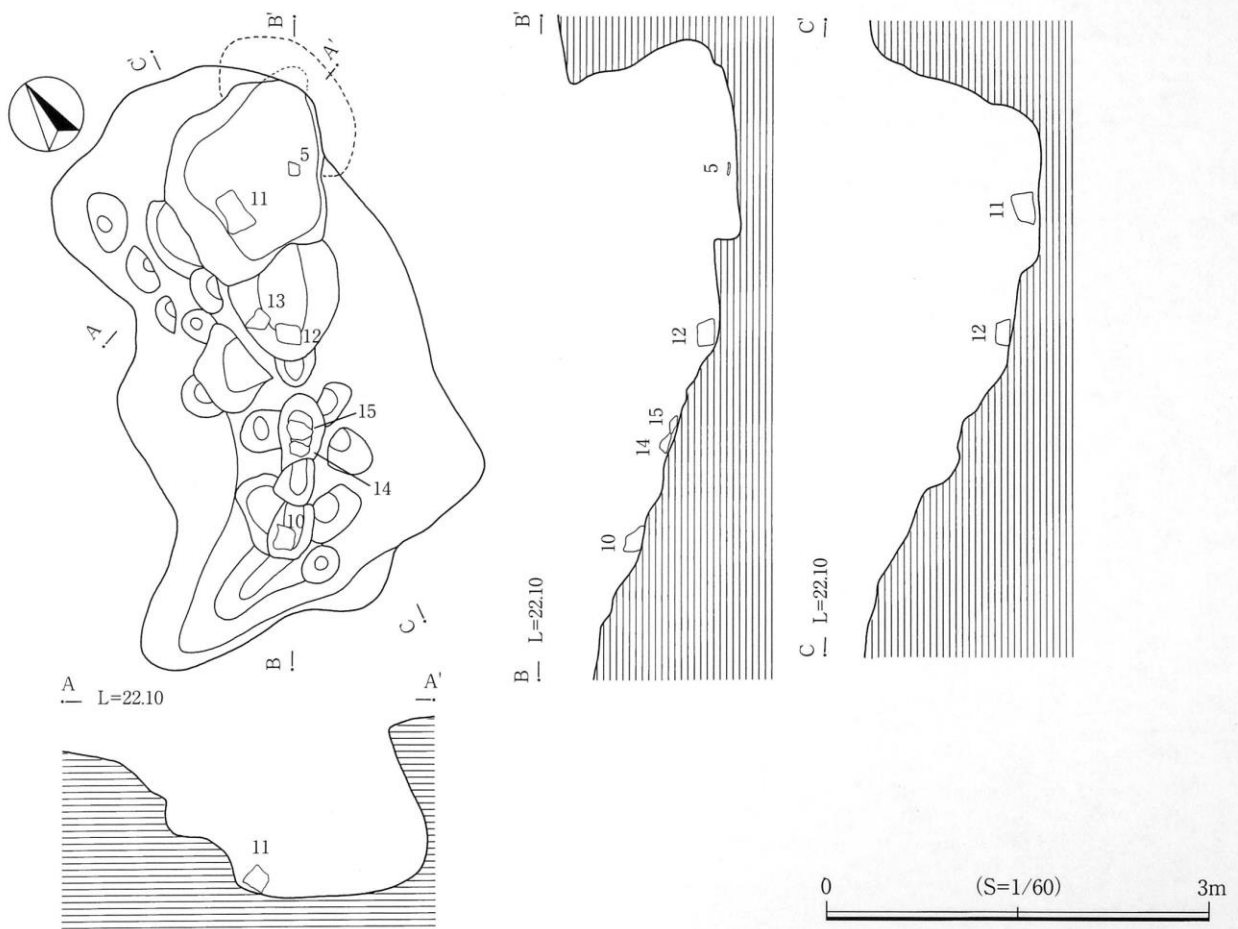
0 (S=1/4) 10cm

0 (S=1/60) 3m

第235図 土坑 (SX-602, SK-604, 614) 実測図及び出土遺物



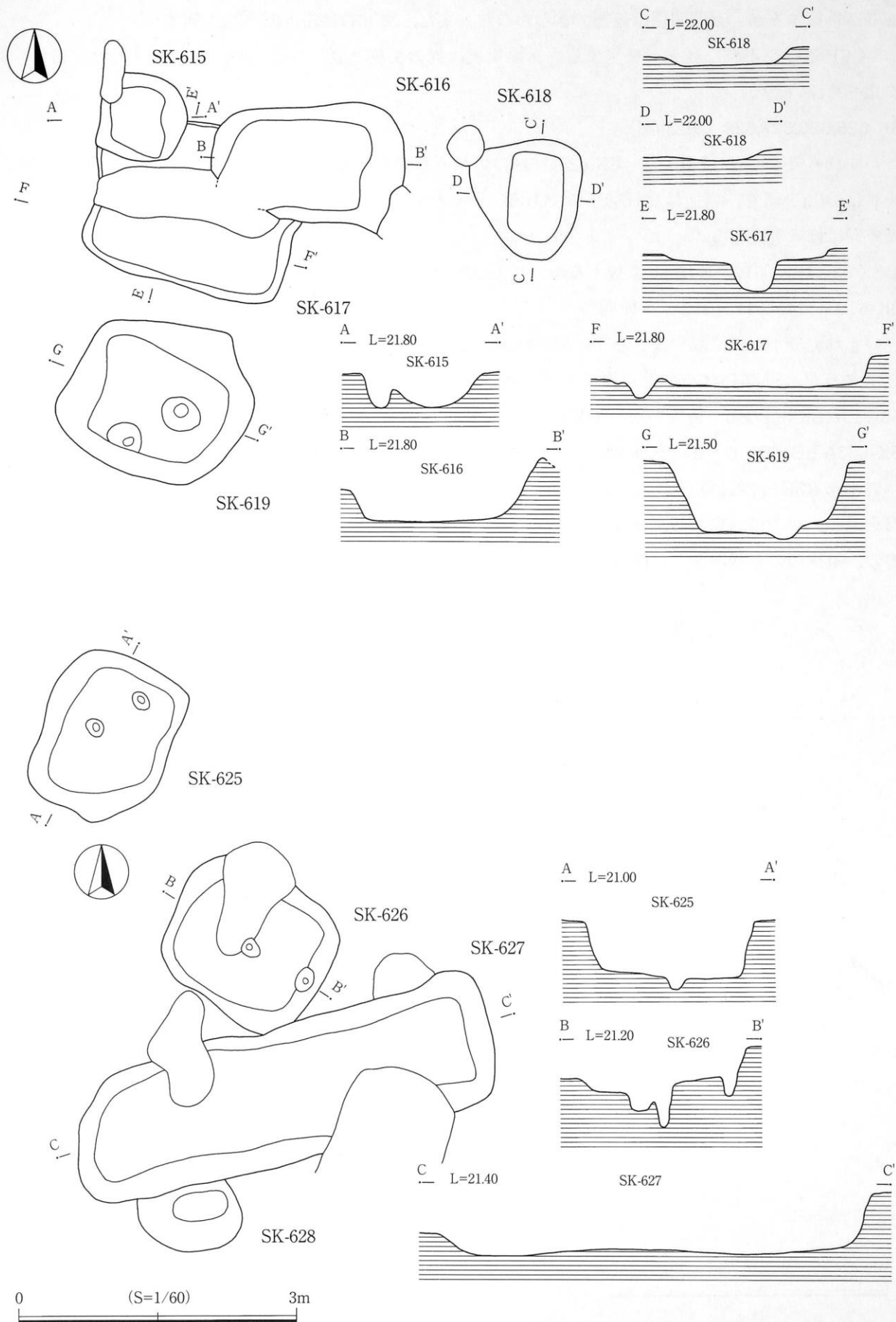
第236图 土坑 (SD-601A・B) 实测图



第237图 土坑 (SD-601C) 实测图



第238図 土坑 (SD-601) 出土遺物



第239图 土坑 (SK-615~619, 625~628) 实测图

両者は重複するが、新旧関係は確認できなかった。また、SK-617はSK-615とも重複する。

SK-619はやや不整な長方形を呈する。平面規模は他の土坑と変わらないが、掘り方は0.8mを測り、他に比べて深い。

SK-625,626,627,628 (第239図)

いずれも5F45-24に位置する。SK-625, 626は方形ぎみの形態を呈する。掘り方の深さは、前者が0.6m、後者は0.4mを測り、底面は比較的平滑である。それぞれ2カ所のピットを中央及び壁際で検出した。主軸方向はほぼ直交する。

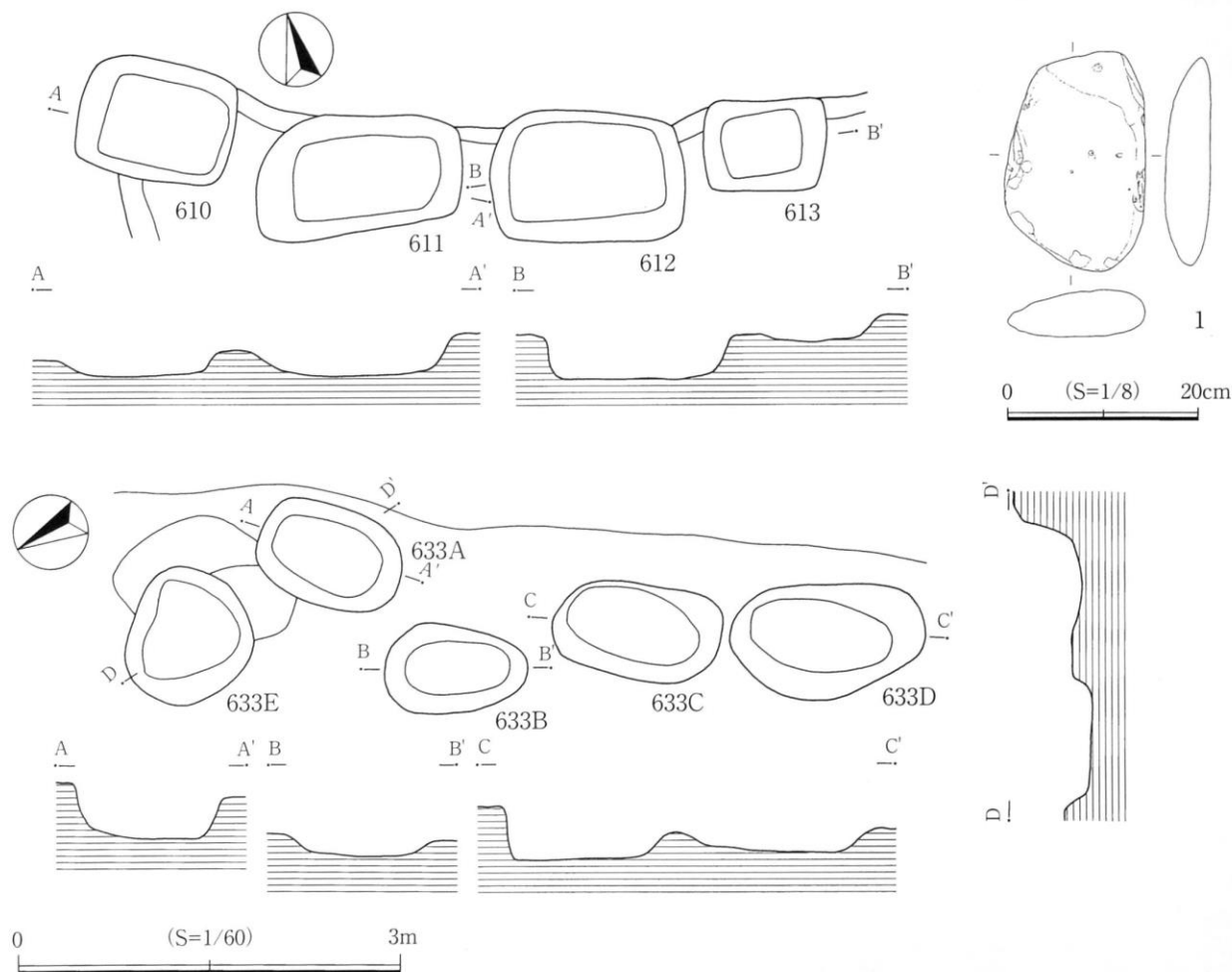
SK-627はSK-601, SK-602と重複するが、長方形を呈する。底面は平滑である。

SK-610・611・612・613 (第240図)

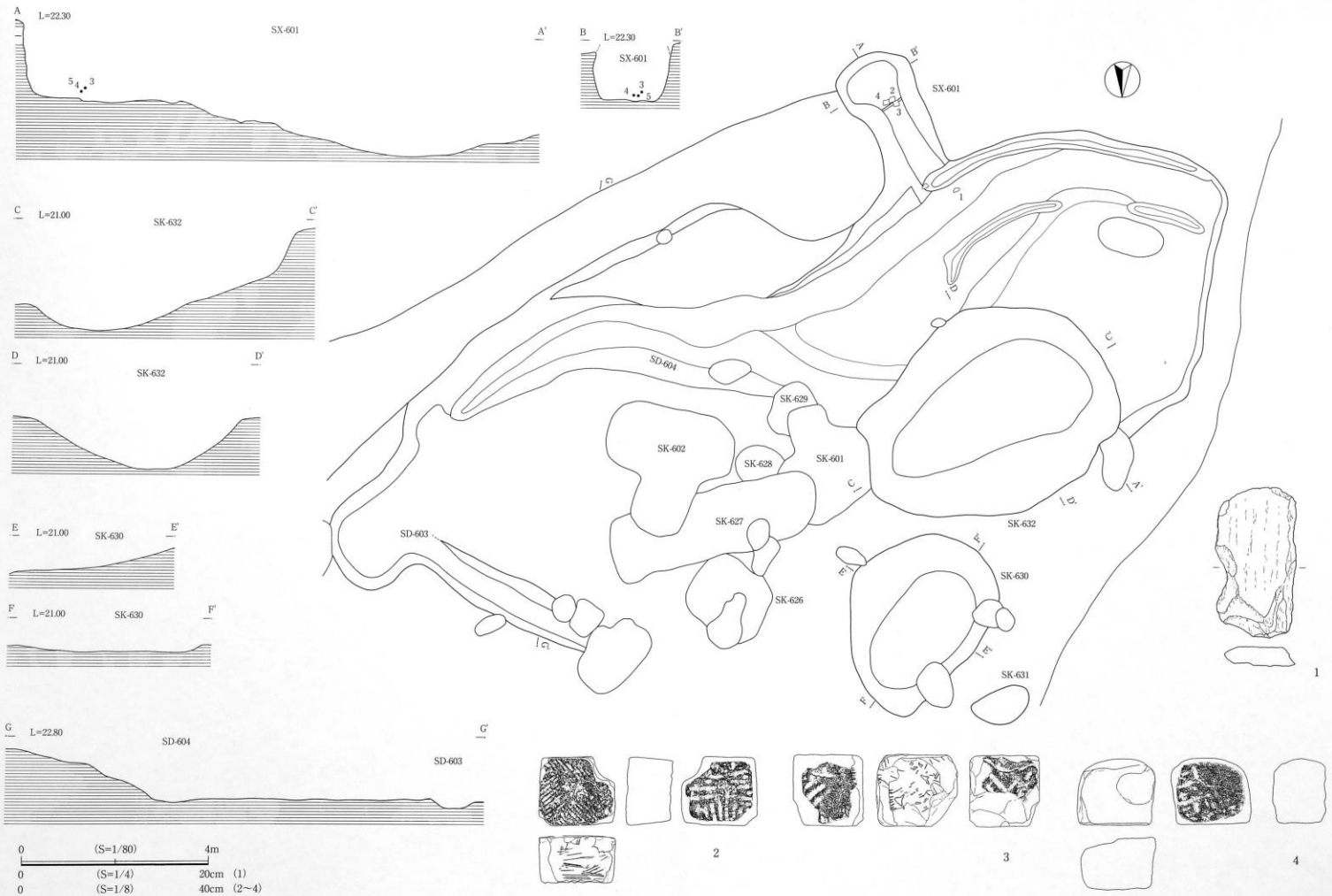
いずれも5F45-6に位置する。形態、規模が類似していることから、一連の土坑群と考えられる。長方形を呈するが、SK-613はやや小規模である。北側の区画縁辺、台地整形による斜面部で並んで検出した。SK-610とSK-611の間で飯岡石が出土した。

SK-633A・B・C・D・E (第240図)

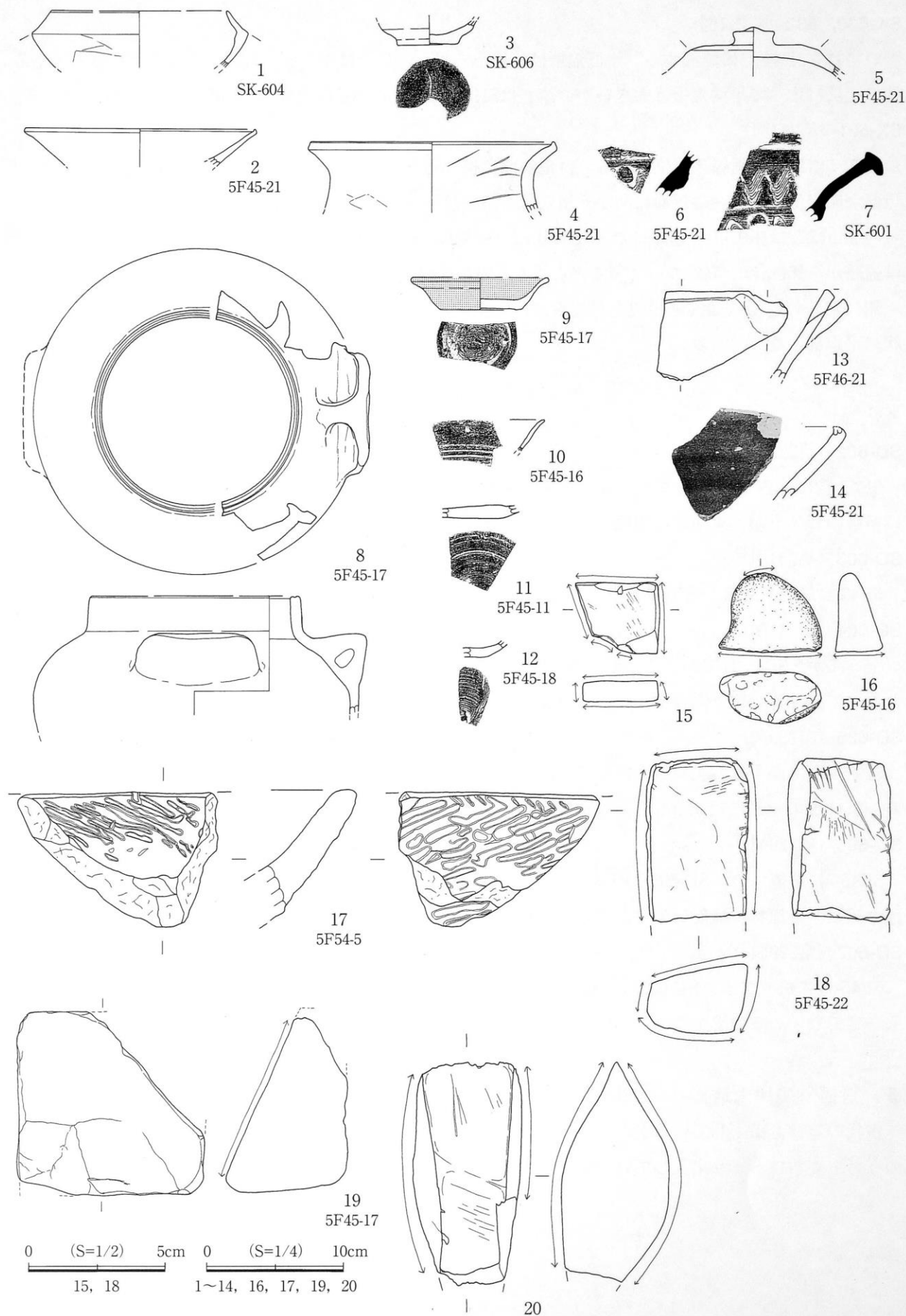
いずれも5F45-22に位置する。形態、規模が類似していることから、一連の土坑群と考えられる。楕円形を呈し、東側の区画縁辺で並んで検出した。先に記したSK-610, 611, 612, 613と平面形態は異なるものの、遺構の分布状況から、同質の性格を有していたと考えられる。



第240図 土坑 (SD-610~613, 633A~E) 実測図及び出土遺物



第241图 土坑 (SK-630, 632, SX-601) 实测图及出土遗物



第242図 遺構外出土遺物

SK-630, 632 (第241図)

いずれも5F44-25に位置する。平面形態は楕円形を呈し、底面はややすり鉢で、なだらかに立ち上がる。他の土坑に比べて平面規模は大きい。深さはSK-630が0.4m、SK-632は0.6mを測るにすぎない。

SX-601 (第241図)

5F54-5南側の区画縁辺に位置する。台地斜面に挟り込むように検出した。構造的には、北側の開けた平坦部が開口部分で、台地斜面に向かう横穴状あるいはトンネル状を呈していたと考えられる。開口部分から約2mほどは幅0.5mの通路になっており、その先に0.8×1.2mの方形状の空間を設けている。この部分は通路から10cmほど高くなっている。ここから石塔類がまとまって出土した。

開口部分の前面には区画縁辺を巡る溝が、二重にはしっている。また、SK-632にかけては幅の狭い棚状の平坦部となっている。

4. 溝

SD-602 (第229図)

5F45-12に位置し、南北にはしる。長さは8mで、幅1m、深さは0.1mを測る。この溝を境に、西側では多数のピットが、東側では規模の大きい土坑が分布している。

SD-603 (第241図)

5F45-21に位置する。等高線に直交するようにはしる。長さ4m、幅1m、深さ0.1mを測る。

SD-604 (第241図)

5F54-5から5F45-21にかけて分布する。南側の区画の縁辺を巡る。長さ17.6mを測るが、幅、深さは一定しない。SX-601前面から西側にかけては幅が狭く、掘り込みも浅い。

SD-605 (第229図)

5F45-7に位置する。北側の区画縁辺で幅の狭い棚状の平坦部を分断するように、北側に向かって低くなる。SD-602の延長に延びるが、直接は接しない。長さ3m、幅0.7m、深さ0.1mを測る。

SD-606 (第229図)

5F45-7に位置する。SD-605と同様、北側に向かって低くなる。長さは6m、幅が広く3mを測る。C5区と接続する道状の機能を果たしていたであろうか。

SD-607 (第229図)

5F45-17に位置する。SD-602の延長にあたる可能性があるが、直接接してはいない。蛇行する上に、幅も一定でない。この溝を境に西側にはピットが多数分布している。長さ9m、幅は2mを測る。

5. 遺構外の出土遺物 (第242図)

古代の遺物も出土しているが、これらは台地上(B区)からの混入である可能性が高い。中世の陶器類のうち、甕類はあまり出土していない。石製品が多く、砥石が目立って出土している。

第39表 C6区古代出土遺物一覧

()は推定値 < >は遺存値

出土地点	挿図No.	種別・器種	計測値(mm)	整形・形態の特徴	色調など	備考
SK-604	第242図-1	土師器 坏	口径: (133) 器高: <42>	口縁部は内側にすぼまり、体部との境には外側に突き出すように稜がたつ。体部はヘラケズリ。	茶褐色	
5F45-21	第242図-2	土師器 高坏か	口径: 170 器高: <28>	体部は直線的に立ち上がる。口唇部はやや上方へつまみ出される。	茶褐色	
SK-606	第242図-3	土師器 坏	器高: <20> 底径: 45	底部は回転系切り。		
5F45-21	第242図-4	土師器 甕	口径: (180) 器高: <53>	口縁部は短く立ち上がる。口唇部はやや上方へつまみ出される。器壁はやや厚い。	明褐色	
5F45-21	第242図-5	土師質 蓋	器高: <36>	ロクロ整形。天井部は回転ヘラケズリ。つまみはやや扁平な宝珠形で、付け根は括れない。	茶褐色	
SK-601	第242図-6	須恵器甕	口縁部破片	同一個体。口唇部は下方へ折り返される。頸部には2段にわたって8本単位のくしがき波状文が施文される。円形の貼り付け文が波状文間に見られる。	灰色	
5F45-21	第242図-7	須恵器甕	頸部破片			

第40表 C6区中世出土遺物一覧

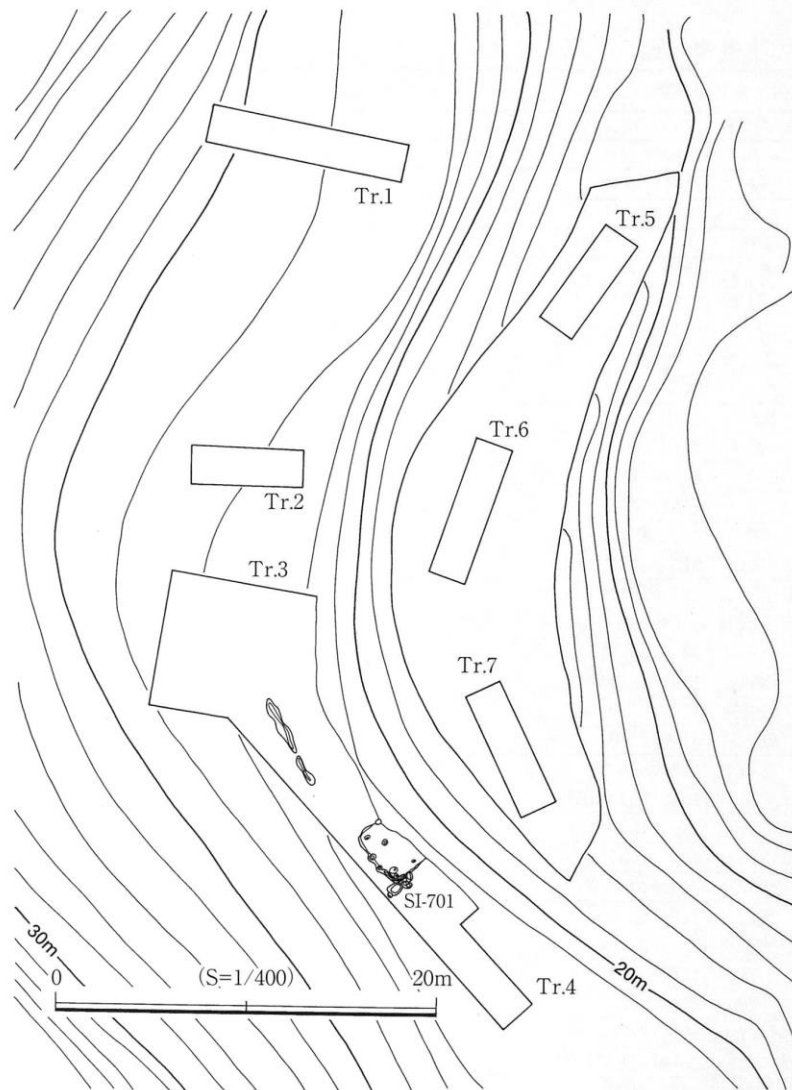
()は推定値 < >は遺存値

出土地点	挿図No.	種別・器種	計測値(mm, g)	特徴
SK-602	第234図-1	転用砥石	176×175×128	五輪塔(地輪)の転用
SK-603	第234図-1	平碗	口縁部破片	瀬戸産
SK-605	第234図-1	かわらけ	口縁部破片	
SK-605	第234図-2	片口鉢か	口縁部破片	
SK-605	第234図-3	砥石	<87>×32×16	
SD-601	第238図-1	内耳土器	口径(290), 器高<55>	601b
	第238図-2	内耳土器	口縁部破片	601b
	第238図-3	内耳土器	口縁部破片	601b
	第238図-4	内耳土器	口縁部破片	601c
	第238図-5	茶釜	破片	601c
	第238図-6	茶壺	破片	瀬戸産
	第238図-7	甕	破片	瀬戸産
	第238図-8	瓶子	底部破片	瀬戸産。15世紀。
	第238図-9	瓶子	底部破片	瀬戸産
	第238図-10	転用砥石	219×157×141	宝篋印塔の転用。601c
	第238図-11	転用砥石	310×200×167	宝篋印塔の転用。601c
	第238図-12	転用砥石	189×191×130	五輪塔(地輪)の転用。601c
	第238図-13	転用砥石	137×137×120	五輪塔(地輪)の転用。601c
	第238図-14	石臼	93×93×<137>	601c
	第238図-15	飯岡石	169×183×70	601c
	第238図-16	石皿	<71>×<89>×32	601c
	第238図-17	砥石	57×31×31, 62g	601c
SX-601	第241図-1	砥石	165×87×22, 535g	片岩を利用
	第241図-2	転用砥石	151×167×103	五輪塔(地輪)の転用
	第241図-3	転用砥石	179×157×154	五輪塔(地輪)の転用
	第241図-4	転用砥石	145×173×114	五輪塔(地輪)の転用
SK-610, 611	第240図-1	飯岡石	234×148×50	
5F45-17	第242図-8	茶釜	150×86	
5F45-17	第242図-9	灰釉小皿	99×23×69	
5F45-16	第242図-10	小皿	口縁部破片	
5F45-11	第242図-11	平碗か	底部破片	
5F45-18	第242図-12	平碗か	底部破片	
5F46-21	第242図-13	片口鉢	口縁部破片	
5F45-21	第242図-14	片口鉢	口縁部破片	
表採	第242図-15	砥石	26×31×18, 11g	
5F45-16	第242図-16	砥石	59×75×38, 174g	
5F54-5	第242図-17	石鉢	破片	
5F45-22	第242図-18	砥石	<60>×38×25	
5F45-17	第242図-19	砥石	135×136×90	五輪塔(地輪)の転用
表採	第242図-20	砥石	82×40×39	

第7章 C7区の調査

台地（B区）の東側斜面部に相当する(第243図)。神山谷遺跡の台地斜面は西側は緩やかだが、東側は比較的急峻で、かつての土地利用を推測させる平場がほとんどみられない。台地の南側よりで籬壇状の平場を確認できたが、幅は10mもなく、長さもせいぜい30mほどであった。

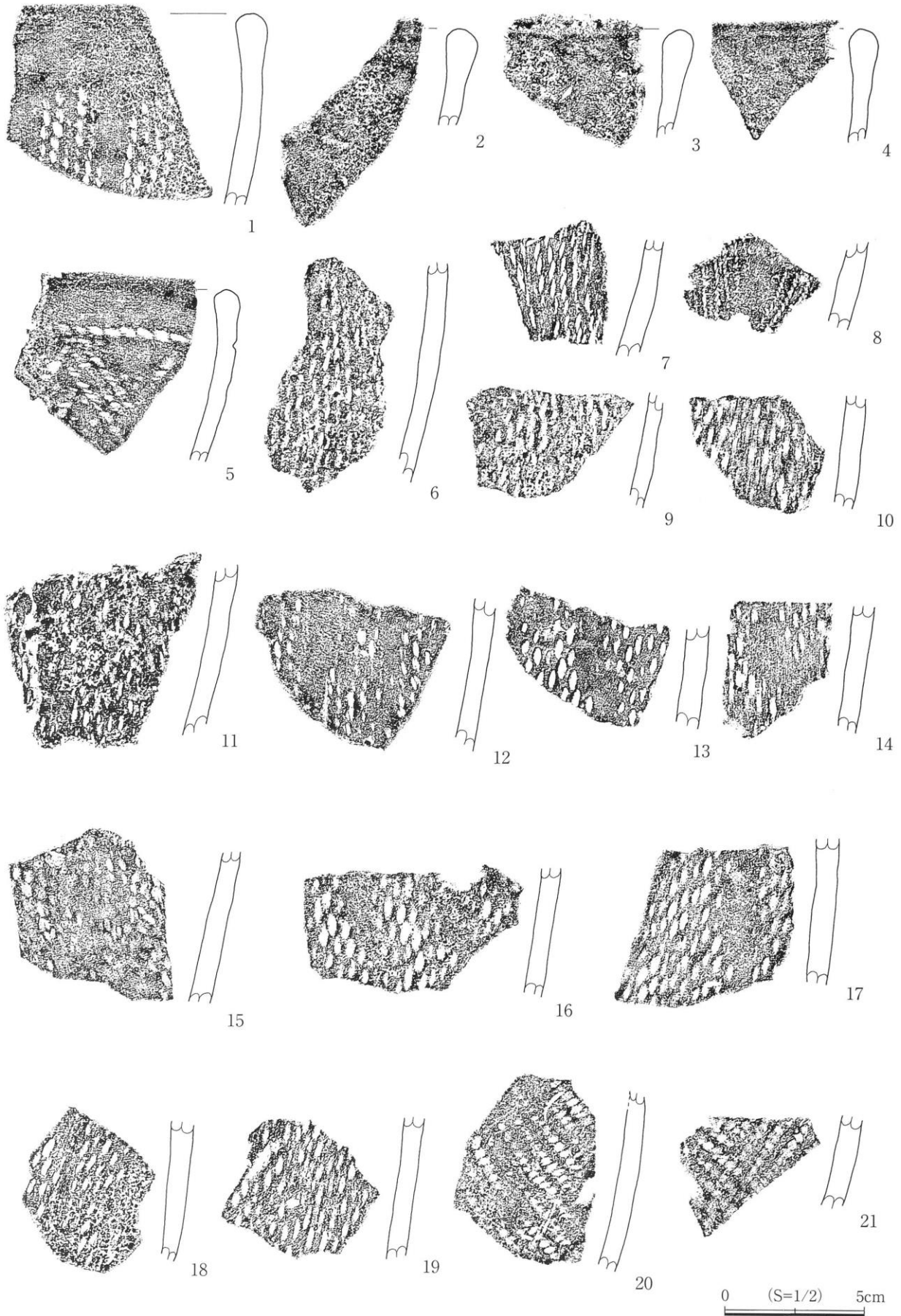
調査では斜面の傾斜を考慮してトレンチを設定し、遺構、遺物の有無を精査した。その結果、平安時代の竪穴住居跡1軒を検出したほか、縄文土器がまとまって出土した。中世の遺物は出土していないことから、籬壇状の平場は古代の台地整形の可能性はある。



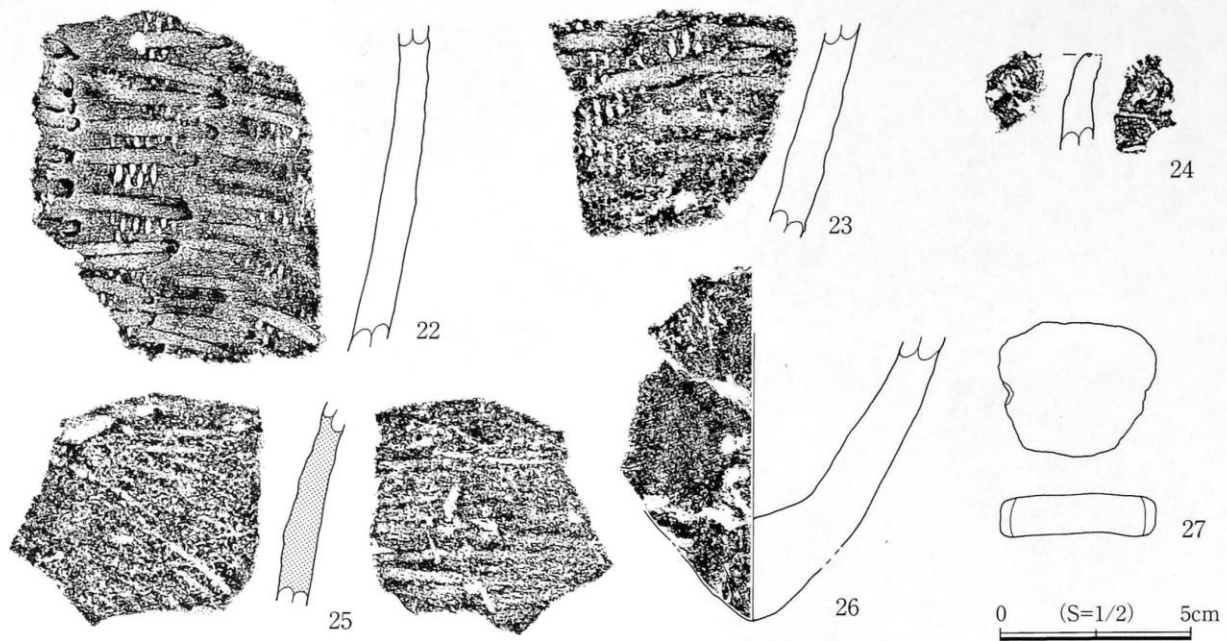
第243図 C7区遺構配置図

第1節 縄文時代 (第244, 245図)

遺構は検出することができなかったが、縄文土器片が比較的まとまって出土している。1～23は撚糸文系、24～26は条痕文系、27は土器片錘である。



第244図 C7区出土縄文土器(1)



第245図 C7区出土縄文土器（2）及び土製品

撚糸文系土器はそのほとんどが稲荷台式で占められる。2～4も摩滅が著しいが、断面形態から稲荷台式であろう。5及び20、21は口縁部に縄文を押圧し、胴部は羽状に回転施文していることから、花輪台式に比定した。22、23は施文間隔が疎らな撚糸文を施文後、横位の短い条線を規則的に施している。器面の状態から竹管状工具の背を使い、器体がまだ柔らかい段階で施文している。条線の断面形態はU字状を呈する。成田市木の根遺跡でも条線を施文した撚糸文土器（第I群5類）が出土しているが、条線の断面形態はV字状を呈し、撚糸は施文されていない。24は内外面及び口唇部に絡条体圧痕が施文されている。子母口式に比定できる。27の土器片錘は摩滅しているが、中期の土器片を利用している。

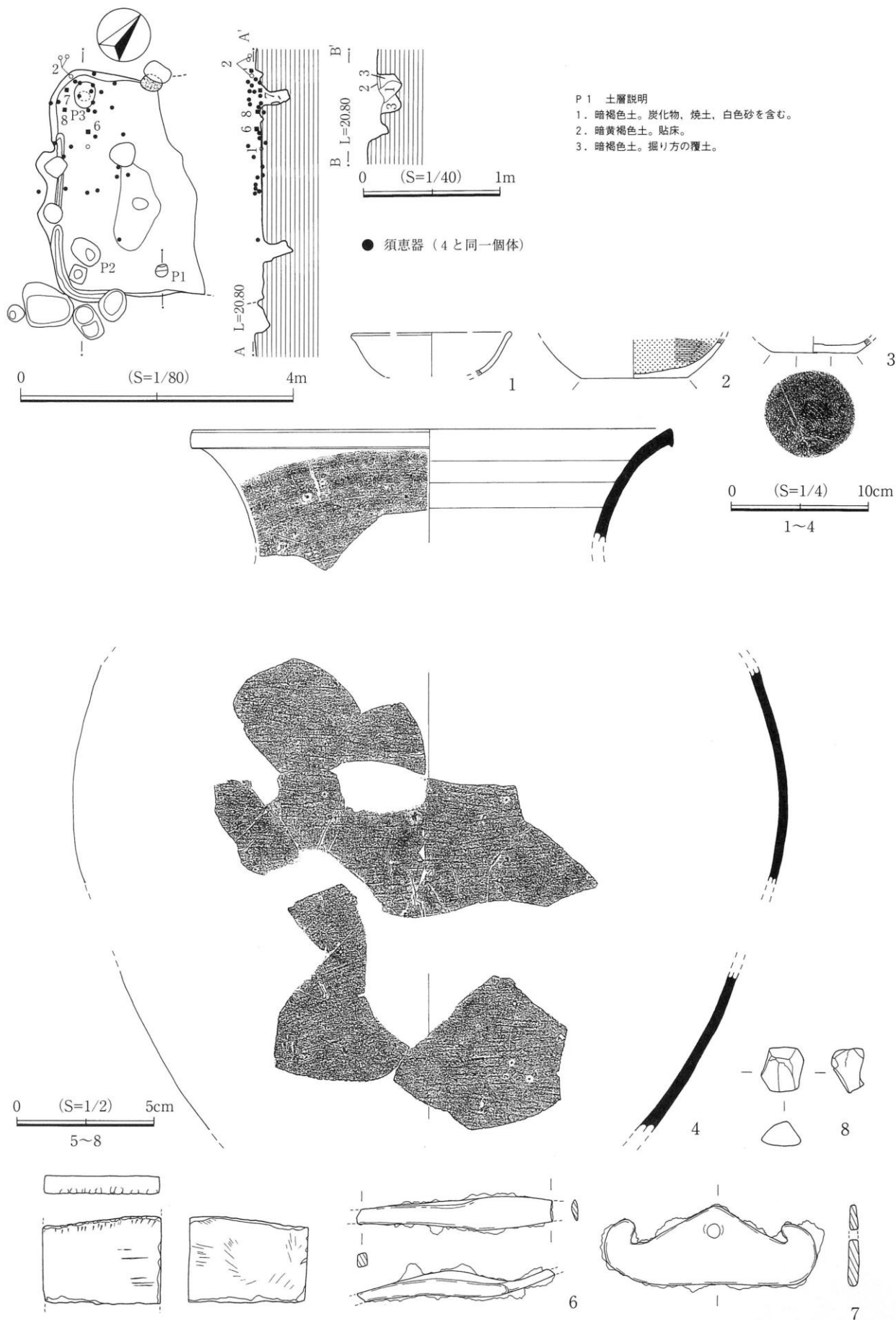
第2節 平安時代

平安時代の竪穴住居跡を1軒検出した。遺構外では平安時代に限らず、奈良時代の遺物もわずかに出土しているが、総じて出土量は少ない（第247図）。東側では積極的な土地利用が行われなかったのであろう。

SI-701（第246図）

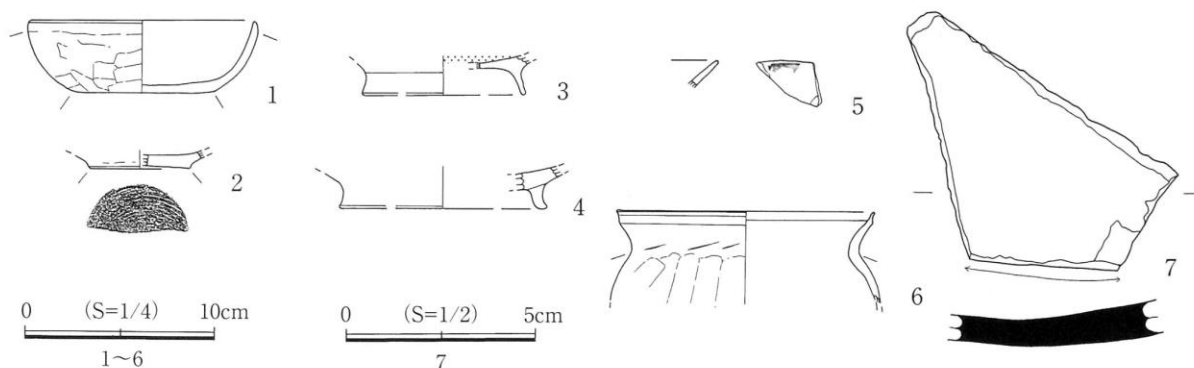
検出状況 平面形態は隅がやや丸い。東側半分は消失しているが、西側は浅いながらも明瞭な掘り込みが確認できた。周溝は南西隅で明瞭に掘削されている。柱穴は竪穴隅付近で検出した。竈の袖は遺存しておらず、火床のみ北側で検出した。この火床は竪穴壁と接していることから、燃焼空間は竪穴外に設けられたのであろう。P3は入口施設に相当するピットである。確認時は半月状で、北側に斜行して掘り込まれていた。梯子ないしは階段状の施設であったろう。この昇降部分の床面は硬化していた。竪穴覆土中に焼土や炭化物が混じっている。面的な広がりは見られないが、焼失した痕跡と考えられる。

遺物と出土状況 北西隅で遺物が多く出土している。同一個体と考えられる須恵器甕の破片が多量に出土しているが、接合率は低く、復元できるほどは出土していない。P2からも出土していることから、竪



第246図 SI-701実測図及び出土遺物

穴廃絶後の出土状況を示している。火打石、火打金は並んで出土した。この他にヤリガンナや砥石などの工具類が出土している。



第247図 遺構外出土遺物

第41表 C7区出土遺物一覧

出土地点	挿図No.	種別 器種	計測値と形態の特徴			備考
			計測値(mm)	整形・形態の特徴	色調など	
SI-701	第246図-1	土師器 坏	口径: (118) 器高: <32>	ロクロ整形。口唇部はわずかに外反する。	暗褐色	No.18
	第246図-2	土師器 坏	器高: <28> 底径: (78)	ロクロ整形。底部は手持ちヘラケズリ。体部下端はヘラケズリか。内面はミガキ。	内面黒色処理	No.36, 43, 44
	第246図-3	土師器 坏	底部破片	ロクロ整形。底部は回転糸切り後周縁部手持ちヘラケズリ。	暗褐色	No.49
	第246図-4	須恵器 甕	口径: 351 胴部径: 260	ロクロ整形。口唇部は下方にもわずかにつまみ出される。頸部に稜線は巡らない。体部の肩は張らない。	灰色	
	第246図-5	石製硯	<32>mm×43mm×6mm。重さ16.7g。表面上端部にクサビ状の擦痕が、上部側縁には規則的な剝離痕。			
	第246図-6	鉄製やりがんな	長さ<72>mm, 高さ12mm, 厚さ4mm。刃部と柄の境に関をもたない。刃部は上下に有し、厚さは3mmほどである。			
	第246図-7	火打金	長さ78mm, 高さ30mm, 厚さ4mm。			
	第246図-8	火打石	16mm×12mm×12mm。重さ3.3g。			
遺構外	第247図-1	土師器 坏	口径: (120) 器高: 39 底径: (74)	底部と体部との境には稜が立つ。体部、底部とも手持ちヘラケズリ。口縁部はナデ。		Tr. 6
	第247図-2	土師器 坏	底径: (54)	ロクロ整形。底部は回転ヘラケズリ後未調整。底部はやや下方へ突き出す。		5F75-5
	第247図-3	土師器 高台付坏	台部径: (87) 器高: <21>	ロクロ整形。		5F75-10
	第247図-4	土師器 高台付坏	台部径: (110) 器高:	ロクロ整形。		Tr. 4
	第247図-5	土師器 坏	口縁部破片		内面に油煙痕	Tr. 4
	第247図-6	土師器 甕	口径: (136) 器高: <48>	口唇部はやや上方へつまみ出される。胴部は縦方向のヘラケズリ。		Tr. 4
	第247図-7	転用砥石	73mm×69mm。須恵器破片を再利用。断面に摩滅痕。			5F75-10

附章 神山谷遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

神山谷遺跡は、標高約20m前後の台地上に位置し、これまでの発掘調査により縄文時代早期から近世にわたる複合遺跡であることが判明している。検出された遺物としては、縄文時代早期～中期の土器、弥生時代のS字口縁や甕、土師器・須恵器などの他に、黒曜石やガラス玉などが多数出土している。特に縄文時代早期後半・早期末・前期前葉に集落が形成されており、土器の出土量が多いとされる。また、遺跡西側では、近世の遺構が多く確認されている。その大半は、湧水を溜める横井戸跡、そこから派生する溝跡、樽や桶を埋設した土坑などである。

今回、黒曜石の産地推定を目的として波長分散型蛍光X線分析装置を用いた化学成分分析と縄文時代早期～前期の土器製作に関する情報を得る目的で胎土重鉱物分析を行う。また、遺構の用途・機能に関して検討するために珪藻分析・寄生虫卵分析・土壤理化学分析を実施する。以下、調査課題ごとに示す。

I. 黒曜石の産地推定

1. 試料

本遺跡で多数出土する黒曜石は形態的な特徴から、1) 鼠色の帯が縞状に見られる剥片、2) 透明な部分が多くある剥片、3) 前記の特徴が無く光沢が強い剥片、の大きく3つのグループに分類されている。また、2グループは、2-a) 透明な部分が多くないが、その度合いが高く黒色部とのコントラストが明瞭なもの、2-b) 透明な部分が大半を占めるもの、2-c) 透明な部分がくすむもの、に細分されている。これら黒曜石が所属する時期は、石器類が包含層からまともなく出土すること、出土土器が縄文時代早期～中期までであること、古代の攪乱などの影響を受けているため明確にされていない。

分析を行う試料は、上記パターンに分類された黒曜石No.95-13,14,16,17,18の5点である。それぞれは、No.95-13が2-aグループ、No.95-14が2-cグループ、No.95-16が2-bグループ、No.95-17が1グループ、No.95-18が3グループとされている。

2. 分析方法

今回、出土した黒曜石について、蛍光X線分析装置による化学分析を実施する。分析元素は、SiO₂、TiO₂、Al₂O₃、Fe₂O₃、MnO、MgO、CaO、Na₂O、K₂O、P₂O₅、Rb、Sr、Zr、Baの14元素とし、分析精度の高い波長分散型蛍光X線分析装置を用いたガラスビード法によって定量する。

・装置

理学電機工業社製RIX1000 (F P法のグループ分析プログラム)

・試料調製

試料を振動ミル(平工製作所製TII100; 10ml容タングステンカーバイト容器)で微粉碎した後、以下の条件でガラスビードを作成した。

溶融装置; 自動剥離機構付理学電機工業社製高周波ビートサンプラー(3491A1)

溶剤及び希釈率; 融剤(ホウ酸リチウム) 5.000g: 試料0.500g

剥離剤；LiI（溶融中2回投入）

溶融温度；1200℃ 約7分

・測定条件

X線管；Cr（50Kv-50mA）

スペクトル；全元素K α

分光結晶；LiF, PET, TAP, Ge

検出器；F-PC, SC

計数時間；PeaK40sec, Back20sec

・原産地判定

五十嵐（未公表）による黒曜石の微量成分解析による。

3. 結果および考察

推定産地を記した化学組成を表1に示す。黒曜石は、流紋岩～デイサイトに相当するガラス岩である。流紋岩～デイサイトの成因は多様であるが、その反面主発物質としてのマグマの生成過程および分化過程で化学組成の挙動が異なることが期待される。

大沢ほか（1991）の黒曜石の化学組成を岩系別に見ると、Rb（ルビジウム）、La（ランタン）、Ce（セリウム）、Eu（ユウロピウム）、Th（トリウム）、Sc（スカジウム）の変動が著しく、地域的な特性を示す微量成分元素として注目される。

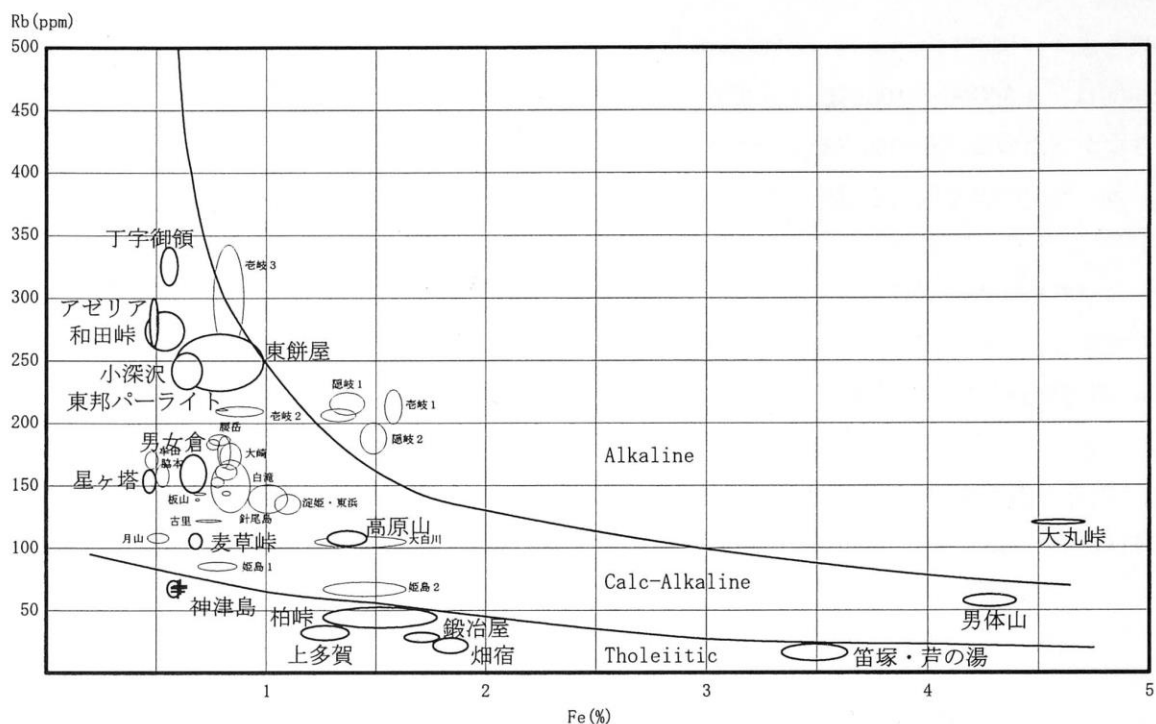
そこで黒曜石の岩系に基づいた化学成分の変化を背景に、産地判定の指標成分としてコンパティブル元素であるFeとインコンパティブル元素であるRbを選択し、各産地ごとの2成分の領域を図示した黒曜石の産地判定図を作成した（図1）。

本判定図は、大沢ほか（1991）の原産地黒曜石370試料、当社保有の原産地黒曜石110試料および様々な文献を参考に計480試料以上の黒曜石の化学組成分析データを用いて作成している。作成した判定図は、縦軸にRb（ppm）、横軸にFe（%）をとると岩系別に指数関数的な分布を示し、産地間の分離が良好であることから、分析精度が十分に高ければ産地の識別は可能であると考えられる（五十嵐、未公表）。なお、この図はFe（%）とRb（ppm）の値を採用しているため、酸化物の分析結果をそれぞれ換算して用いている。

今回の黒曜石資料は肉眼鑑定によって分類された各グループの代表資料とされたものであるが、Fe-Rbによる産地判定図にプロットしてみると、これら黒曜石資料の原産地はいずれも「神津島」と判定され、同一の原産地に帰属すると考えられる。

表1 黒曜石元素分析結果（ガラスビード-FP法）

測定試料		SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	Fe ₂ O ₃	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	P ₂ O ₅	Rb	Sr	Zr	Ba	推定 原産地	参考値	
No.	分類	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	ppm	ppm	ppm	ppm		Fe %	Rb ppm
No. 95-13	2-a	77.97	0.12	12.81	0.86	0.07	0.13	0.85	3.78	3.38	0.03	65.2	74.5	72.9	578.5	神津島	0.60	65.2
No. 95-14	2-c	77.74	0.12	12.68	0.87	0.08	0.16	0.87	3.95	3.51	0.03	68.3	75.9	75.3	615.4	神津島	0.61	68.3
No. 95-16	2-b	77.83	0.12	12.65	0.86	0.08	0.16	0.87	3.89	3.51	0.02	68.7	77.9	72.7	618.3	神津島	0.60	68.7
No. 95-17	1	78.11	0.12	12.67	0.86	0.07	0.18	0.86	3.55	3.54	0.03	68.0	76.8	71.1	585.4	神津島	0.60	68.0
No. 95-18	3	77.97	0.13	12.76	0.87	0.07	0.13	0.86	3.64	3.54	0.02	69.6	76.6	72.3	608.1	神津島	0.61	69.6



第1図 黒曜石の原産地判定図

II. 土器の産地推定

1. 試料

試料は、ひかり工業団地遺跡より出土した縄文時代早期後半～早期末とされる土器片6点である。各試料には、455、473、532、569、694+695、708という番号が付されている。これらの内で、455および473は子母口式とされ、532は下吉井式の可能性があるとされている。また、708は東海地方に主に分布するとされている入海式の可能性があるとされている。さらに発掘調査者の所見では、肉眼で観察される胎土中の岩石片または鉱物片の多少について、それらを比較的多く含む試料の場合は「鉱物多い」という記載がされている。各試料の記載は、分析結果を呈示した図2に併記する。

2. 分析方法

当社では、これまでに椎柴小学校遺跡や本遺跡内から出土した弥生土器の胎土分析を行っている。分析方法は、試料の質とこれまでの分析例から、重鉱物分析を用いた。今回の試料である縄文土器も前回の弥生土器と同様に低温焼成であり、また砂粒を比較的多く含むことから、重鉱物分析を用いる。分析処理手順は以下の通りである。試料は、適量をアルミナ製乳鉢を用いて粉碎、水を加え超音波洗浄装置により分散、#250の分析篩により水洗、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた1/4mm-1/8mmの粒子をポリタングステン酸ナトリウム（比重約2.96に調整）により重液分離、重鉱物のプレパラートを作製した後、偏光顕微鏡下にて同定した。鉱物の同定粒数は、250個を目標とした。同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するものを「不透明鉱物」とし、それ以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とした。

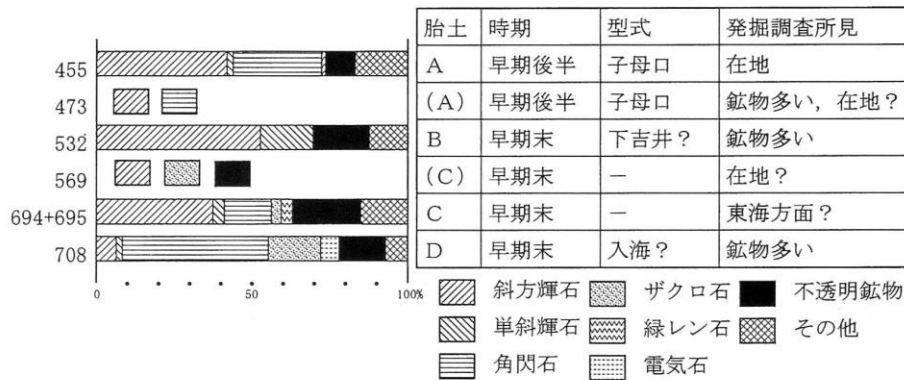
3. 結果

結果を表4、図2に示す。6点の試料のうち、473と569は、重鉱物粒を100個以上計数することができなかったので、その組成を表すグラフとせず、多い傾向のある鉱物を呈示するだけにとどめた。

これら以外の4点の試料の重鉱物組成は、以下の通りである。

455：斜方輝石と角閃石が概ね同量程度に多く、少量の不透明鉱物と微量の単斜輝石および緑レン石を含む。

532：斜方輝石が多く、これに少量の単斜輝石と不透明鉱物を伴う組成。角閃石や緑レン石などは極めて微量検出される。



第2図 胎土重鉱物組成

694+695：斜方輝石が最も多く、少量の角閃石と不透明鉱物を伴い、微量の単斜輝石、ザクロ石、緑レン石を含む。

708：角閃石が最も多く、少量の斜方輝石、ザクロ石、電気石、不透明鉱物を伴い、微量の単斜輝石を含む。

以上の記載から、上記4点の胎土はそれぞれ異なる胎土であるといえる。ここでは、これら4種類の胎土を上記の試料順にA～D類とする。なお、同定粒数100個未満であった473と569については、多く見られる鉱物の傾向から、それぞれA類とC類に分類される可能性がある。

4. 考察

遺跡の所在する光町の地質学的背景の主体は、下総台地の構成層である。下総台地の地質とその重鉱物組成については、当社が以前に行った椎柴小学校遺跡などにおける弥生土器の胎土分析でも以下のように述べている。

台地を構成する海成層の成田層やその上位の氾濫原堆積物である常総層は、広く関東平野を取り巻く山地に由来する碎屑物により構成されている。この碎屑物中に含まれる重鉱物の主たる給源は、関東平野周囲の地質の中では、榛名や赤城、日光火山群、高原山、那須火山に至る安山岩質またはデイサイト質の火山岩や未固結の火山噴出物であると考えられる。これに、群馬県西部の凝灰岩類や上越国境地帯に広がる

表2 胎土重鉱物分析結果

試料番号	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	ジルコン	ザクロ石	緑レン石	電気石	不透明鉱物	その他	合計
455	1	105	5	71	2	0	1	3	2	24	36	250
473	0	19	0	13	0	0	0	0	1	2	2	37
532	0	132	42	1	0	0	1	1	0	45	28	250
569	0	8	0	1	0	0	5	2	1	29	4	50
694+695	0	72	7	29	1	2	6	7	1	42	25	192
708	1	10	3	72	0	0	26	1	9	23	9	154

花崗岩類や日光周辺の流紋岩などに由来する重鉍物も混在していると考えられる。また、関東平野東南部では、筑波山塊を構成する花崗岩類に由来する重鉍物も考えられる。このような碎屑物の状態を想定すると、下総台地の堆積物の重鉍物組成は、斜方輝石が多く、これに単斜輝石や角閃石および磁鉄鉍などの不透明鉍物が混在するという組成が考えられる。

今回の胎土では、A類とB類が常総層の重鉍物組成に相当する。実際に、紀村ほか（1981）に示された下総台地の常総層の重鉍物組成のなかに、両者と類似する組成を認めることができる。すなわち、これらの胎土は、光町の地質学的背景と調和する。発掘調査所見では、A類の455が在在とされていることを考慮すれば、A類の在在性（ここでは下総台地東部程度の広がりで考える）は高いといえる。473は、「鉍物多い」という所見があるが、前述のように重鉍物組成からみれば、455と同様のA類の胎土である可能性があり、したがって、在在性も高いと考えられる。

B類の試料である532は、特に在在という発掘調査所見はないが、B類の重鉍物組成は上述のように在在性を有することから、532は在在である可能性がある。なお、532は473と同様に「鉍物多い」とされているが、胎土の分類は異なる可能性が高い。

C類の重鉍物組成は、主たる鉍物組成からみればA類と類似し、したがって在在性も高いと言えそうであるが、少量であってもザクロ石の量比においてA類とは異質である。椎柴小学校遺跡ほかでの弥生土器の胎土分析では、今回のC類とは単斜輝石と角閃石の量比が若干異なるが、斜方輝石が多い組成に少量のザクロ石を伴う組成が認められている。そこでは、ザクロ石の給源として筑波山塊の花崗岩を推定した。この場合、土器の産地として茨城県側の常陸台地とその周辺地域が想定される。ただし、より範囲を広げてみるならば、関東地方南部には埼玉県吉見町付近にもザクロ石の産する地質の分布がある（日本の地質「関東地方」編集委員会編、1986）。さらに、C類とされた694+695については、発掘調査所見では東海方面の産地の可能性もあるとされている。当社では、愛知県を中心とした東海地域において縄文土器や弥生土器の胎土重鉍物分析例を比較的多く有するが、その中にC類と類似する組成も認めることができる。したがって、現時点では、C類の地域性を常陸台地に限定する段階でなく、より多くの分析例が必要とされる。C類の可能性があった569については、発掘調査所見により在在性の可能性があるという指摘があるが、上述のようにザクロ石の由来を考慮すれば、少なくとも下総台地東部付近に産地を求めることができず、他地域からの搬入品と考えられる。

D類の重鉍物組成は、上述のA～C類とは全く異質であり、かつザクロ石や電気石の量比から、光町付近の地質学的背景とも異質である。さらに、D類の試料である708が、発掘調査所見により、東海地方を主たる分布域とする入海式である可能性が指摘されていることも考慮すれば、D類の胎土は、下総台地とその周辺域外の地域からの搬入である可能性がある。実際に、上述した当社における東海地域の分析例では、D類のような組成を多く認めることができる。東海地域においては、D類の由来として、花崗岩と片麻岩を主たる構成要素とする領家帯と呼ばれる地質を想定した。領家帯は、長野県の諏訪付近から天竜川沿いに伸びて静岡県西部から愛知県東部地域に至り、さらに伊勢湾を越えて紀伊半島中部から四国中部を横断し、九州に至る広範な分布を示す地質である。したがって、今回の708の場合も、その産地として東海地域だけでなく、長野県の天竜川流域も含めた地域からの搬入を想定できる。なお、当社における既存の分析例では、神奈川県や伊豆半島における遺跡から出土した入海式の土器にD類とほぼ同様の組成を認めることができる。このことは、伊豆半島以東の地域で出土する入海式の土器には、何か特殊な事情すな

わち搬入品という事情があることを示唆しているとも考えられる。今後、より多くの関東各地における入海式土器の分析例を得た上で検討してみたい。

Ⅲ. 遺構の用途推定

1. 試料

試料は、SE200, SK211, SK221から採取された。SE200は、横井戸の近くから検出された桶を埋設した土坑であり、水利施設と考えられている。桶覆土は、上部に青灰色砂、下部に炭化物・材を多量に含む黒褐色シルトによって埋積するとされる。試料は、炭化物・材を多量に含む黒褐色シルト層から採取された。

SK211は、3つ連なる円形土坑のうちの一つである。桶の底板の痕跡と考えられる腐植土の直上に暗褐色シルトが堆積するとされる。トイレの可能性があるとされている。試料は、暗褐色シルト層から採取された。

SK221は、溝の途中に桶を埋設した土坑である。横井戸の近くから検出されており、水利施設と考えられている。桶覆土は、上部に周囲の地山と同じ砂のブロックが、下部に暗褐色シルト質砂が堆積するとされる。下部の暗褐色シルト質砂層からは、多量の材とともに、種実遺体も出土するとされる。試料は、板材の下位から採取された。

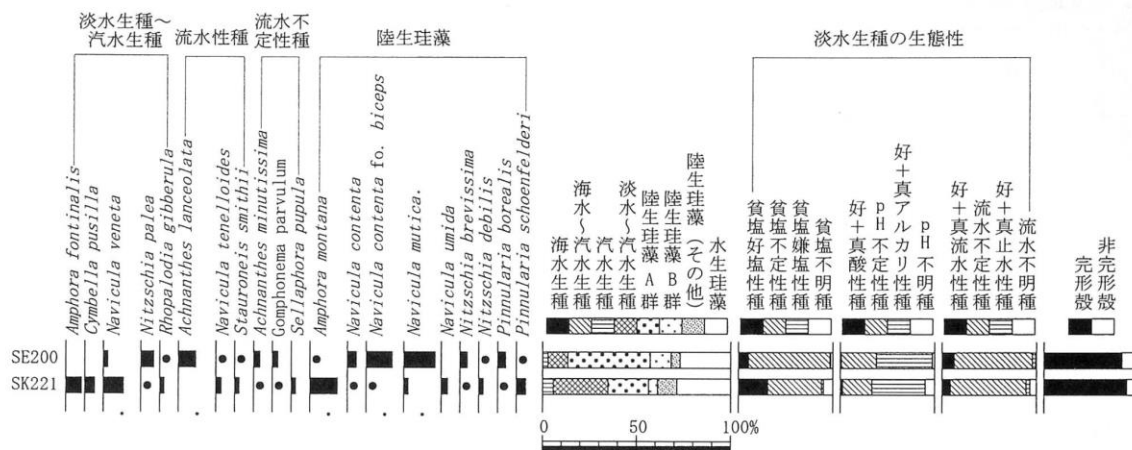
これら採取された試料について、水質等に関する情報を得るためにSE200およびSK221から採取された2点について珪藻分析を実施する。また、トイレ遺構に関する検討を行うためSK211から採取された試料について寄生虫卵分析を実施する。さらに、3基の遺構について土壌の理化学組成から内容物等に関する情報を得るために土壌理化学分析を実施する。なお、土壌理化学分析で測定する項目は、全炭素、全窒素、リン酸、カルシウムの含量である。

2. 分析方法

(1) 珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する。種の同定は、原口ほか(1998)、Krammer(1992)、Krammer and Lange-Bertalot(1986,1988,1991a,1991b)などを参照する。

同定結果は、汽水生種、淡水～汽水生種、淡水生種の順に並べ、その中の各種類をアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種はさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度(pH)・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、産出個体数200個体以上の試料については、産出率2.0%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析は、海水～汽水生種については小杉(1988)、淡水生種については安藤(1990)、陸生珪藻については伊藤・堀内(1991)、汚濁耐性については、Asai and Watanabe(1995)の環境指標種を参考とする。



各種産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。なお、●は2%未満の種類を示す。

第3図 主要珪藻化石群集の層位分布

(2) 寄生虫卵分析

試料15ccを量りとり、重さを測定して分析用試料とする。これについて水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉍物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理によるセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施し、濃集する。残渣を定容してから一部をとり、グリセリンで封入してプレパラートを作成し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。なお、分析過程の各所で重量や容積の測定を行い、堆積物1ccあたりの検出個数を求められるようにする。

(3) 土壤理化学分析

試料を風乾後、土塊を軽く崩して2mmの篩でふるい分けをする。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉碎し、0.5mm篩を全通させ、粉碎土試料を作成する。風乾細土試料については、105℃で4時間乾燥し、分析試料水分を求める。

全炭素および全窒素の測定は、粉碎土試料100mg前後をスズカプセルに精秤し、CHNS/O元素分析装置（PERKIN ELMER2400 II）に挿入する。挿入した試料を酸素気流中で高温燃焼させ、燃焼生成したガスをフロントアルクロマトグラフ法により展開し、熱伝導度検出器（TCD）により測定する。測定値と加熱減量法で求めた試料中の水分から、乾土あたりの炭素量（T-C%）と窒素量（T-N%）を求め、同時にC/Nを算出する。リン酸・カルシウムの測定は、風乾細土試料1.00gをケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸約5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P₂O₅）濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム（CaO）濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（P₂O₅mg/g）とカルシウム含量（CaOmg/g）を求める。

表3 珪藻分析結果(1)

種類	生態性			環境 指標種	SE200	SK221
	塩分	pH	流水			
<i>Amphora holsatica</i> Hustedt	Meh			D1	-	1
<i>Amphora strigosa</i> Hustedt	Meh				-	2
<i>Amphora</i> spp.	Meh				-	2
<i>Caloneis africana</i> (Giffen)Stidolph	Meh				-	1
<i>Diploneis pseudovalis</i> Hustedt	Meh				1	2
<i>Fragilaria subsalina</i> (Grun.)Lange-Bertalot	Meh				-	1
<i>Nitzschia compressa</i> (Bailey)Boyer	Meh			E1	3	1
<i>Nitzschia compressa</i> var. <i>elongata</i> (Grun.)Lange-B.	Meh			E1	-	1
<i>Nitzschia levidensis</i> (W. Smith)Grunow	Meh				-	1
<i>Nitzschia levidensis</i> var. <i>salinarum</i> Grunow	Meh				1	-
<i>Nitzschia littoralis</i> Grunow	Meh				1	-
<i>Amphora fontinalis</i> Hustedt	Ogh-Meh	al-il	ind		-	17
<i>Cymbella pusilla</i> Grunow	Ogh-Meh	al-il	ind		-	11
<i>Fragilaria brevistriata</i> Grunow	Ogh-Meh	al-il	l-ph	U	1	-
<i>Navicula capitata</i> Ehrenberg	Ogh-Meh	al-il	r-ph	U	1	-
<i>Navicula cincta</i> (Ehr.)Kuetzing	Ogh-Meh	al-il	ind		-	1
<i>Navicula goeppertiana</i> (Bleisch)H. L. Smith	Ogh-Meh	al-il	ind	S	-	1
<i>Navicula veneta</i> Kuetzing	Ogh-Meh	al-il	ind	U	5	22
<i>Nitzschia frustulum</i> (Kuetz.)Grunow	Ogh-Meh	al-bi	ind		-	1
<i>Nitzschia palea</i> (Kuetz.)W. Smith	Ogh-Meh	ind	ind	S	14	2
<i>Rhopalodia gibberula</i> (Ehr.)O. Muller	Ogh-Meh	al-il	ind		1	5
<i>Achnanthes exigua</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	S	3	2
<i>Achnanthes lanceolata</i> (Breb.)Grunow	Ogh-ind	ind	r-ph	K, T	19	-
<i>Achnanthes minutissima</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	7	1
<i>Amphora affinis</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	3
<i>Amphora montana</i> Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	3	30
<i>Amphora normanii</i> Rabenhorst	Ogh-ind	ind	ind	RB	2	-
<i>Caloneis bacillum</i> (Grun.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	1	1
<i>Caloneis leptosoma</i> Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	l-ph	RB	3	1
<i>Caloneis molaris</i> (Grun.)Krammer	Ogh-ind	ind	ind		2	3
<i>Cymbella silesiaca</i> Bleisch	Ogh-ind	ind	ind	T	-	1
<i>Diploneis ovalis</i> (Hilse)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		1	-
<i>Fragilaria construens</i> (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	-	1
<i>Fragilaria construens</i> fo. <i>venter</i> (Ehr.)Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	S	-	1
<i>Fragilaria parasitica</i> (W. Smith)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	1
<i>Frustulia vulgaris</i> (Thwait.)De Toni	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	1
<i>Gomphonema angustatum</i> (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	1
<i>Gomphonema gracile</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O, U	2	-
<i>Gomphonema parvulum</i> Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	6	2
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA, U	3	4
<i>Navicula cohnii</i> (Hilse)Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-bi	ind	RI	-	2
<i>Navicula contenta</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA, T	10	3
<i>Navicula contenta</i> fo. <i>biceps</i> (Arnot)Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	RA, T	29	1
<i>Navicula elginensis</i> (Greg.)Ralfs	Ogh-ind	al-il	ind	O, U	4	2
<i>Navicula elginensis</i> var. <i>neglecta</i> (Krass.)Patrick	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	1
<i>Navicula ignota</i> Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RB	1	-
<i>Navicula kotschyi</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	ind		-	2
<i>Navicula lapidosa</i> Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RI	3	-
<i>Navicula mutica</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RA, S	35	5
<i>Navicula mutica</i> var. <i>ventricosa</i> (Kuetz.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	RI	-	1
<i>Navicula muticoides</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RI	3	-
<i>Navicula paramutica</i> Bock	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	1
<i>Navicula seminulum</i> Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RB, S	2	-
<i>Navicula symmetrica</i> Patrick	Ogh-ind	al-il	ind		1	-
<i>Navicula tenelloides</i> Hustedt	Ogh-unk	unk	r-ph	J, U	2	6
<i>Navicula umida</i> W. Bock	Ogh-unk	unk	unk	RI	-	7
<i>Navicula viridula</i> var. <i>linearis</i> Hustedt	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	2
<i>Navicula</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	4

表3 珪藻分析結果(2)

種 類	生態性			環境 指標種	SE200	SK221
	塩分	pH	流水			
Neidium affine var. longiceps (Greg.)Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-bi		-	1
Neidium alpinum Hustedt	Ogh-unk	unk	ind	RA	1	-
Nitzschia amphibia Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	S	-	1
Nitzschia brevissima Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RB, U	8	1
Nitzschia debilis (Arnott)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RB, U	4	5
Nitzschia hantzschiana Rabenhorst	Ogh-ind	al-bi	ind		1	-
Nitzschia linearis W. Smith	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	1	-
Nitzschia nana Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RB, S	1	-
Nitzschia sinuata var. delognei (Grun.)Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	-	3
Nitzschia terrestris (Pet.)Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RI	1	-
Nitzschia spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	1
Orthoseira roeseana (Rabh.)O' Meara	Ogh-ind	ind	ind	RA	1	-
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	9	1
Pinnularia braunii (Grun.)Cleve	Ogh-hob	ac-bi	l-ph		-	1
Pinnularia krookii (Grun.)Cleve	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	1
Pinnularia mesolepta (Ehr.)W. Smith	Ogh-ind	ind	ind	S	-	1
Pinnularia microstauron (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	S	1	-
Pinnularia nodosa Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	1	-
Pinnularia rupestris Hantzsch	Ogh-hob	ac-il	ind		-	1
Pinnularia schoenfelderi Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	3	10
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB, S	-	1
Pinnularia subrupestris Krammer	Ogh-hob	ac-il	ind		-	1
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	1
Sellaphora pupula (Kuetz.)Mereschkowsky	Ogh-ind	ind	ind	S	-	5
Stauroneis anceps Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	T	-	1
Stauroneis obtusa Lagerstedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	1	1
Stauroneis smithii Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	1	5
Stauroneis tenera Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	1	-
Surirella angusta Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-bi	U	1	1
Surirella ovata var. pinnata (W. Smith)Hustedt	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	1
海水生種合計					0	0
海水～汽水生種合計					0	0
汽水生種合計					6	12
淡水～汽水生種合計					22	60
淡水生種合計					180	134
珪藻化石総数					208	206

凡例

H. R. : 塩分濃度に対する適応性 pH : 水素イオン濃度に対する適応性 C. R. : 流水に対する適応性
Meh : 汽水生種 al-bi : 真アルカリ性種 l-bi : 真止水性種
Ogh-Meh : 淡水～汽水生種 al-il : 好アルカリ性種 l-ph : 好止水性種
Ogh-hil : 貧塩好塩性種 ind : pH不定性種 ind : 流水不定性種
Ogh-ind : 貧塩不定性種 ac-il : 好酸性種 r-ph : 好流水性種
Ogh-hob : 貧塩嫌塩性種 ac-bi : 真酸性種 r-bi : 真流水性種
Ogh-unk : 貧塩不明種 unk : pH不明種 unk : 流水不明種

環境指標種群

D1: 海水砂質干潟指標種, E1: 海水泥質干潟指標種 (以上は小杉, 1988)
J: 上流性河川指標種, K: 中～下流性河川指標種, O: 沼沢湿地付着生種 (以上は安藤, 1990)
S: 好汚濁性種, U: 広域適応性種, T: 好清水性種 (以上はAsai, K. & Watanabe, T., 1986)
R: 陸生珪藻 (RA:A群, RB:B群, RI未区分群、伊藤・堀内, 1991)

3. 結果

(1) 珪藻分析

結果を表5, 図3に示す。SE200土坑覆土, SK221土坑覆土とも珪藻化石が豊富に産出する。完形殻の出現率は80%前後である。産出分類群数は, 合計で18属84種類である。

SE200土坑覆土は淡水域に生育する珪藻と陸上のコケや土壌表面など多少の湿り気を保持した好気的環境に耐性のある陸生珪藻が混在するが, 陸生珪藻の占める割合が高い。主な産出種は, 陸生珪藻の中でも分布がほぼ陸域に限られる耐乾性の高い陸生珪藻A群(伊藤・堀内, 1991)の*Navicula contenta* fo. *biceps*, *Navicula mutica* が比較的多く検出され, この他にも陸生珪藻A群の*Navicula contenta*, *Pinnularia borealis*などを伴う。また, 塩分耐性が高く, 有機汚濁の進んだ富栄養水域にも生育する好汚濁性種(Asai and Watanabe, 1995)の*Nitzschia palea*, 好流水性種で中～下流性河川指標種群の*Achnanthes lanceolata*が産出する。中～下流性河川指標種群とは, 河川中～下流部や河川沿いの河岸段丘, 扇状地, 自然堤防, 後背湿地などに集中して出現することから, その環境を指標することができる種群のことである(安藤, 1990)。

SK221土坑覆土では, 淡水域に棲息する珪藻と陸生珪藻が混在するが, 淡水域に棲息する珪藻化石の占める割合が高い。淡水域に棲息する種類の生態性(塩分濃度, 水素イオン濃度, 流水に対する適応能)の特徴は, 貧塩不定性種(少量の塩分には耐えられる種)と貧塩好塩性種(少量の塩分を含む水域の方が生育に適する種), 真+好アルカリ性種(pH7.0以上のアルカリ性水域に最もよく生育する種), 流水不定性種(流水域にも止水域にも生育する種)が多く検出される。主な産出種は, 淡水～汽水性の*Amphora fontinalis*, *Cymbella pusilla*, *Navicula veneta*, 陸生珪藻A群の*Amphora montana*などである。これらの淡水～汽水生種は, 少量の塩分のある水域の他に電気伝導度の高い塩類を豊富に含む水域(たとえば温泉)等にも多産する種類である(吉田・中島・木崎, 1984, 田中・中島, 1985)。また, 低率であったが, *Amphora strigosa*, *Diploneis pseudovalis*などの汽水附着性種も産出する。

(2) 寄生虫卵分析

結果を表6に示す。寄生虫卵は全く検出されない。検出される花粉化石・シダ類胞子は, 木本花粉のマツ属・コナラ属コナラ亜属, 草本花粉のカヤツリグサ科, シダ類胞子である。これら僅かに検出される花粉化石・シダ類胞子は, 保存状態が極めて悪い。

表4 寄生虫卵分析結果

種 類	試料番号 SK221
木本花粉	
マツ属	8
コナラ属コナラ亜属	1
草本花粉	
カヤツリグサ科	1
シダ類胞子	
イノモトソウ属	6
他のシダ類胞子	8
合 計	
木本花粉	9
草本花粉	1
シダ類胞子	14
総計	24

表5 土壤理化学分析結果

試料名	土性	土色	全炭素(%)	全窒素(%)	C/N	P ₂ O ₅ (mg/g)	CaO(mg/g)	備考
SE200	CL	10YR2/2 黒褐	10.54	0.71	15	0.72	4.28	炭・木片多量に含む
SK211	SCL	10YR3/4 暗褐	0.89	0.08	11	8.68	2.87	炭少量含む
SK221	SCL	2.5Y5/3 黄褐	2.01	0.08	25	0.63	2.43	炭・木片多量に含む

注1) 土色: マンセル表色系に準じた新版標準土色帖(農林省農林水産技術会議監修, 1967)による。

注2) 土性: 土壤調査ハンドブック(ペドロジスト懇談会編, 1984)の野外土性による。

CL…埴壤土(粘土15~25%、シルト20~45%、砂3~65%)

SCL…砂質埴壤土(粘土15~25%、シルト0~20%、砂5~85%)

(3) 土壤理化学分析

結果を表7に示す。全炭素が0.89~10.54%, 全窒素が0.08~0.71%である。SE200において全炭素が著しく高い。C/Nは、11~25程度を示す。リン酸は0.63~8.68P₂O₅mg/gであり、SK211で著しく高い値を示す。カルシウム含量は、2.43~4.28CaOmg/gである。

4. 考察

・SE200

土壤の理化学組成をみると、全炭素量が著しく高く、また全窒素量も若干高い値が得られている。これは、覆土内に多量に材が含まれることを反映したものである。カルシウム含量は、他遺構と比べて若干高いが、カルシウムが土壤中に普通に含まれる量(天然賦存量)が普通1~50CaOmg/gとされており(藤貫, 1979)、他の遺構と有意差があるとは言えない。

珪藻化石群集をみると、陸生珪藻が水生珪藻を上回り、約60%産出する。中でも耐乾性の強い陸生珪藻A群の産出する割合が高い。このことから、遺構覆土には、渴いた場所に堆積した土壤が混入していることがうかがえる。これは、井戸が乾いた時に陸生珪藻が生育した、もしくは周囲の乾いた場所から土壤が二次的に流入したなどのことが予測されるが詳細不明である。一方、淡水性種も約40%検出されることから、遺構内に水が存在していたと考えられ、調査所見により水利施設とされることと調和的な結果である。検出される淡水性種の生態的特徴をみると、流水環境を指標する中~下流性河川指標種群を含む流水性種が混じる。これは、本遺構に水の流入および排水があったことを示している可能性がある。そのことが桶の用途にどの様に結び付くか、今後、考古学的な所見も含めて検討を行いたい。

・SK211

土壤の理化学組成をみると、他遺構2基と比較してリン酸含量が極めて高い。ここで、川崎ほか(1991)、天野ほか(1991)、Bowen(1983)、Bolt・Bruggenwert(1980)などの調査事例から推定されるリン酸の天然賦存量の上限は約3.0P₂O₅mg/g程度である(なお、各調査例の記載単位が異なるためP₂O₅mg/gで統一している)。すなわち、本遺構のリン酸含量は、天然賦存量の上限を大きく上回る。一般的には土壤中のリン酸の供給源として植物体の存在も考えられるが、今回の場合、全炭素量が他の遺構と比較して低いことから、植物体の影響は低いとみて良い。したがって、遺構内部には何らかの外的要因、おそらくは人為的な影響によって動物由来のリン酸が富化されていると推定される。

発掘調査所見によると本遺構の用途としてトイレ遺構が考えられている。既存の調査によると、トイレ遺構であると1cm³あたり1万~数万個の寄生虫卵が検出されるのに対し、それ以外の堆積物では1cm³あたり100個未満あるいは未検出であることから、糞便の堆積を認めることができるとされている(例えば、黒崎ほか, 1994; 金原・金原, 1994; 金原ほか, 1995など)。しかし、本遺構覆土からは寄生虫卵が全く検出されない。この点については、元来遺構覆土に糞便の堆積物が混入していなかった、あるいは寄生虫卵とほぼ同程度の保存性を持つとされる花粉化石の保存状態が悪いことから(黒崎ほか, 1994)、堆積後の経年変化によって分解・消失したなどのことが考えられる。

以上のことから、SK211では、何らかの要因によってリン酸成分が富化されているが、それが糞便堆積によるものか明らかにできず、トイレとして利用されていたか判断がつかない。この点については、遺構覆土の埋積環境を明らかにする必要がある、珪藻化石の産状を明らかにした上で改めて検討を行いたい。

また、土壤理化学成分のバックグラウンドを明らかにするため基本土層の調査、および遺構覆土における土壤理化学成分の偏在性を明らかにする必要がある。また、遺構の用途を明らかにするためには、覆土内に含まれる微細な遺物も重要な情報を提供してくれるものと期待される。

・SK221

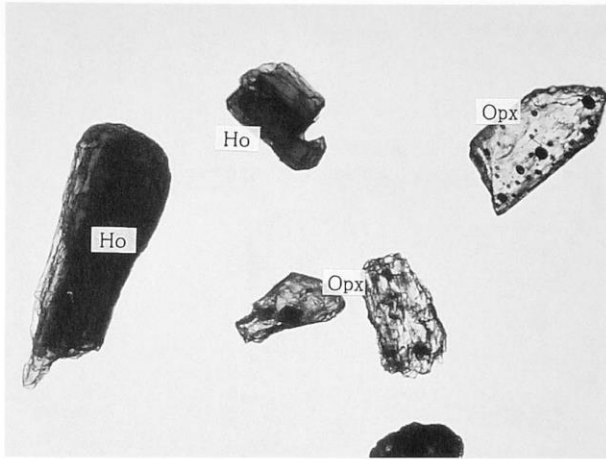
本遺構では、土壤の理化学成分において、特に含量が高い成分は認められない。他の遺構と比較すると本遺構は、C/Nが25と高い特徴が認められる。微生物体と土壤有機物のC/Nは、10前後とされている（三好ほか編，1983）。C/Nは、低いほど有機物の分解が進んでおり、分解が進んでないものほどC/Nが高くなる。このことから、他の遺構と比べると有機物の分解が進んでないことがうかがえる。これは、珪藻化石で淡水性種が多産することを考慮すると、還元条件下に置かれていたことを反映していると思われる。調査所見でも本遺構の用途が水利施設とされており、調和的な結果と言える。

珪藻化石の生態的特徴をみると、少量の塩分や塩類を豊富に含んだ水域に一般的な種類が多く検出されたこと、本来汽水域に生育する種類も低率ながら検出されたことが特徴である。このことから、桶の中には塩類を豊富に含んだ水、あるいは富栄養の水が存在したことが推定される。また、SE200と珪藻化石群集と差がある。このことが、用途等の差を反映しているのか不明であるが、少なくとも水質的にはSE200と異なった状態であったことが考えられる。

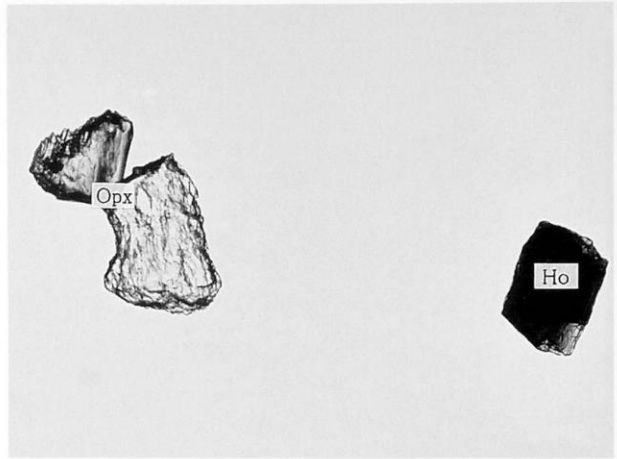
引用文献

- 天野洋司・太田 健・草場 敬・中井 信（1991）中部日本以北の土壤型別蓄積リンの形態別計量．農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発」，p.28-36.
- 安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標种群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42，p.73-88.
- Asai, K. and Watanabe, T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom*, 10, p.35-47.
- Bowen, H.J.M. (1983) 「環境無機化学 - 元素の循環と生化学 -」. 浅見輝男・茅野充男訳，297p., 博友社 [Bowen, H.J.M. (1979) *Environmental Chemistry of Elements*].
- Bolt, G.H. & Bruggenwert, M.G.M. (1980) 「土壤の化学」. 岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽捷行訳，309p., 学会出版センター [Bolt, G.H. and Bruggenwert, M.G.M. (1976) *SOIL CHEMISTRY*], p.235-236.
- 藤貫 正（1979）カルシウム．地質調査所化学分析法，52，p.57-61，地質調査所.
- 原口和夫・三友 清・小林 弘（1998）埼玉の藻類 珪藻類．埼玉県植物誌，埼玉県教育委員会，p.527-600.
- 伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用．珪藻学会誌，6，p.23-45.
- 金原正明・金原正子（1994）堆積物中の情報の可視化．可視化情報，14，p.9-14.
- 金原正明・金原正子・中村亮仁（1995）大宮坊跡（厠跡）における自然科学的分析．「史跡石動山環境整備事業報告Ⅱ」，p.51-70，石川県鹿島町教育委員会.

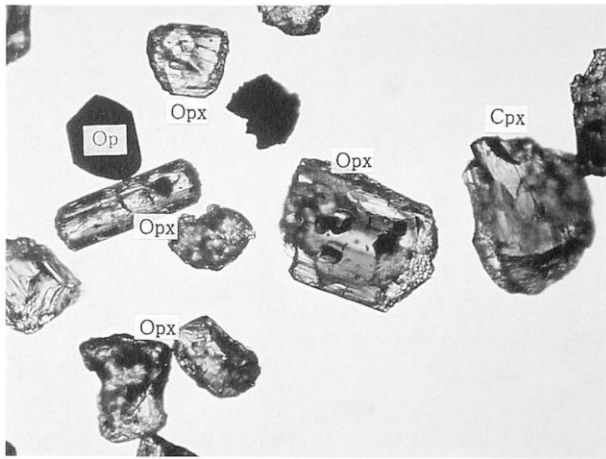
- 川崎 弘・吉田 滂・井上恒久 (1991) 九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量. 農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, p.23-27.
- 紀村雅裕・寺岡達朗・小玉喜三郎 (1981) 下総台地南部における洪積台地の変形と埋没段丘. 地質学論集, 20, p.103-111.
- 肥塚隆保 (1999) 出土遺物の材質調査－日本で出土した古代ガラスの研究－. 理学電気ジャーナル, 30(1), p.33-40.
- 小杉正人 (1988) 珪藻の環境指標种群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究, 27, p.1-20.
- Krammer, K. (1992) PINNULARIA, eine Monographie der europäischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA, BAND 26, p.1-353., BERLIN・STUTTGART.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1986) Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae. Band 2/1 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 876p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1988) Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. Band 2/2 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 536p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1991a) Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. Band 2/3 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1991b) Bacillariophyceae, Teil 4, Achnanthaceae, Kritische Ergaenzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. Band 2/4 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.
- 黒崎 直・松井 章・金原正明・金原正子 (1994) トイレの考古学. 日本考古学協会第60回総会研究発表要旨, p.49-51, 日本考古学協会.
- 三好 洋・嶋田永生・石川昌男・伊達 昇 (1983) 「土壌肥料用語集」. 258p, 社団法人農山漁村文化協会.
- 日本の地質「関東地方」編集委員会 (1986) 日本の地質 3 関東地方. 335p., 共立出版.
- 二宮修治・綱干 守・藁科 実・友廣秀尚・大沢眞澄 (1991) 微量成分元素存在量による原産地黒曜石の識別・分類と遺跡出土黒曜石石器の原産地推定への適用. 「黒曜石の化学 遺跡出土黒曜石石器の原産地推定の基礎として」,平成2年度科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書, p.54-69. 農林省農林水産技術会議事務局監修 (1967) 新版標準土色帖.
- ペドロジスト懇談会編 (1984) 「土壌調査ハンドブック」. 156p., 博友社.
- 田中宏之・中島啓治 (1985) 群馬県老神・奥平・梨木・嶺・赤久縄温泉及び福島県元温泉小屋温泉のケイソウ, 群馬県立歴史博物館紀要, 6, p.1-22.
- 山崎一雄 (1990) 日本出土のガラスの化学的研究. 「古文化財の科学」, p.274-300, 思文閣出版
- 吉田武雄・中島啓治・木崎喜雄 (1984) 吾妻川中流域の温泉の珪藻フローラ. (社団法人) 群馬県温泉協会学術調査研究報告, 温泉科学, p.1-5.



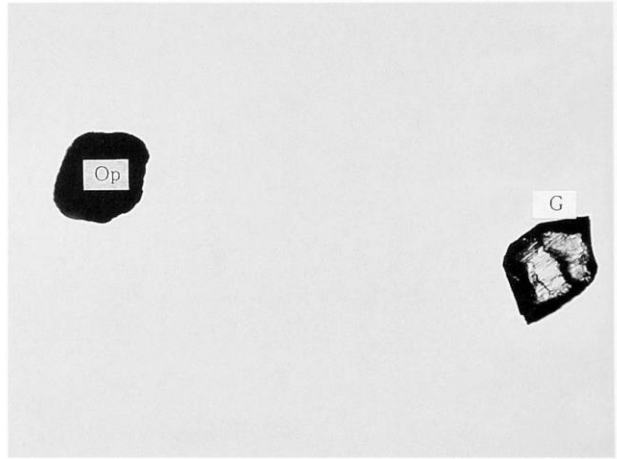
1. 455 (縄文時代早期後半 子母口 在地)



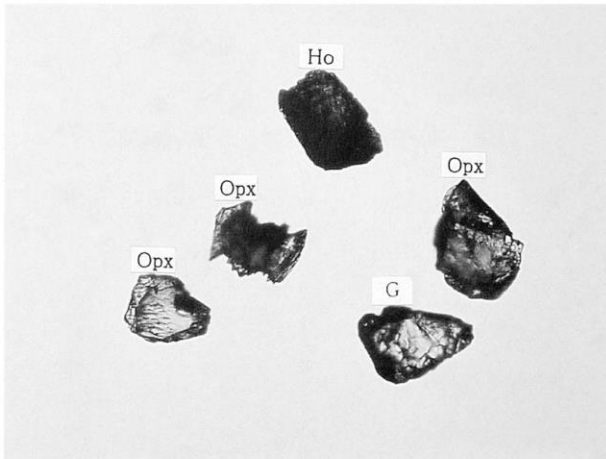
2. 473 (縄文時代早期後半 子母口 鉍物多い 在地?)



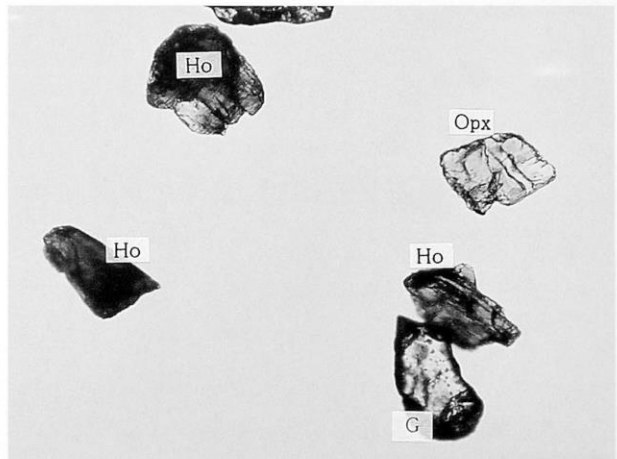
3. 532 (縄文時代早期末 下吉井? 鉍物多い)



4. 569 (縄文時代早期末 在地?)



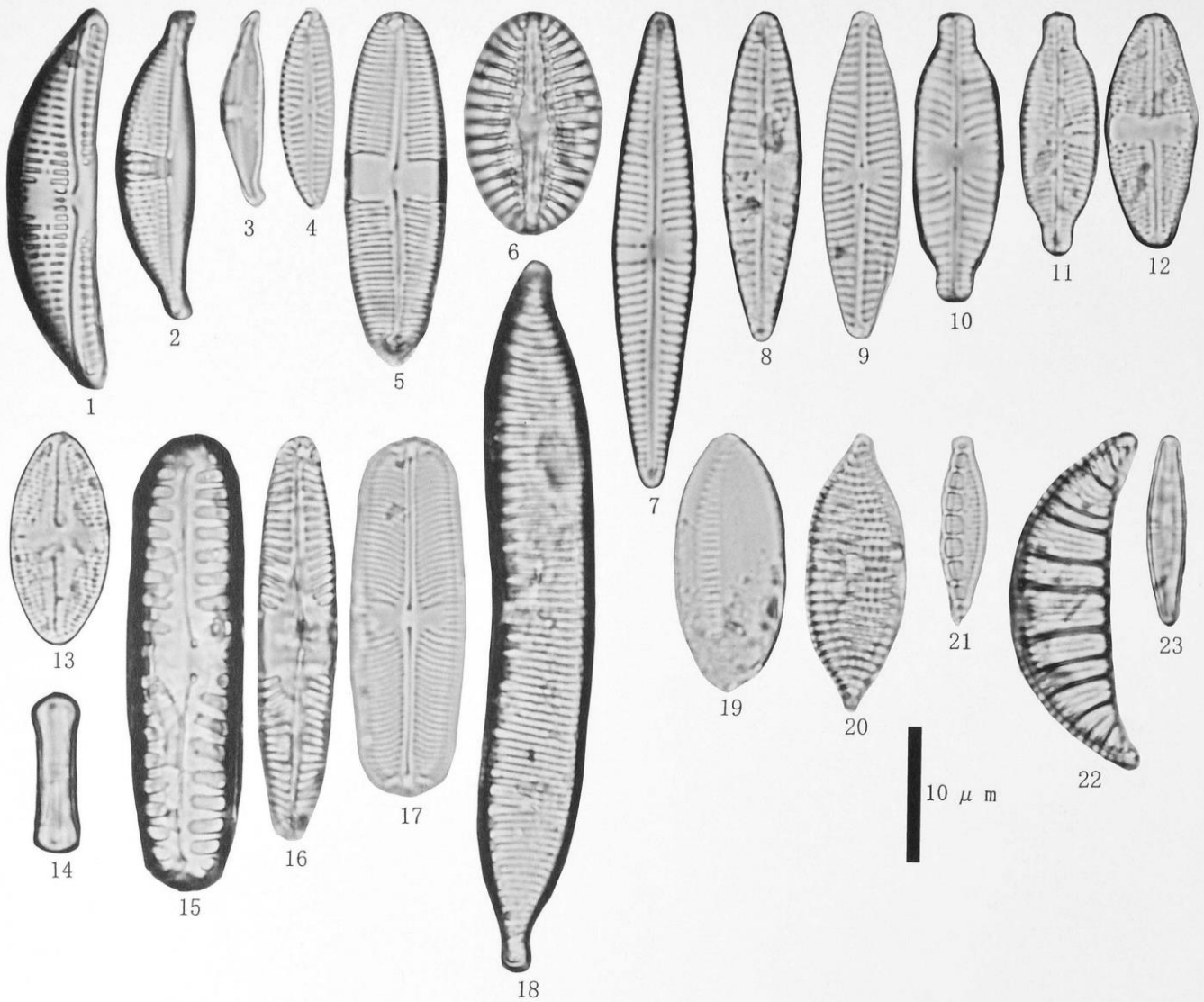
5. 694+695 (縄文時代早期末 東海方面?)



6. 708 (縄文時代早期末 入海? 鉍物多い)

Opx: 斜方輝石. Cpx: 単斜輝石. Ho: 角閃石. G: ザクロ石. Op: 不透明鉍物.

0.5mm



1. *Amphora affinis* Kuetzing (SK221)
2. *Amphora fontinalis* Hustedt (SK221)
3. *Amphora montana* Krasske (SK221)
4. *Cymbella pusilla* Grunow (SK221)
5. *Caloneis molaris* (Grun.) Krammer (SK221)
6. *Diploneis pseudovalis* Hustedt (SK221)
7. *Gomphonema gracile* Ehrenberg (SE200)
8. *Gomphonema parvulum* Kuetzing (SE200)
9. *Navicula veneta* Kuetzing (SK221)
10. *Navicula elginensis* (Greg.) Ralfs (SK221)
11. *Navicula kotschyi* Grunow (SK221)
12. *Navicula mutica* Kuetzing (SE200)
13. *Navicula muticoides* Hustedt (SE200)
14. *Navicula contenta* fo. *biceps* (Arnott) Hustedt (SE200)
15. *Pinnularia borealis* Ehrenberg (SE200)
16. *Pinnularia schoenfelderii* Krammer (SK221)
17. *Sellaphora pupula* (Kuetz.) Mereschkowsky (SK221)
18. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (SE200)
19. *Nitzschia debilis* (Arnott) Grunow (SK221)
20. *Nitzschia compressa* (Bailey) Boyer (SK221)
21. *Nitzschia sinuata* var. *delognei* (Grun.) Lange-Bertalot (SK221)
22. *Rhopalodia gibberula* (Ehr.) O. Muller (SK221)
23. *Achnanthes minutissima* Kuetzing (SE200)

写 真 图 版



新台遺跡

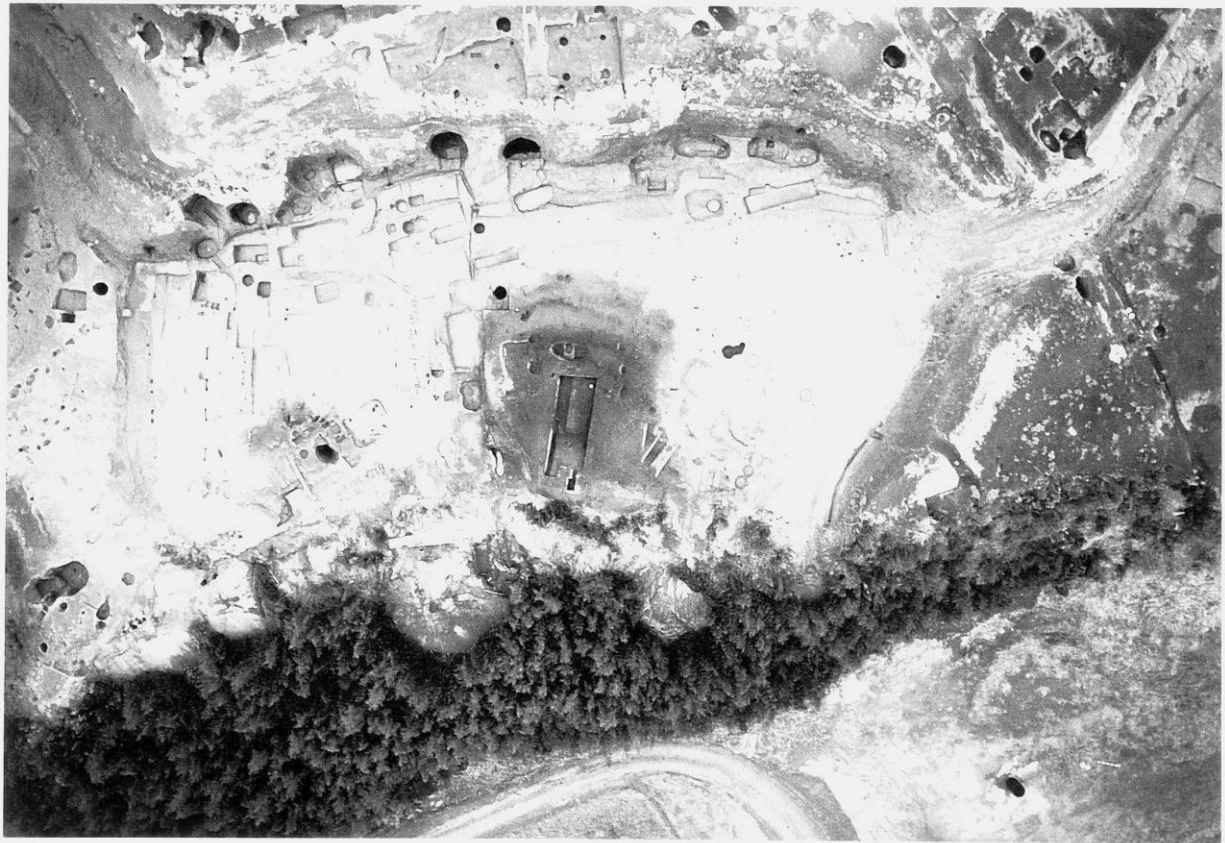
城山遺跡

夏台遺跡

神山谷遺跡



C3区 空中写真(南から)



C3区 第2区画



C3区 空中写真（北から）

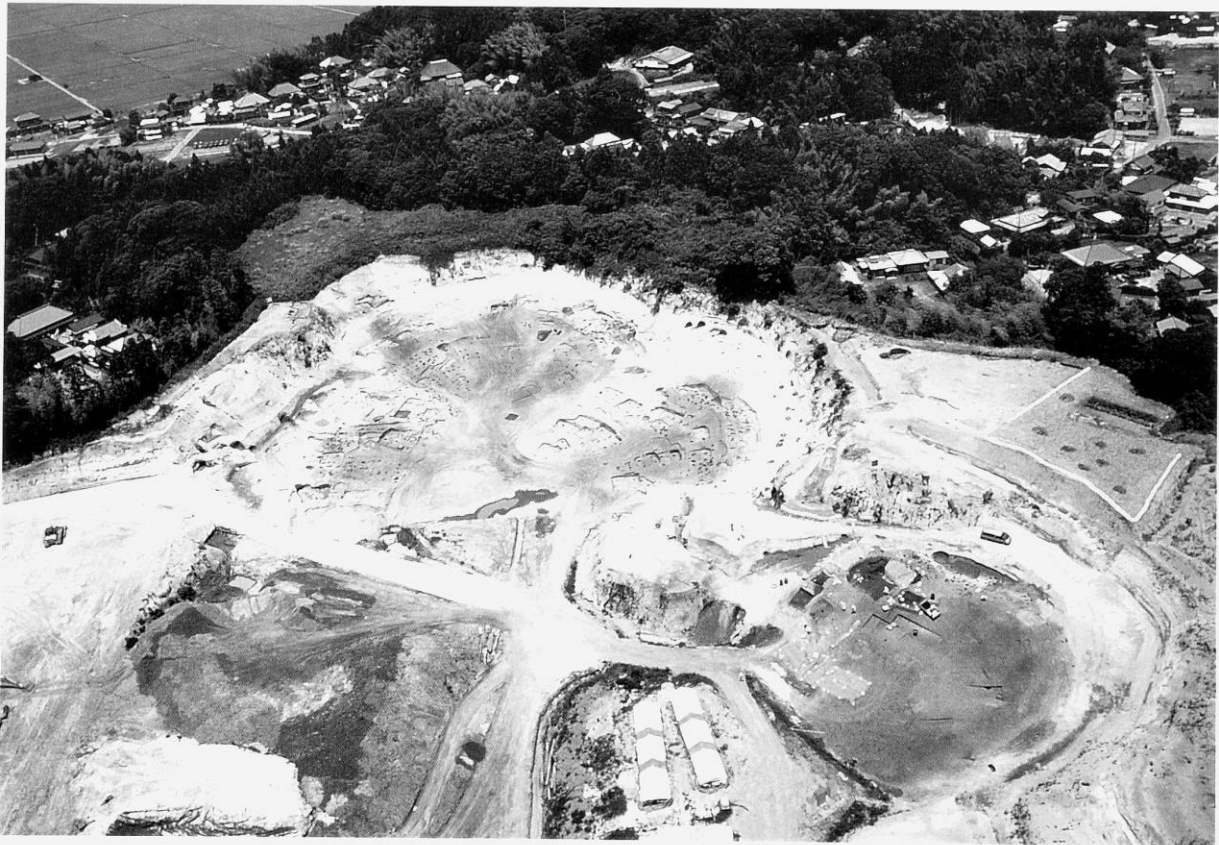


C3区 第2, 第3区画

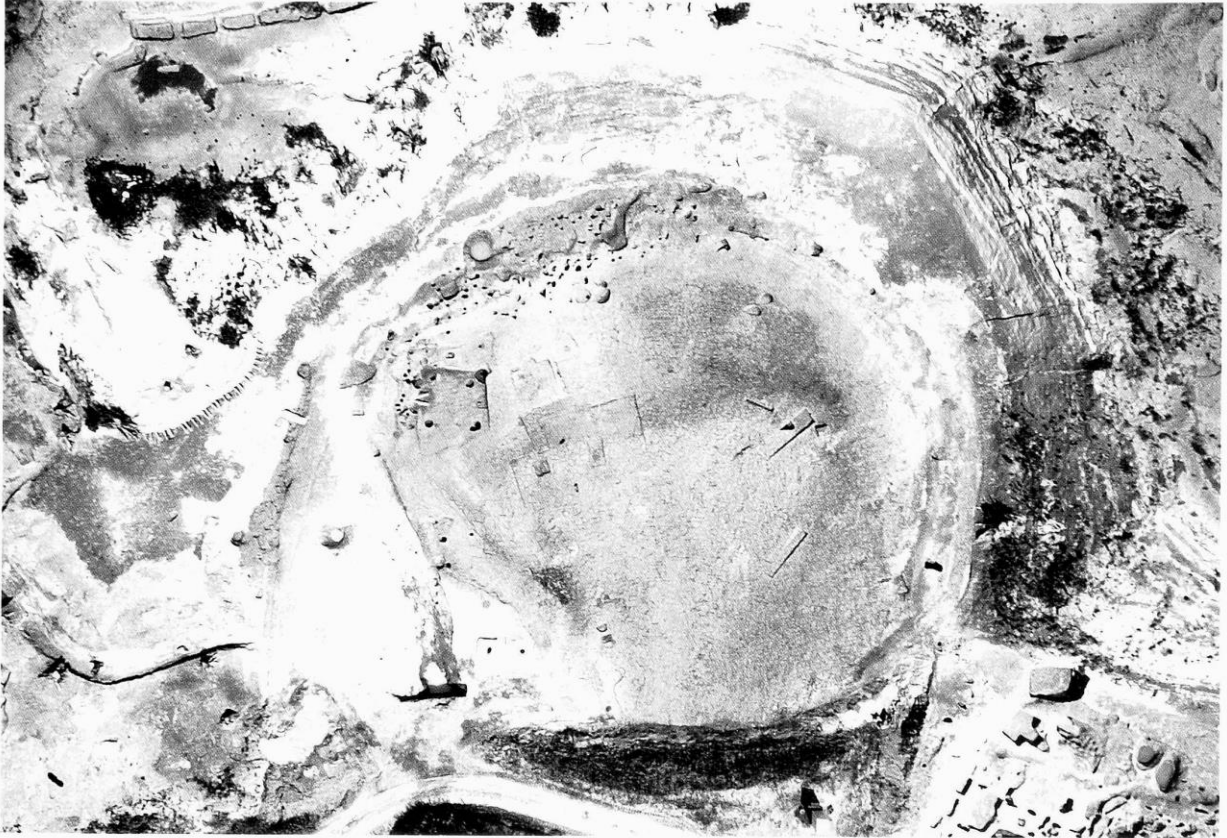
図版4 C4・5・6区



C4・5・6区 空中写真(南から)



C4・5区 空中写真(南から)



C5区 空中写真



C6区 空中写真

図版6 C1・C2区



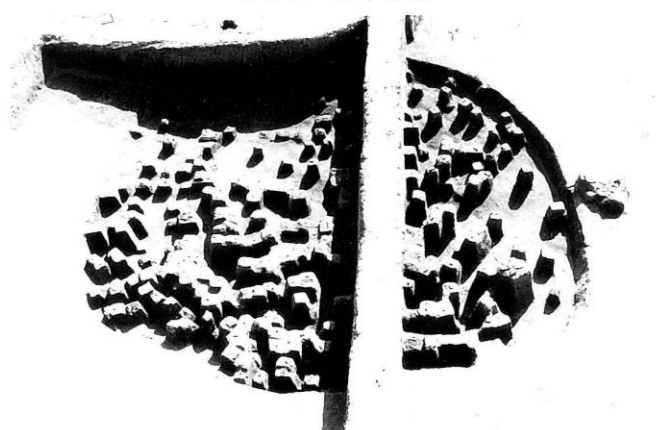
C1, 2区 空中写真 (南から)



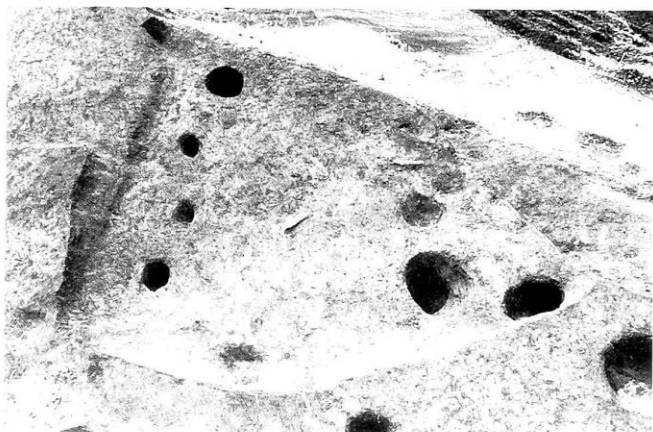
C2区 空中写真



SI-137



SI-137 遺物出土状況



SI-138



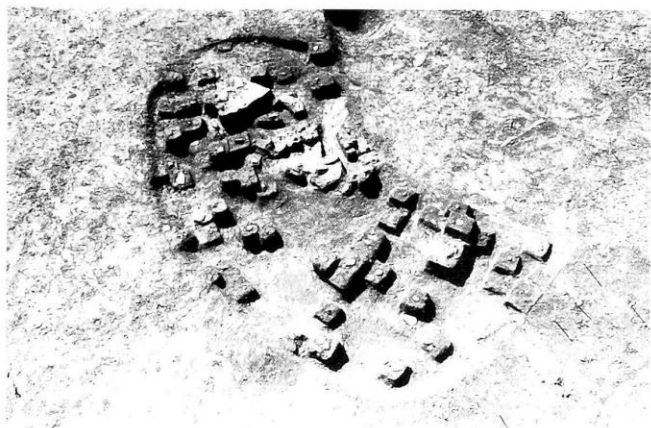
SI-138 遺物出土状況



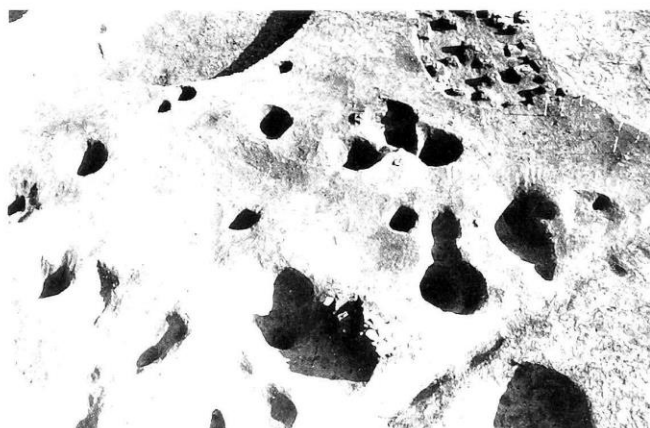
SI-139



SI-142



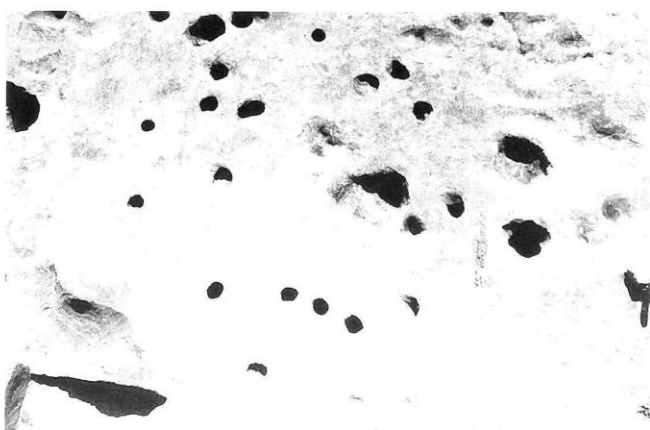
SI-142 遺物出土状況



SI-143



SI-144



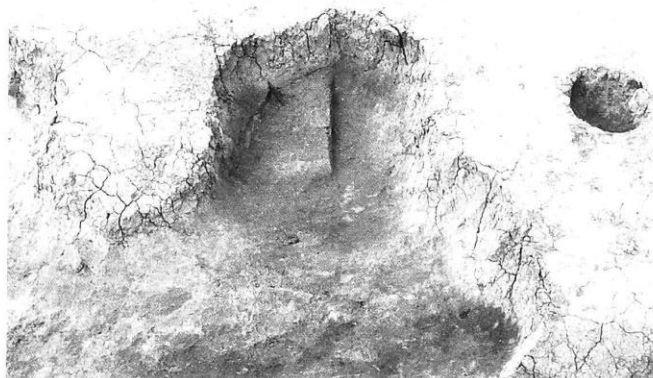
SI-145



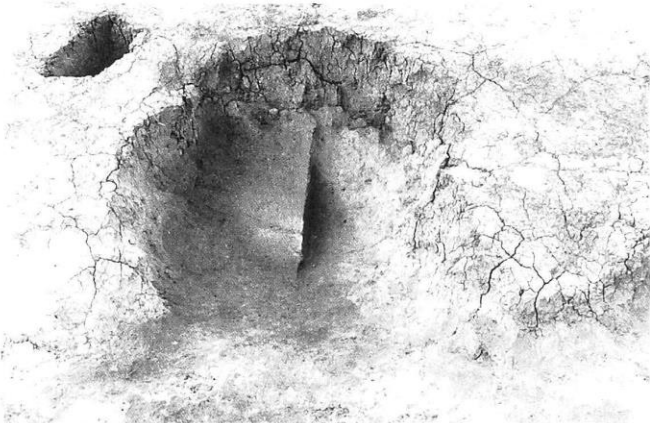
1号炉穴群 (FP-1~5)



1号炉穴群 (FP-1~5)



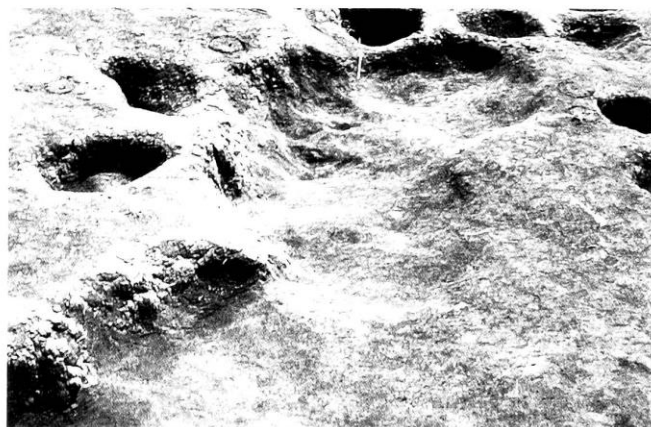
FP-1



FP-2



FP-3



FP-4, 5



2号炉穴群 (FP-10, 11, 17~20)



FP-10, 17, 18 遺物出土狀況



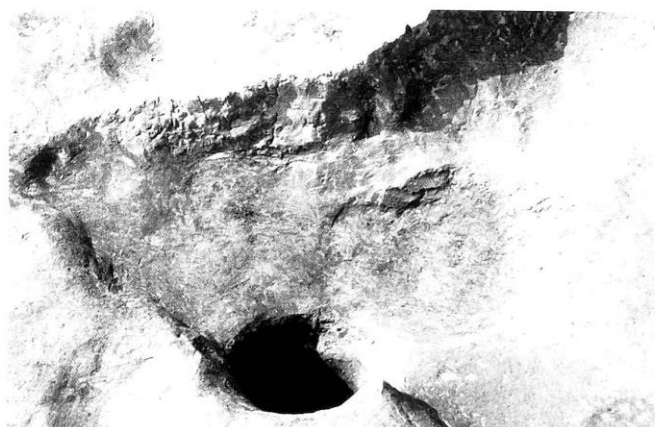
3号炉穴群 (FP-14, 15, 21~23)



FP-21 遺物出土狀況



FP-15



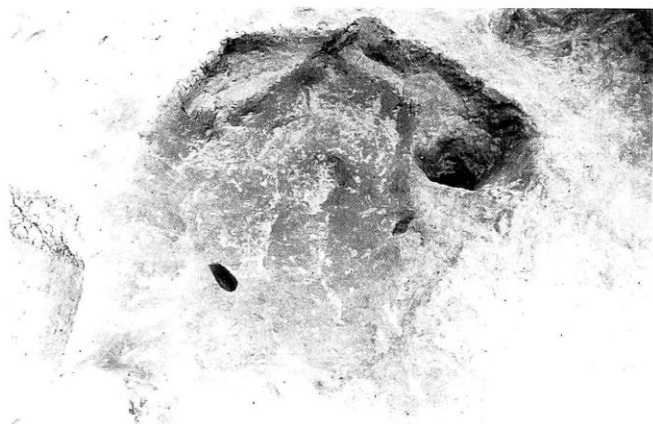
FP-21



FP-23



FP-6



FP-7



FP-8



FP-9



FP-12



FP-13



FP-16



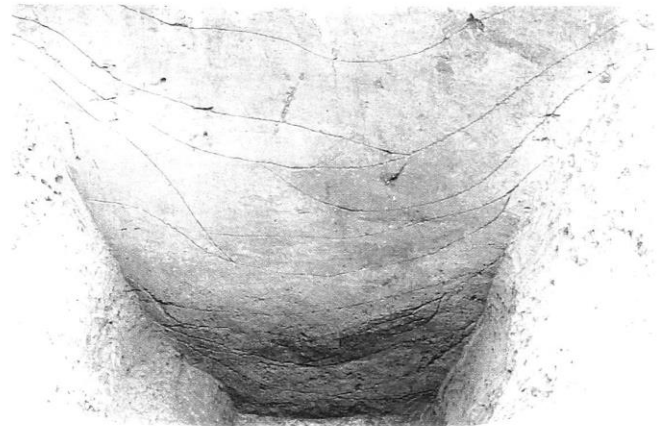
2号落とし穴



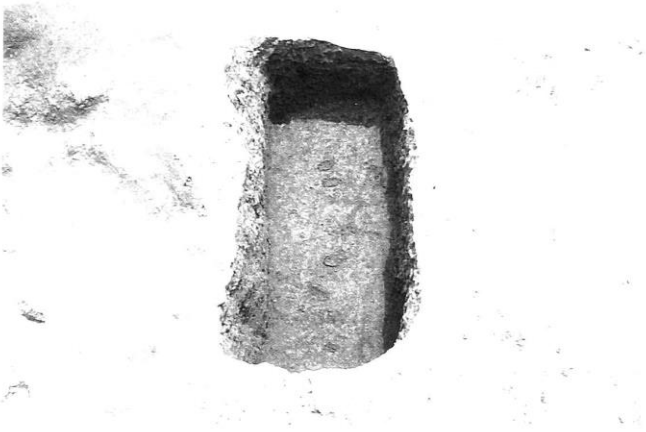
3号落とし穴



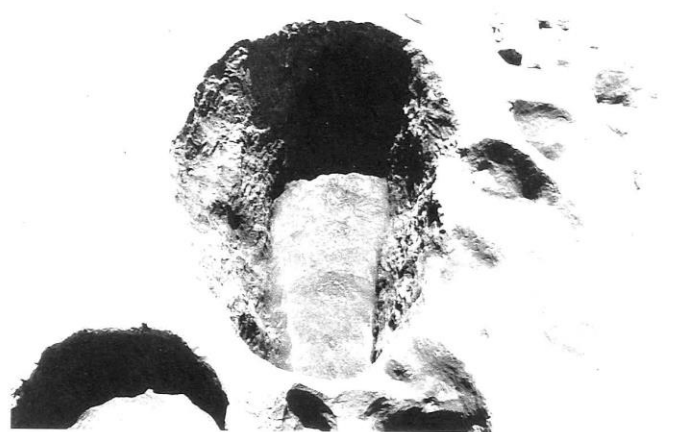
3号落とし穴



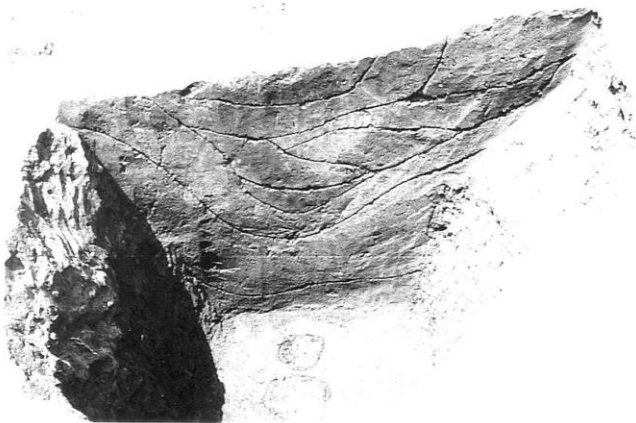
3号落とし穴土層断面



4号落とし穴



5号落とし穴

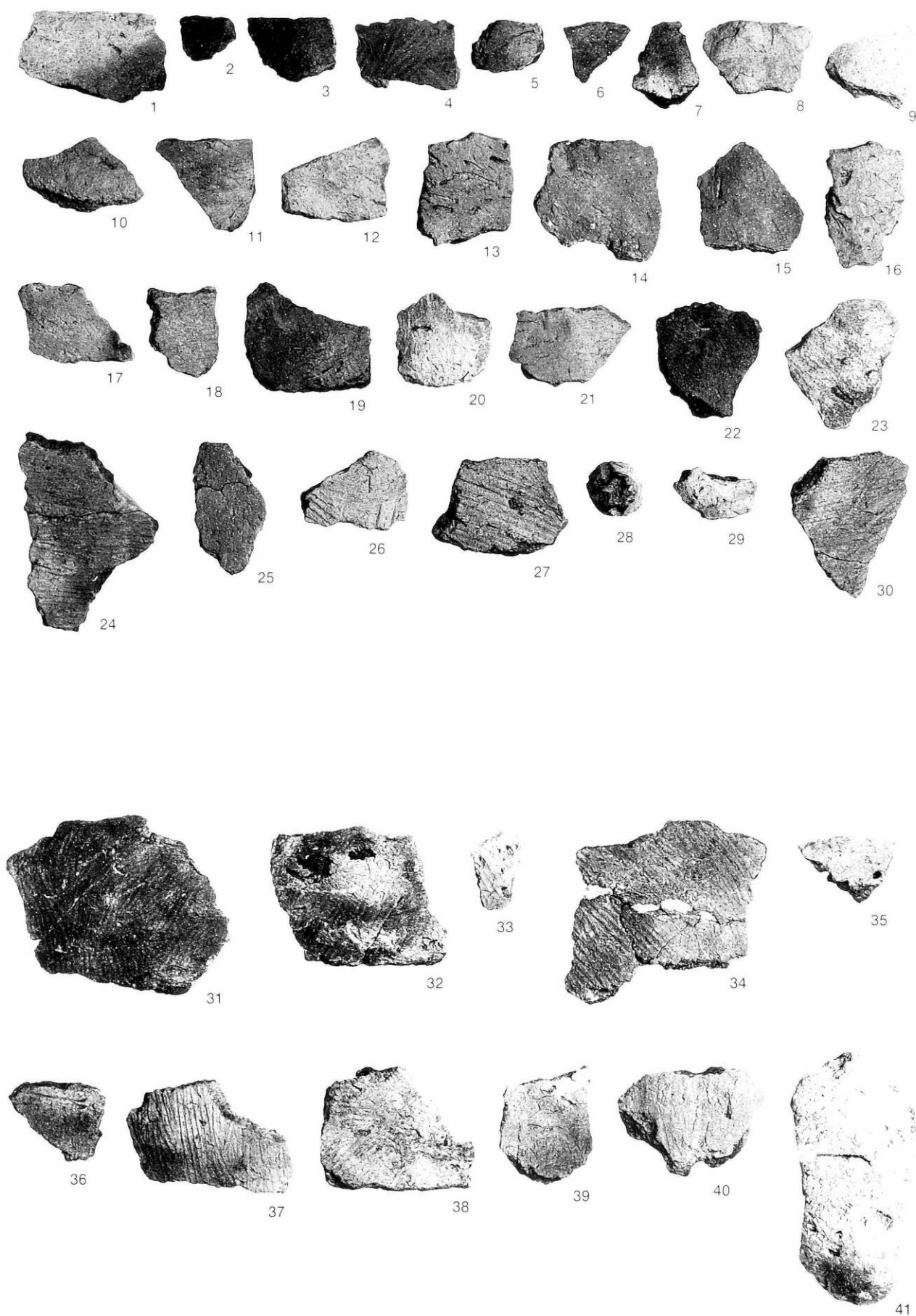


5号落とし穴土層断面

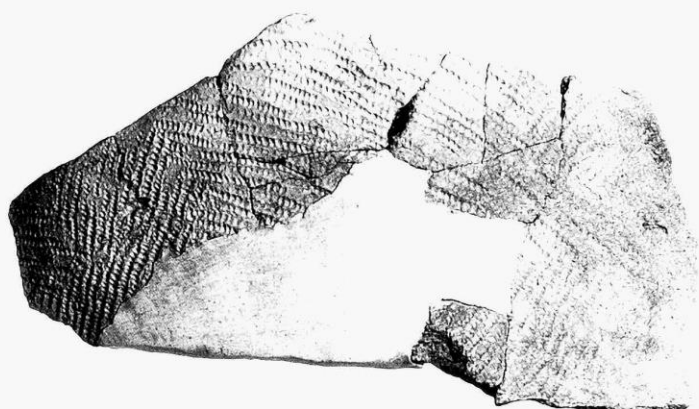


5号落とし穴底面ピット

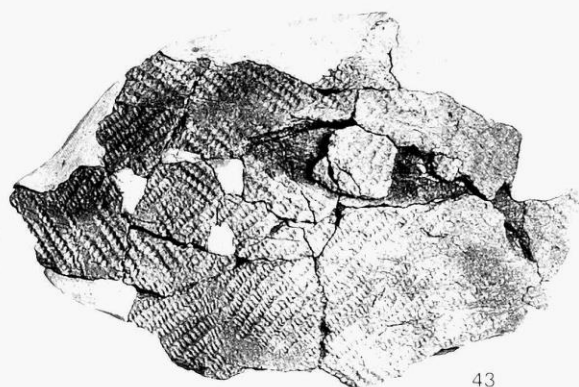
SI-137



図版12 C1・C2区(縄文)



42



43



44



45



46



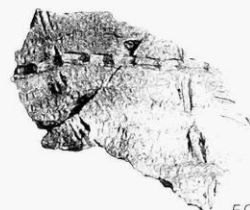
47



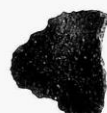
48



49



50



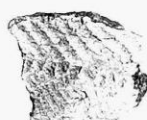
51



52



53



54



55

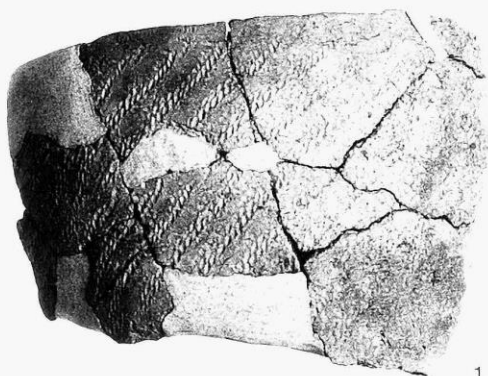


56



57

SI-138



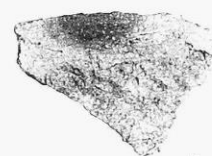
1



3



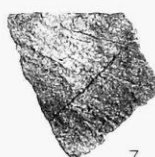
4



5



6



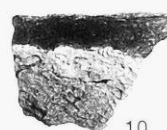
7



8



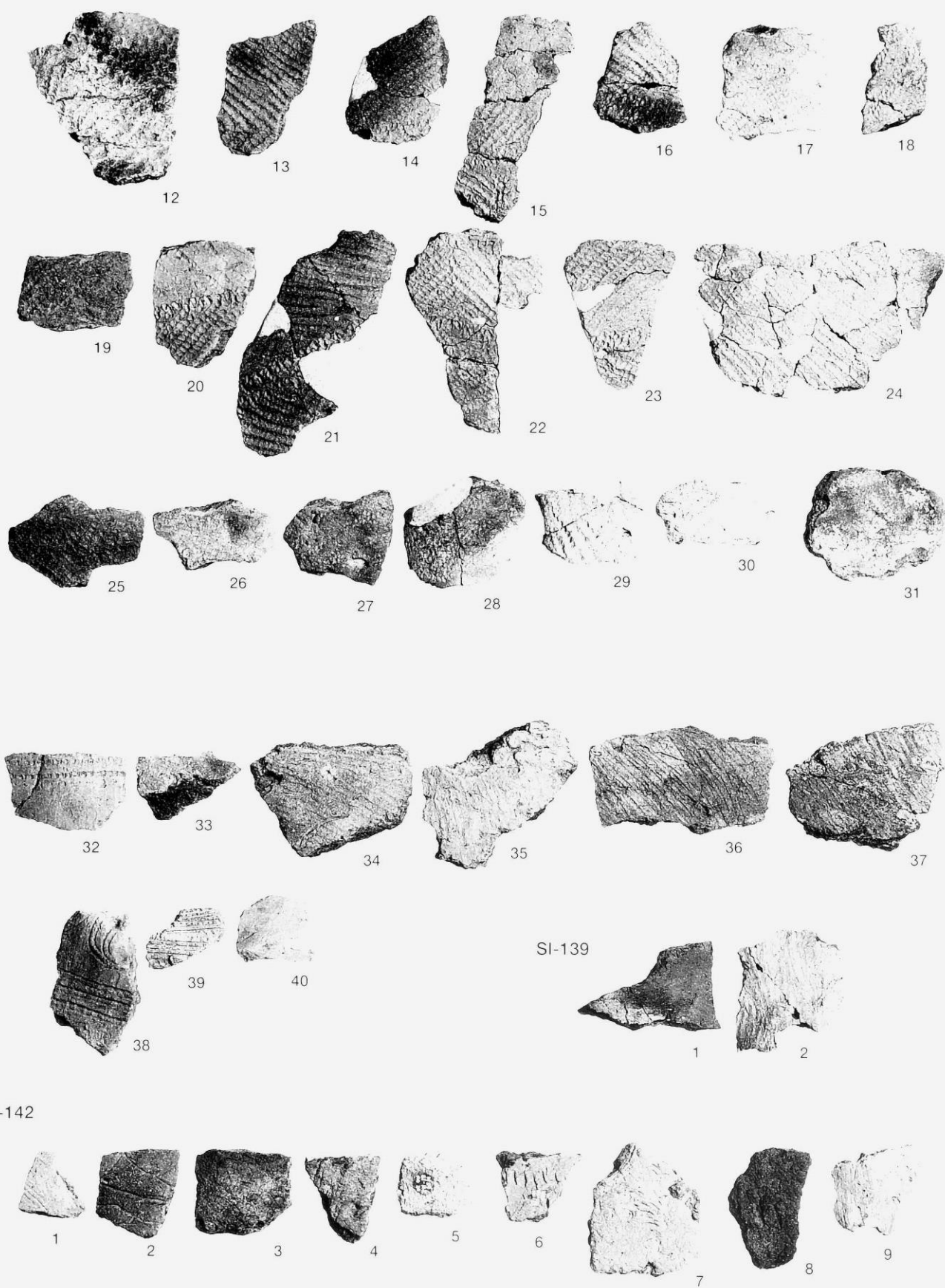
9



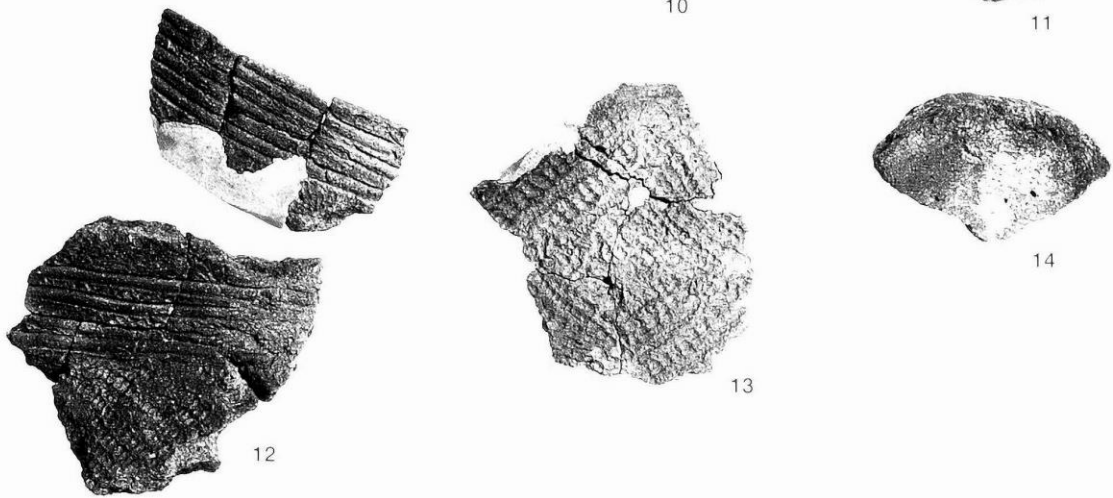
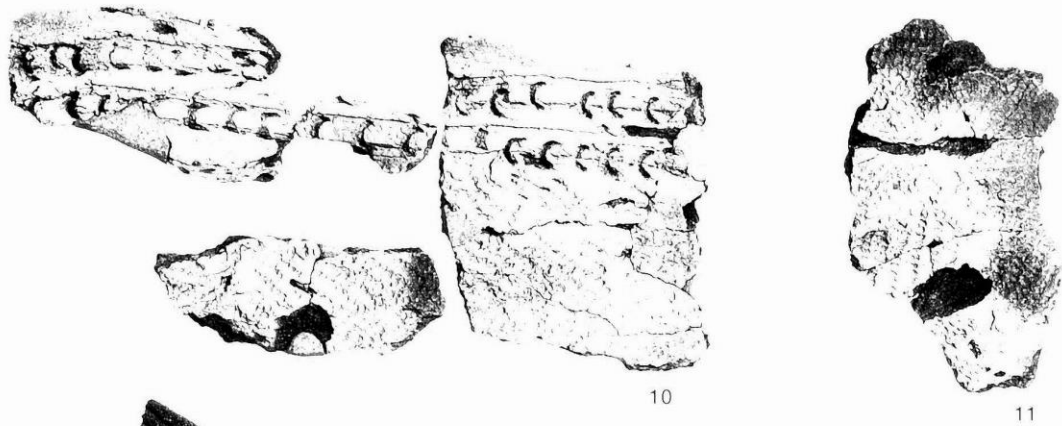
10



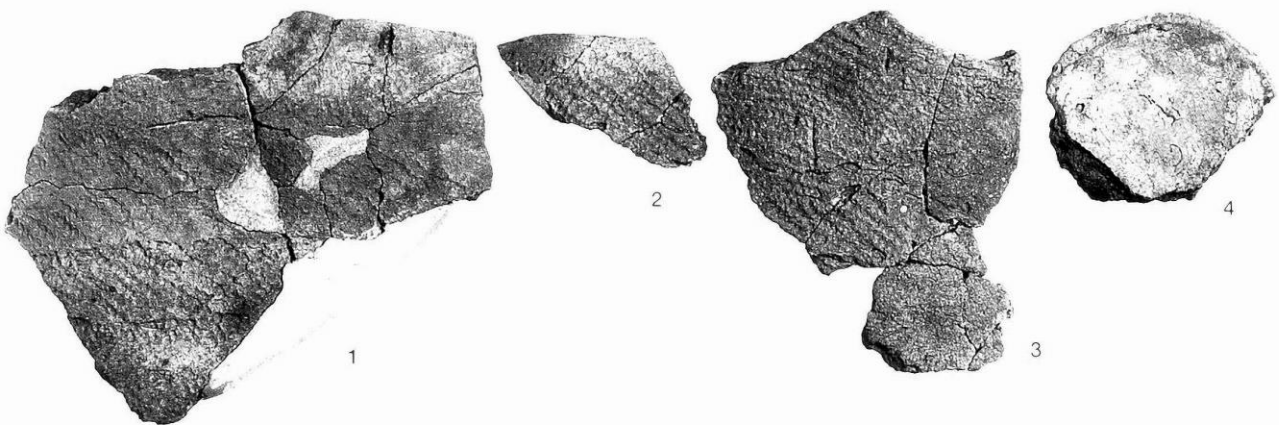
11



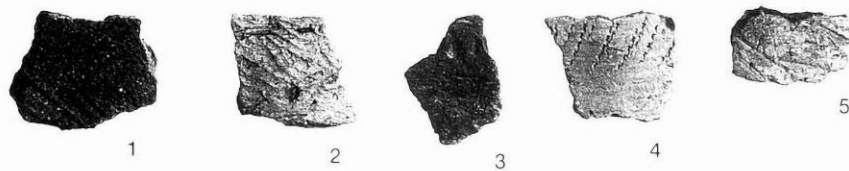
図版14 C1・C2区(縄文)



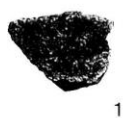
SI-143



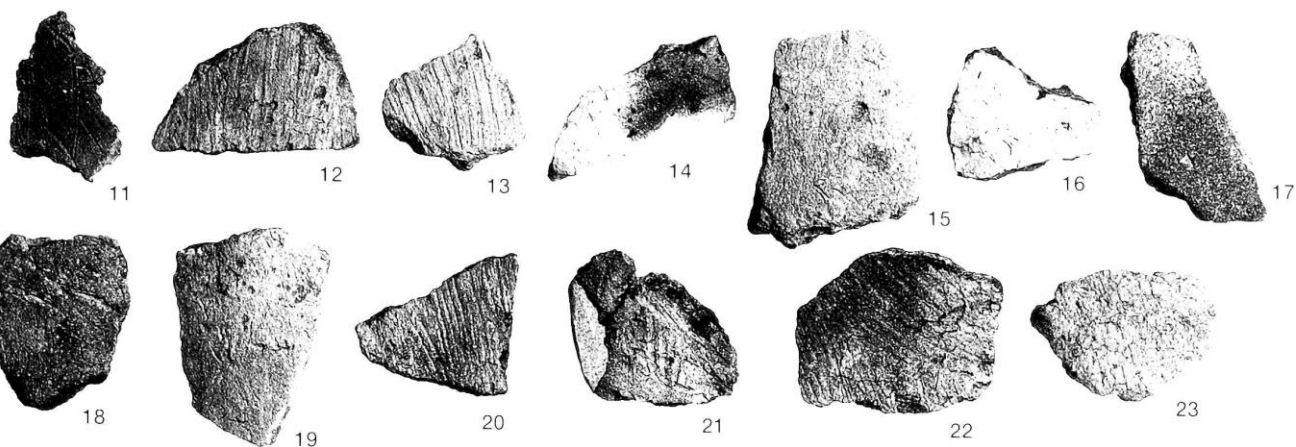
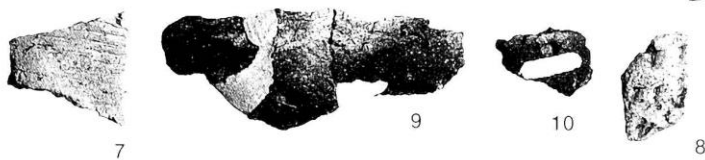
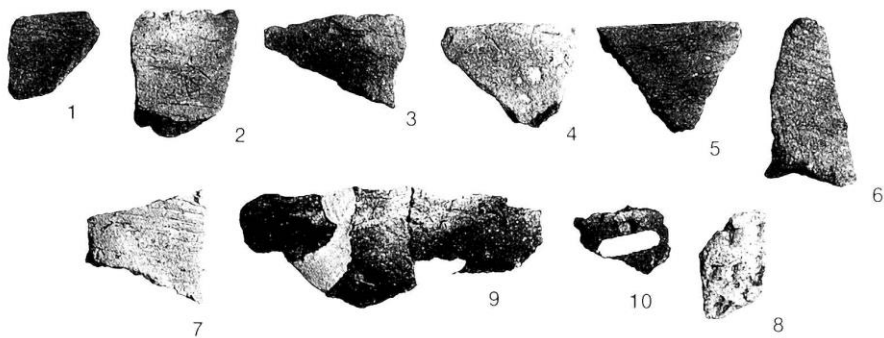
SI-144



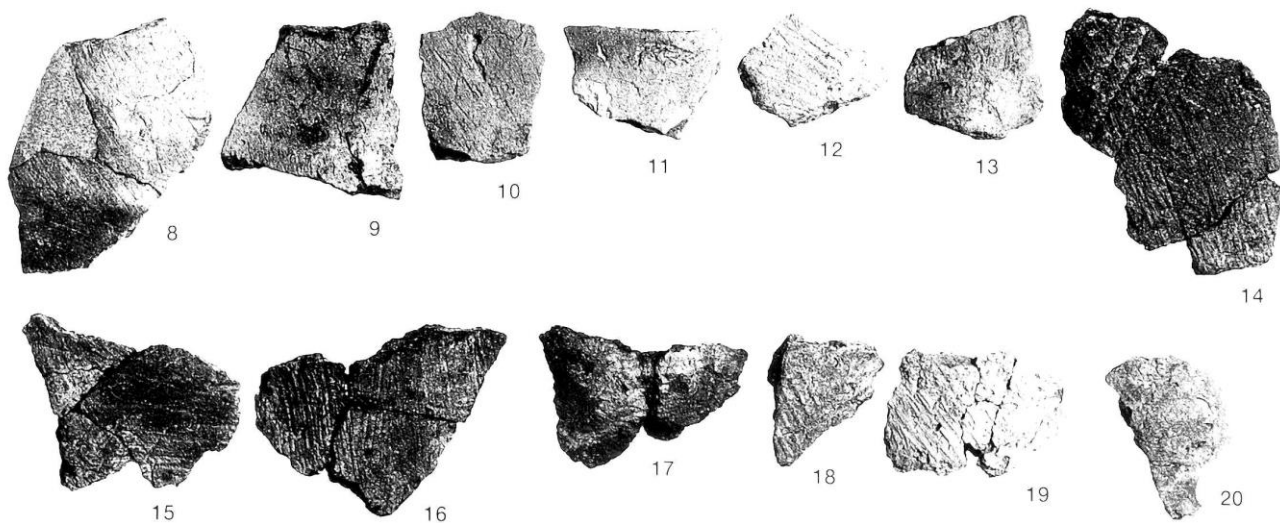
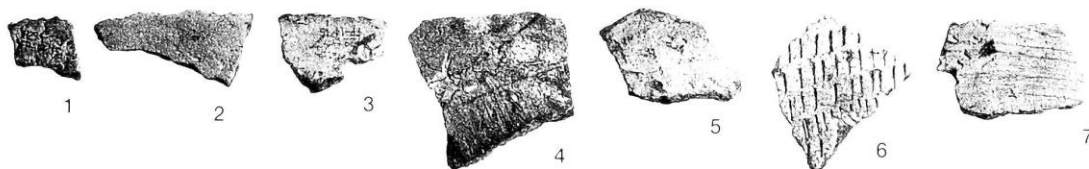
1号炉穴群



2号炉穴群

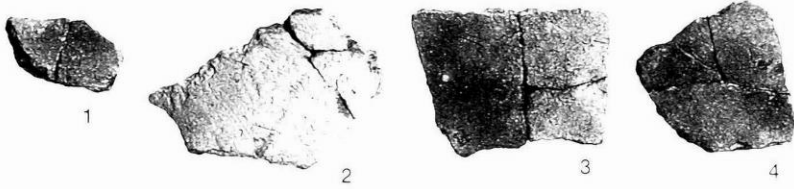


3号炉穴群

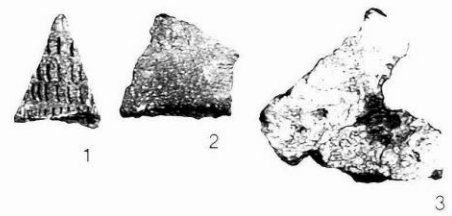


図版16 C1・C2区(縄文)

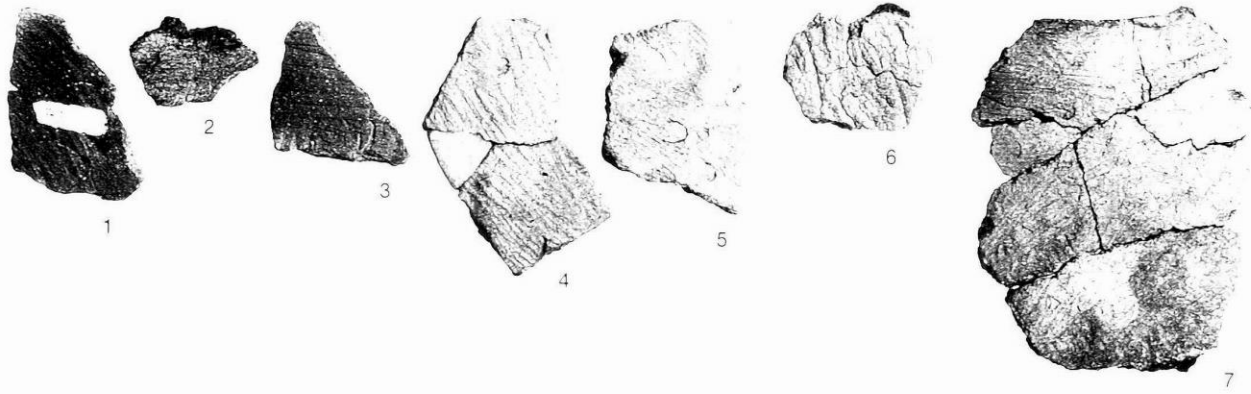
FP-7



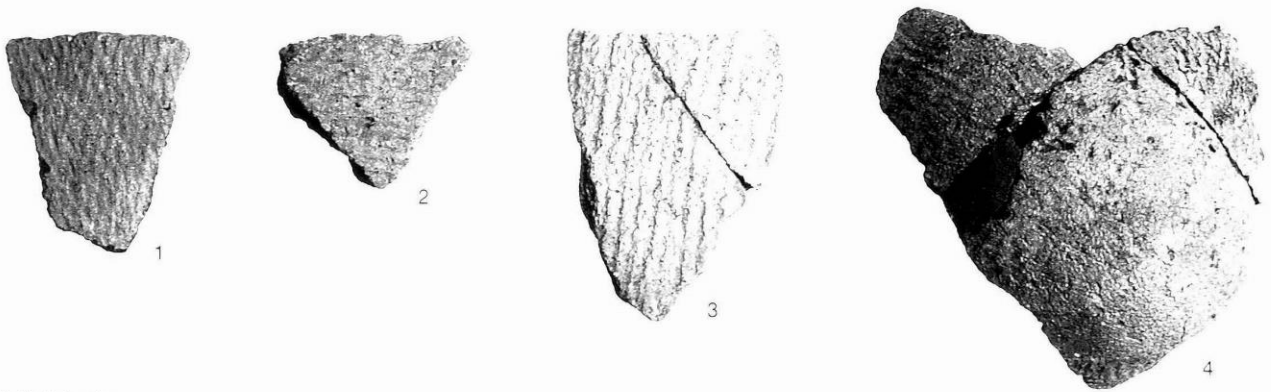
FP-9



FP-13

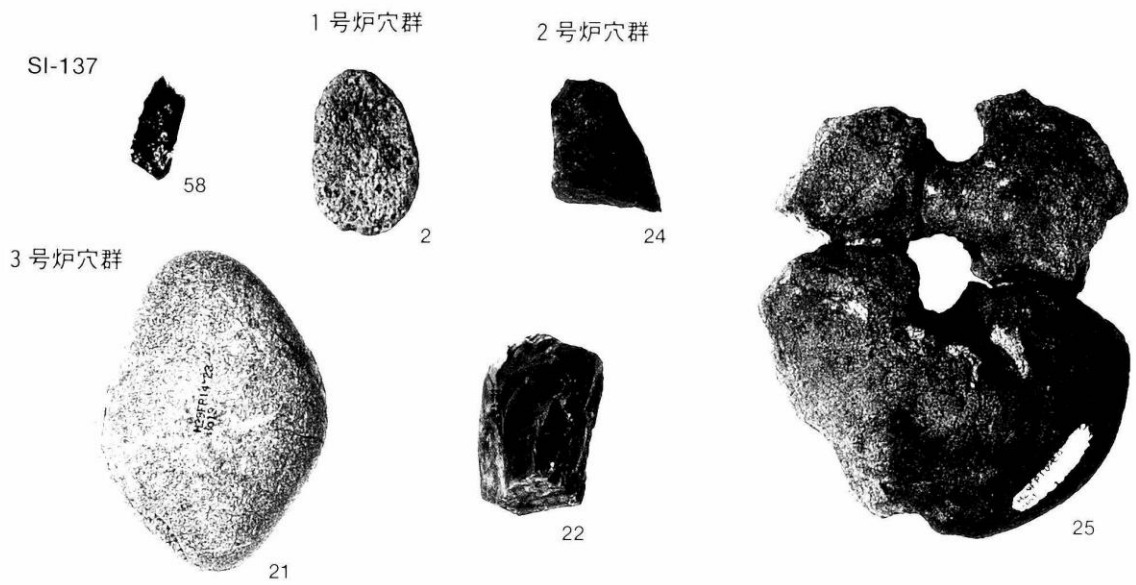


2号落とし穴

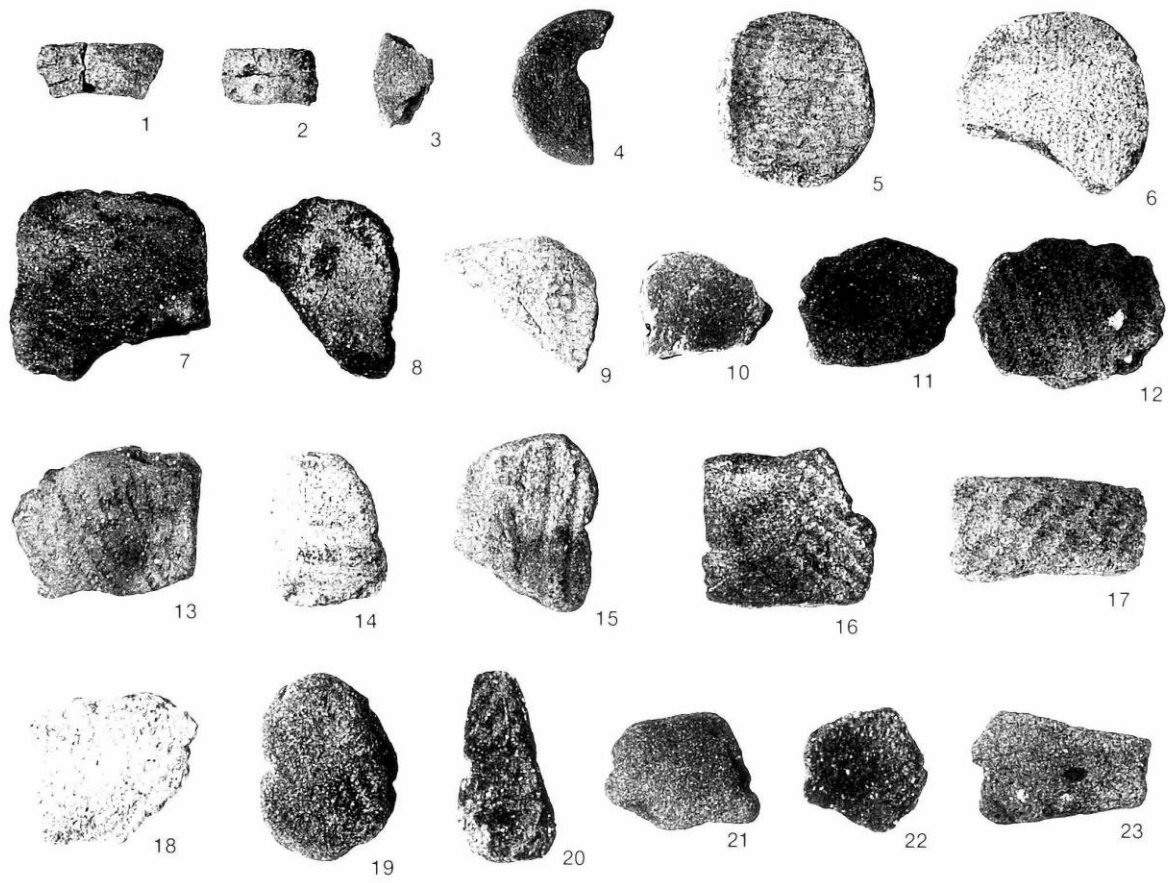


3号落とし穴





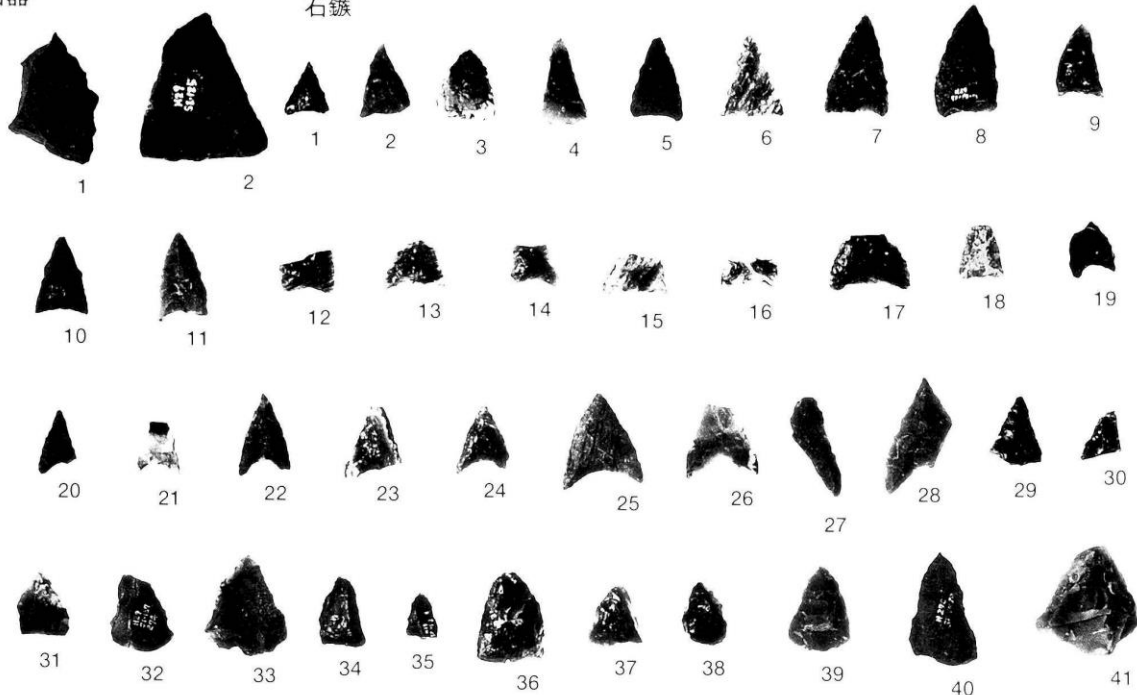
土製品



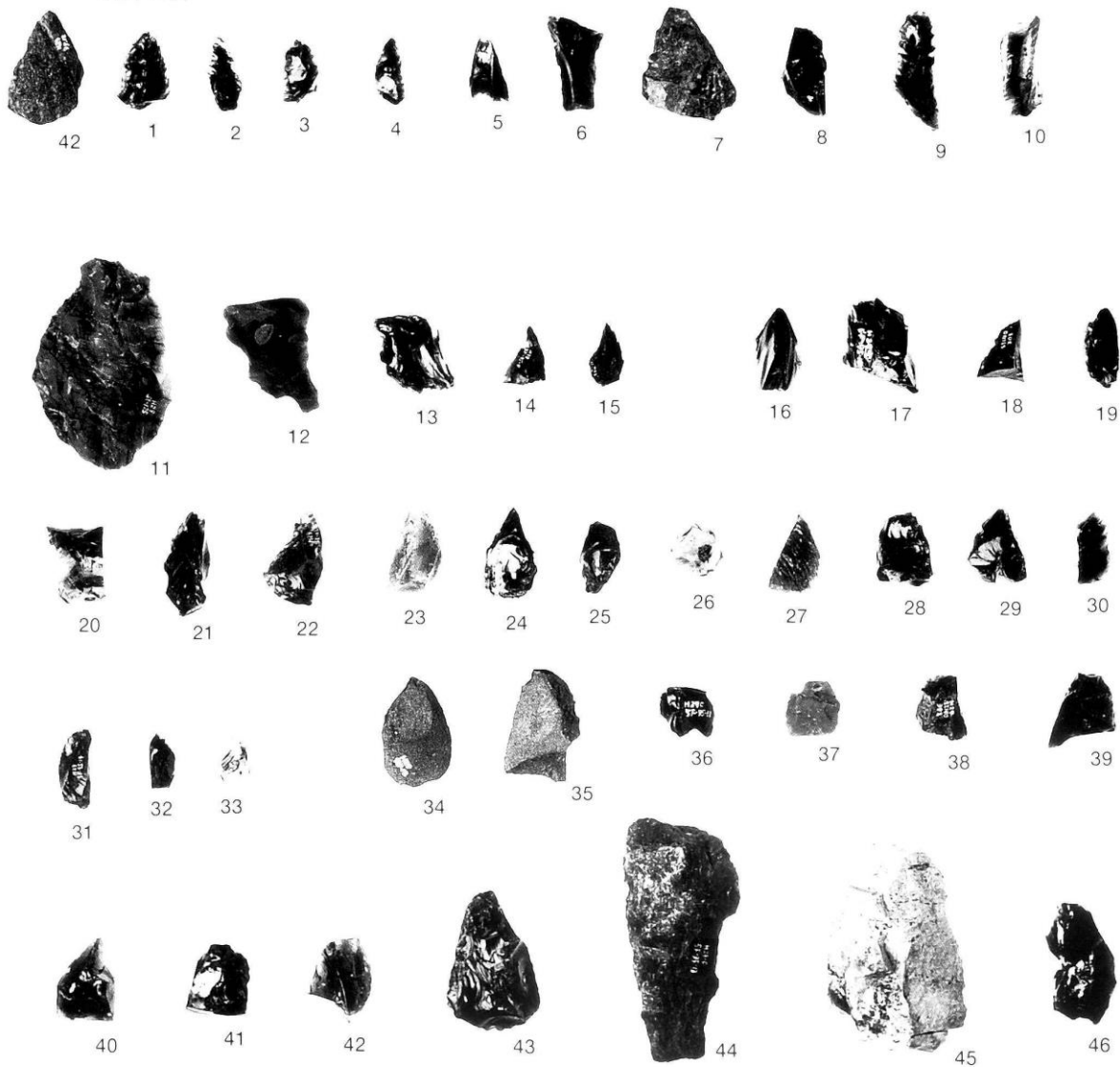
図版18 C1・C2区(縄文)

旧石器

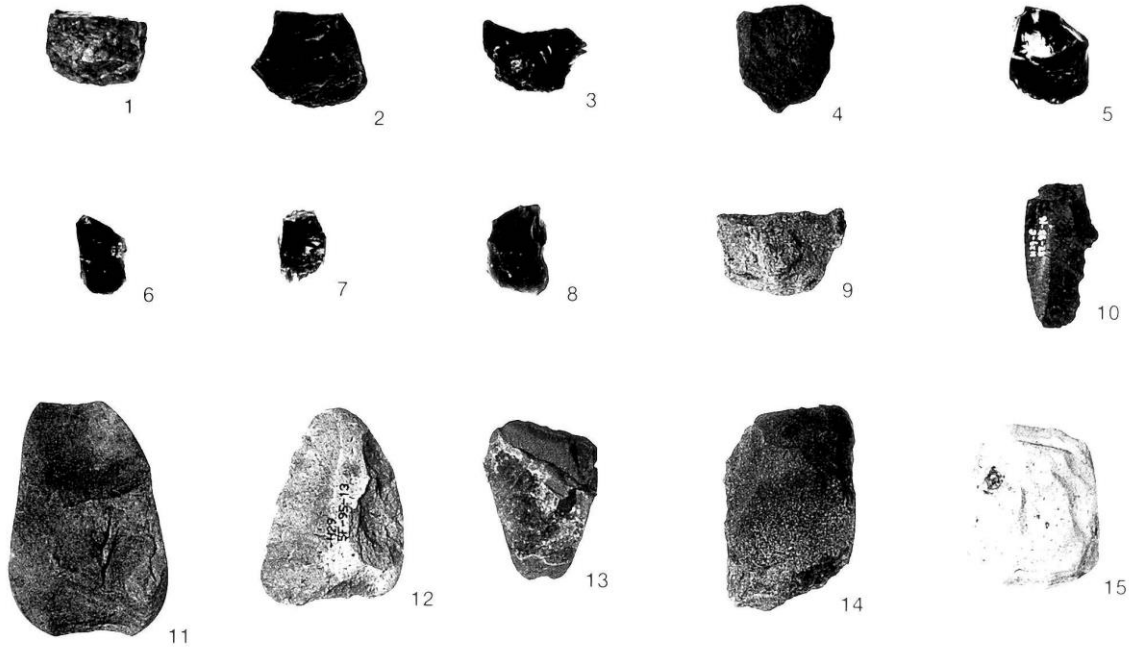
石鏃



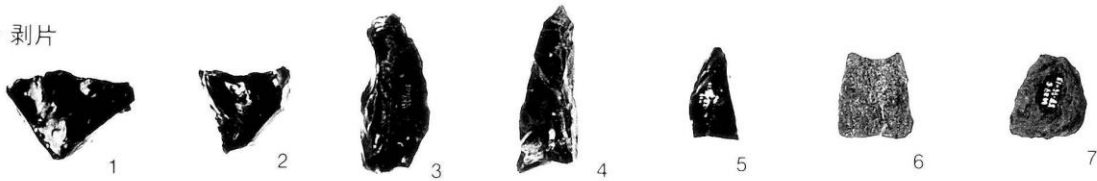
剥片石器



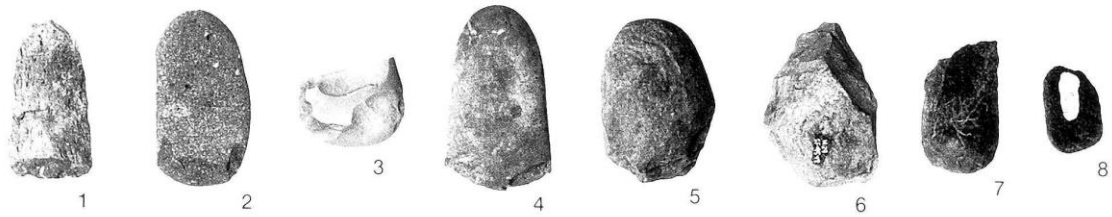
搔器・削器



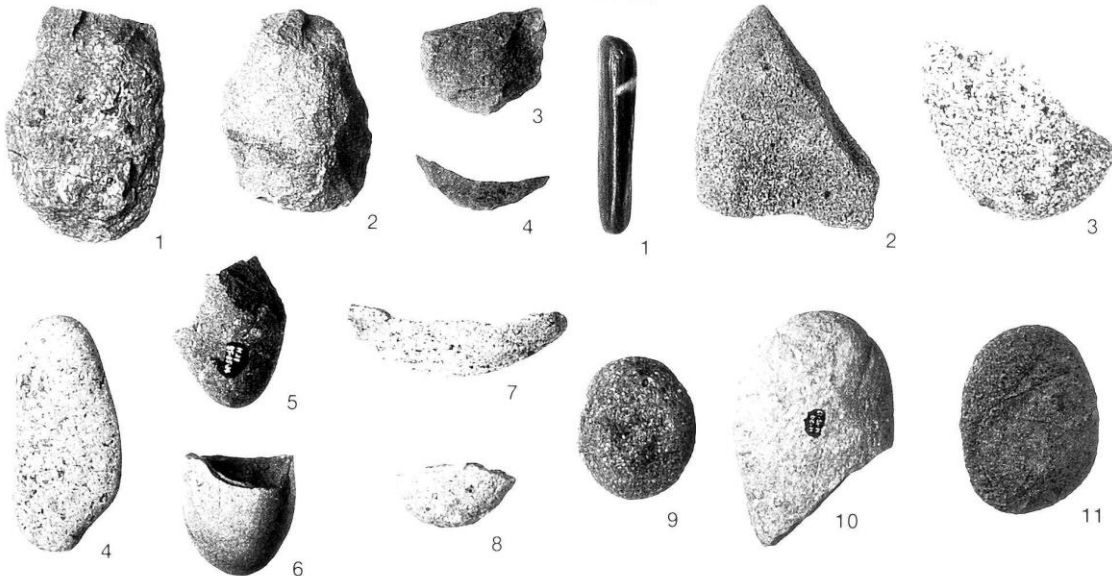
石核・剥片



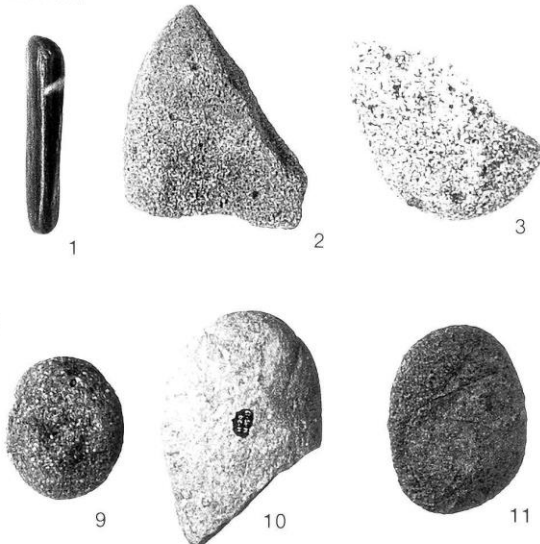
磨製石斧



打製石斧

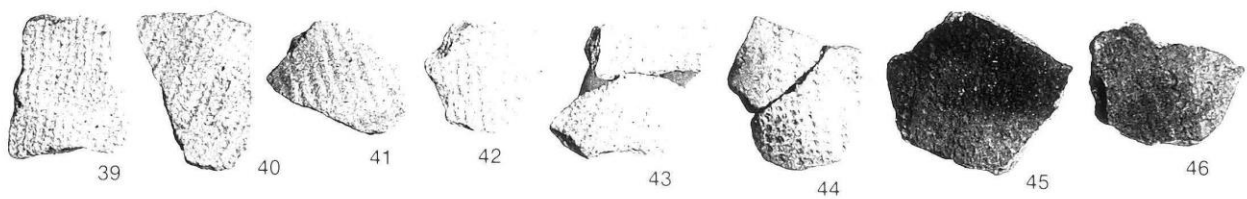
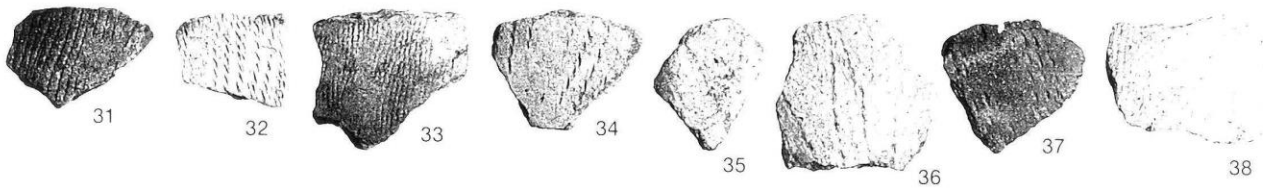
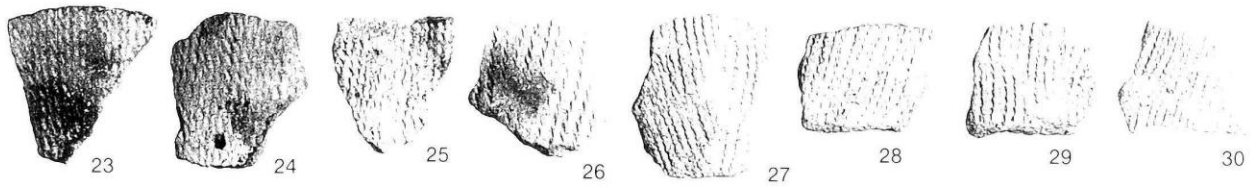
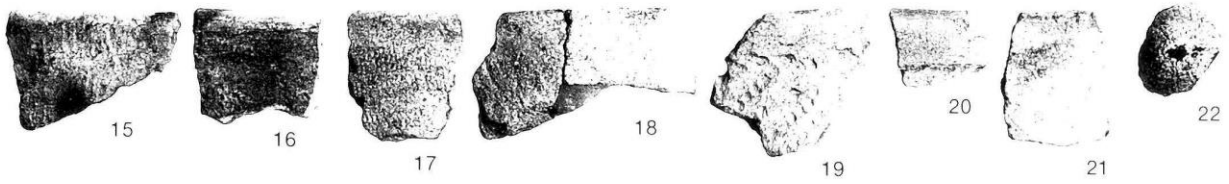
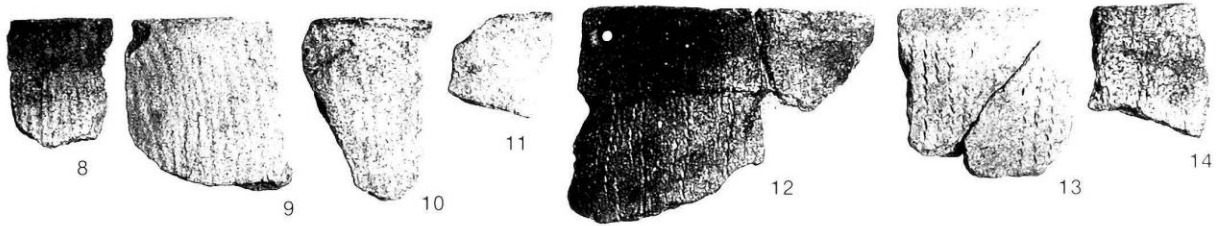
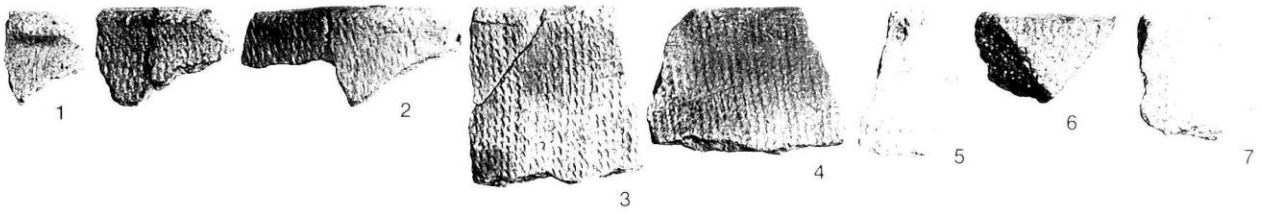


礫石器

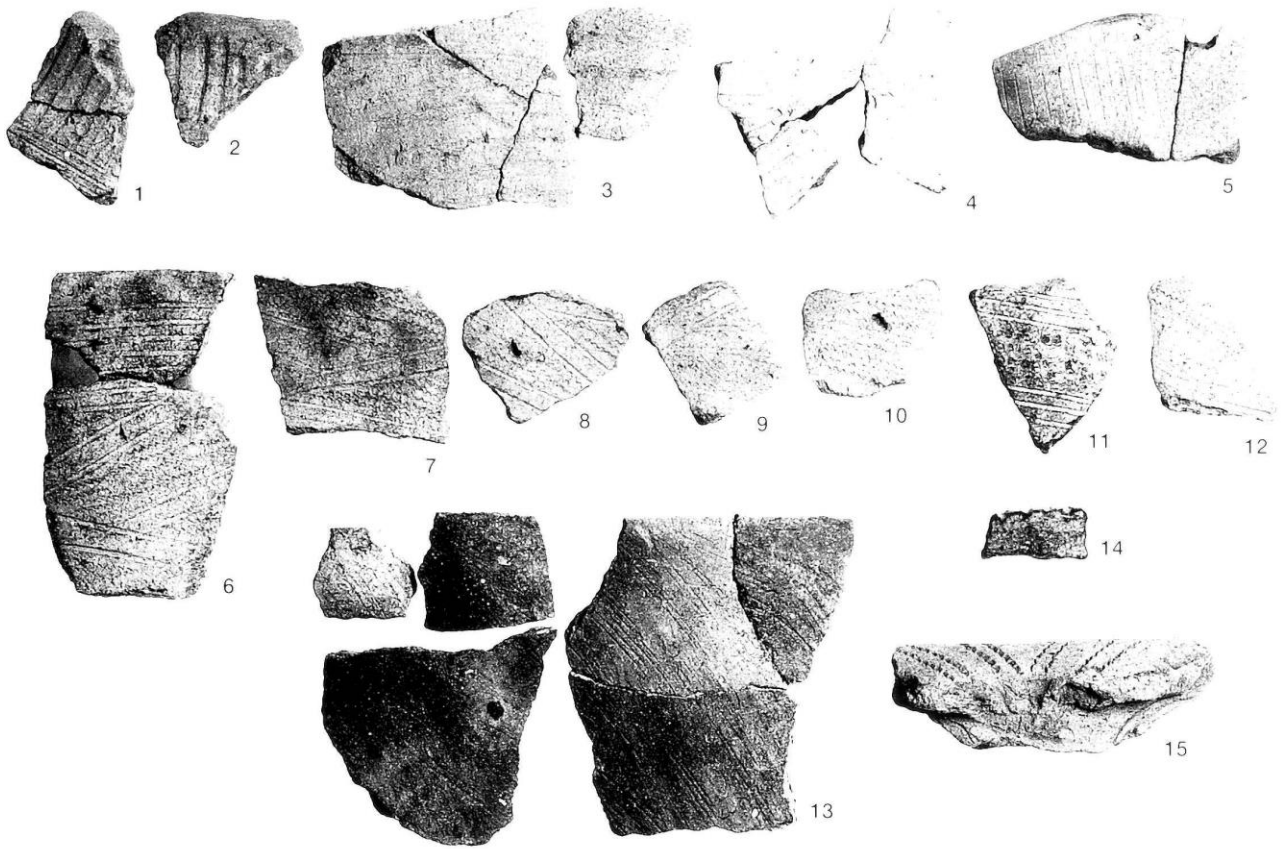


図版20 C1・C2区(縄文)

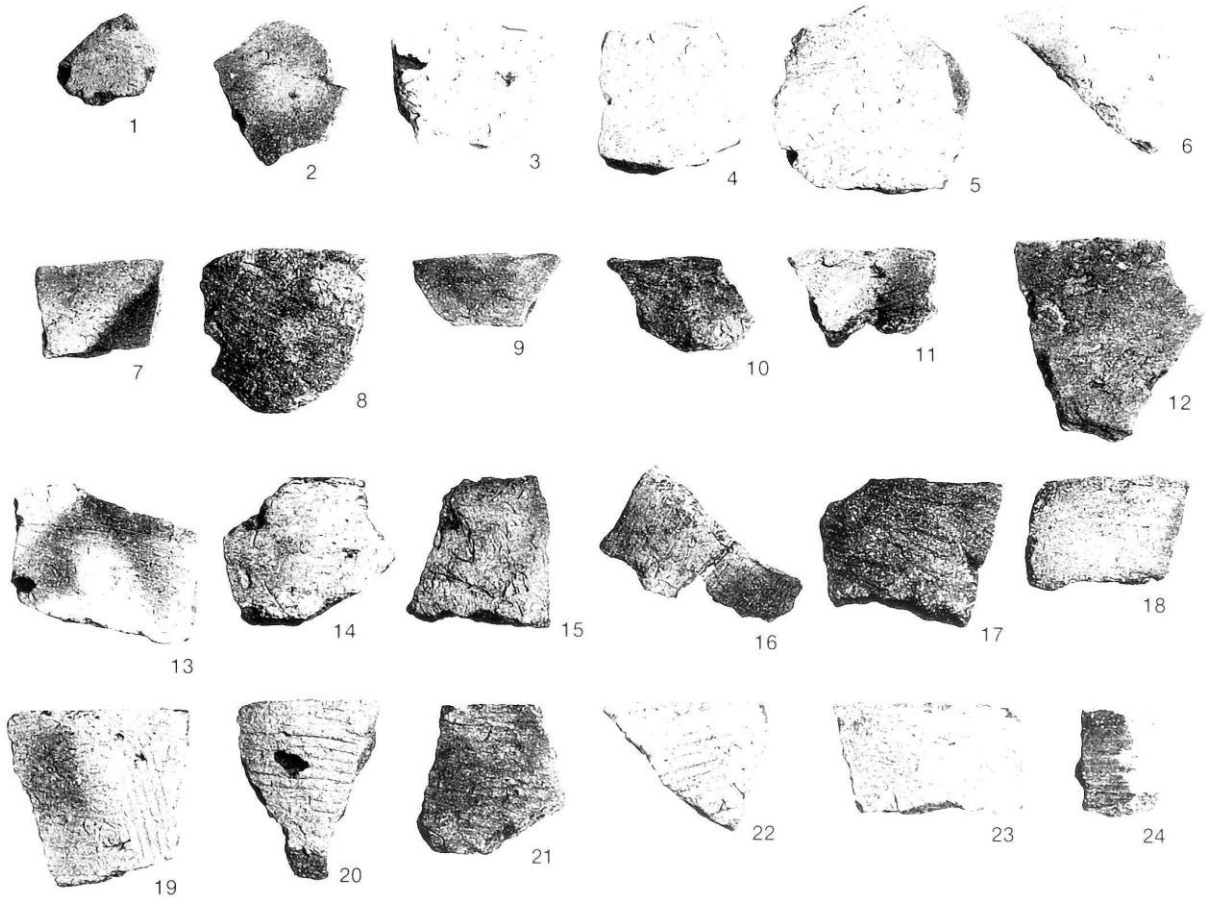
I群土器



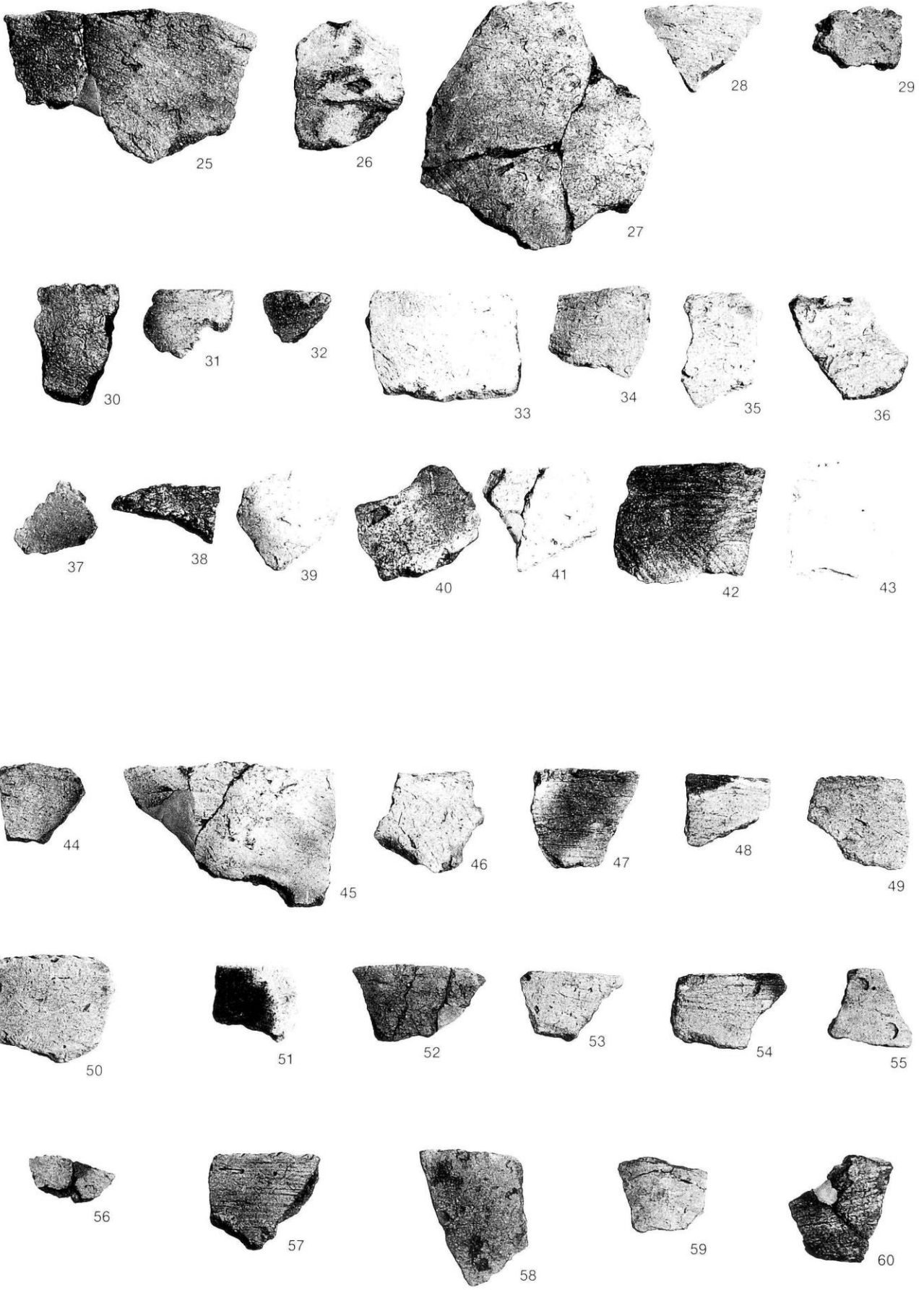
Ⅱ 群土器

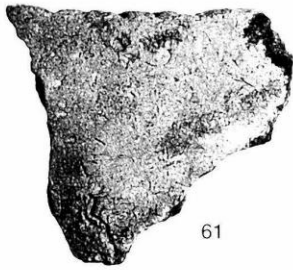


Ⅲ A 群土器



図版22 C1・C2区(縄文)

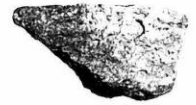




61



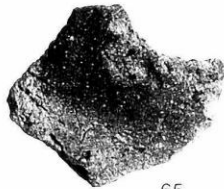
62



63



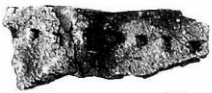
64



65



66



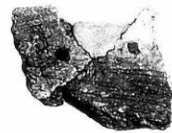
67



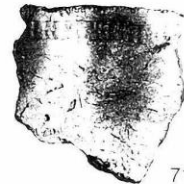
68



69



70



71



72



73



74



75



76



78



79



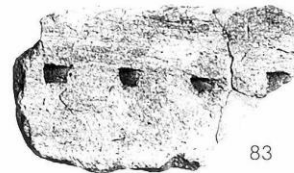
80



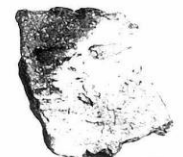
81



82



83



84



85



86



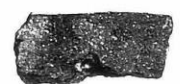
87



88

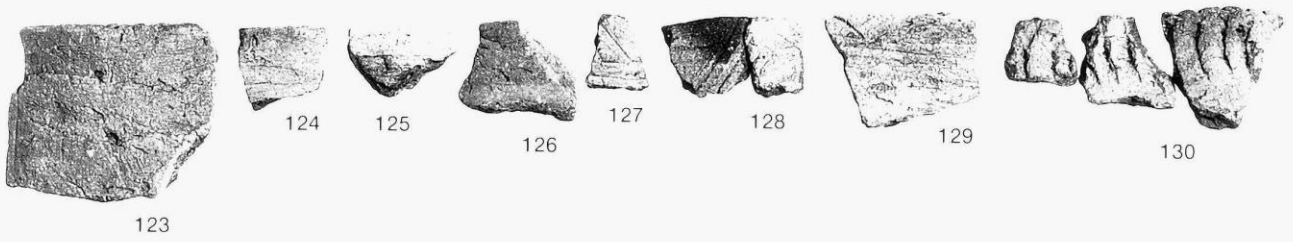
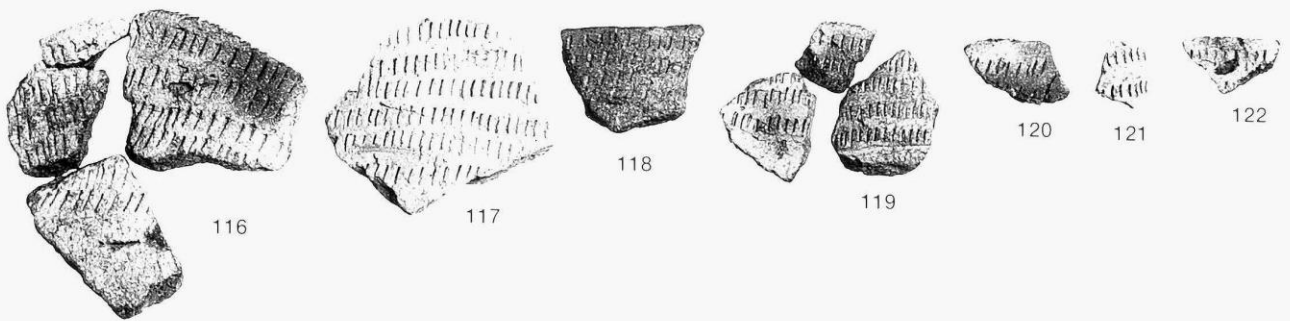


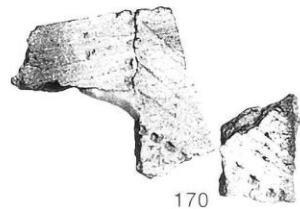
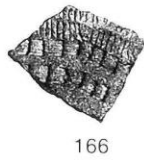
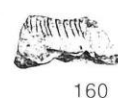
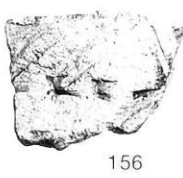
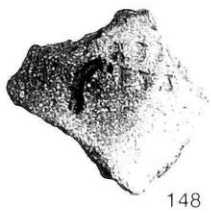
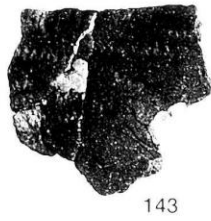
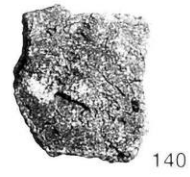
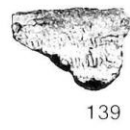
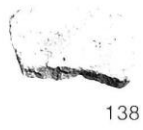
89



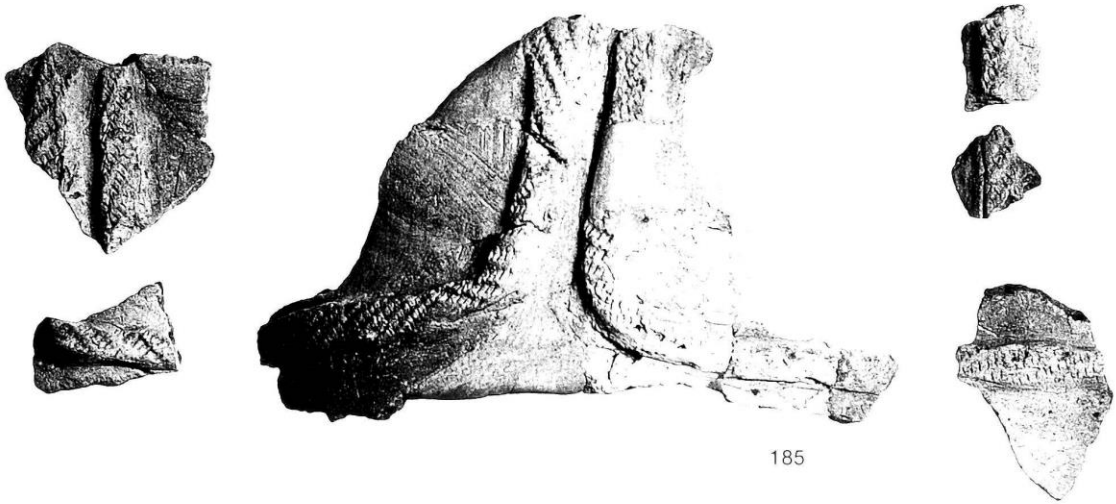
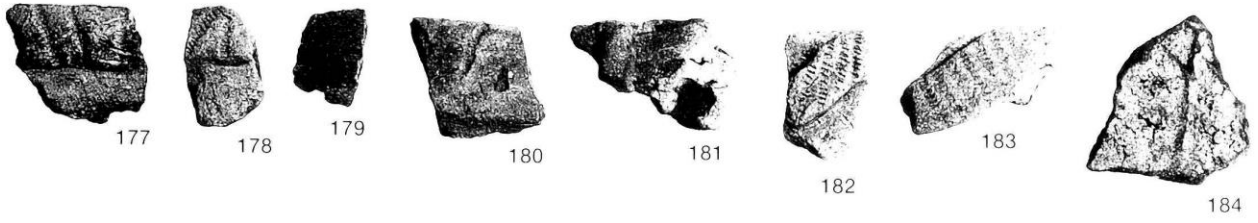
90

図版24 C1・C2区(縄文)

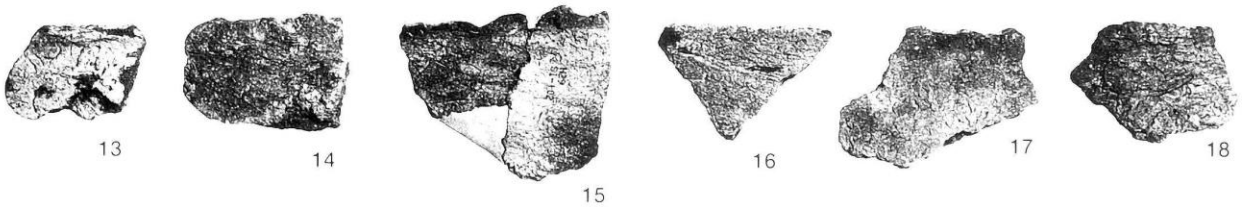
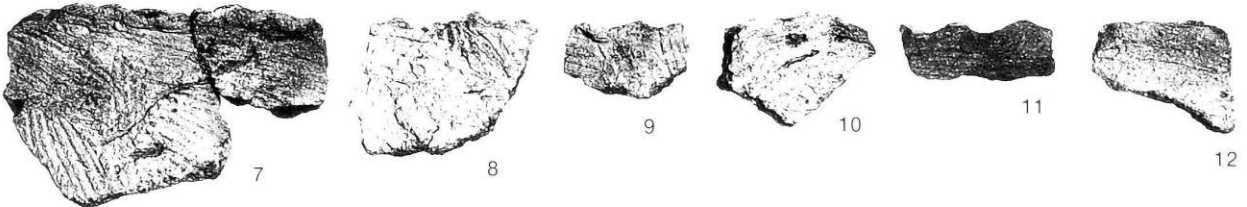
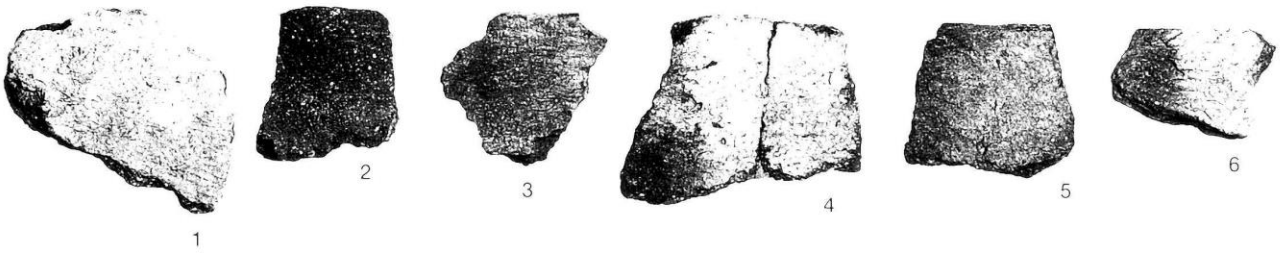




図版26 C1・C2区(縄文)

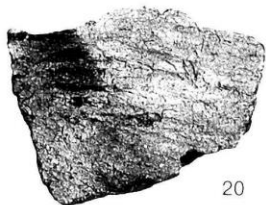


ⅢB群土器





19



20



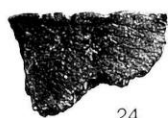
21



22



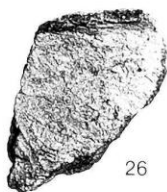
23



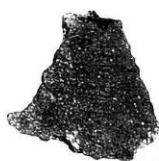
24



25



26



27



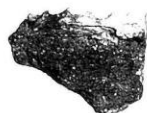
28



29



30



31



32



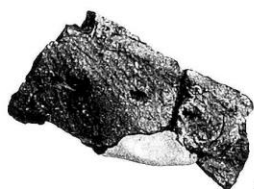
33



34



35



36



37



38



39



40



41



42



43



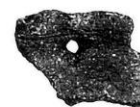
44



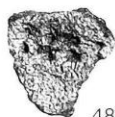
45



46



47



48



49



50



51



52

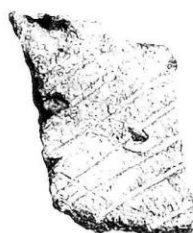
图版28 C1·C2区(绳文)



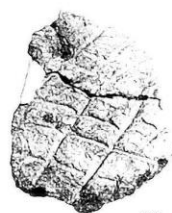
53



54



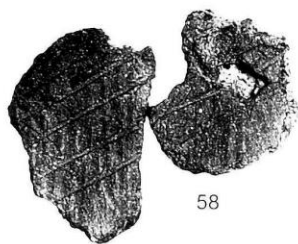
55



56



57



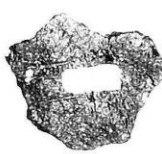
58



59



60



61



62



63



65



66



67



68



69



70



71



72



73



74



76



77



78



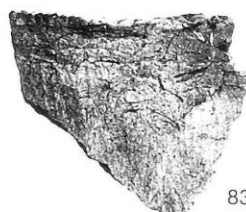
79



80



82



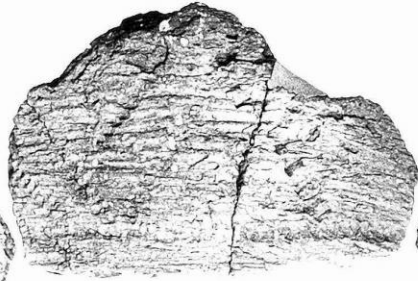
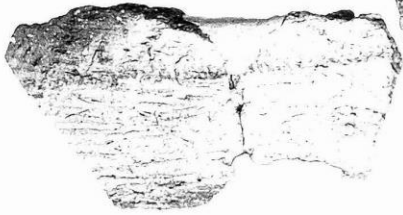
83



81



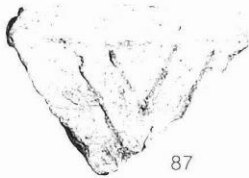
84



85



86



87



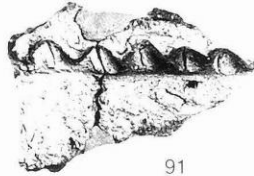
88



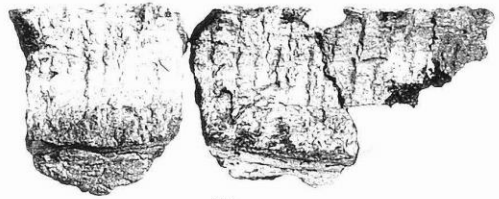
89



90



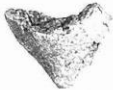
91



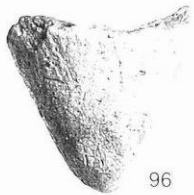
93



94



95



96



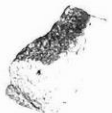
97



98



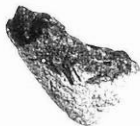
99



100



101



102



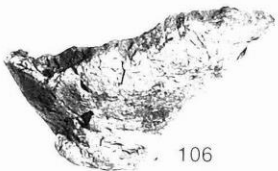
103



104



105



106



107



108



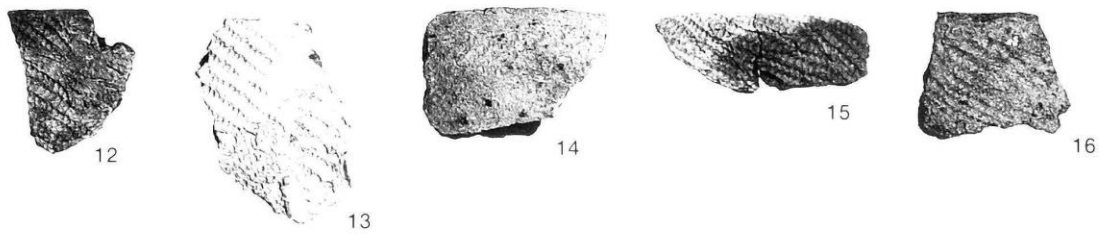
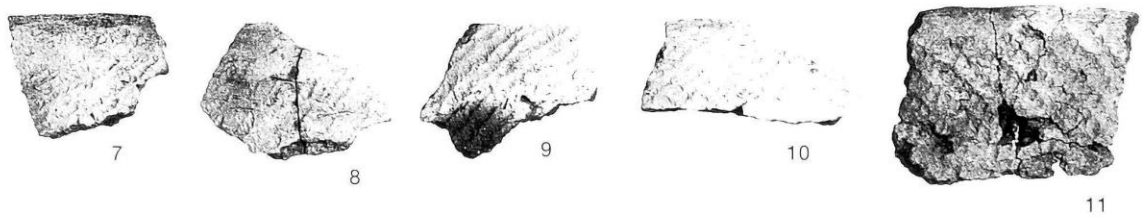
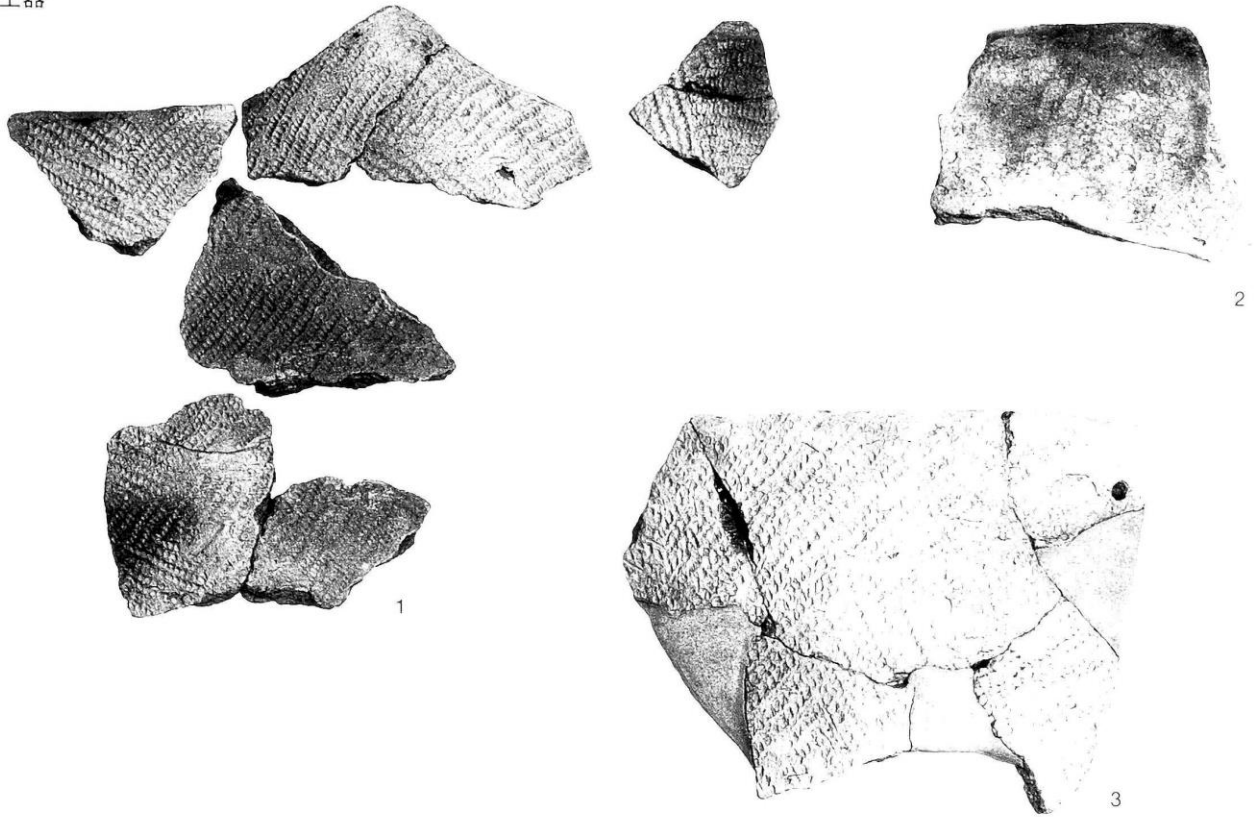
109

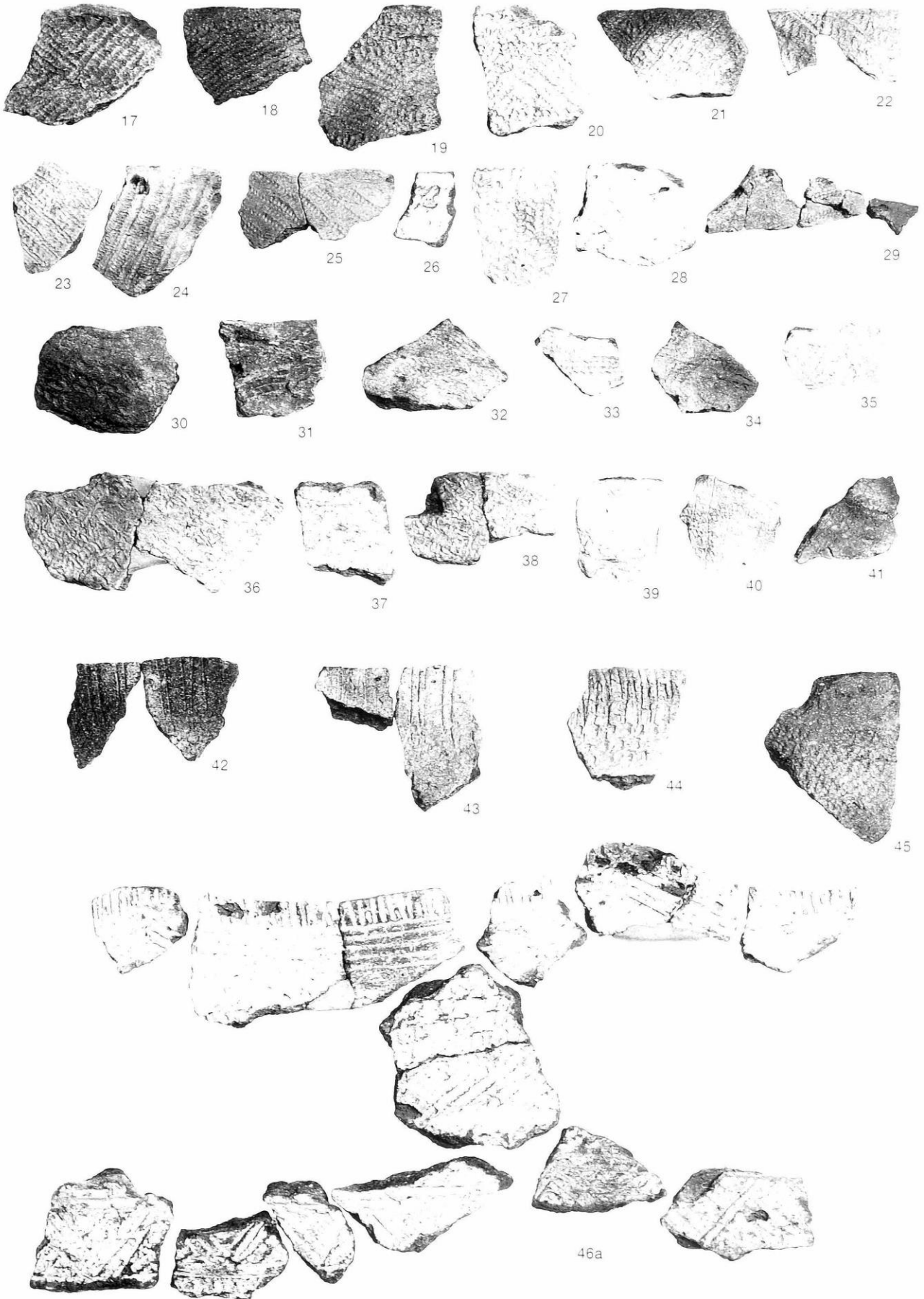


110

図版30 C1・C2区(縄文)

IV群土器

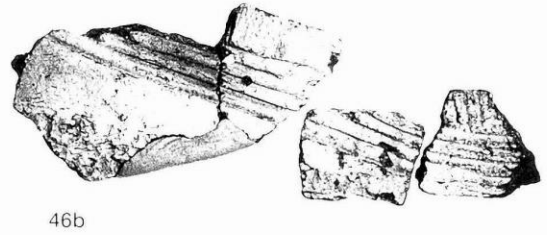
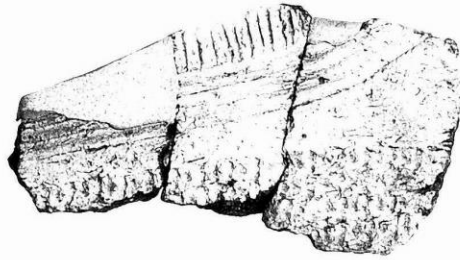




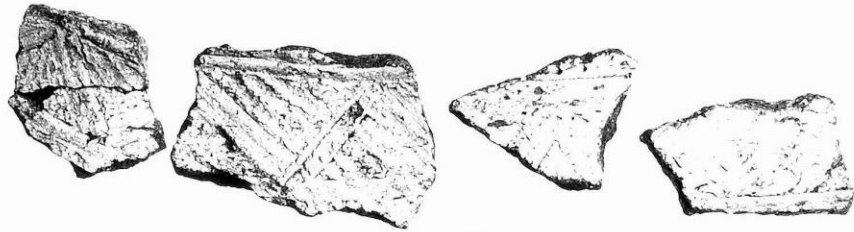
図版32 C1・C2区(縄文)



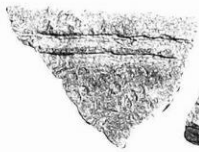
47



46b



46c



48



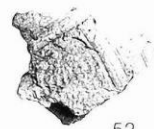
49



50



51



52



53



54



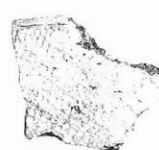
55



56



57



58



59



60



61



62



63



64



65



66



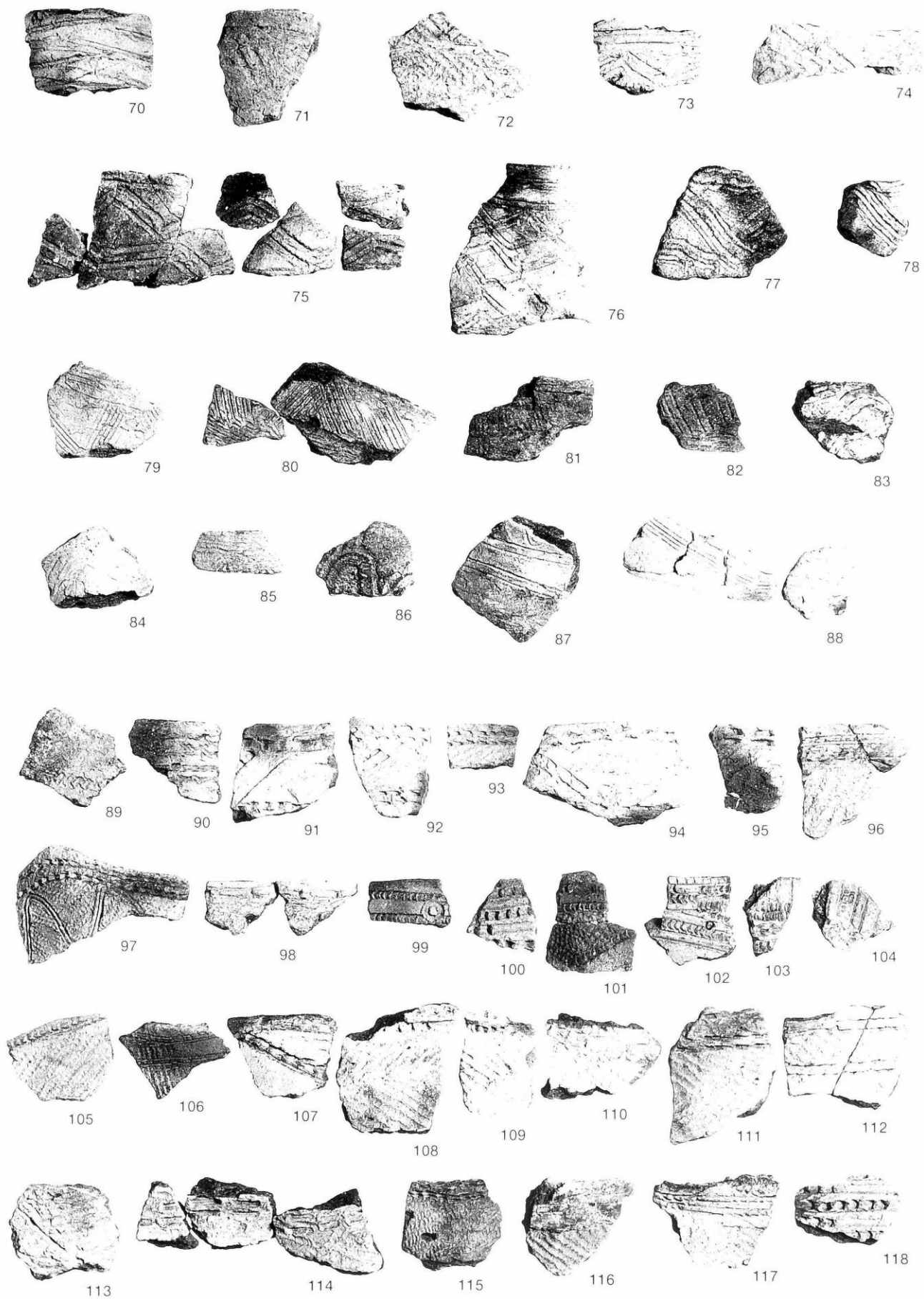
67



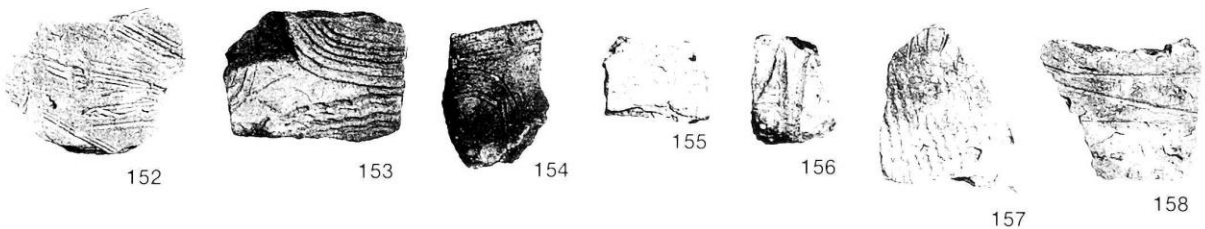
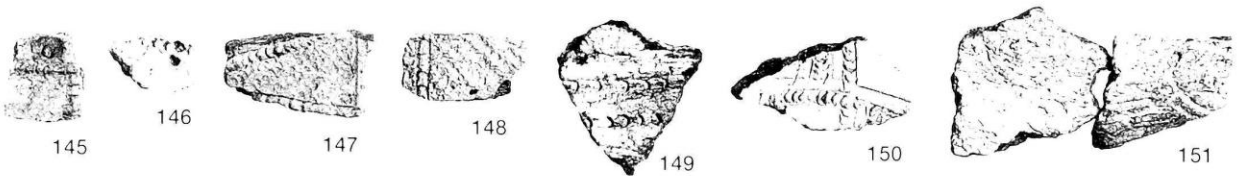
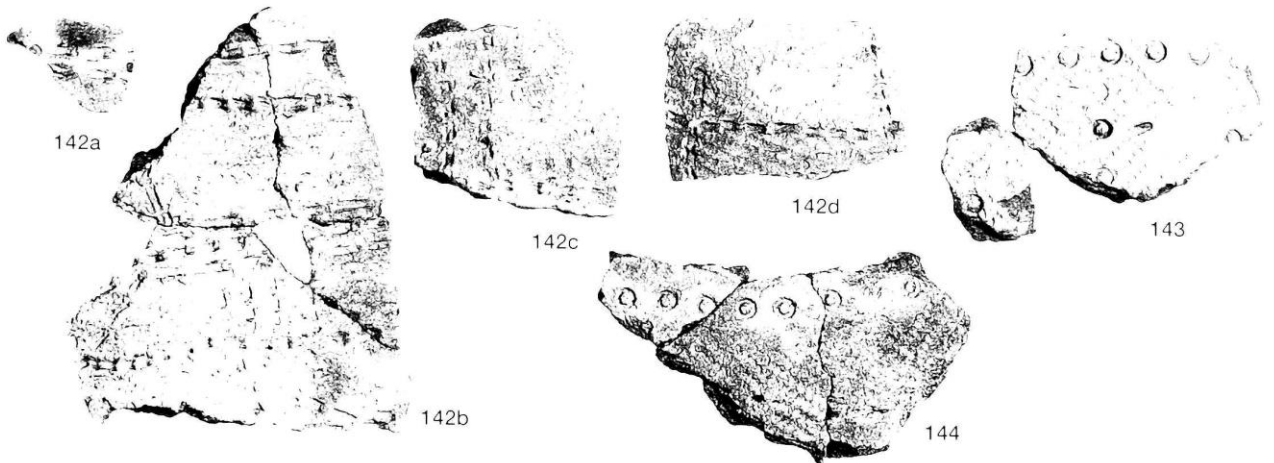
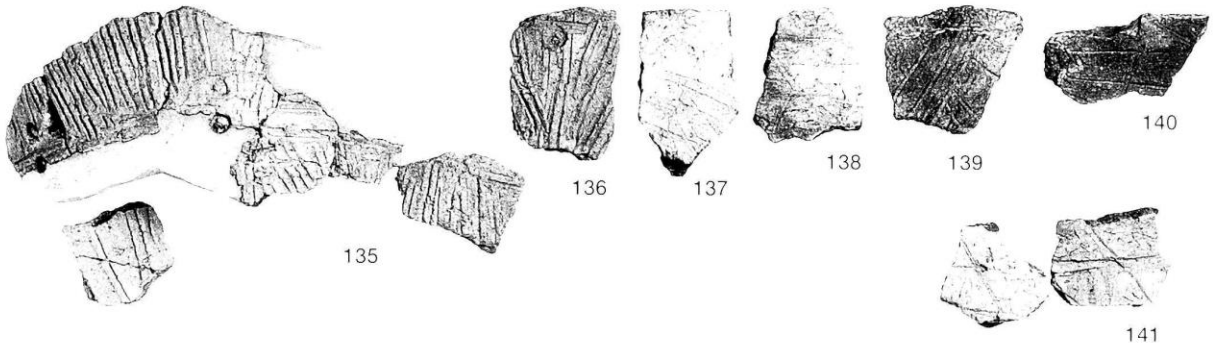
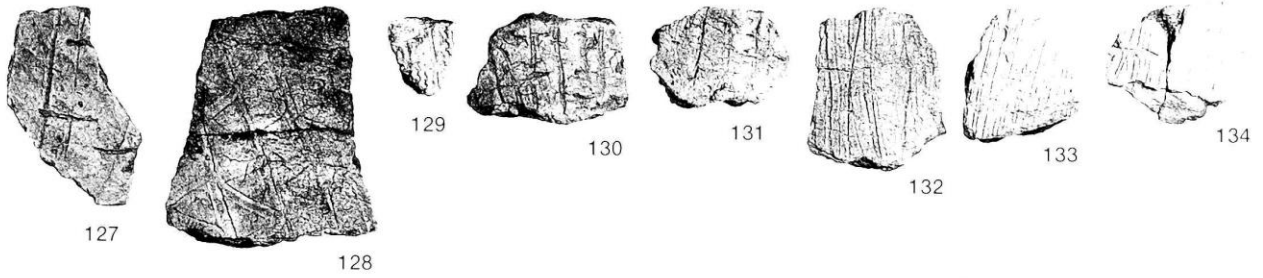
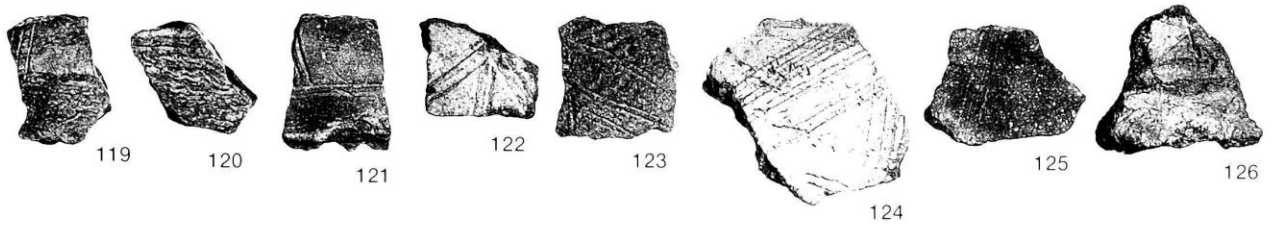
68

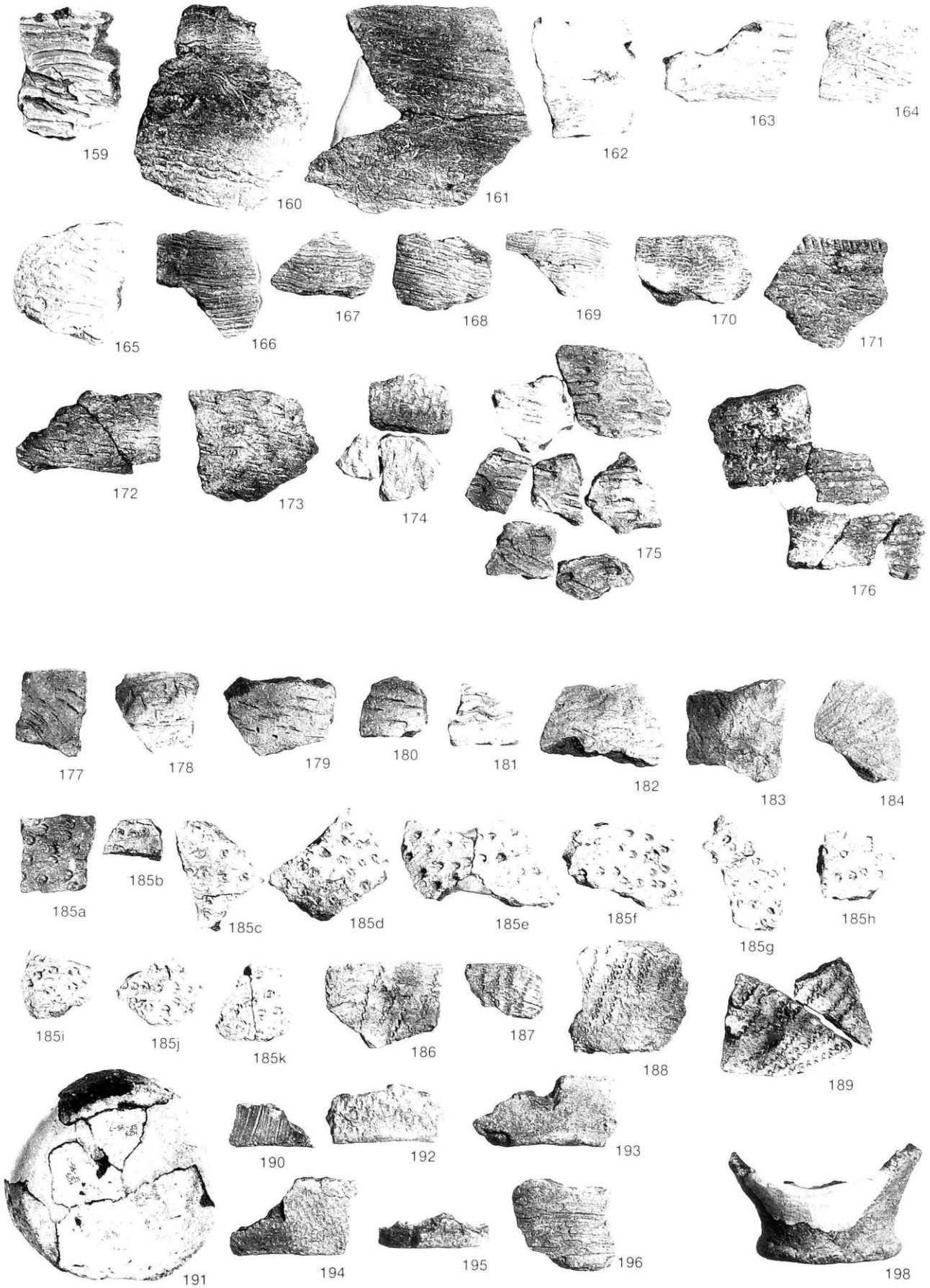


69



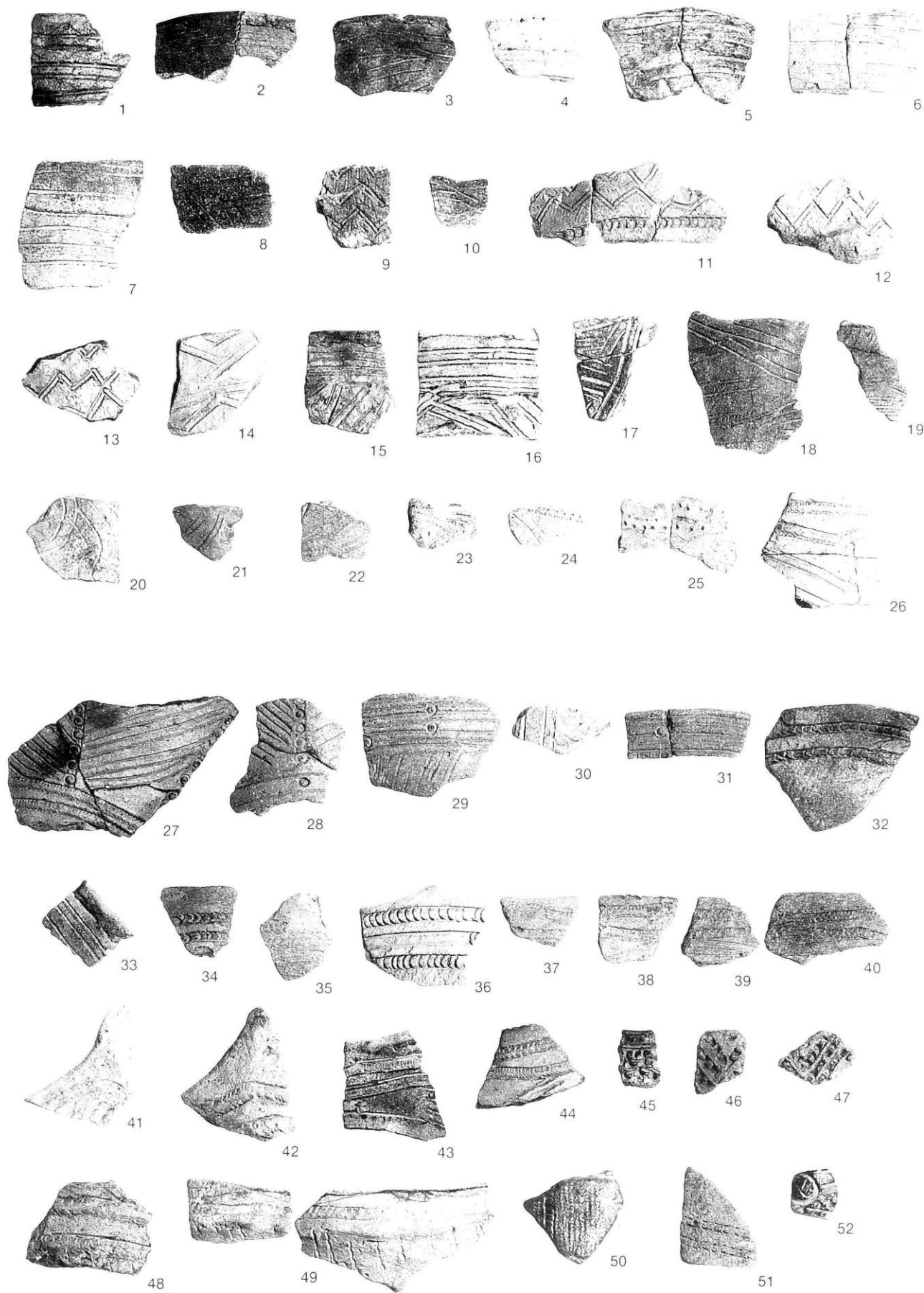
図版34 C1・C2区(縄文)

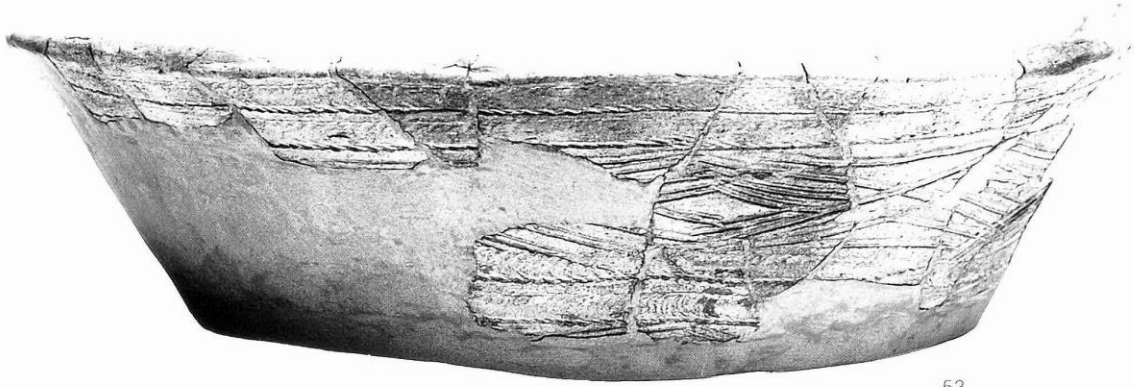




図版36 C1・C2区(縄文)

V群土器





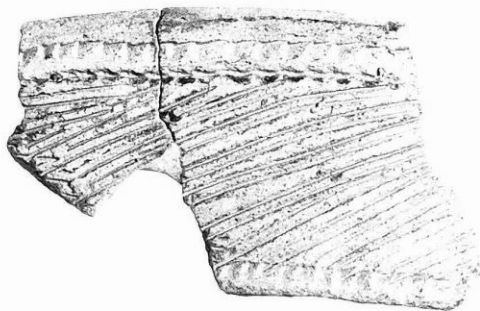
53



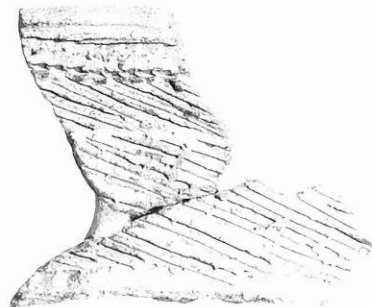
54



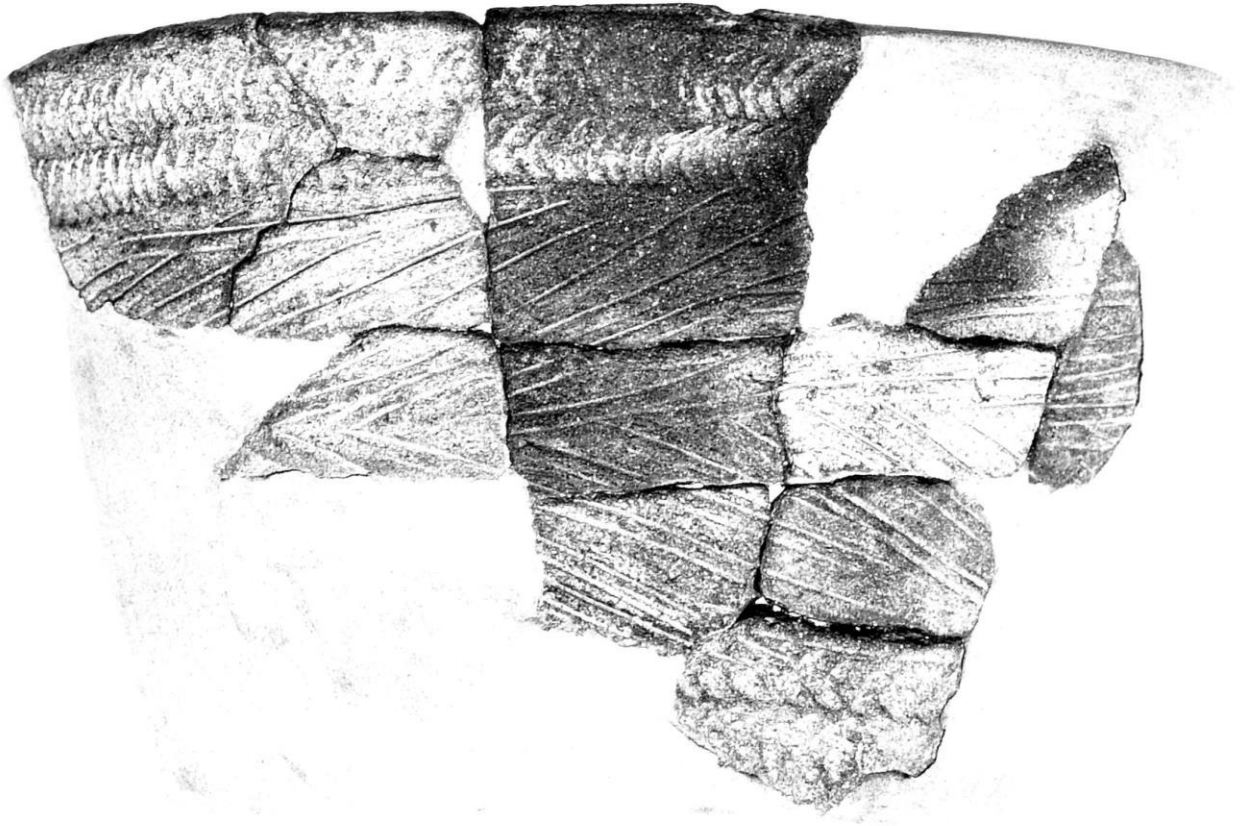
55



58



57



56



59



60



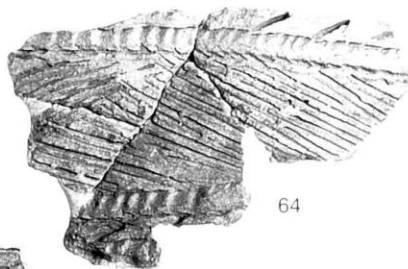
61



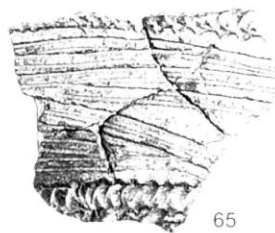
62



63



64



65



66



67



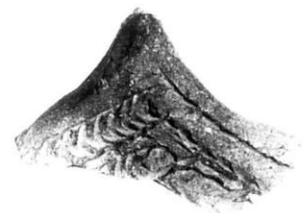
68



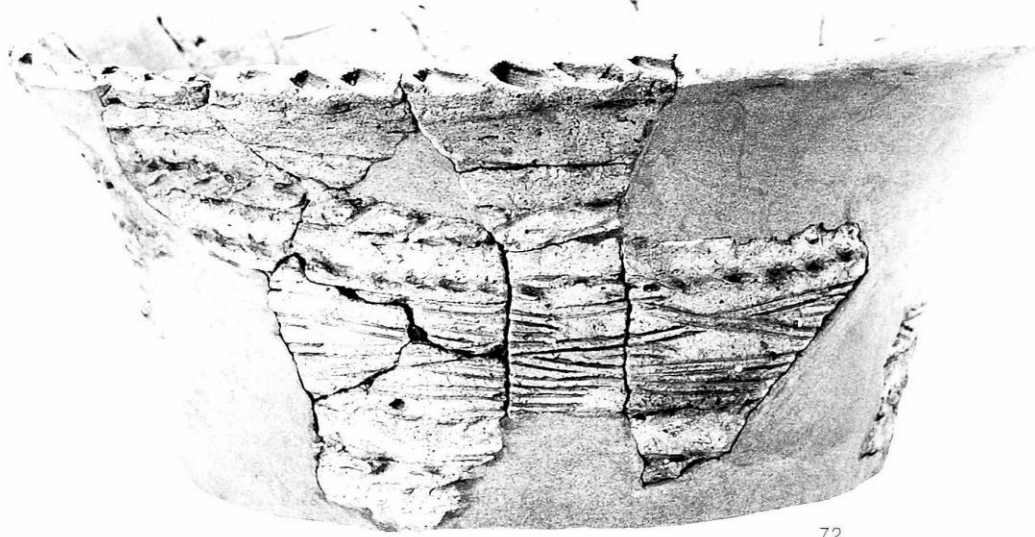
69



70



71



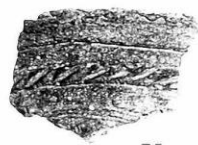
72



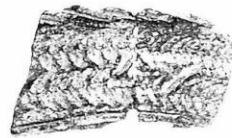
73



74



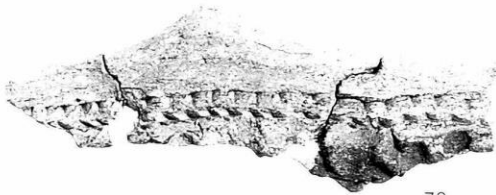
75



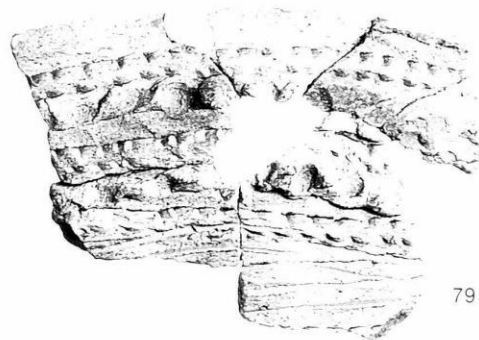
76



77



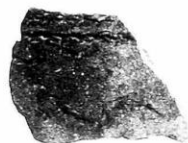
78



79



80



81

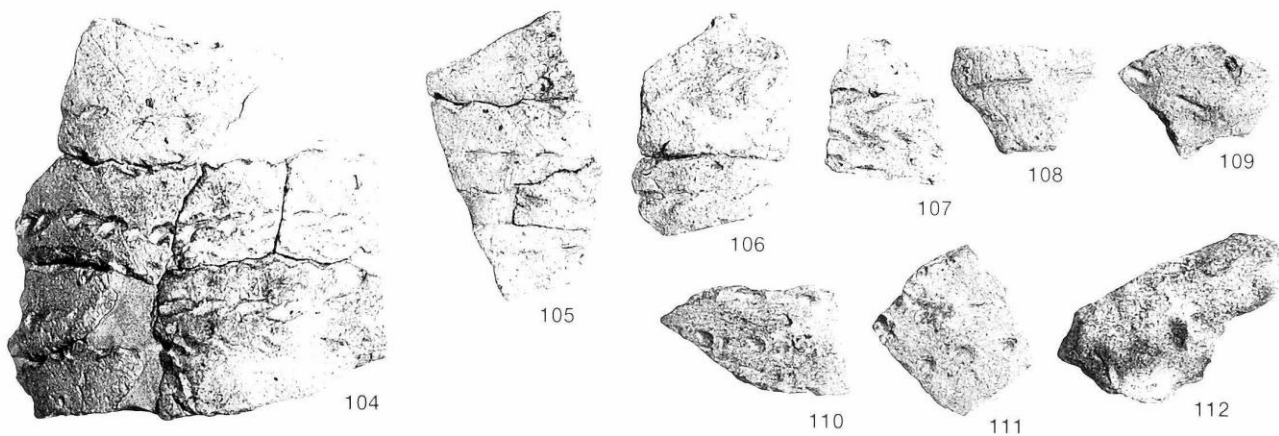
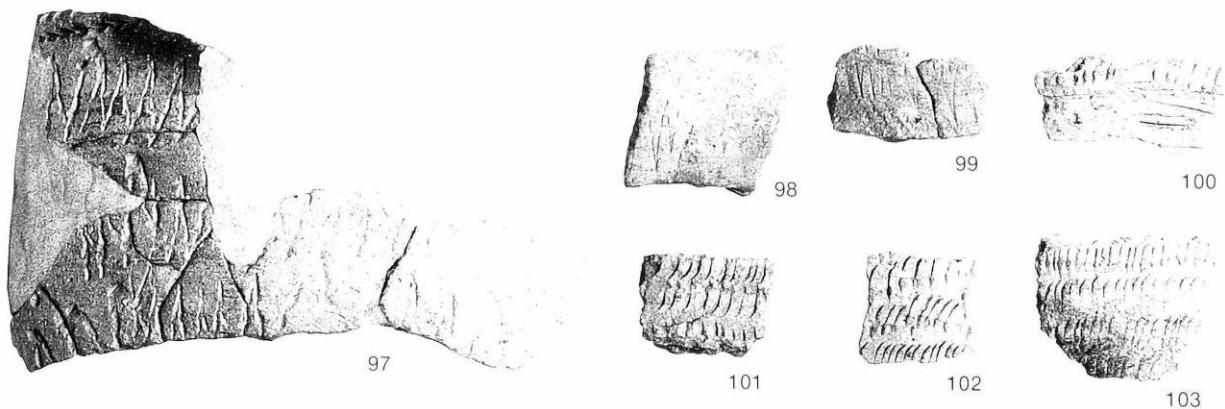
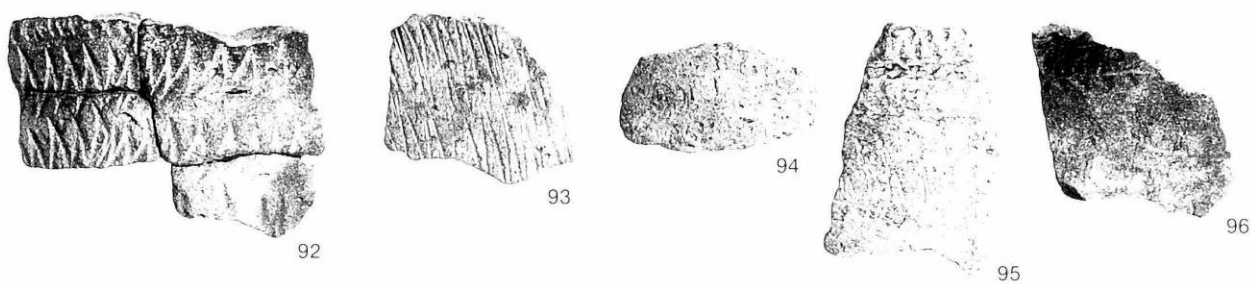
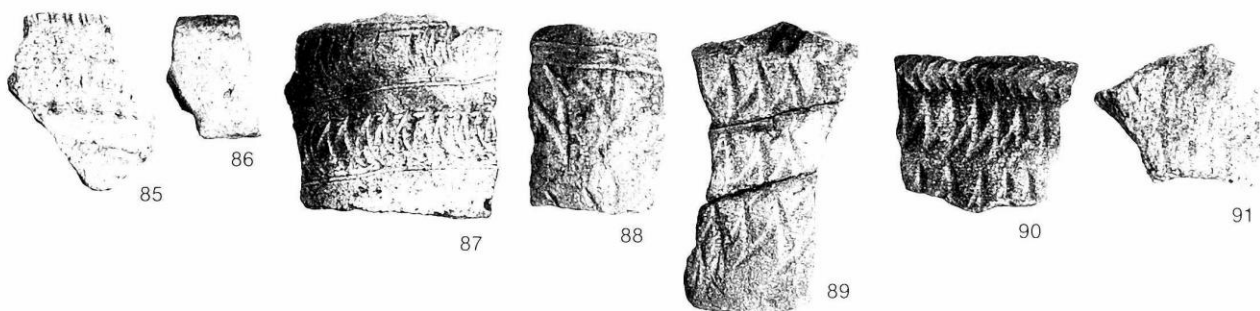


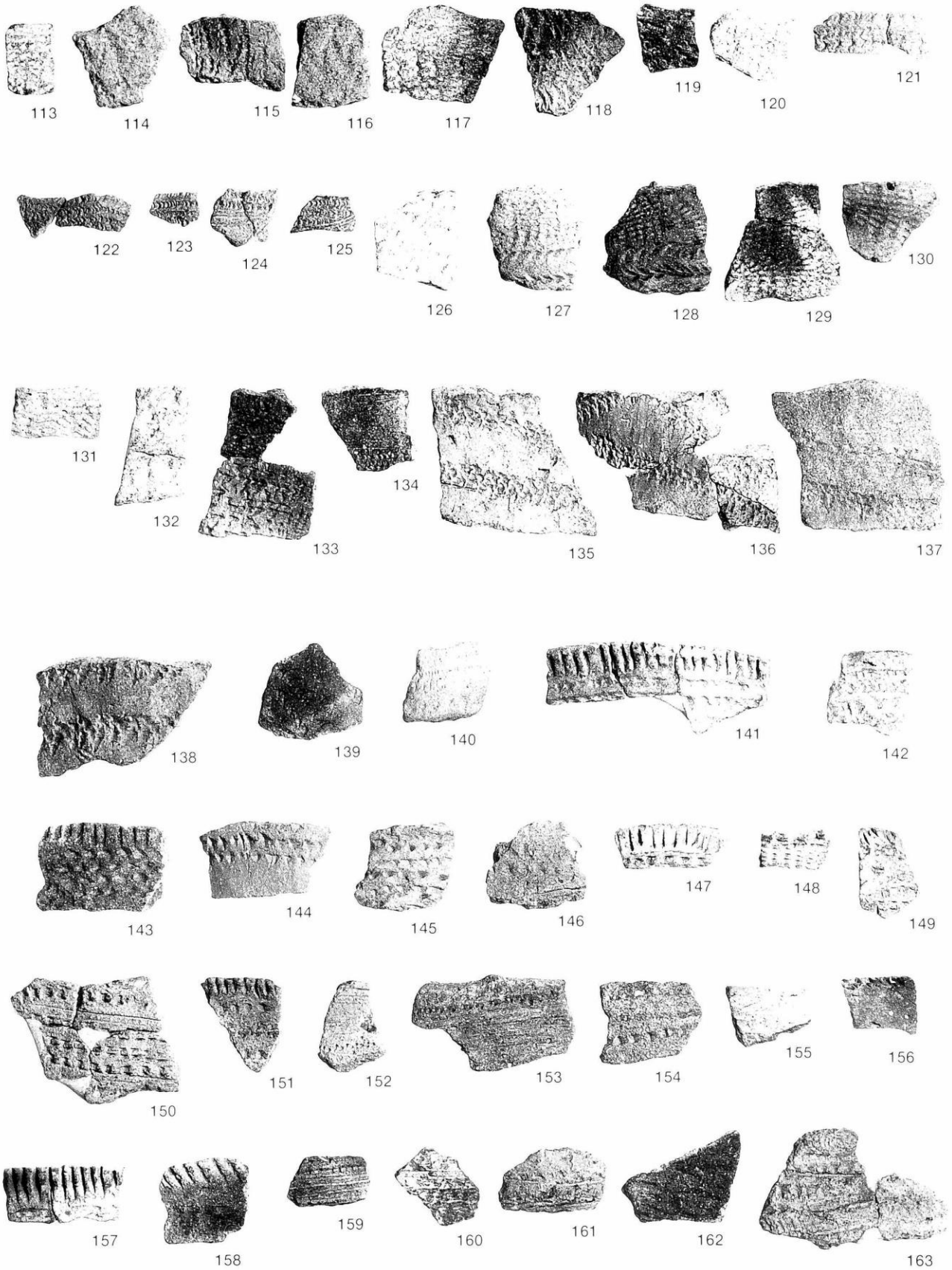
82



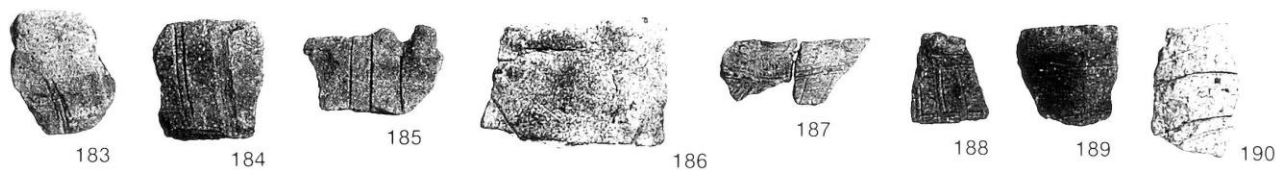
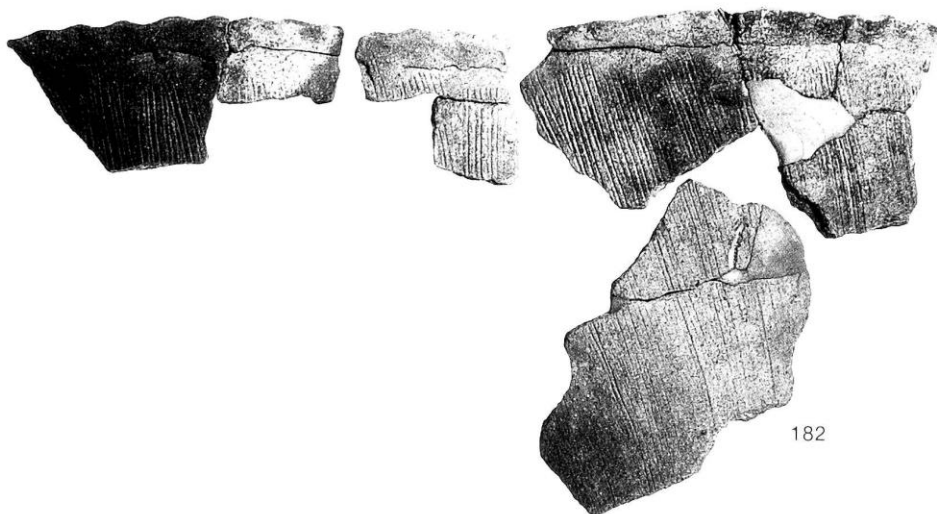
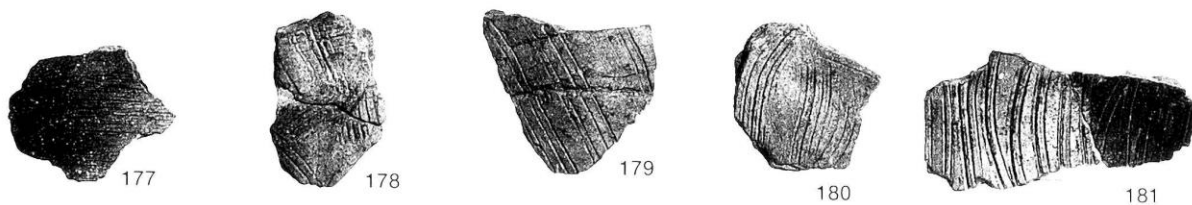
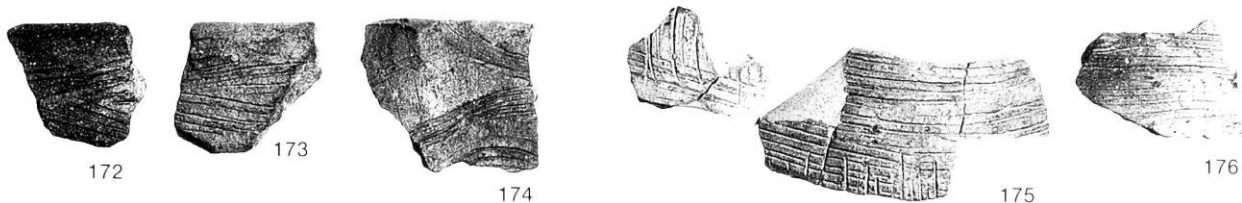
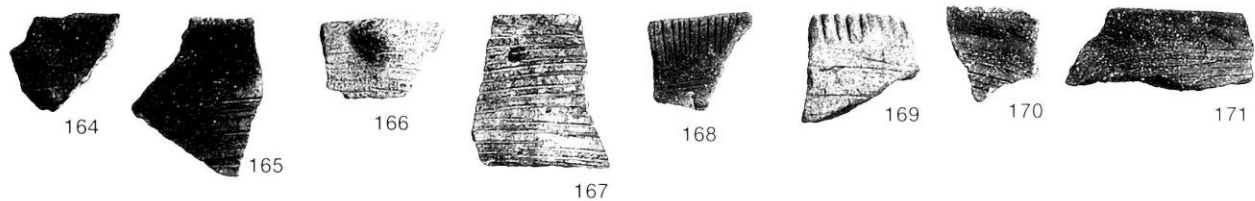
83

図版40 C1・C2区 (縄文)



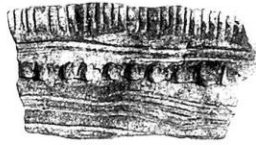


図版42 C1・C2区(縄文)





200



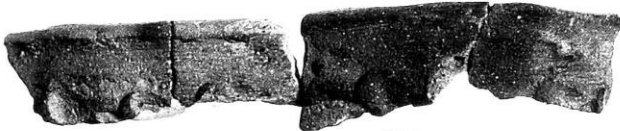
201



202



203



204



205



206



207



209



211



212



213



214



215



216



217



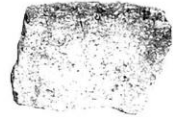
218



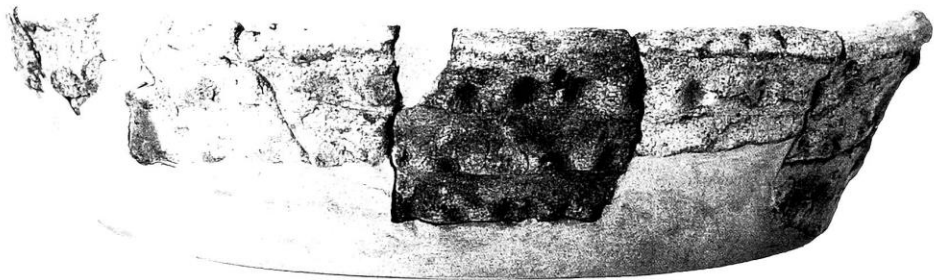
219



220



221



208



210

図版44 C1・C2区 (縄文)



222



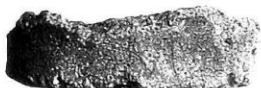
223



224



225



226



227



228



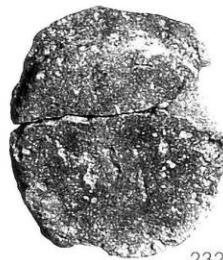
229



230



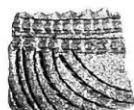
231



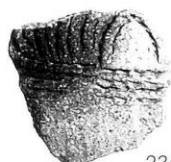
232



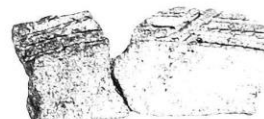
233



234



235



236



237

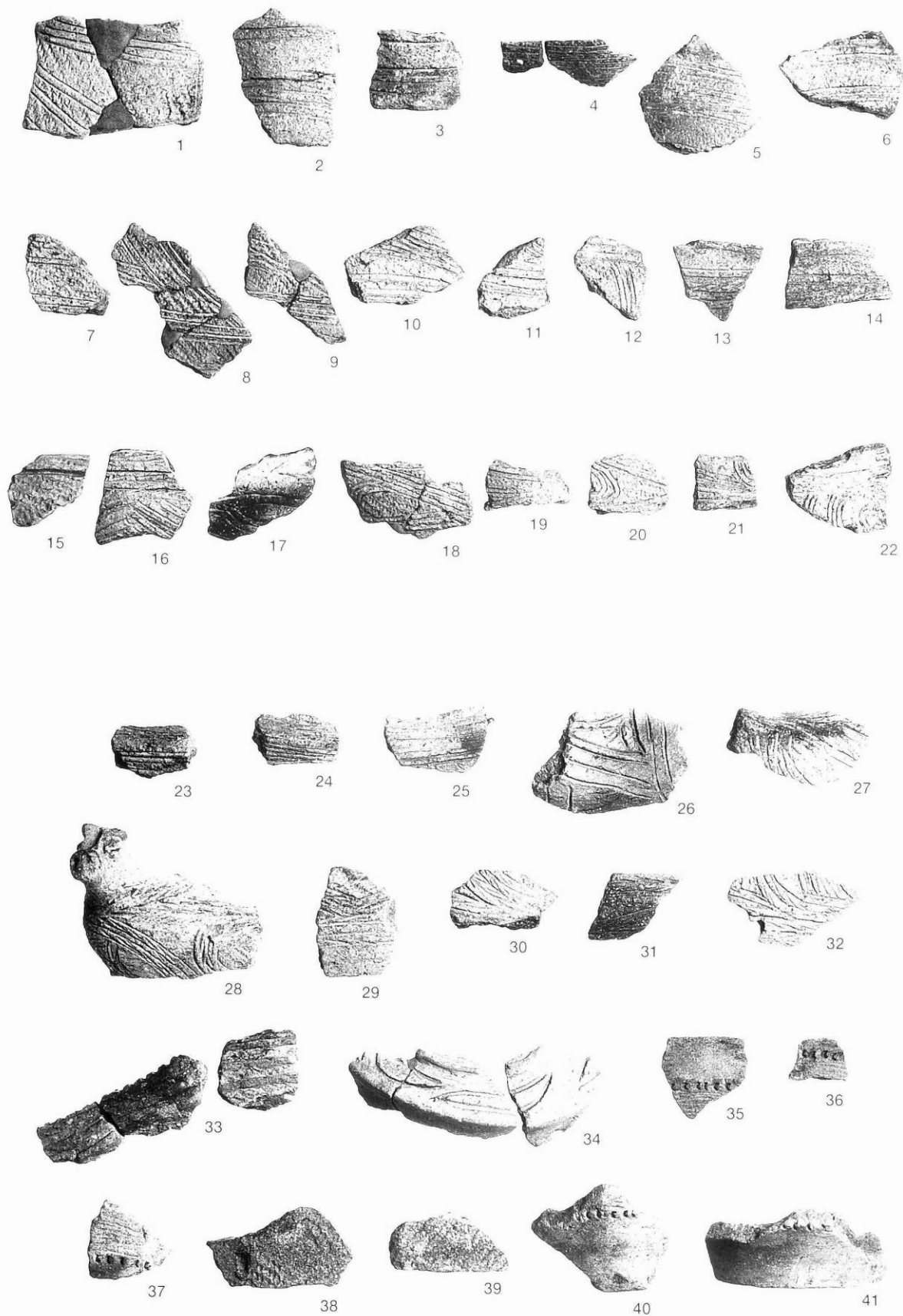


238



239

VI群土器



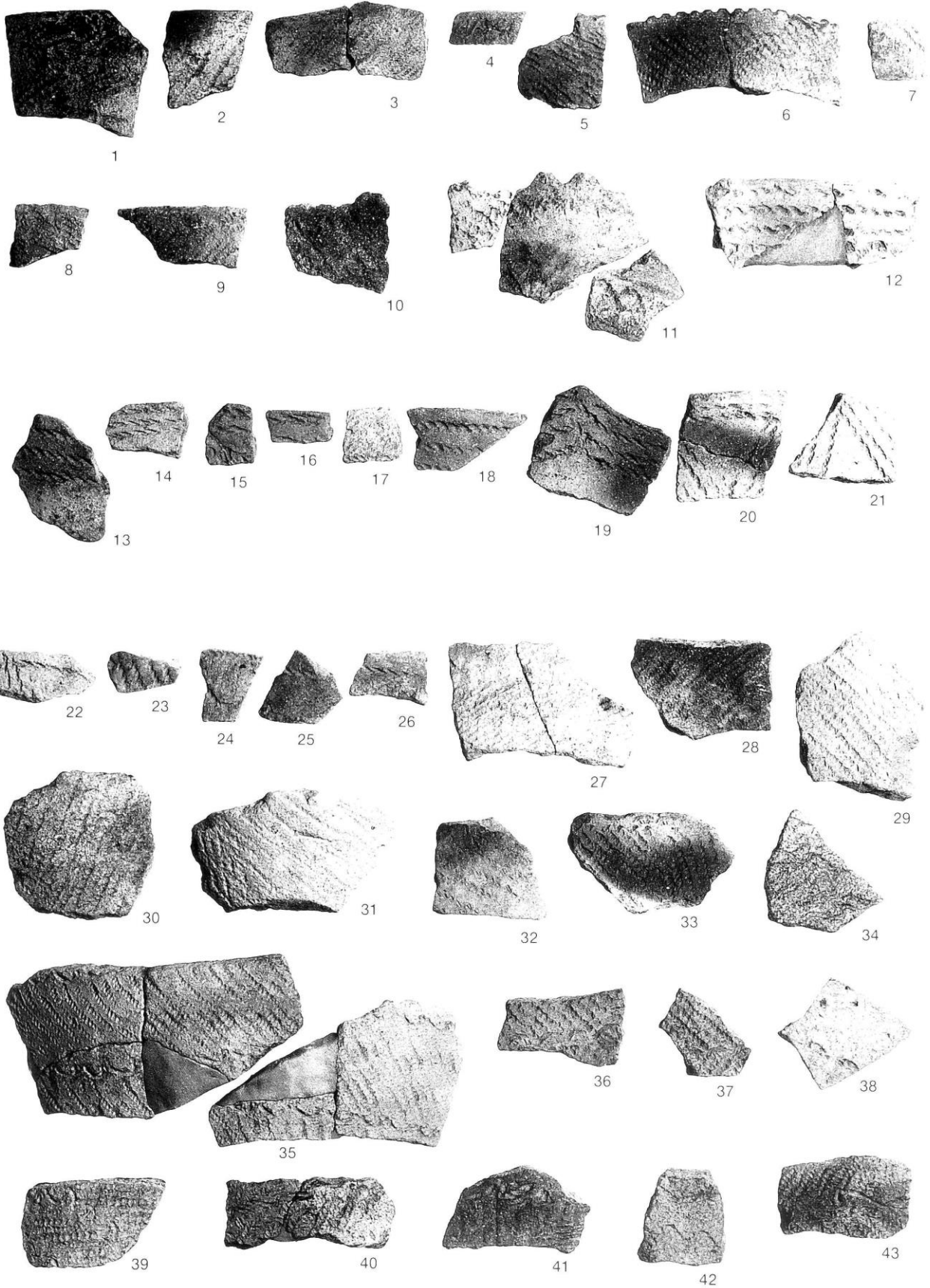
図版46 C1・C2区(縄文)

Ⅵ群土器

28

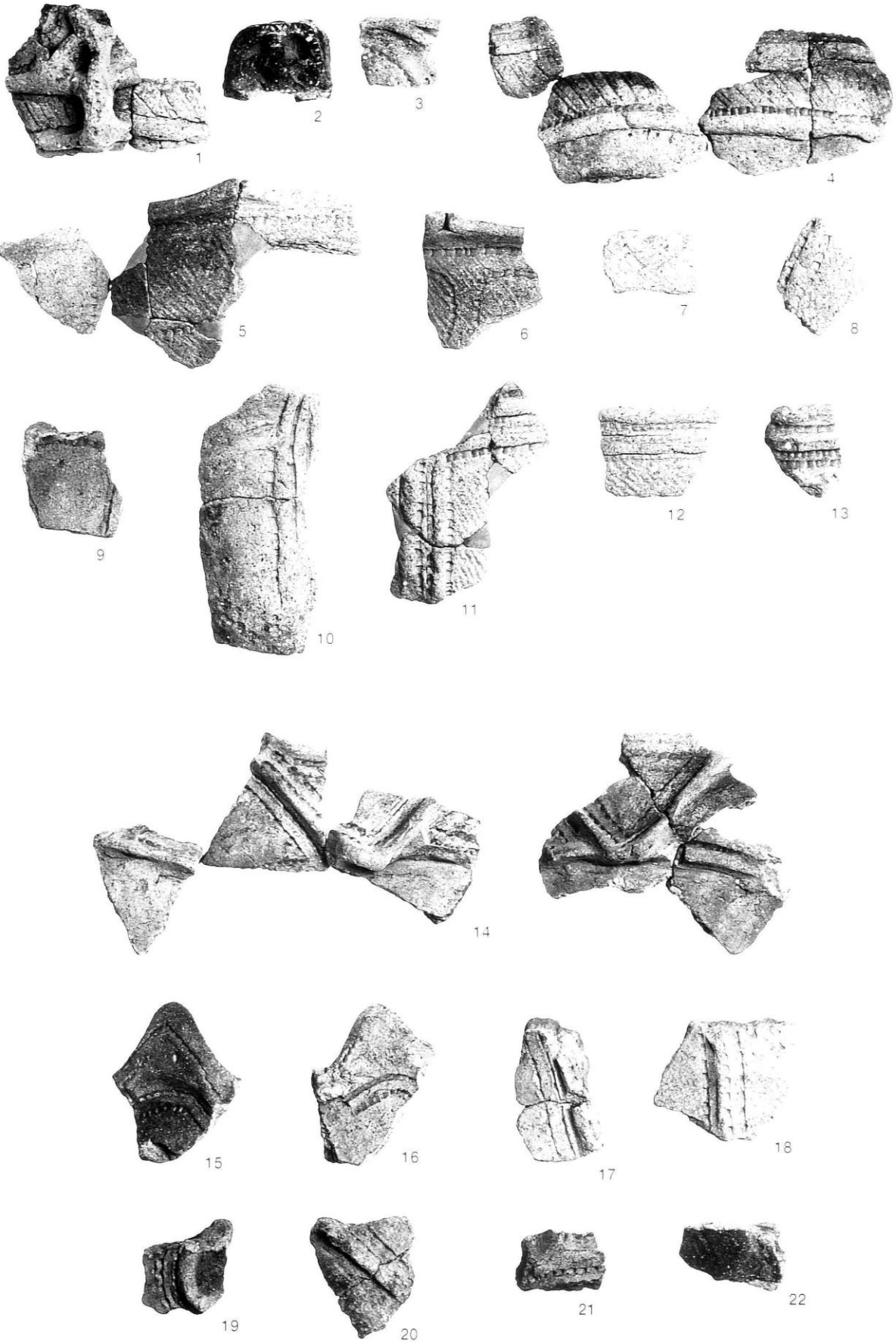


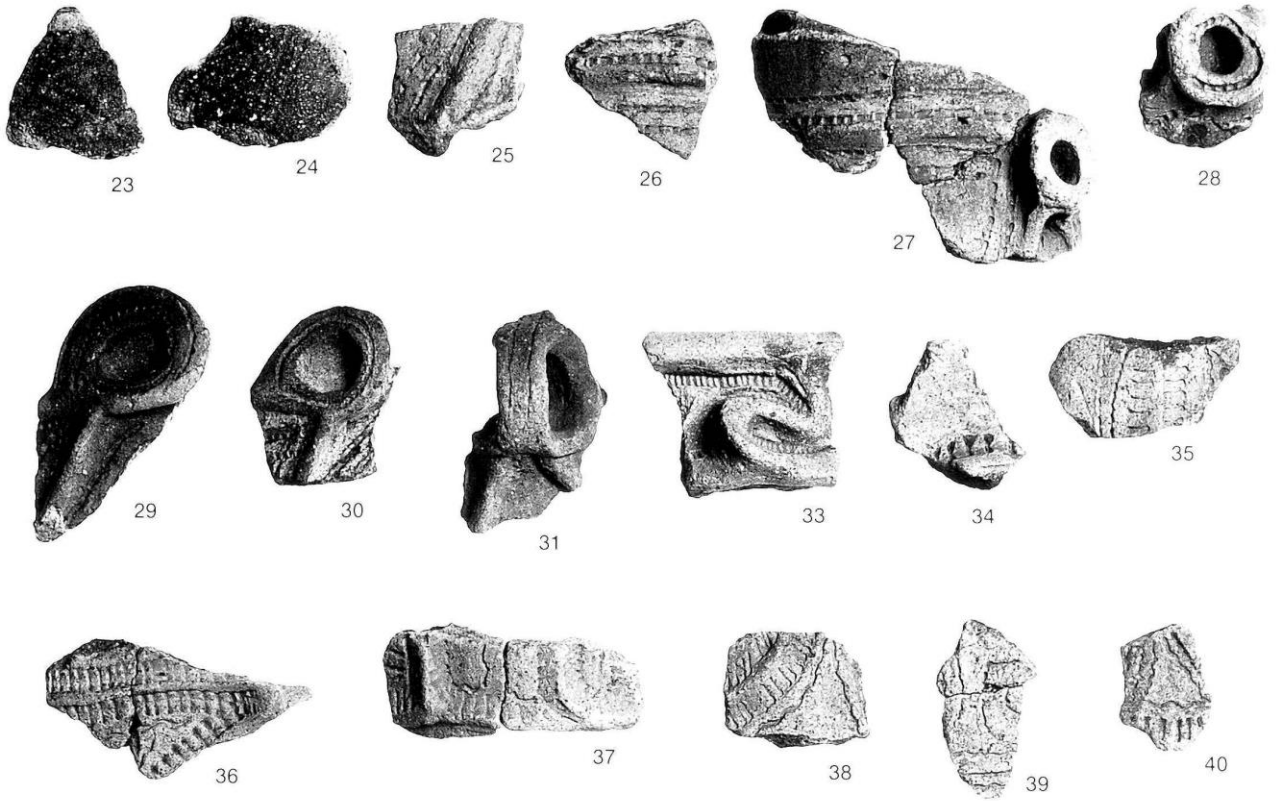
Ⅶ群土器



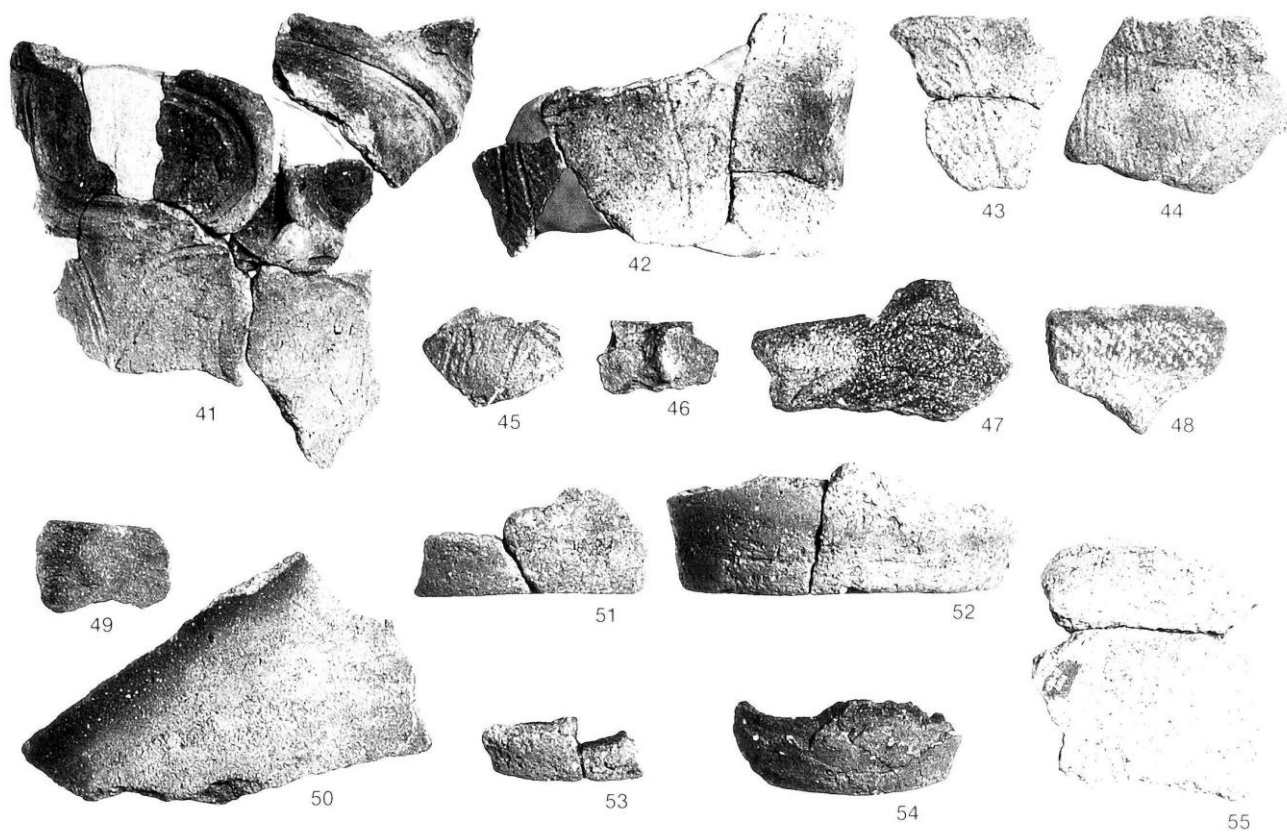
図版48 C1・C2区(縄文)

Ⅷ群土器

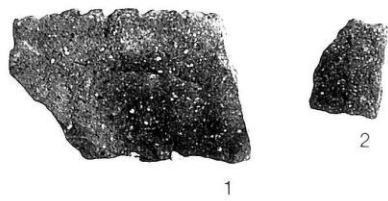




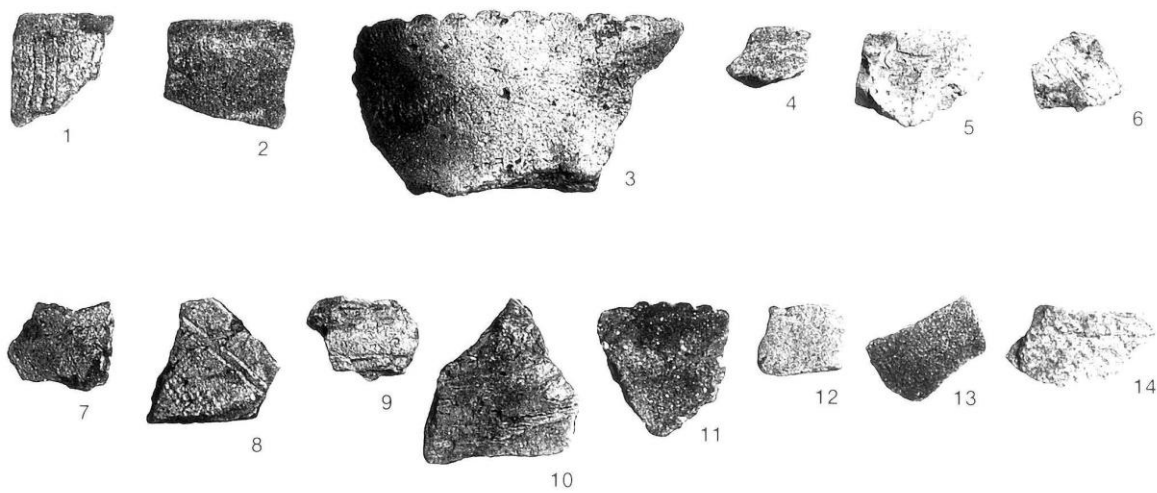
図版50 C1・C2・C3区 (縄文)



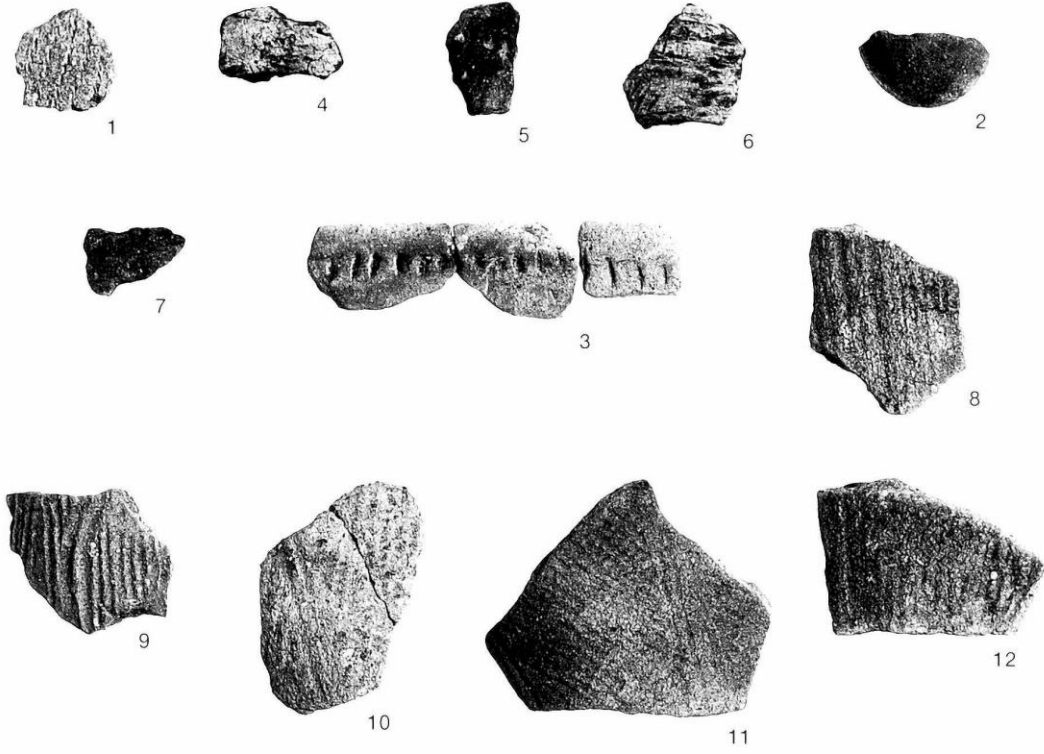
C3区
SK-241



C3区
遺構外



C4区



C5区

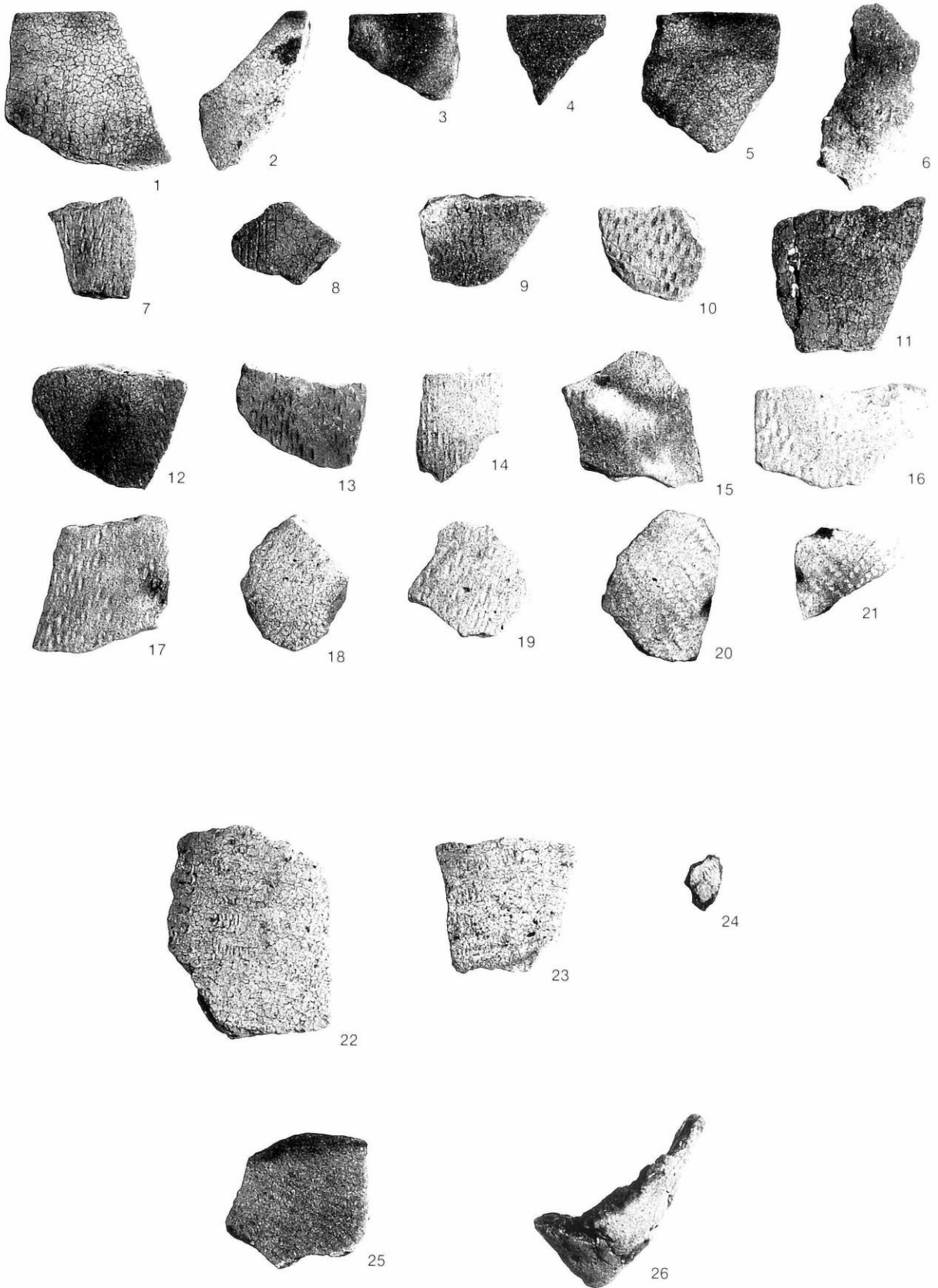


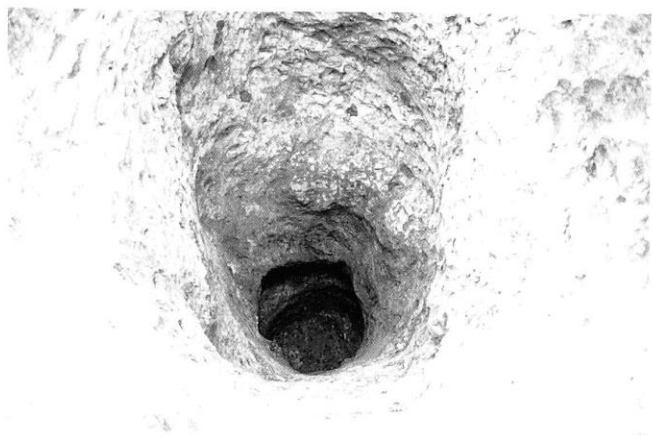
C6区



図版52 C7区 (縄文)

C7区

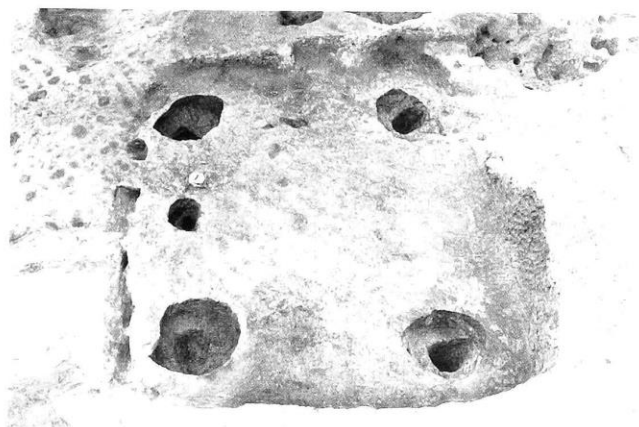




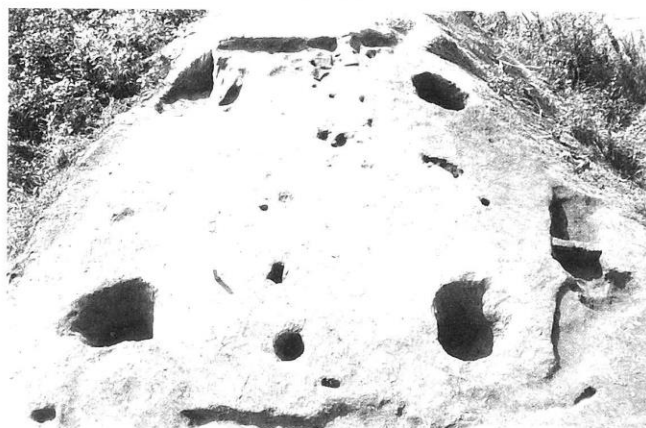
SK-241



SI-200



SI-201



SI-202



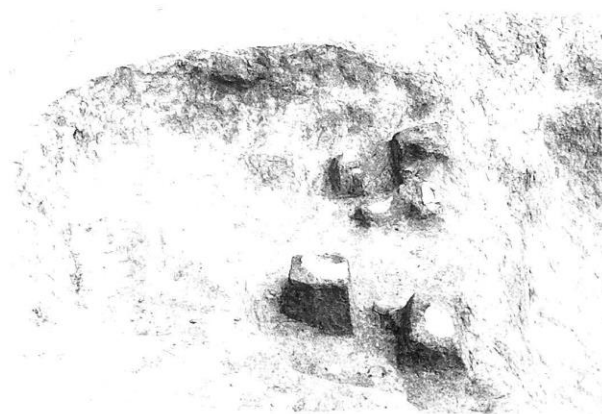
SI-202 P 2



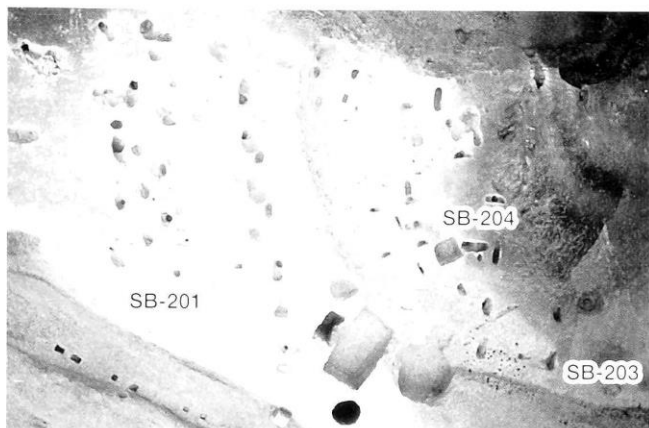
SI-203



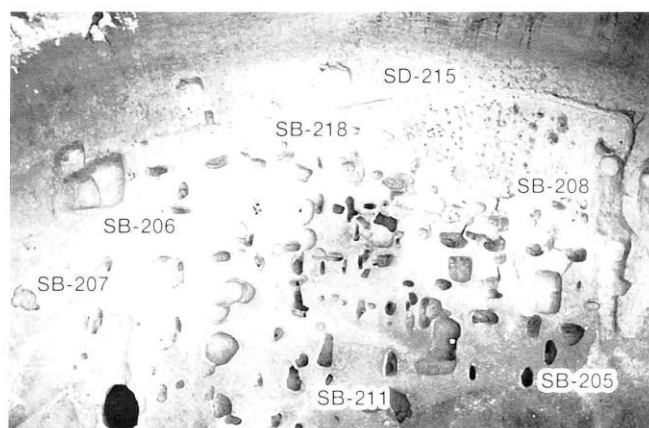
SI-203 竈



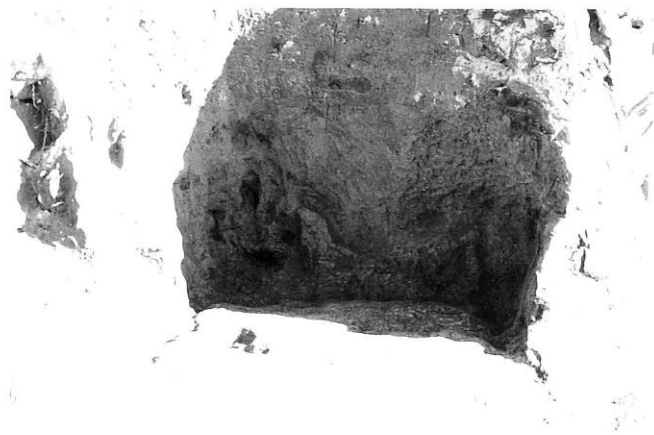
SK-234



SB-201, 203, 204



SB-205, 206, 207, 208, 211, 212, SD-215



SX-211



SX-206



SK-238



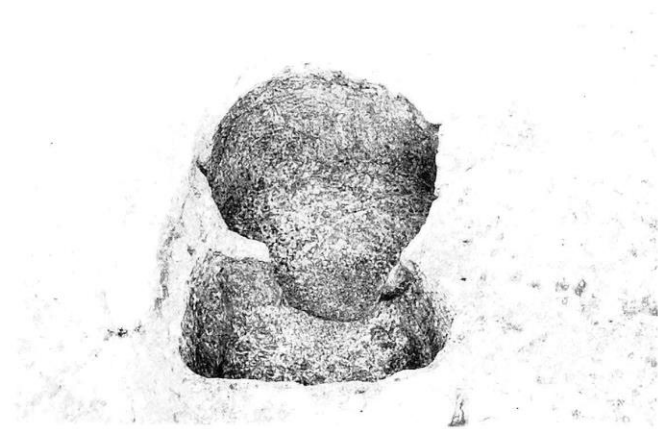
SK-239



SD-216



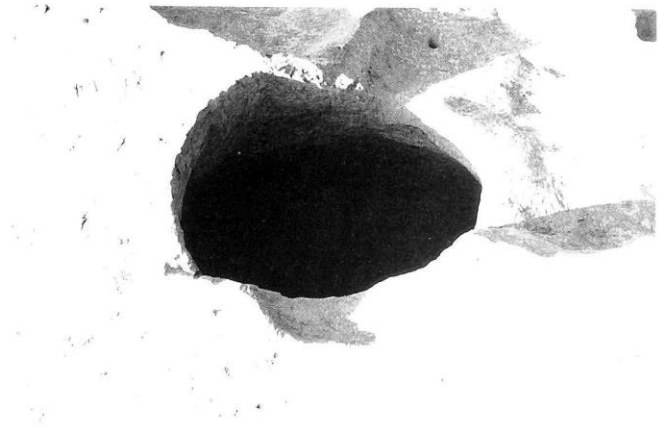
SK-242



SK-245



SK-246



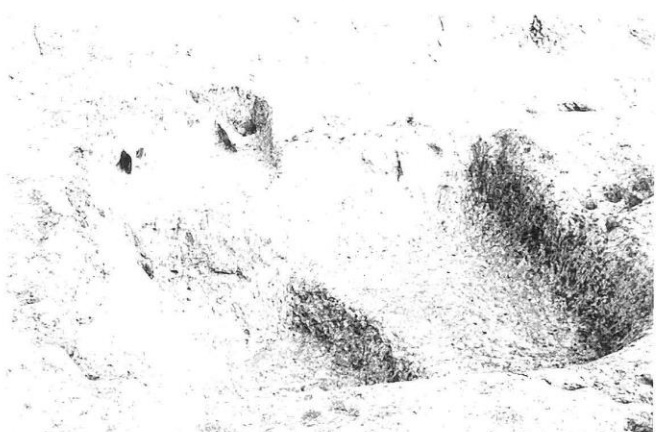
SK-247



SK-251



SK-250



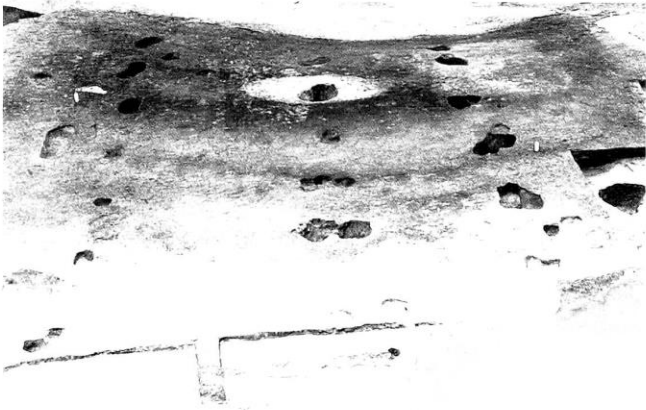
SK-248



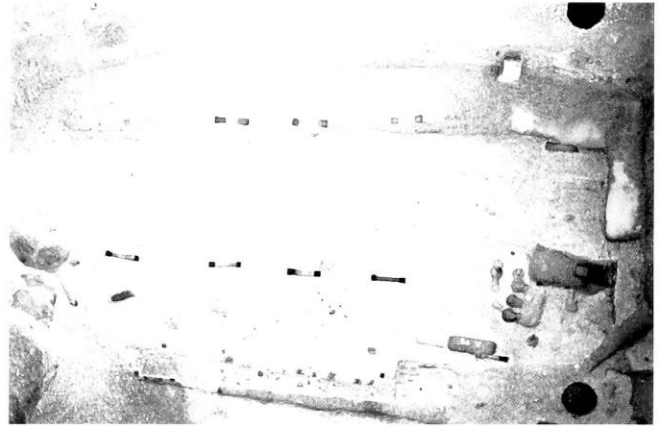
SD-213, 214



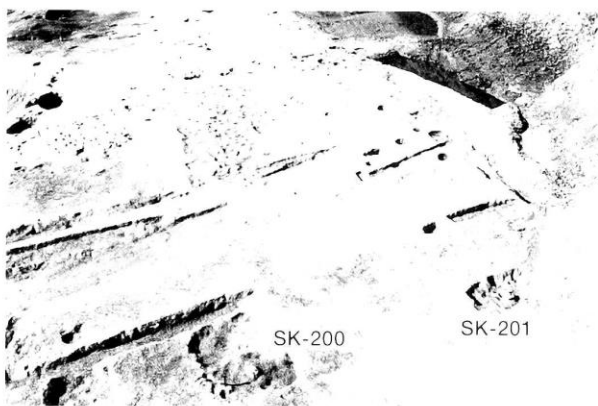
SD-212



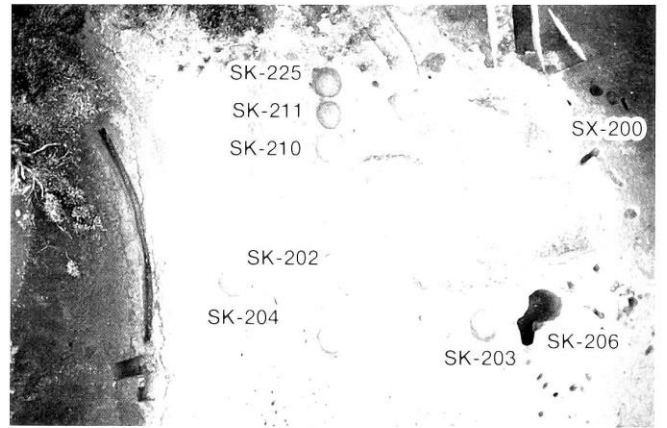
SB-200



SB-202



SK-200, 201



土坑群



SK-210, 211



SK-210, 211, 225



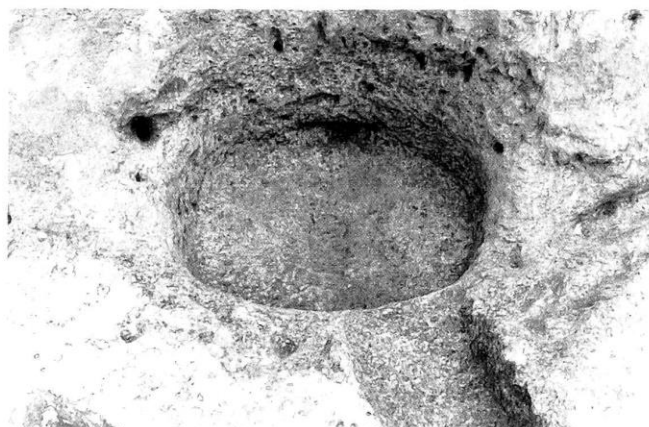
調査風景



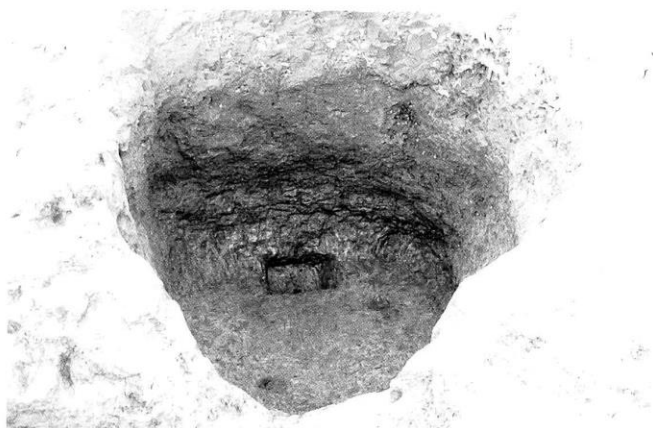
水利施設群



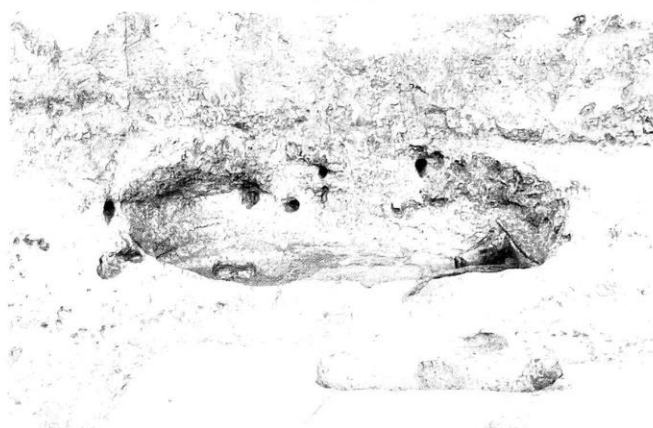
SX-208



SK-228



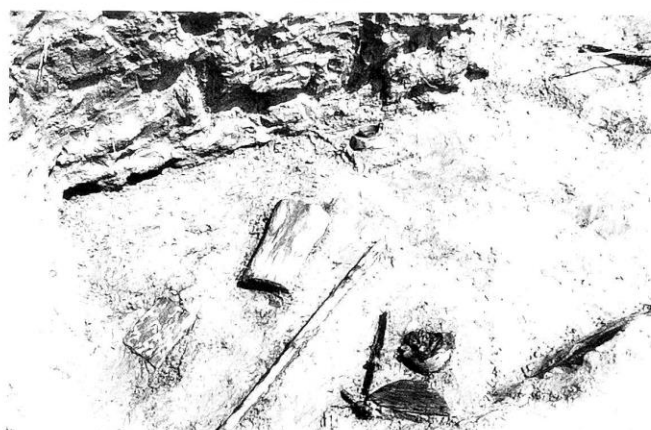
SK-229



SX-205



SX-209, 210



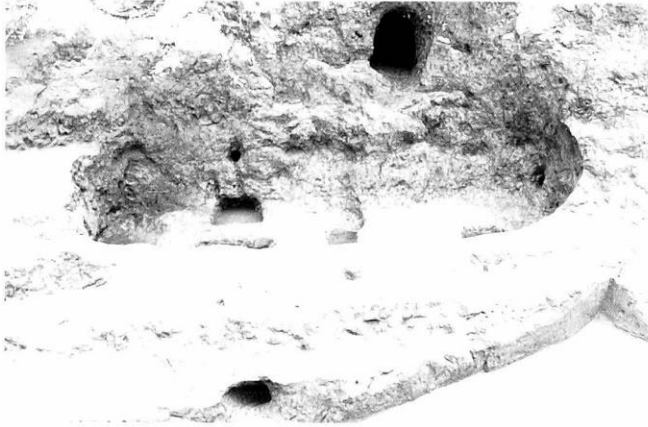
SX-210 遺物出土状況



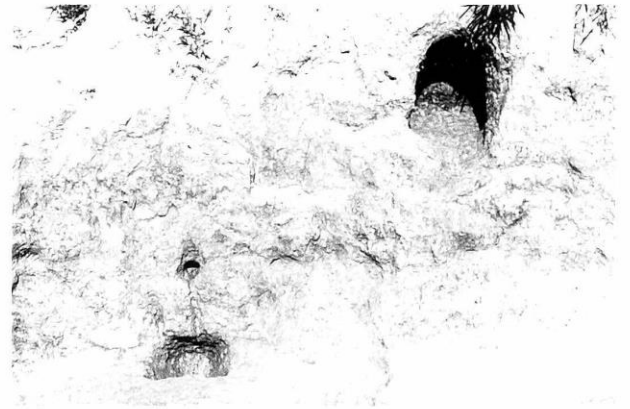
SX-207



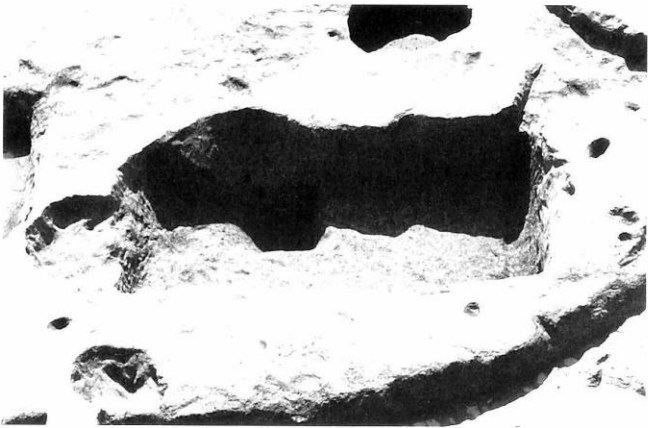
SX-207 遺物出土状況



SX-204



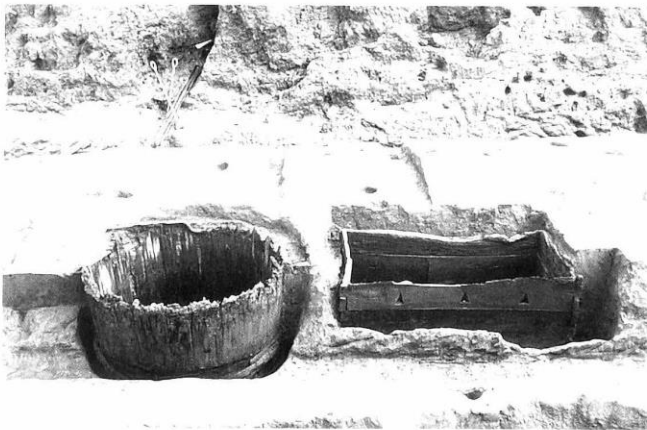
SX-204



SK-231



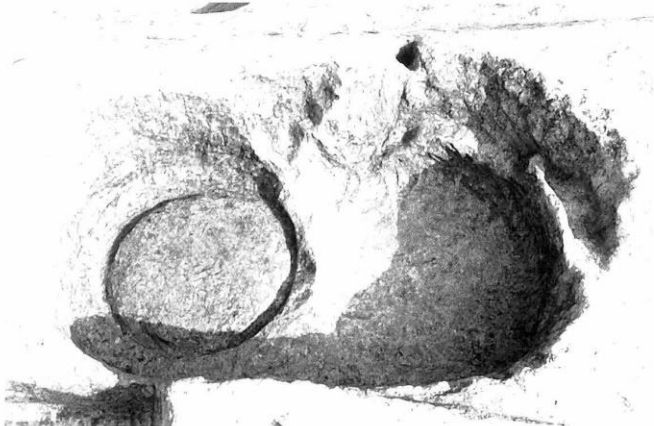
水利土坑群



SE-200, SK-233



SK-221, 222



SK-215A · B



SK-237



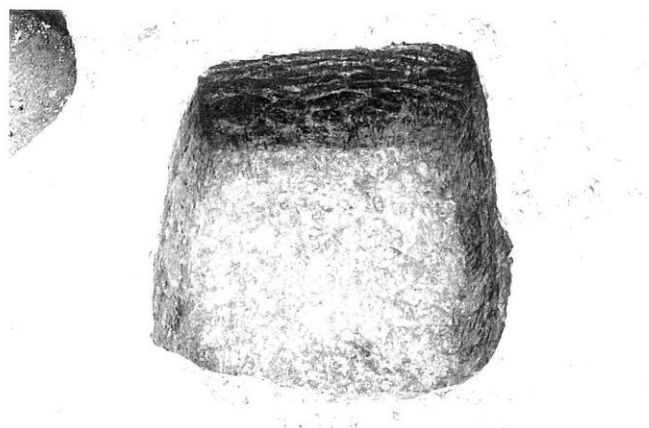
SK-230



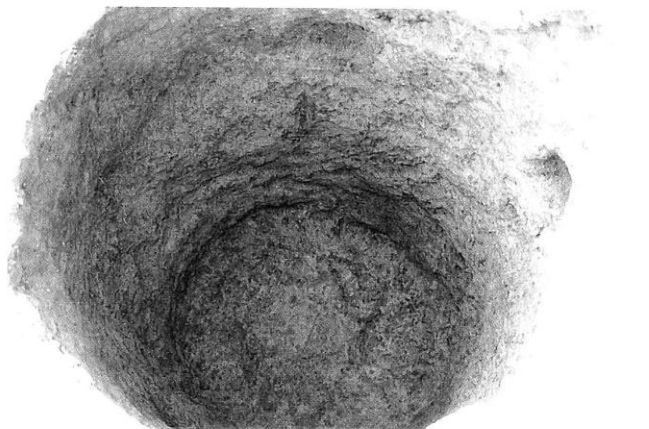
SK-230



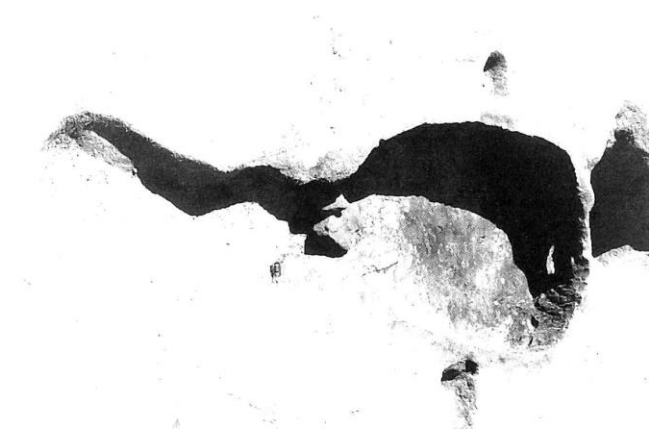
SK-235



SK-219



SE-203



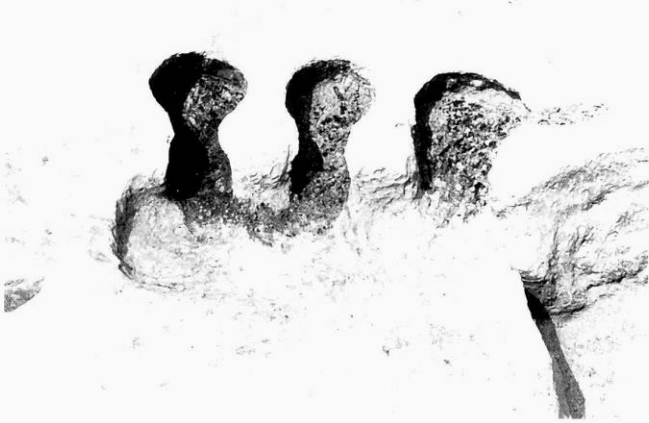
炭窯 200



炭窯 201



炭窯 202



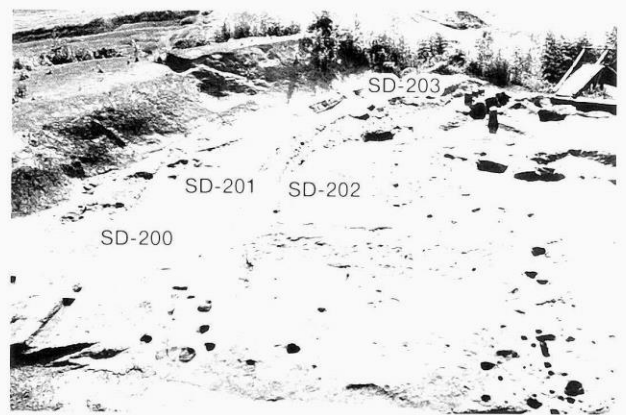
SK-220



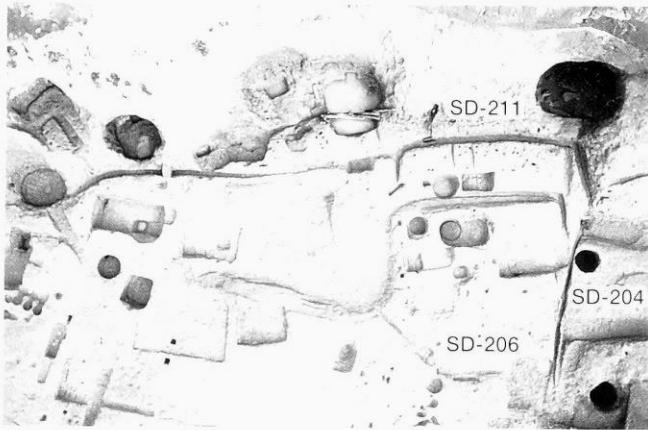
SK-220



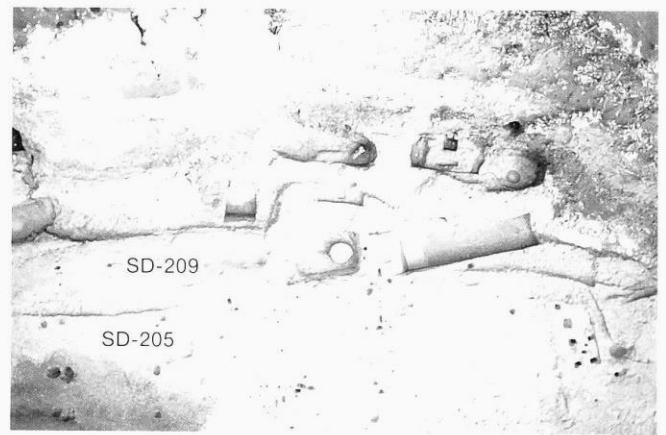
SX-200



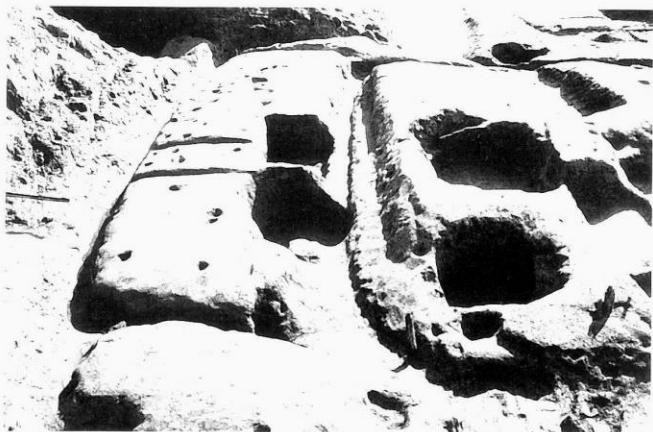
SD-200, 201, 202, 203



SD-204, 206, 211



SD-205, 209

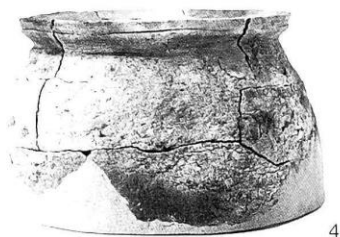


水利土坑群と溝

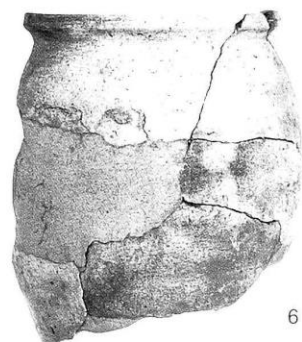
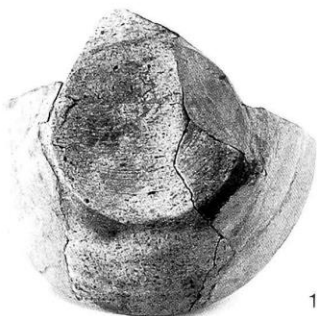
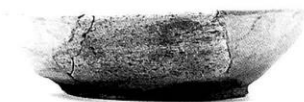


SD-206

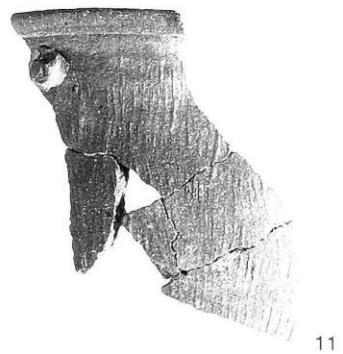
SI-202



SI-203



SK-234



SI-201



5F84-3



SX-203



5F64-19



5F74-2



SK-234



图版62 C3区(中世)

SX-211



SK-248



SX-203



SD-216



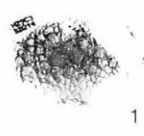
SD-213



SD-213



SD-214



SX-203



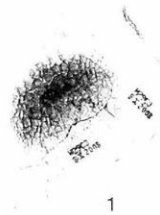
SX-203



SK-216



SX-200



SX-200A



SX-200A, B



SB-201



SD-213



SX-206



SK-242



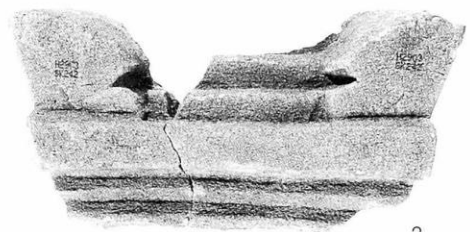
SK-242



SD-213



SK-242



SK-228



SK-221



SX-200B



SX-209



SK-216



SD-204



SK-223



SX-200A



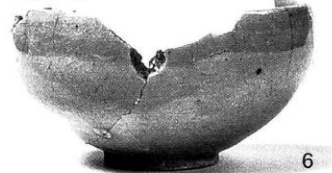
SK-232



SX-200B



SX-200



SK-212, SK-232



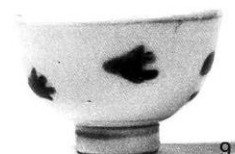
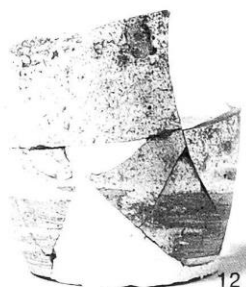
SX-200



SE-200

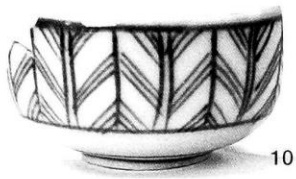


SX-200A, B



図版64 C3区(近世)

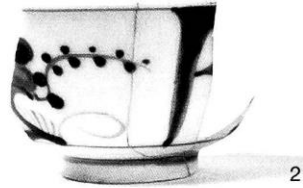
SD-204



SD-210



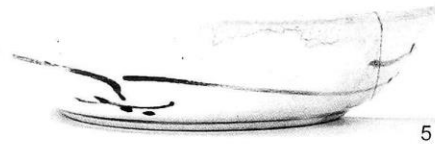
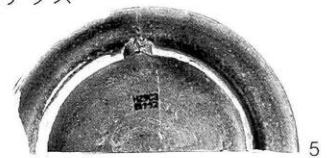
5F84-25



SX-201



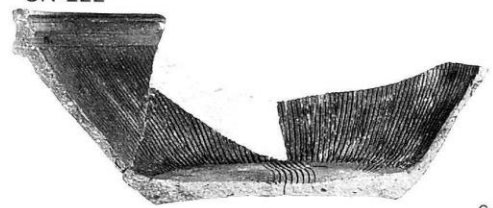
西テラス



西テラス



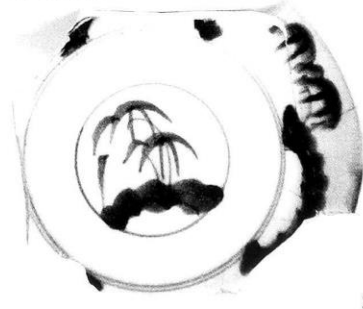
SK-222



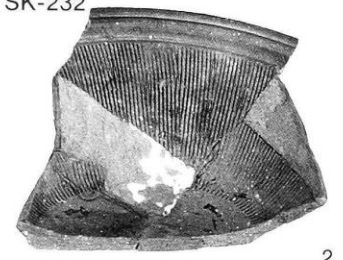
5F74-17



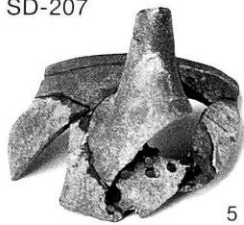
5F84-25



SK-232



SD-207



SX-210A



9

SX-209



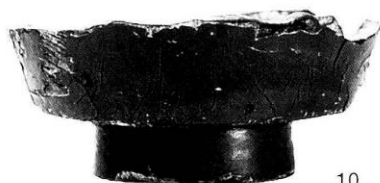
8

SK-233



4

SX-210A



10

SX-209B



4

SX-209B



3

5F74-19

5F84-10



37

SD-203



20

5F74-19



39

SX-209B



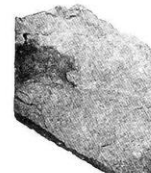
6

西テラス

5F74-17

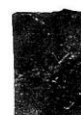


35



34

5F84-10



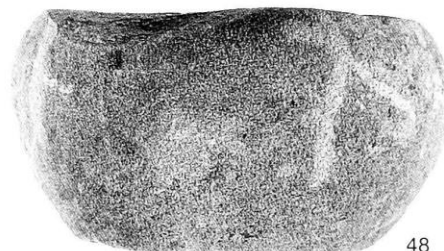
38

5F74-19



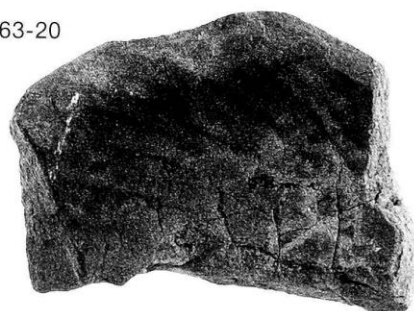
39

5F63-20



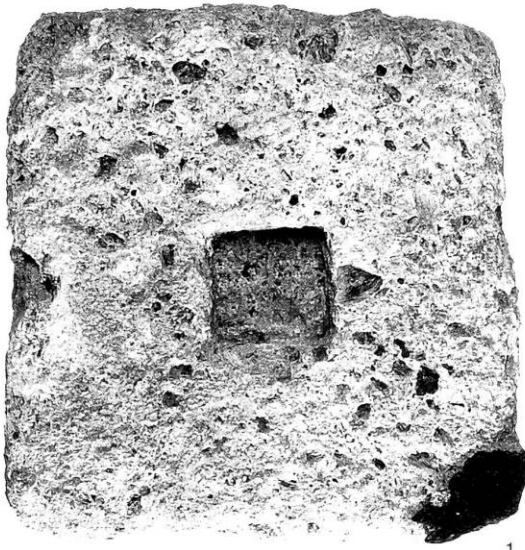
48

5F63-20



42

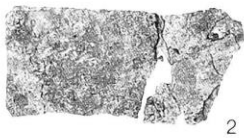
SX-207



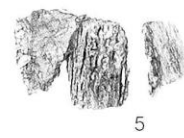
炭窯200



SK-200



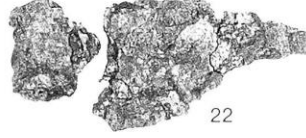
SK-201



SK-200



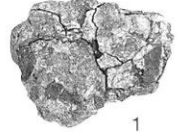
SX-200



SK-200



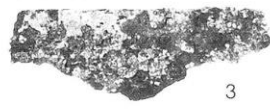
SX-202



SK-221



SK-230



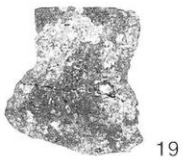
SB-200



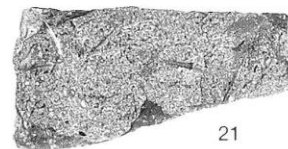
SX-200



SD-204



SD-209



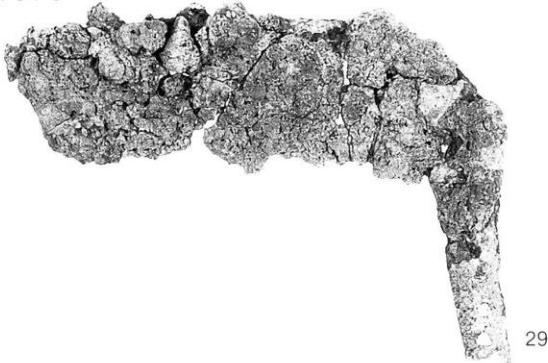
SX-200



SX-200



5F84-9



SX-200A



5F84-14



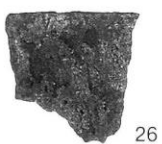
SK-225



5F84-24



5F74-19



SD-214



SK-242



SK-207





SK-307



SK-319



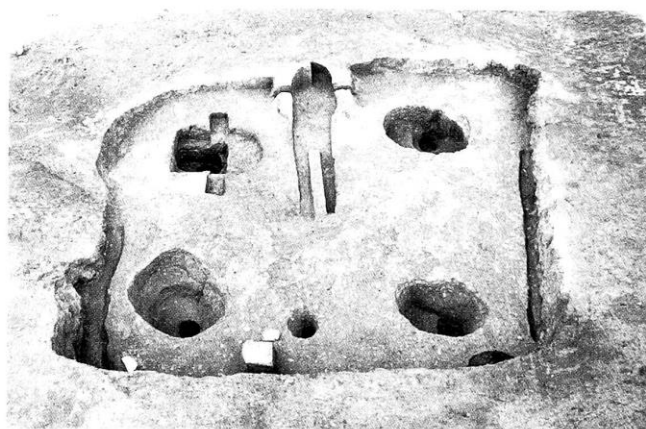
SI-301



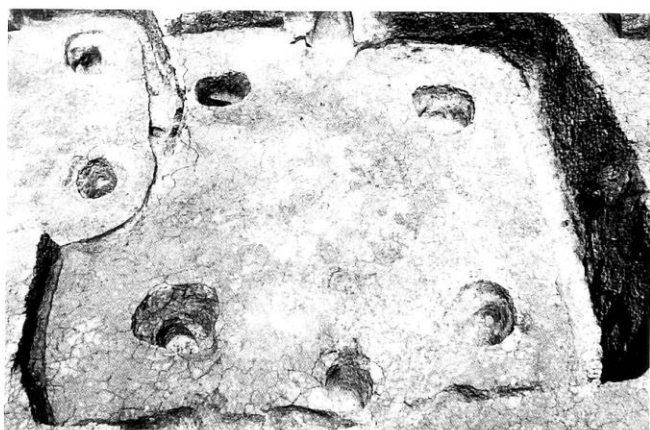
SI-301 遺物出土状況



SI-302



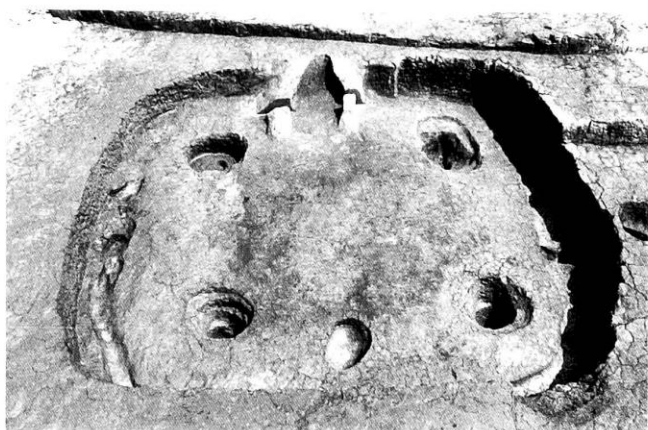
SI-303



SI-304



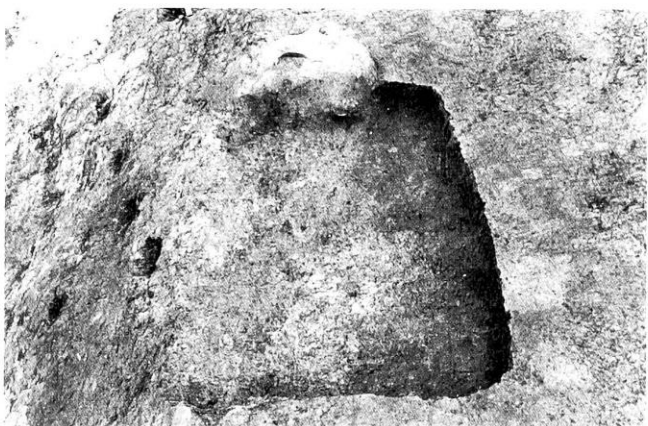
SI-304 竈



SI-305



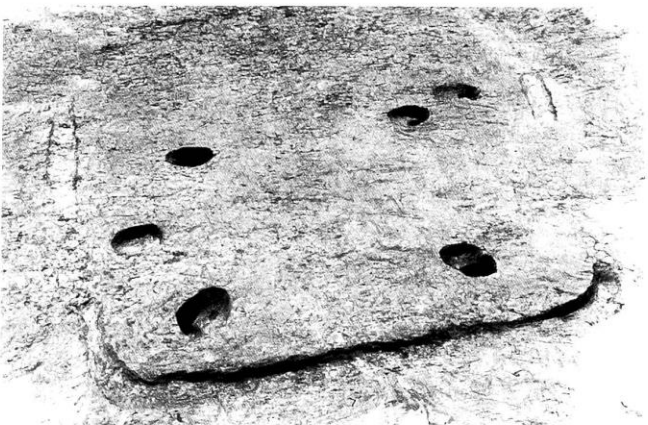
SI-305 竈



SI-306



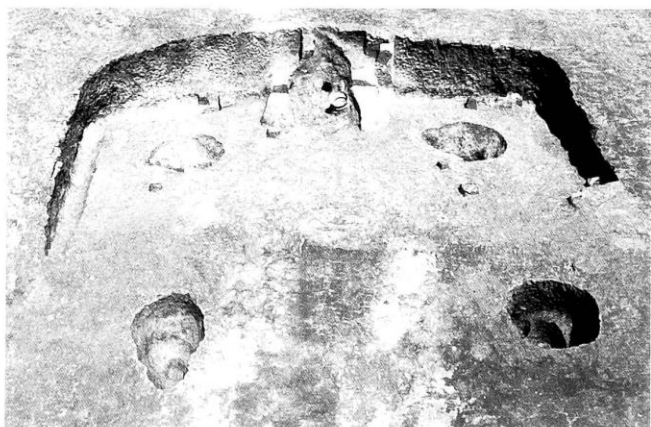
SI-306 竈



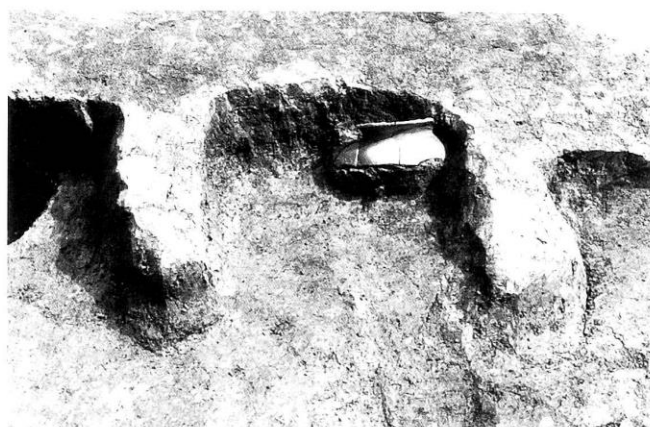
SI-307



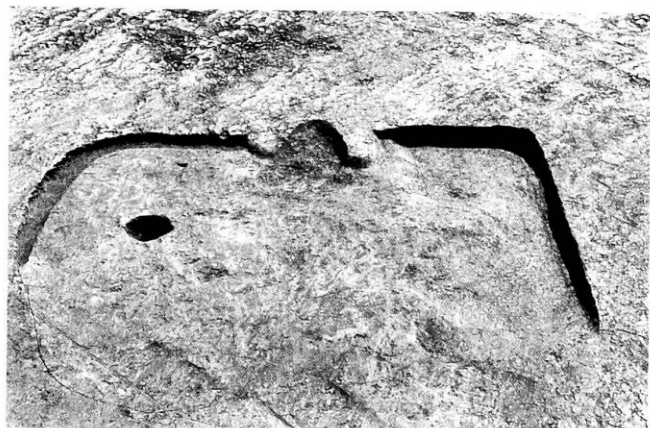
SI-308



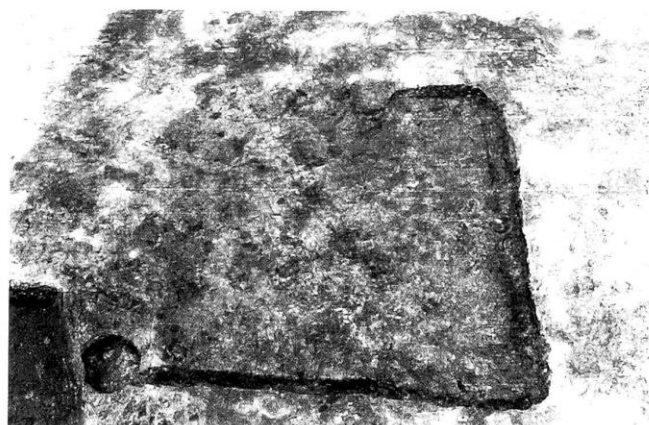
SI-309



SI-309 竈B



SI-310



SI-311



SI-312



SI-313



SI-314 遺物出土状況



SI-314



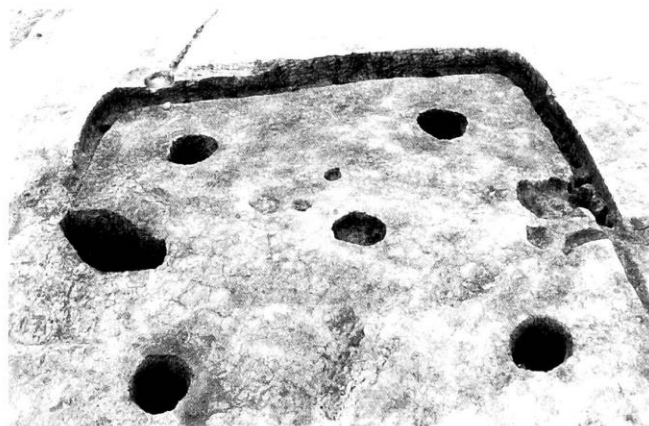
SI-315



SI-317



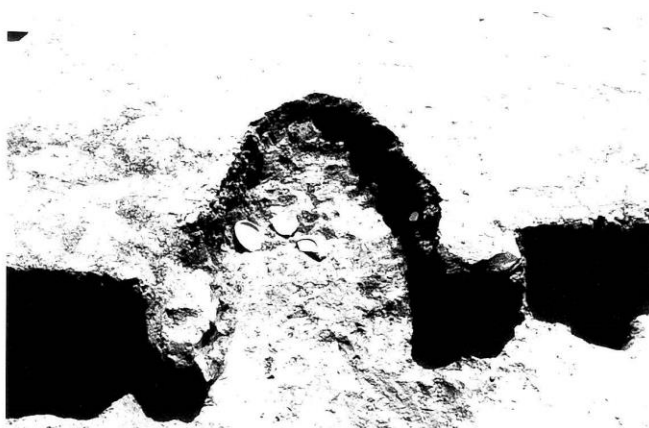
SI-318



SI-319



SI-320



SI-320 竈



SI-321



SI-322



SI-323



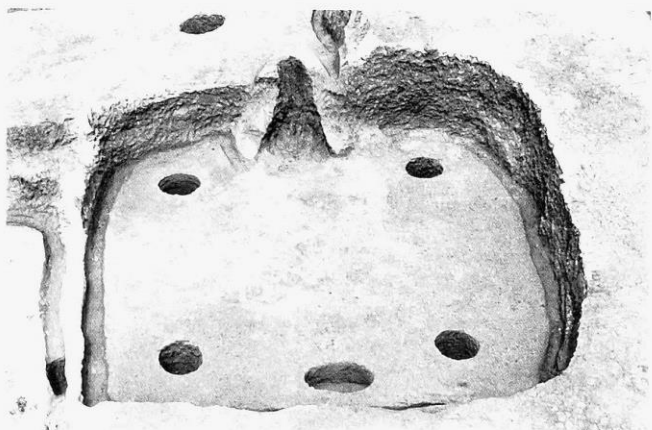
SI-323 遺物出土狀況



SI-324



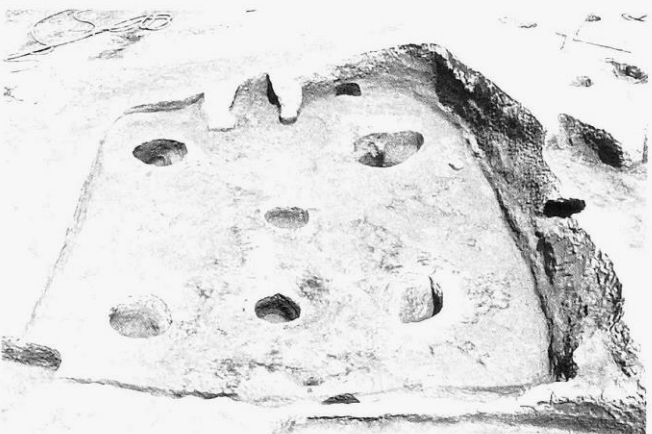
SI-324 遺物出土状況



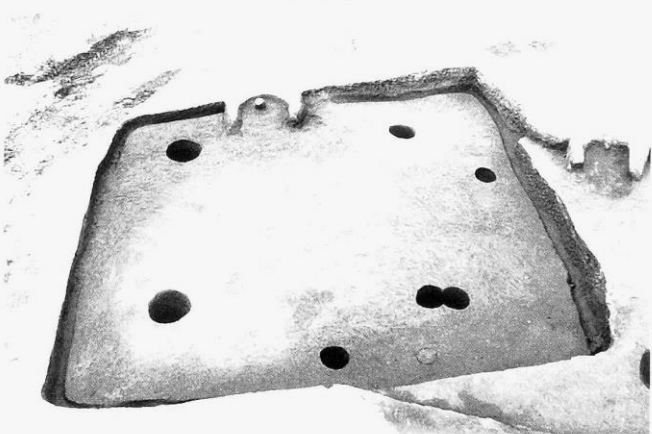
SI-325



SI-326



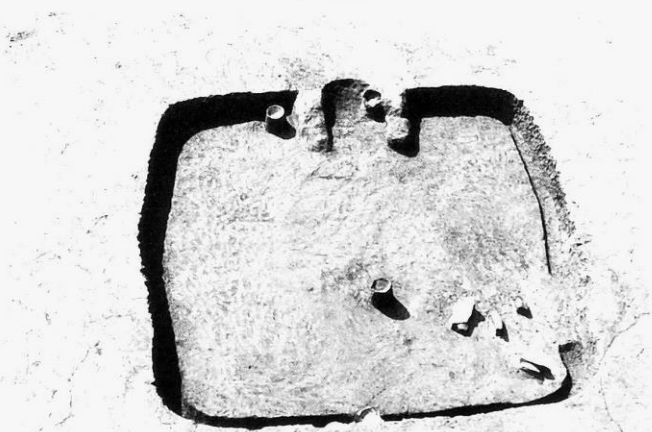
SI-328



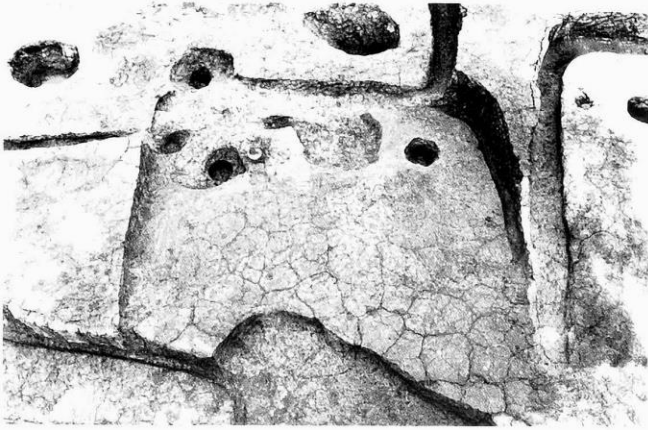
SI-329



SI-330



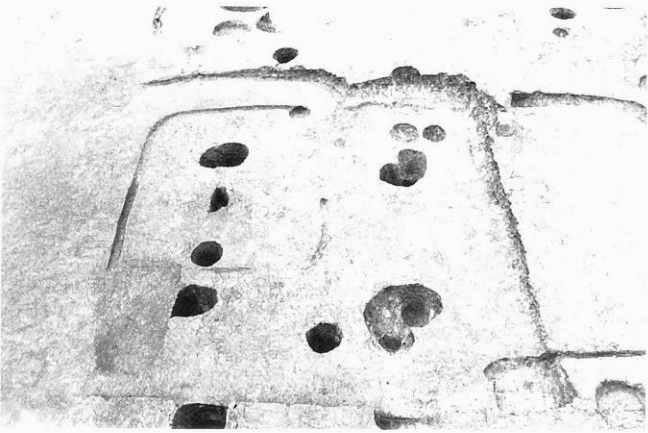
SI-331



SI-332



SI-334



SI-335



住居跡群



SI-336



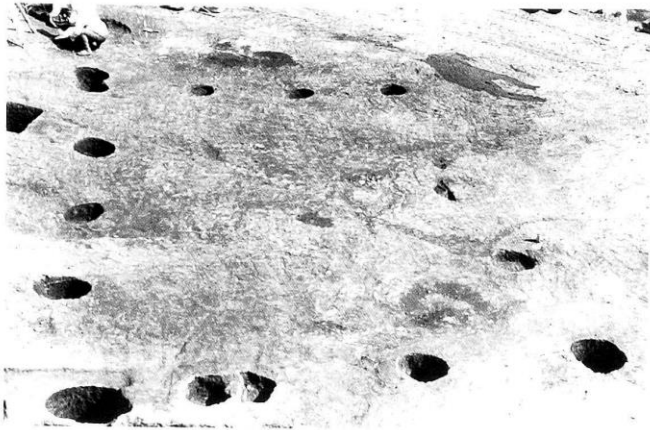
SI-336 遺物出土状況



SI-337



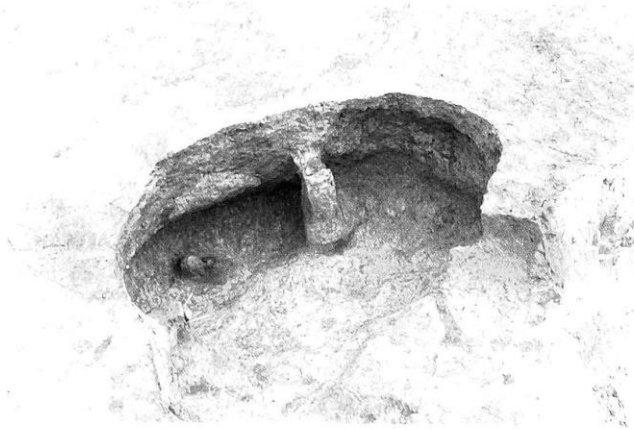
SI-337 遺物出土状況



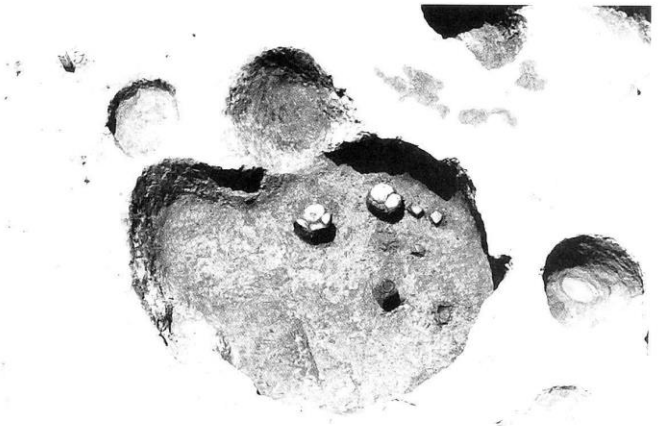
SB-301



SB-305



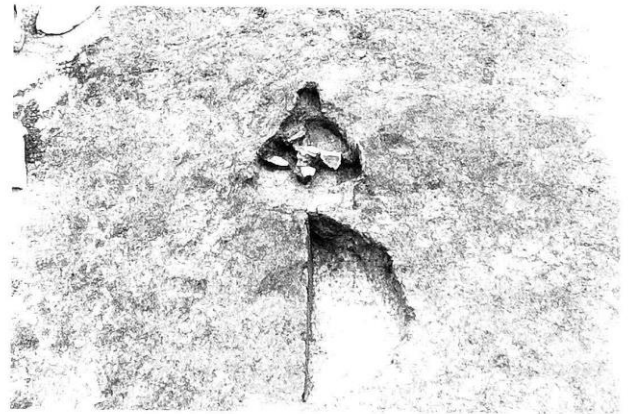
SK-308



SK-320



SX-303



SX-303 遺物出土状況



SK-301



SK-302



SK-303



SK-305



SK-306



SK-324~335



SX-302



SD-302



SD-303



調査風景

SI-301



1



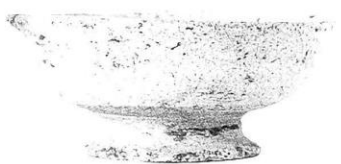
2



3



4



5

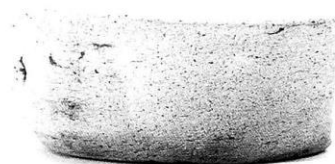


7

SI-302



1



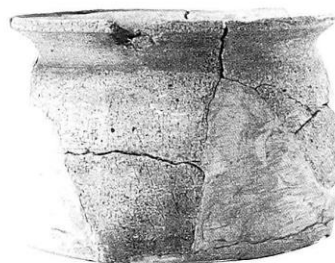
5



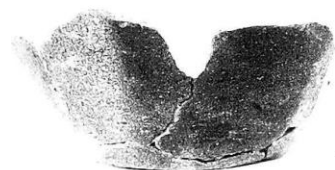
6



7



18



19



20

SI-303



2



3

SI-304



4



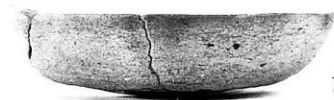
1



2



4



7



12



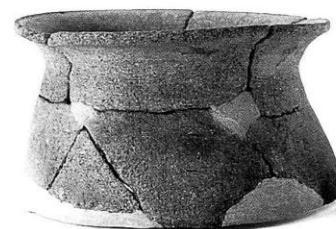
13



14



16



27

SI-305

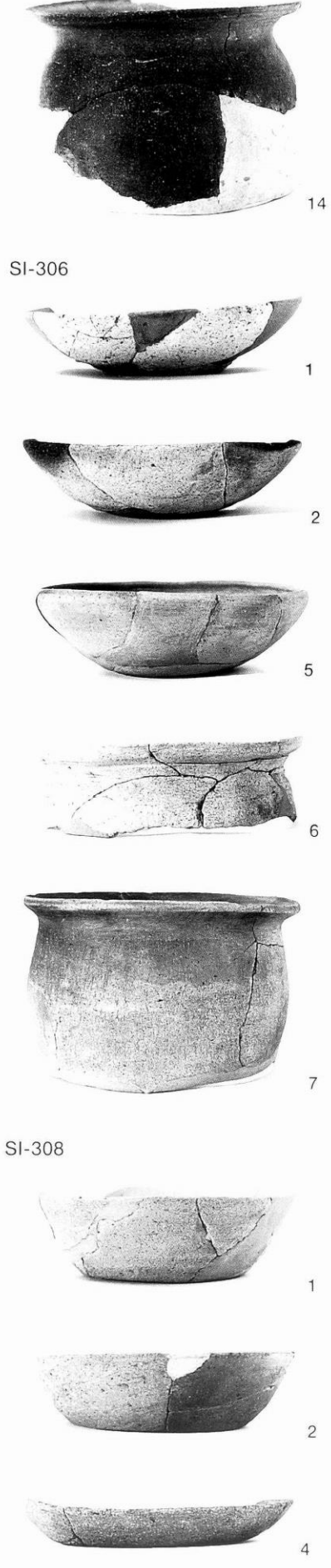
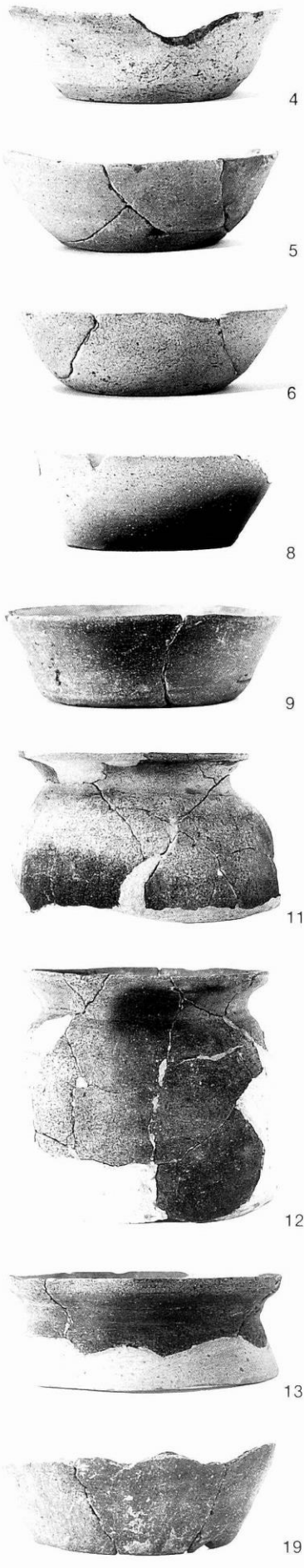


2



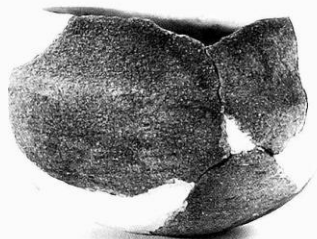
3

図版76 C4区 (古墳・古代)





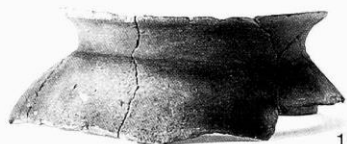
9



3



2



11



6



3



12

SI-315



1

SI-321



1

SI-311



3

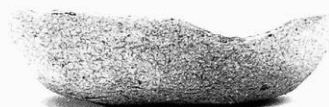


2

SI-314



1



2

SI-323



7



2

SI-317



1



2



7

SI-319



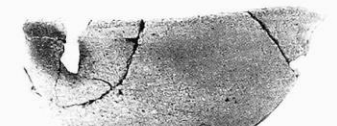
2



6



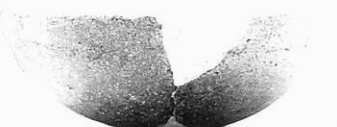
3



9



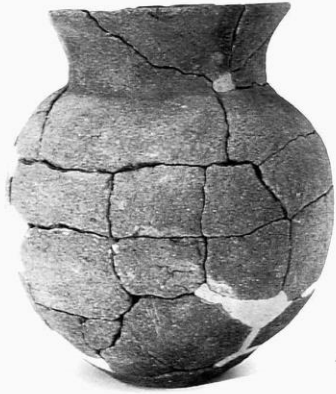
4



10



11



15



16



20



22



23



26

25

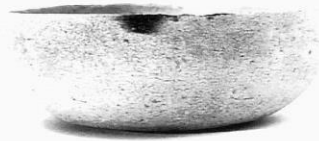
27

28

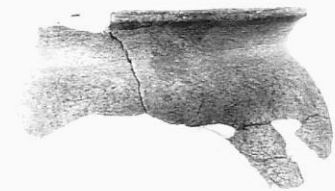


24

SI-324



2



4



6

SI-325

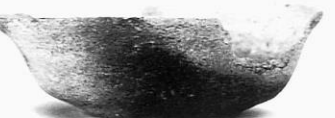


5

SI-327



1



2



3

SI-328



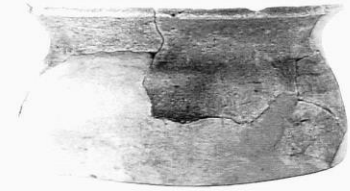
2



3



5



8

SI-329



1



2



4

SI-330



1



2

SI-331



1



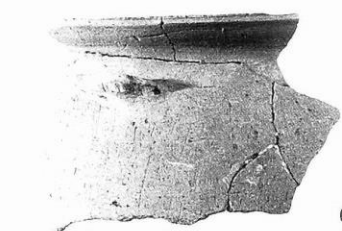
2



3



4



6



4



5



7



8



9

SI-337



1



2



3

SK-320



3



4



5

SI-332

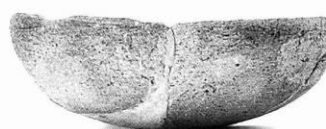


1

SI-334



1



2



4



4



5



6

SK-310



6



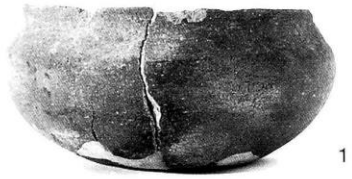
10



1

图版80 C 4区 (古墳・古代)

SK-323



1

SX-303



1



2



3



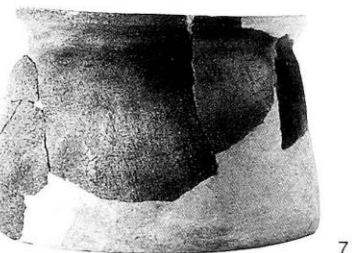
4



5



6



7

遺構外



1



4



6



7



8



10



12



13



15



17



18



19



20



21



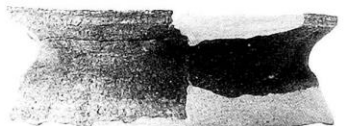
22



35



36



38



41

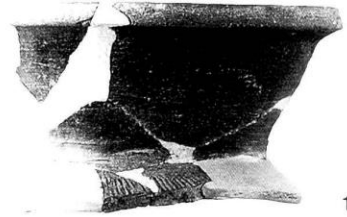
須恵器



9



11



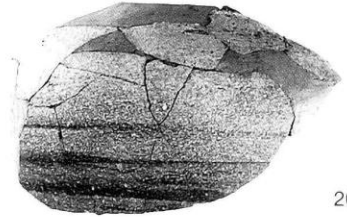
17



17



16



20

SI-305



20

SI-309



13

SI-334



14

SK-318



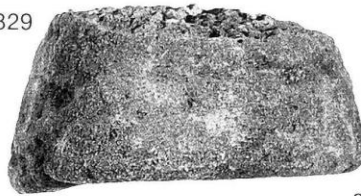
1

5F25-21



3

SI-329



8

SI-305



24

SI-318



3

SI-327



5

SI-334



15

SI-302



23

SI-303



9

SI-304



29

SI-305



25

SI-321



18

SI-305



26

SI-328



10

SI-329



9

SI-309



15

SI-305



23

SI-304



28

5F24-9



7

SI-336



6

SI-320



5

SI-320



34

5F25-16



29

5F25-16

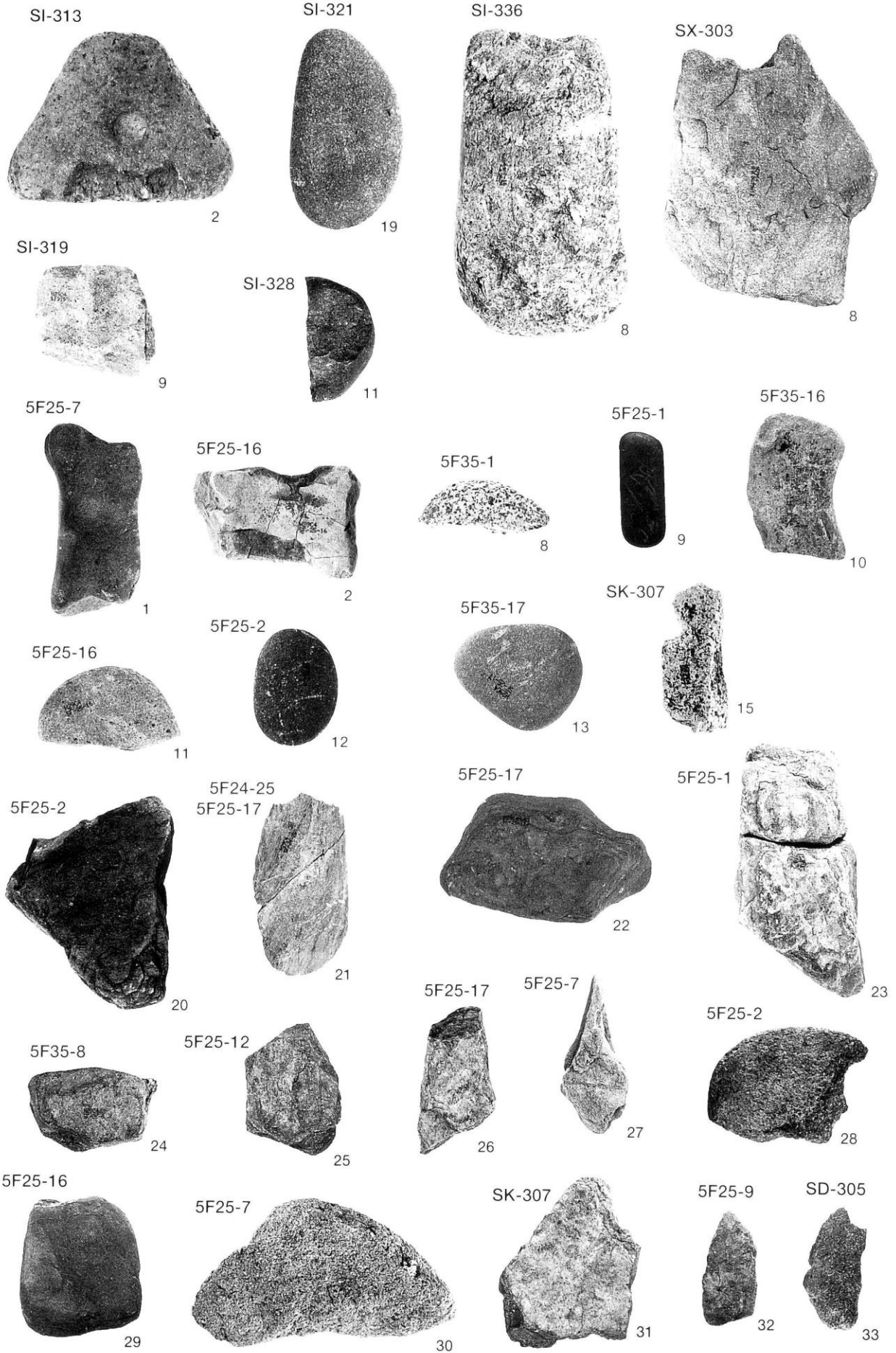


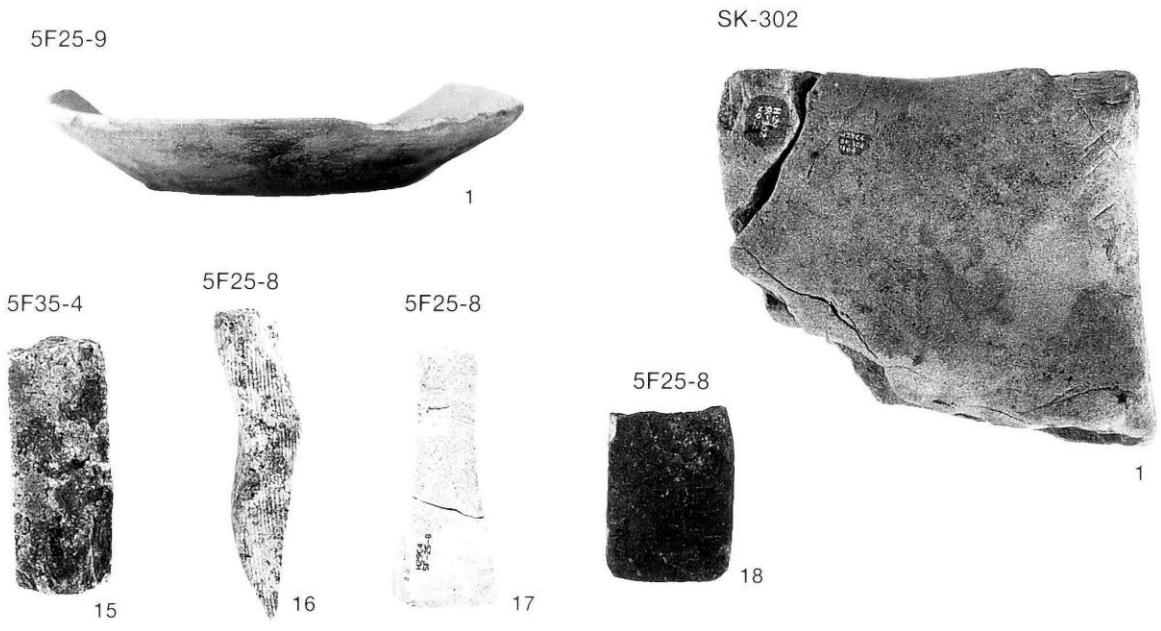
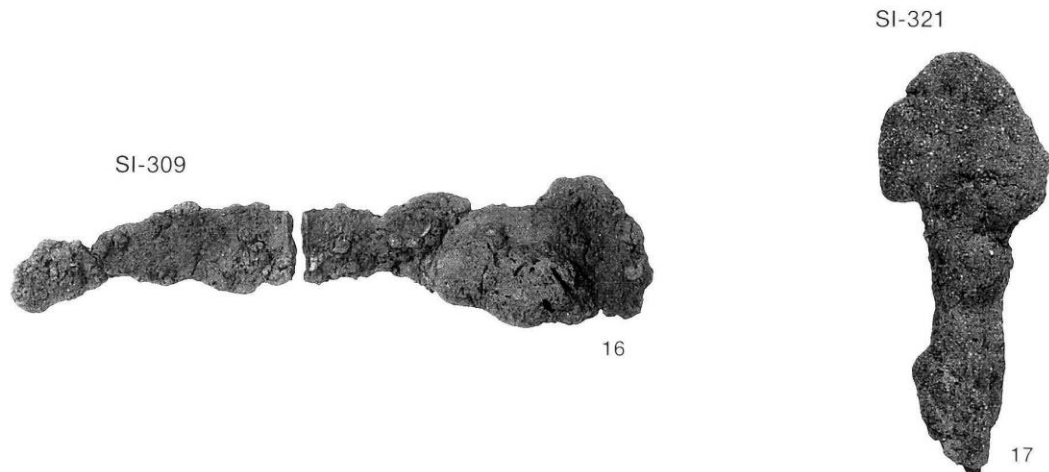
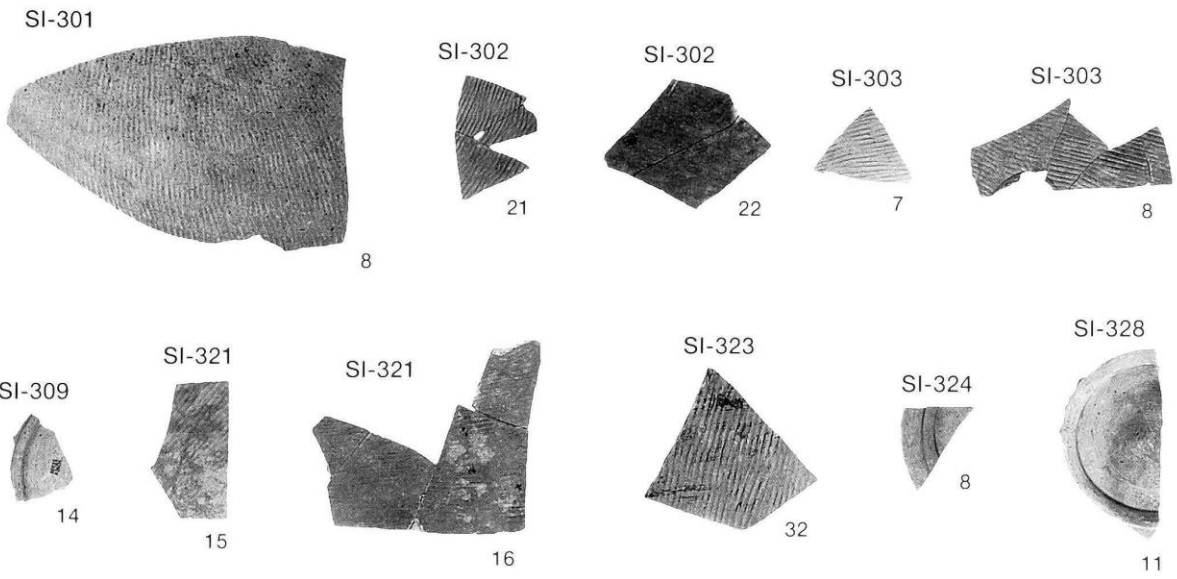
4

SI-319



图版82 C 4区 (古代)





図版84 C5区



C5・6区 空中写真(北西から)



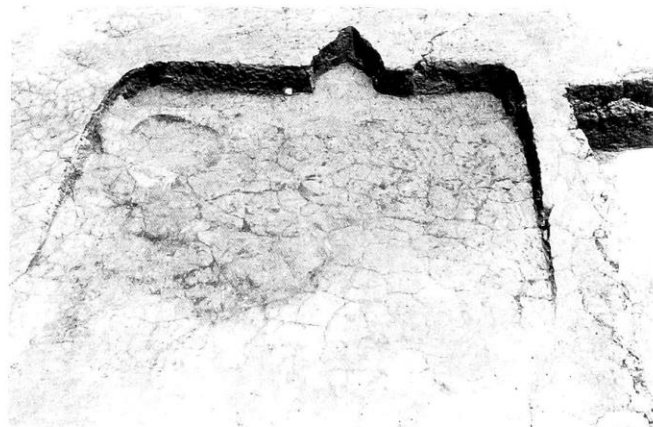
C5区



SI-501A 竈



SI-501B



SI-502



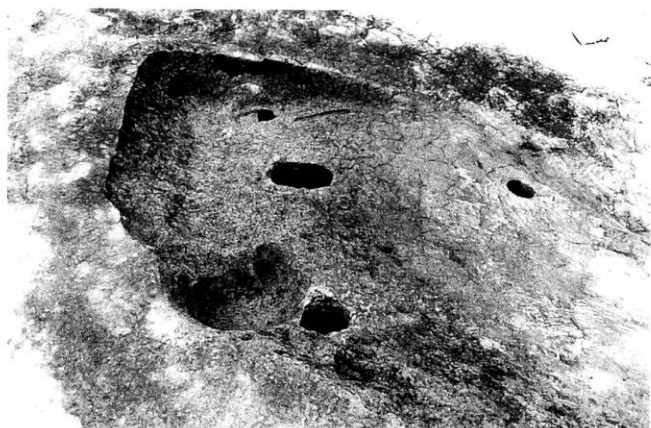
SI-502 遺物出土状況



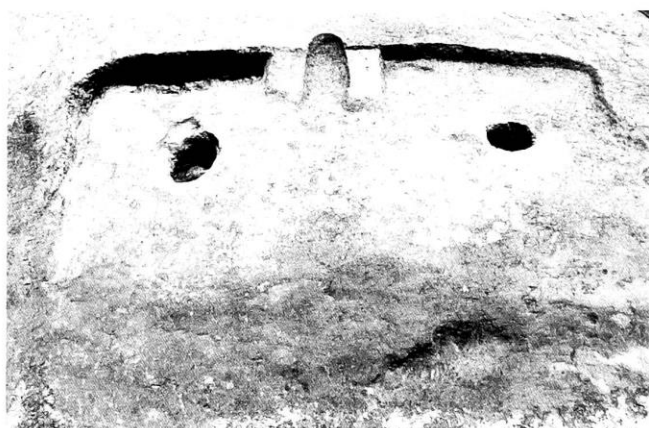
SI-502 竈A



SI-502 竈B



SI-503



SI-504



SI-505



SI-505 遺物出土状況



SI-505 竈A・B



SD-502



SX-501



SX-502

图版86 C5区(古墳・古代)

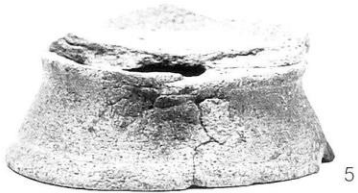
SI-501A



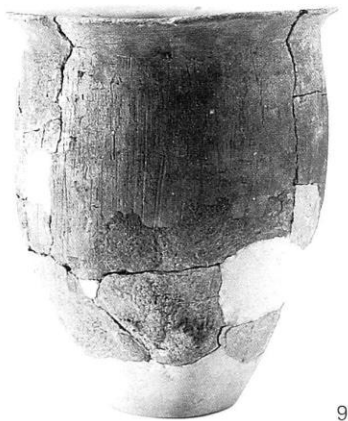
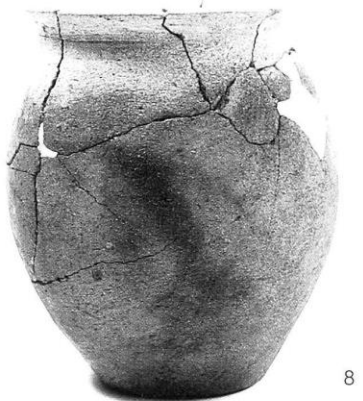
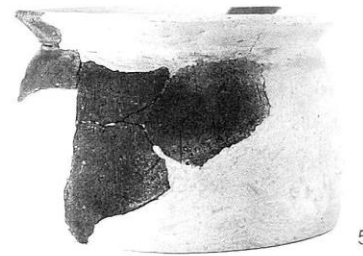
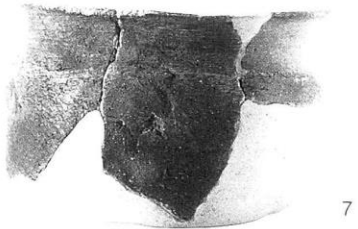
SI-502



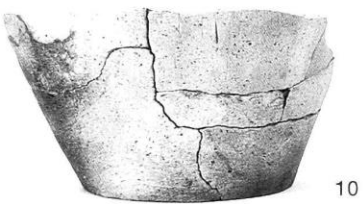
SI-501B



SI-505



SD-502



SI-501B



15

5F35-3



16

5F35-18



17

SI-501B



13

SI-502



13

5F45-3



14

5F45-24



15

SI-501B



17

SI-501B



14

5F35-16



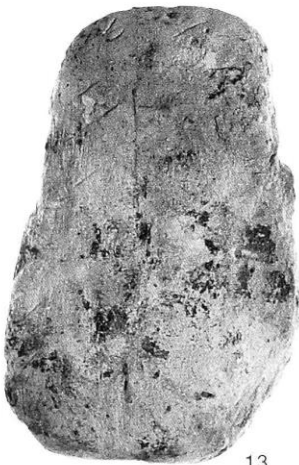
18

5F35-7



20

SI-502



13

SI-505



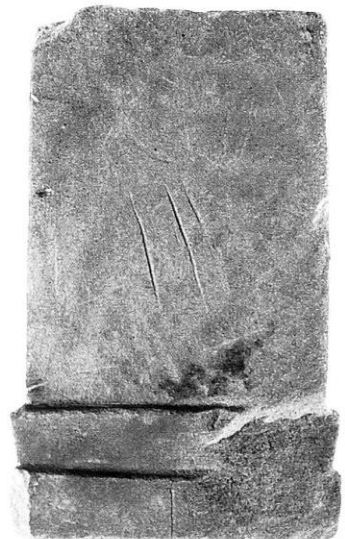
6

SK-501



3

5F35-17



5

SI-505



7

SK-502



2

5F45-9



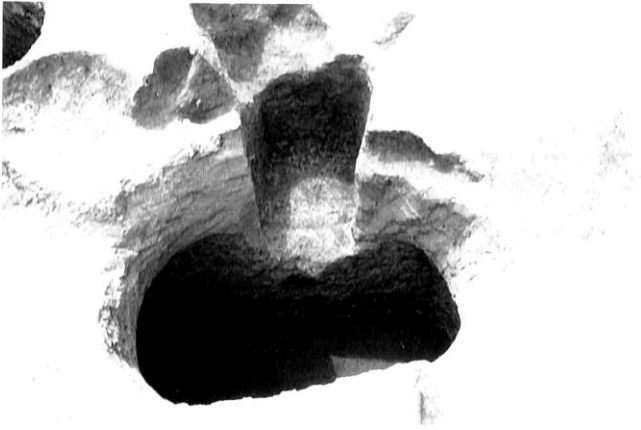
19



C 5・6区 空中写真 (南から)



C 6区



SK-601



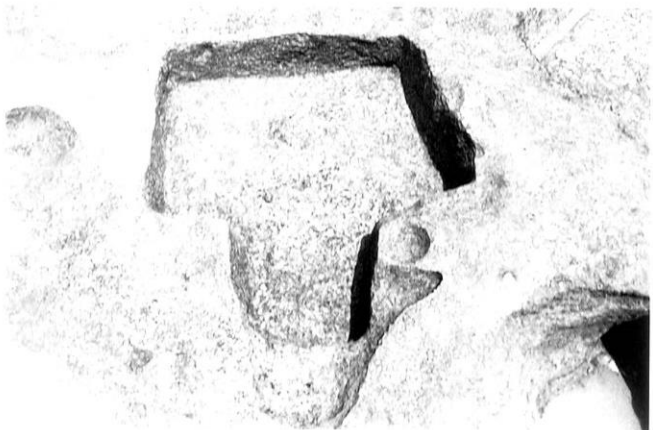
SK-602



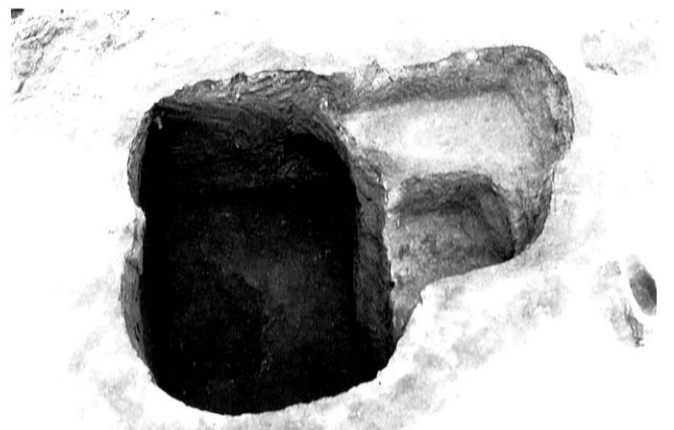
SK-602 遺物出土状況



SK-603



SK-604



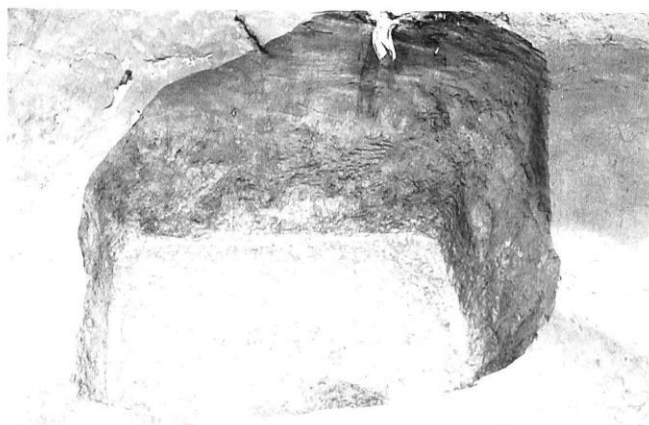
SK-605



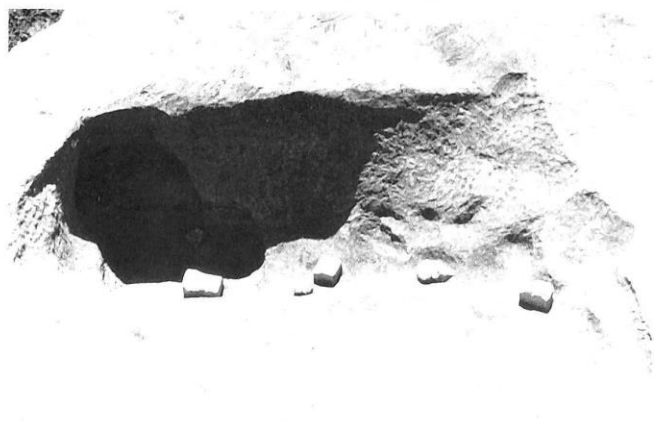
SX-601



SX-601 遺物出土状況



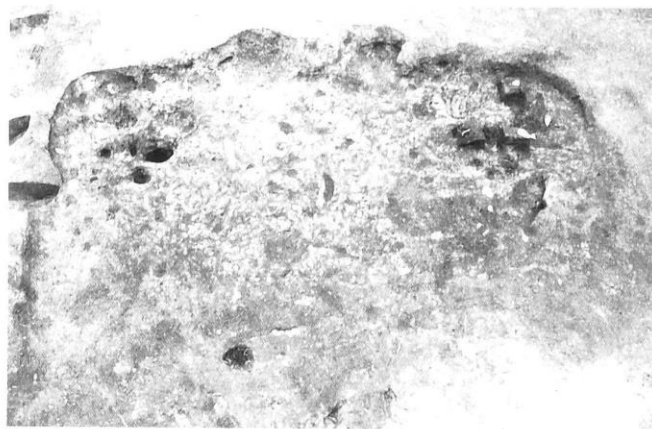
SX-602



SD-601C



C7区



SI-701

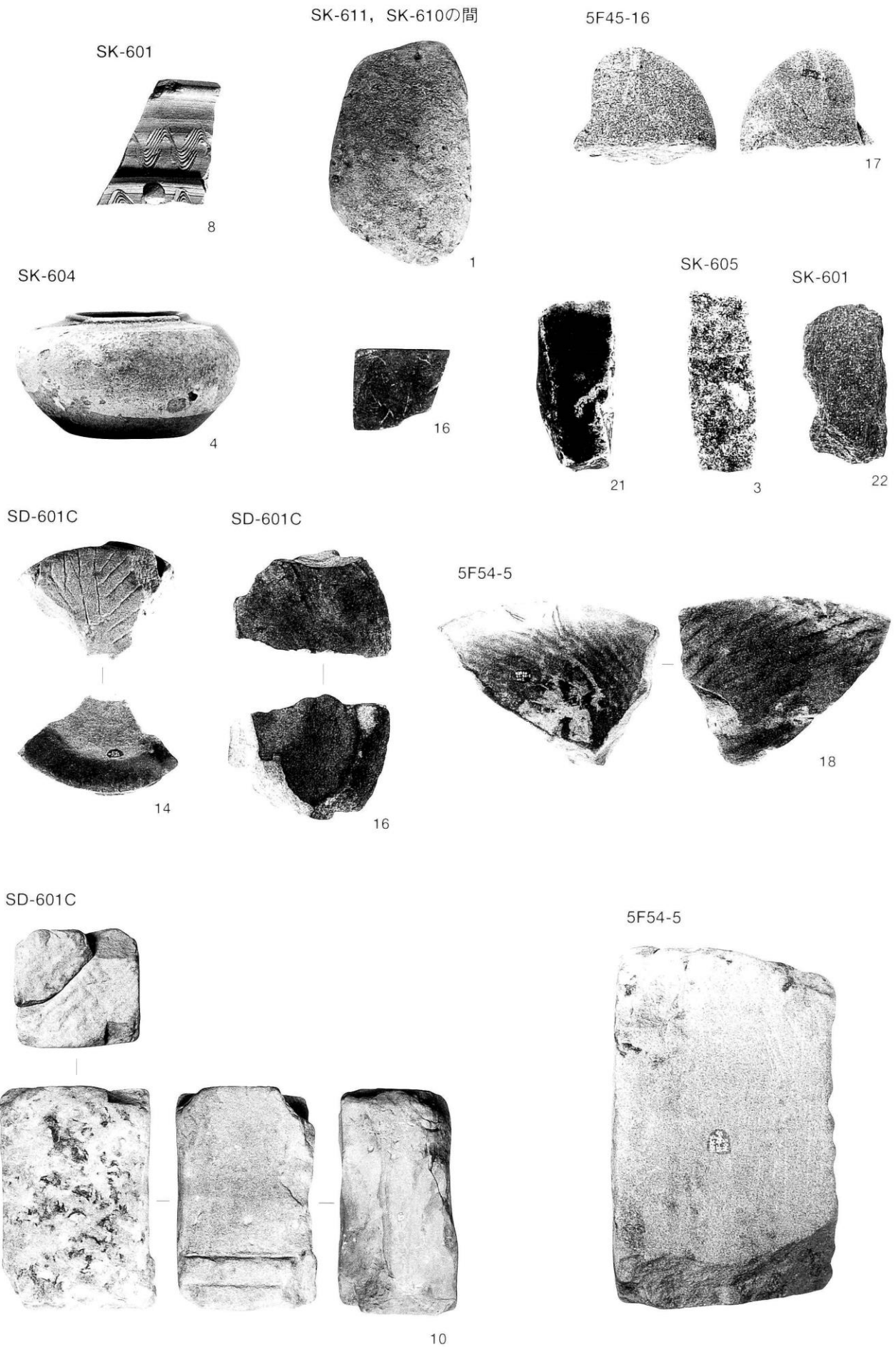


SI-701 遺物出土状況



SI-701 遺物出土状況

図版90 C 6区 (古墳・古代・中世)

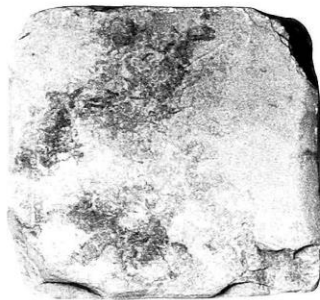


SK-602



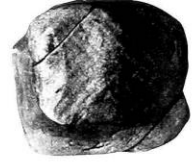
1

SD-601C



12

SD-601C



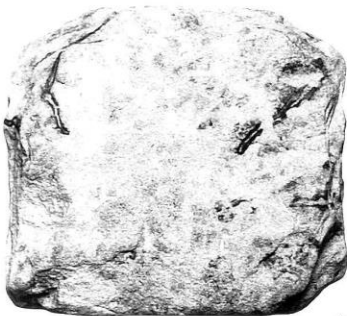
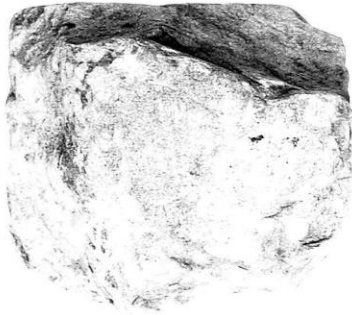
13

SD-601C



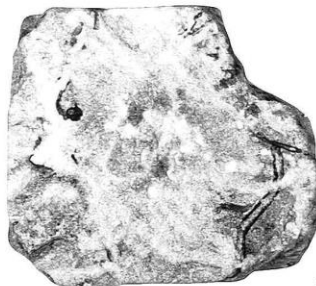
15

SX-601



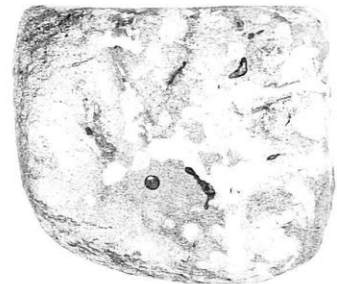
3

SX-601



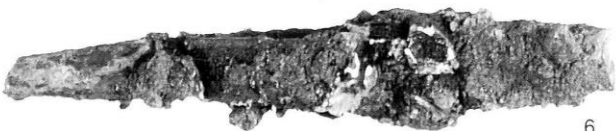
2

SX-601



4

SI-701



6



7

報告書抄録

ふりがな	かみやまたにいせき
書名	神山谷遺跡(2)
副書名	ひかり工業団地埋蔵文化財調査
巻次	Ⅳ
シリーズ名	財団法人 東総文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第26集
編著者名	本多昭宏
編集機関	財団法人 東総文化財センター
所在地	〒289-1727 千葉県匝瑳郡光町宮川字宮内前2334
発行	西暦2002年3月31日

しよしゅういせきめい 所収遺跡名	しよざいち 所在地	コード		経度	緯度	調査期間	調査面積	調査原因
かみやまたにいせき 神山谷遺跡	ちばけん 千葉県 そうさぐんひかりまち 匝瑳郡光町 あざささと 字篠本	市町村	遺跡番号	140°	35°	1995. 4. 6～ 1997. 10. 9	22, 200m ²	工業団地 造成に伴 う埋蔵文 化財調査
		12381	29	29'	41'			

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
神山谷遺跡	集落跡 城跡	縄文時代	竪穴住居跡 7軒 炉穴 10基 落とし穴 8基	縄文土器, 石器, 土製品	C2区 縄文時代早期 後半の集落跡
		古墳時代	竪穴住居跡 48軒	土師器, 須恵器, 石製品, 土製品, 鉄製品	C4区 谷底まで集落 が展開する
		奈良時代	掘立柱建物跡 6棟		
		平安時代	土坑 16基 溝 1条		
		中世	掘立柱建物跡 14棟 地下式坑 18基 水利土坑 2基 土坑 63基 溝 20条	陶器, 石製品, 鉄製品	C3, 4, 5, 6区 篠本城 跡と関わる施設群
		近世	掘立柱建物跡 4棟 水利土坑 29基 土坑 12基 土坑墓 1基 井戸 3基 炭窯 3基 溝 13条 火葬施設 2基	磁器, 石製品, 鉄製品, 木 製品	C3区 水利施設群

財団法人 東総文化財センター発掘調査報告書 第26集

千葉県匝瑳郡光町

神山谷遺跡(2)

ひかり工業団地造成に伴う埋蔵文化財調査

印刷 平成14年 3月25日

発行 平成14年 3月31日

編集 財団法人 東総文化財センター

発行 千葉県企業庁

印刷 株式会社 エリート印刷